

広島市の文化財 第41集

広島市佐伯区五日市町所在

一般県道原田五日市線(石内バイパス)道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告

1988.3

広島市教育委員会



石内川流域（西から）

は し が き

広島市域の西部に位置する佐伯区は、旧五日市町時代から、宅地造成等の開発がさかんに進められた地域ですが、ここを貫流する八幡川流域の両岸の丘陵上には多くの埋蔵文化財が確認されており、広島市域でも埋蔵文化財の比較的集中している地域の一つです。

このたび報告いたします下沖3号遺跡、下沖5号遺跡、和田1号遺跡は、道路建設に伴って発見されたものですが、調査の結果、多くの竪穴式住居跡が確認されるとともに、市域では例の少ない弥生時代前期の土器、石器等が出土し、古代の人々の様子を知らうえで大切な資料を得ることができました。

調査について、ご指導いただきました諸先生方並びに精力的に発掘作業に従事していただいた方々に厚くお礼申しあげるとともに、この調査報告書が、地域の歴史学習の一助となり、また、郷土に対する理解と愛着を深めていただくことに役立てばと願っている次第です。

昭和63年3月

広島市教育長 宮 永 聰 夫

例 言

1. 本書は、広島市佐伯区五日市町石内、及び利松における道路改良工事に伴い、昭和60・61・62年度の3ヶ年にわたり実施した一般県道原田・五日市線（石内バイパス）道路改良工事業業地内遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市佐伯区役所土木課から委託を受け、広島市教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、I・IIを若島一則が、IIIを岡野幸夫、岡野孝子が、IV・V・VIを高田正剛、若島一則が行い、編集は幸田淳、若島一則が行った。
4. 出土遺物、遺構の実測、整図及び写真等は、高田正剛が中心となり、幸田淳、阿部滋、若島一則、岡野孝子が各々分担して行った。
5. 本書掲載の石内川流域全景写真は、はにわ会会員井手三千男氏から提供を受け、他の航空写真はスタジオ・ユニに委託した。
6. 第1図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1、廿日市及び広島の地形図を複製したものである。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	4
III 下沖3号遺跡	7
IV 下沖5号遺跡	15
V 和田1号遺跡	38
VI 総 括	56

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	3	第22図 下沖5号遺跡第7号住居跡実測図	77
第2図 下沖3号遺跡周辺地形図及び遺構配置図	61	第23図 下沖5号遺跡第8号住居跡実測図	78
第3図 下沖3号遺跡第1号住居跡実測図	62	第24図 下沖5号遺跡第9号住居跡実測図	79
第4図 下沖3号遺跡第2・3号住居跡実測図	63	第25図 下沖5号遺跡第10号住居跡実測図	79
第5図 下沖3号遺跡第2号住居跡掘り込み内遺物出土状態実測図	64	第26図 下沖5号遺跡第10号住居跡内遺物出土状態	80
第6図 下沖3号遺跡第4号住居跡実測図	65	第27図 下沖5号遺跡第11・12号住居跡実測図	81
第7図 下沖3号遺跡テラス状遺構実測図	66	第28図 下沖5号遺跡第13号住居跡実測図	81
第8図 下沖3号遺跡第1・2号土壌実測図	67	第29図 下沖5号遺跡第14号住居跡実測図	82
第9図 下沖3号遺跡第3号土壌実測図	67	第30図 下沖5号遺跡第15号住居跡実測図	82
第10図 下沖3号遺跡出土土器実測図	68	第31図 下沖5号遺跡第16号住居跡実測図	83
第11図 下沖3号遺跡出土土器実測図	69	第32図 下沖5号遺跡第17号住居跡実測図	84
第12図 下沖3号遺跡出土土器実測図	70	第33図 下沖5号遺跡第18号住居跡実測図	85
第13図 下沖3号遺跡出土遺物実測図	71	第34図 下沖5号遺跡第1号住居跡状遺構実測図	85
第14図 下沖5号遺跡地形図及び遺構配置図	折り込み	第35図 下沖5号遺跡第2号住居跡状遺構実測図	85
第15図 下沖5号遺跡第1号住居跡実測図	72	第36図 下沖5号遺跡南側独立柱建物跡群遺構配置図	86
第16図 下沖5号遺跡第2号住居跡実測図	73	第37図 下沖5号遺跡第2号独立柱建物跡実測図	87
第17図 下沖5号遺跡第3号住居跡実測図	73	第38図 下沖5号遺跡第3号独立柱建物跡実測図	88
第18図 下沖5号遺跡第4号住居跡実測図	74	第39図 下沖5号遺跡第4号独立柱建物跡実測図	88
第19図 下沖5号遺跡第5号住居跡実測図	75		
第20図 下沖5号遺跡第1号掘立柱建物跡実測図	75		
第21図 下沖5号遺跡第6号住居跡実測図	76		

第40図	下沖5号遺跡第5号掘立柱建物跡 実測図	89	第63図	和田1号遺跡第7号住居跡実測図	107
第41図	下沖5号遺跡第6号掘立柱建物跡 実測図	89	第64図	和田1号遺跡南側住居跡群遺構 配置図	108
第42図	下沖5号遺跡第1号土壇実測図	90	第65図	和田1号遺跡第8・9・10号住居跡 実測図	109
第43図	下沖5号遺跡出土土器実測図(1)	91	第66図	和田1号遺跡第14号住居跡実測図	109
第44図	下沖5号遺跡出土土器実測図(2)	92	第67図	和田1号遺跡第11・12・13号 住居跡実測図	110
第45図	下沖5号遺跡出土土器実測図(3)	93	第68図	和田1号遺跡第1号掘立柱建物跡 実測図	110
第46図	下沖5号遺跡出土土器実測図(4)	94	第69図	和田1号遺跡第1号土壇実測図	111
第47図	下沖5号遺跡出土土器実測図(5)	95	第70図	和田1号遺跡第2号土壇実測図	111
第48図	下沖5号遺跡出土土器実測図(6)	96	第71図	和田1号遺跡第3・4・5号土壇 実測図	112
第49図	下沖5号遺跡出土土器実測図(7)	97	第72図	和田1号遺跡第6号土壇実測図	113
第50図	下沖5号遺跡出土土器実測図(8)	98	第73図	和田1号遺跡第7号土壇実測図	114
第51図	下沖5号遺跡出土鉄器及び石器 実測図(9)	99	第74図	和田1号遺跡第8号土壇実測図	114
第52図	下沖5号遺跡出土土器実測図(10)	100	第75図	和田1号遺跡出土土器実測図(1)	115
第53図	和田1号遺跡周辺地形図	101	第76図	和田1号遺跡出土土器実測図(2)	116
第54図	和田1号遺跡遺構配置図及び完掘後 地形測量図	102	第77図	和田1号遺跡出土土器実測図(3)	117
第55図	和田古墳周辺遺構配置図及び完掘後 地形測量図	103	第78図	和田1号遺跡出土土器実測図(4)	118
第56図	和田古墳主体部実測図	104	第79図	和田1号遺跡出土土器実測図(5)	119
第57図	和田1号遺跡第1号住居跡実測図	105	第80図	和田1号遺跡出土土器実測図(6)	120
第58図	和田1号遺跡第2号住居跡実測図	105	第81図	和田1号遺跡出土鉄器実測図(1)	121
第59図	和田1号遺跡第3号住居跡実測図	106	第82図	和田1号遺跡出土鉄器実測図(2)	122
第60図	和田1号遺跡第4号住居跡実測図	106	第83図	和田1号遺跡出土石器実測図(1)	123
第61図	和田1号遺跡第5号住居跡実測図	106	第84図	和田1号遺跡出土石器実測図(2)	124
第62図	和田1号遺跡第6号住居跡実測図	107			

図 版 目 次

巻頭図版	石内川流域（南西より）	図版 4	下沖3号遺跡第3号住居跡掘り込み内土 器出土状態
図版 1	遺跡群全景		下沖3号遺跡第4号住居跡
図版 2	下沖3号遺跡遠景（北西より） 下沖3号遺跡近景（南西より）	図版 5	下沖3号遺跡テラス状遺構土器出土状態 （南西より）
図版 3	下沖3号遺跡第1号住居跡 下沖3号遺跡第2・3号住居跡		下沖3号遺跡全景（航空写真）

- 図版 6 下沖 3号遺跡出土土器
- 図版 7 下沖 3号遺跡出土土器
- 図版 8 下沖 3号遺跡出土土器
- 図版 9 下沖 3号遺跡出土遺物
- 図版 10 下沖 5号遺跡全景(調査後)
- 図版 11 下沖 5号遺跡全景(調査前)
下沖 5号遺跡北側住居跡群
- 図版 12 下沖 5号遺跡第 1号住居跡
下沖 5号遺跡第 1号住居跡炭化物出土状態
- 図版 13 下沖 5号遺跡第 1号住居跡(完掘後)
下沖 5号遺跡第 2号住居跡
- 図版 14 下沖 5号遺跡第 3号住居跡
下沖 5号遺跡第 4号住居跡
- 図版 15 下沖 5号遺跡第 5号住居跡
下沖 5号遺跡第 1号掘立柱建物跡
- 図版 16 下沖 5号遺跡南側住居跡群
下沖 5号遺跡第 6号住居跡(遠景)
- 図版 17 下沖 5号遺跡第 6号住居跡(近景)
下沖 5号遺跡第 7号住居跡
- 図版 18 下沖 5号遺跡第 8号住居跡
下沖 5号遺跡第 9号住居跡
- 図版 19 下沖 5号遺跡南側住居跡群(西側斜面部分)(南西より)
下沖 5号遺跡第 10号住居跡
- 図版 20 下沖 5号遺跡第 10号住居跡遺物出土状態
下沖 5号遺跡第 11・12号住居跡
- 図版 21 下沖 5号遺跡第 13号住居跡
下沖 5号遺跡第 14号住居跡
- 図版 22 下沖 5号遺跡第 15号住居跡
下沖 5号遺跡第 16号住居跡
- 図版 23 下沖 5号遺跡第 17号住居跡
下沖 5号遺跡第 18号住居跡
- 図版 24 下沖 5号遺跡第 2号掘立柱建物跡
下沖 5号遺跡第 2号掘立柱建物跡柱穴内遺物出土状態
- 図版 25 下沖 5号遺跡第 3・4・5・6号掘立柱建物跡
- 図版 26 下沖 5号遺跡第 1号住居跡状遺構
下沖 5号遺跡第 2号住居跡状遺構
下沖 5号遺跡第 1号土墳
- 図版 27 下沖 5号遺跡出土土器
- 図版 28 下沖 5号遺跡出土土器
- 図版 29 下沖 5号遺跡出土土器
- 図版 30 下沖 5号遺跡出土土器
- 図版 31 下沖 5号遺跡出土土器
- 図版 32 下沖 5号遺跡出土土器
- 図版 33 下沖 5号遺跡出土土器
- 図版 34 下沖 5号遺跡出土鉄器及び石器
- 図版 35 下沖 5号遺跡出土石器
- 図版 36 和田 1号遺跡遠景(調査前)
- 図版 37 和田古墳(西より)
和田古墳主体部及び第 2号住居跡、掘立柱建物跡
- 図版 38 和田古墳主体部(正面より)
和田古墳主体部(完掘後)
- 図版 39 和田 1号遺跡第 1号住居跡
和田 1号遺跡第 2号住居跡
- 図版 40 和田 1号遺跡第 2号住居跡石鍾出土状態
和田 1号遺跡第 3号住居跡
- 図版 41 和田 1号遺跡第 4号住居跡及び第 2号土墳
和田 1号遺跡第 5号住居跡
- 図版 42 和田 1号遺跡第 6・7号住居跡
和田 1号遺跡南側住居跡群
- 図版 43 和田 1号遺跡第 8号住居跡
和田 1号遺跡第 9・10号住居跡
- 図版 44 和田 1号遺跡第 11・12・13号住居跡
和田 1号遺跡第 14号住居跡
- 図版 45 和田 1号遺跡第 1号土墳
和田 1号遺跡第 3・4・5・6号土墳
- 図版 46 和田 1号遺跡第 7号土墳
和田 1号遺跡第 8号土墳
- 図版 47 和田 1号遺跡中央部東側土器だまり遺物出土状態

	和田1号遺跡中央部東側土器だまり遺物 出土状態(甕形土器及び壺形土器)	図版 51	和田1号遺跡出土土器
図版 48	和田1号遺跡出土土器	図版 52	和田1号遺跡出土土器
図版 49	和田1号遺跡出土土器	図版 53	和田1号遺跡出土土器
図版 50	和田1号遺跡出土土器	図版 54	和田1号遺跡出土鉄器
		図版 55	和田1号遺跡出土鉄器及び石器

付 表 目 次

第1表	下沖3号遺跡出土土器観察表 …………… 12	第3表	和田1号遺跡出土土器観察表 …………… 52
第2表	下沖5号遺跡出土土器観察表 …………… 32		

I はじめに

広島市教育委員会では、昭和60年3月に五日市町と合併した時点で、一般国道原田・五日市線の道路改良工事として、石内及び利松地区に道路を建設する計画があることを知り、その事業地内に多くの遺跡が含まれていることを確認した。

以後、これらの遺跡の取扱いについて、広島市教育委員会と佐伯区役所土木課の間で協議を重ねたが、用地買収も大部分終了しており、地形的にも計画変更が困難であったため、記録保存もやむなしとの結論に達した。これをうけて、広島市教育委員会では、昭和60年度、61年度の2カ年にわたって発掘調査を実施することとなった。なお、諸般の事情により、実質的には、62年5月まで調査は実施された。

発掘調査は、工事を急ぐところから順次着手していき、昭和60年10月～12月に下沖3号遺跡を、昭和61年5月～昭和61年12月に下沖5号遺跡を、昭和61年12月～昭和62年5月に和田1号遺跡の調査を実施した。

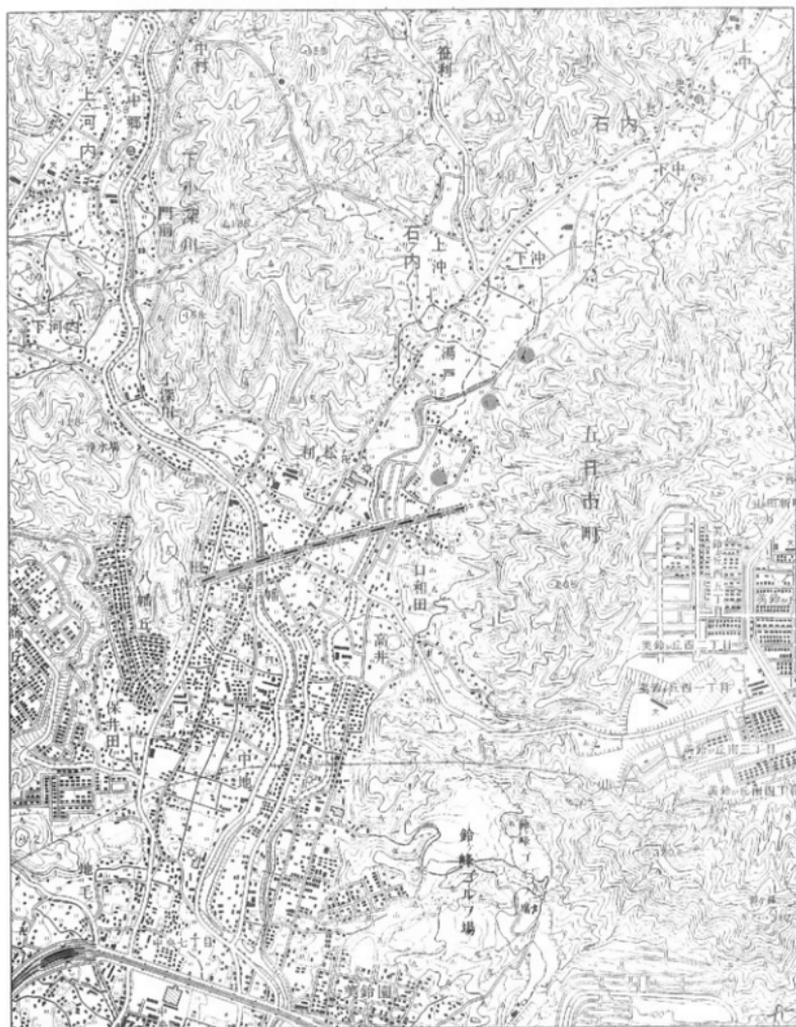
調査の実施にかかる関係者は、下記のとおりである。

調査依頼者	広島市佐伯区役所土木課
調査主体	広島市教育委員会
調査担当者	広島市教育委員会社会教育部管理課文化財係
調査関係者	森脇昭文 社会教育部長（現 財団法人広島アジア競技大会組織委員会事務次長） 上川孝明 社会教育部長 藤井克己 管理課長（現 財政課長） 繁野勝元 管理課長 松垣栄次 管理課文化財係係長
調査者	幸田 淳 管理課文化財係主査（調査担当者） 若島一則 管理課文化財係主事（調査担当者） 高田正剛 管理課文化財係主事（調査担当者） 岡野幸夫 管理課文化財係主事（現 段原再開発部補償課） 奥田泰将 管理課文化財係主事 阿部 滋 管理課文化財係主事 岡田秀明 管理課文化財係主事 大崎尚吾 管理課文化財係主事 江崎一博 管理課文化財係主事 草木二三夫 管理課文化財係主事（現 安芸区役所農林課） 廣本喜稔 管理課文化財係主事補 奥田社紀 管理課文化財係（現 安芸区役所地域振興課） 岡野孝子 管理課文化財係嘱託
調査補助員	吉本由紀 管理課文化財係嘱託（退職）

竹内サダ子、増崎正雄、国本敬子、国本直江、本田春子、道添キヌ子、森崎幸江、奥田
稔子、森崎レイ子、長力初江、川本頼男、中田君枝、中田 稔、中田南枝、西垣内やす
子、大背戸千香子、中山敦子、丸山小夜子、川崎 泉、川口サチ子、玉貞妙子、松田照

子、玉貞トヨ子、梅田キク子、三野丈一、横山 茂、新田松三、野崎 晃、西本秋穂、木村武勲、坂部照美、坂本かずえ、吉本美佐子、立川美津子、中山良子、杉田春人、白井由美、浅岡勝子、田中美子、乾 建作、小川修二、岡座義治、白井慎吾、山根裕幸、安森清美、藤原和江、増永一美、高野 都、石藤文子、一本木シキブ、立川美津子、中山良子、杉田春人、住川香代子、橋本礼子、上林陽子、河合淳子、鼓 智子

また、広島市佐伯区役所土木課、石内公民館の職員の方々をはじめ、広島市文化財保護指導員三野丈一氏、田中孝雄氏、はにわ会会員井手三千男氏外多くの方々から、調査を円滑に進めるために多大なご配慮、ご援助を頂いた。さらに、報告書作成にあたっては、広島大学考古学研究室、広島大学理学部教授沖村雄二氏、広島大学総合地誌研究資料センター助手牧野一成氏、奈良国立文化財研究所建造物研究室長宮本長二郎氏等から、広範な御教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。



1. 下沖3号遺跡
2. 下沖5号遺跡
3. 和田1号遺跡
4. 和田畠塚
5. 利松遺跡
6. 利松任吉遺跡
7. 高井遺跡
8. 寺田遺跡
9. 大虎遺跡
10. 水晶塚遺跡
11. 浄安寺遺跡
12. 長尾城遺跡
13. 笹利田遺跡

第1圖 周辺遺跡分布圖

II 位置と環境

標高 665 m の向山に源を発した石内川は、途中幅 400 m 前後の沖積地を形成しながら南流し、やがて八幡川と合流して広島湾に流れこんでいる。特に、この二つの河川の合流点周辺は、八幡川流域の中でも特別に遺跡が多く分布する地域である。

今から、6000 年くらい前には海水面が高く、海岸線は二河川の合流点付近まで入りこんでいたものと言われているが、その後の海退現象の結果、沖積作用が進み、少くとも縄文晩期あたりには、眼下にひろがる肥沃な沖積地がすでに形成されていたものと考えられる。また、利松から石内にかけては、古代山陽道が通り、前面には古代から内海交通の重要な港であった鞆島、草津を臨む交通の要衝であり、文献上もたびたび登場する地である。また、利松周辺には「郡」という地名が存在していることから、佐伯郡衙の推定地の 1 つにもあげられている重要な地域である。

さて、石内川流域を中心にして周辺の遺跡を見てみると、旧石器時代にすでに人々が生活をはじめたよう^{注1)}で、高井遺跡から尖頭器 1 点が出土している。

縄文時代に入ると、早期の遺跡が比較的多く発見されている。特に、和田 1 号遺跡の直近に位置する利松住古遺跡^{注2)}は、昭和 41 年に広島大学による調査が行なわれており、遺物包含層から押型文土器や長脚釜など多数の遺物が出土している。その他、周辺の遺跡で縄文時代早期の土器や石鏃等を出土した遺跡には、高井遺跡^{注3)}、寺田遺跡^{注4)}、大蔵遺跡^{注5)}等がある。しかし、その後の縄文時代の遺跡は、周辺からは発見されていない。八幡川流域全域に目をやれば、早期及び後・晩期の土器の出土した円形地遺跡^{注6)}や後・晩期の土器の出土した五日市小学校校庭遺跡^{注7)}など、海岸線に比較的近い地域に分布しているようである。

次に弥生時代について概観してみると、弥生時代前期の遺跡としては、今回調査した和田 1 号遺跡を含めて三カ所^{注8)}があげられる。そのひとつ、高井遺跡^{注9)}は、和田 1 号遺跡の南 500 m、石内川と八幡川の形成する沖積地を見下ろす標高 30 m の丘陵上に位置しており、水田の中から縄文時代や古墳時代の遺物と共に、弥生時代前期の土器や石包丁・石鏃などが採集されている。利松遺跡^{注9)}は、和田 1 号遺跡と向いあう位置にあり、昭和 46 年に広島県教育委員会が行った調査によると、縄文時代早期の遺物を中心とした包含層の中に、弥生時代前期及び後期の土器が出土したことが報告されている。全国的にみて、弥生時代前期の遺跡は比較的海岸線に近い低湿地に立地していることが多く、広島市域で弥生時代前期の遺跡として著名な中山貝塚についても同様な傾向がみられる。これは、石内川と八幡川の合流するこの地域にもあてはまる条件であり、接近した三カ所の地点から遺物が出土していることと合わせて考えた場合、この地域は、弥生時代前期の集落跡の存在する可能性がきわめて高い地域といえよう。

石内川流域及びその周辺で、遺跡数が増加してくるのは、弥生時代後期のことである。弥生時代後期になると、太田川下流域では、中小河川を見下ろす低丘陵上に遺跡が増加するといわれており^{注10)}、石内川流域においても同様な傾向がみられるようである。現在確認されている遺跡についてみても、石内川下流域及び八幡川と石内川の合流地点周辺に遺物の散布する地域が集中しているようである。近年、(財)広島県埋蔵文化財調査センターが行った山陽自動車道建設に伴う発掘調査等によって、石内川右岸の弥生時代後期の遺跡の様子が次第に明らかになってきた。この内、水島城遺跡^{注11)}は、標高 100 m 前後、水田面からの比高 40 m の丘陵上に位置する遺跡であり、竪穴式住居跡 7 軒と貯蔵穴 2 基、土壇 1 基からなっており、弥生時代後期中葉から後葉にかけての時期の遺跡と考えられている。長尾城遺跡^{注12)}は、標高 90 m、水田面からの比高 40 m の丘陵上

に位置する遺跡で、古墳時代初頭と考えられる竪穴式住居跡1軒と土壇3基が検出されている。笹利田遺跡¹³⁾跡は、石内川の支流笹利川の造る狭小な谷の奥に立地し、竪穴式住居跡1軒、土壇2基及び弥生時代後期中葉から古墳時代初頭のころの土器を多量に出土した貝塚1ヶ所から構成されている。浄安寺遺跡¹⁴⁾は、標高110m、水田面からの比高50mの丘陵上に位置しており、竪穴式住居跡21軒(建て替え分を除く)、貯蔵穴3基、土壇墓2基、土器蓋土壇墓2基、土壇3基、集石遺構1基を検出し、多量の弥生土器や鉄器、青銅器(銅鍍)、玉類(勾玉)等の優れた遺物を多く出土しており、弥生時代後期中葉から後葉にかけての時期のこの地域における中心的な集落の1つといわれている。特に、①尾根頂部平坦面に立地する6軒の住居跡とともに、丘陵斜面にも15軒分の住居跡が造られている点、②これらの住居跡が、尾根頂部の広場状の空間をとりまくように分布している点、③遺跡の存続時期が弥生時代後期中葉から後葉を中心とする時期である点、など、石内川をはさんだ対岸にある下沖5号遺跡と共通する点が多く、注目される。一方、石内川左岸についてみれば、当該時期の遺跡の調査は今回が初例であり、遺跡の分布についても明確になっていない。しかし、弥生時代後期といわれる比較的大規模な貝塚である和田貝塚¹⁵⁾の存在や、石内川左岸に展開する低丘陵の多くから、遺物の散布が確認されていることなどから、左岸においても右岸と同様な遺跡の分布状態がみられるようである。

古墳時代になると、明瞭にこの時期に属する集落は検出されておらず、丘陵上から他に立地を移しているようである。また、古墳についても、石内川流域及びその周辺の調査例は乏しく、大正時代に吉野益見氏によって、須恵器、金環、鉄刀などの出土が報告されている高井古墳¹⁶⁾(消滅)が知られるのみである。八幡川流域全域をみても、調査された古墳としては、5世紀代を中心に11基の古墳が確認された月見城遺跡¹⁷⁾、7世紀中ごろの横穴式石室を内部主体とする倉重古墳等があげられよう。この他、鉄刀、鉄鍍、轡、玉類など多数の副葬品を出土した三宅古墳(消滅)、四基以上の横穴式石室からなる栄草原古墳群¹⁸⁾(未調査)などがあげられる程度で、未確認のものや、すでに破壊されたものがあるにしても、弥生時代の遺跡数に比して古墳数が少ないといえるであろう。

さて、今回調査した遺跡群の大部分が属する弥生時代後期及び古墳時代前半のころの遺跡の状況を概観すれば、①弥生時代後期には集落が小河川を見おろす丘陵上に立地している点、②古墳時代になると集落が丘陵上から発見されなくなる点など、太田川の下流域の状況と共通する点が多いことが指摘できよう。古墳時代になると丘陵上から集落が発見されなくなる理由として、一般に集落立地の変化をあげる場合が多い。つまり、丘陵上に造られていた集落が、古墳時代になると、現存の農家が立地している沖積地縁辺部に移動したのではないかというのである。現在のところ、広島市域において、古墳時代の集落を調査した例は極めて少く、前述した仮説を裏証する遺跡は発見されていない。また、集落立地の変化を促した要因についても、様々な考え方があがるが、比較的遺跡の分布密度の低い太田川流域と、今回調査を行った下沖5号遺跡や浄安寺遺跡のように比較的高い密度で遺跡の分布している石内川流域の間で、ほぼ同じ時期に同じ変化がみられることは、単なる農耕技術や人口増加による漸進的な変化とは考えがたく、きわめて興味深い現象といえよう。

注

1. 五日市町誌編集委員会『五日市町誌』上巻 1974
2. 川越哲志「広島県佐伯郡五日市町利松住古遺跡の調査」『広島大学文学部紀要』第28巻第1号 1968
3. 同上
4. 同上
5. 同上

6. 広島県教育委員会『円命寺（延命寺）遺跡発掘調査報告書』 1971
7. 注1に同じ
8. 注2に同じ
9. 広島県教育委員会「利松遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』 1973
10. 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977
11. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅱ） 1986
12. 同上
13. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『笹利迫田遺跡発掘調査報告書』 1985
14. 注11に同じ
15. 注2に同じ
16. 注1に同じ
17. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』 1987
18. 注1に同じ

Ⅲ 下 沖 3 号 遺 跡

(1) 遺跡の概要

下沖3号遺跡は、広島市佐伯区五日市町下沖の石内川左岸の丘陵上に位置している。石内川は北東から南西に流れ、細長い沖積地を形成しており、遺跡の付近で北西から流れてきた笹利川と合流している。遺跡は石内川の沿原の南東側にはほぼ平行する山嶺より北西にのびた丘陵が大きく南西に向きを変え、やや独立丘陵状を呈した部分の尾根及び斜面にある。頂部の標高は46.5mで、北東—南西方向に細長い丘陵である。遺跡の南麓には狭小な谷水田が奥深く入り込んでおり、この水田面との比高差は約20mを測るが、石内川側の水田面との比高差は約40mある。今回の調査の結果、竪穴式住居跡4軒、土壇3基、テラス状遺構1を検出した。竪穴式住居跡は丘陵頂部からやや下った尾根上に位置し、斜面の上方を削平し、下方側に盛り土を施した上に構築しており、下方側は土が流れて不明確なものが多かった。ほとんどの遺構は平坦面に見られず縁辺にあり、空閑地が存在する。テラス状遺構は、丘陵の南西斜面にテラス状の段を設けたもので、多量の土器が出土した。

遺物としては、土器（壺形土器・甕形土器・鉢形土器・器台形土器・高杯形土器）、鉄器（鉄鏃）、石器（礫石）等が出土した。

(2) 遺 構

第1号住居跡（第3図）

本住居跡は、丘陵頂部から北東にのびる丘陵尾根の平坦面の北東にゆるやかに傾斜するところに造られているので、南西側を削平し北東側に盛り土したものとと思われるが、北東側は土が流れて確認できなかった。平面プランは胴がやや張った隅丸方形が想定され、規模は北西—南東で540cmである。後世の畑作によって削平を受けているため、壁高は不明瞭であるが、南側で最高約10cmである。柱穴は7個（P1～P7）あり、径22～42cm、深さ39～43cmを測る。いずれも形状や規模に大差はないが、位置関係から本住居跡はP1～P4を支柱穴とする4本柱構造と考えられる。柱間距離は2.1～2.3mである。壁溝は、北西側の掘り込み部分を除いて残存する壁の全てに巡っており、規模は幅10～20cm、深さ3～5cmである。溝内には径10～30cm、深さ5～10cmの小ピットが多数検出された。床面の中央と南側には2ヶ所の掘り込みが確認された。中央の掘り込みは長方形に近い平面プランをもち、規模は長辺120cm、短辺70cm、深さ15～20cmである。埋土中に炭化物を含んでおり、おそらく本住居跡の炉跡と考えられる。南側のものは一辺80～85cm、深さ10～15cmの不整形な方形である。P1を取り囲むような状態で検出されたが、本住居跡に伴うものかどうか、また性格も不明である。また、北西側の壁に浅い掘り込みがみられる。平面プランは長方形で、規模は長辺126cm、短辺110cm、深さ13cmで、住居跡の内外にまたがって掘り込まれており、本住居跡に伴う施設と考えられる。この場合の機能としては、例えば山手A地点遺跡第1・2号住居跡や大槻地遺跡SB12でも類似した突出部がみられ、入り口と捉えられているが、貯蔵施設の一種の可能性も考えられるなど、明らかにし得なかった。

遺物は、床面から鉢形土器、甕形土器、鼓形器台が出土した。

第2号住居跡（第4図）

本住居跡は丘陵頂部の平坦面から北東、さらに東に向きを変え少し下った尾根線上に位置している。第1

号住居跡から東に約1mのところであり、第3号住居跡と重複している。平面プランは胴がやや張り気味の隅丸方形であるが、南西コーナーのみ内側に湾曲している。壁は後世の削平を受けているため、やや不明瞭であるが、北東コーナー付近を除いてはほぼ完周している。規模は東西380cm、南北350cmで、屋根に沿った東西方向がやや長くなっており、壁高は南西コーナーで21cmである。柱穴は住居跡内に6個(P1~P6)確認でき、径30~40cm、深さ25~43cmであるが、規模・配置等からP1~P4が本住居跡の主柱穴であり、4本柱構造と考えられる。柱穴は壁から80~100cmの位置にあり、柱間距離はすべて160cmである。その他壁溝内に、北辺の中央から西寄りに径30cm、深さ28cmのピットが検出された。壁溝は東壁を除く3辺に巡っており、規模は幅10cm、深さ5cmであり、溝内には小ピットが多数掘り込まれている。これらは2~3本でまとまりをもち、30~50cm間隔にあり、特にコーナー付近に集中している。住居跡の床面はほぼ平坦で、中央には重複する2つの東西に長い掘り込みが検出された。この内西側のものが土層や位置関係から、本住居跡に伴うものと考えられる。規模は長軸70cm、短軸55cm、深さ10cmである。位置や形態から炉跡と考えられる。また、住居跡の南西コーナーに接して東西に長い楕円形の掘り込みがある。規模は長軸94cm、短軸40cm、深さ10cmである。壁及び壁溝はこの掘り込みに沿って内側に湾曲している。第1号住居跡の掘り込みと若干構造は異なるが、検出状況から考えて、本住居跡に伴う遺構であると考えられる。遺物は、P2の南西側の床面から壺形土器が出土した。第3号住居跡との新旧関係は、土層観察から第2号住居跡が第3号住居跡に先行すると考えられる。

第3号住居跡（第4図）

本住居跡は第2号住居跡と切り合って構築されている。住居跡付近は西から東にゆるやかに傾斜しており、壁は西半が半円状に残存するのみである。平面プランは円形が想定でき、復元すると径540cm程度の規模をもつものであろう。主柱穴は、配置・規模からP5~8で、4本柱構造と考えられる。径40~50cm、深さ40~55cmで、いずれも壁から100cm前後の位置にある。柱間距離は南北280cm、東西260cmで、屋根と直交した南北方向が若干長くなっている。壁溝は壁が存在するすべてにおいて検出され、規模は幅40cm、深さ7cm程度である。壁溝内には小ピットが多数確認され、第2号住居跡と同様2~3本のまとまりをもっている。第2号住居跡の項で述べた2つの掘り込みのうち、土層の切り合い関係から、東側のものが本住居跡に伴うと考えられる。平面プランは東西に長い楕円形で、規模は長軸50cm、短軸45cm、深さ24cmである。掘り込み内とその周辺の土は焼けた痕がみられ、埋土は炭を含む黒灰色土である。この掘り込みの上面付近から壺形土器3個体分を検出した(6・7・8)。6は胴部下半を欠失しており、底面からやや浮いたところに口縁部を横に向け寝かせた状態にあった。この土器の胴部下半はテラス状遺構流れ込み土器群から出土しており、人為的に壊して胴部下半を投棄したと考えられる。7も胴部下半を欠失し、6の上に口縁部を上に向け、かぶせるように置いた状態で出土した。8は細かく破砕しており、7の胴部に土器片が貼りつくように接して出土した。これらは、明らかに故意に組み合わせで置いたもので、注目すべきものである。掘り込み自体は、状況からは炉跡と考えられるが、中の土器が炉に伴う施設であるということは断定し得ない。炉内に土器を設置し、カマド的使用したともみられるが、土器の内外面ともススの付着はみられず、火を受けた痕跡がないことから、可能性としては低い。建物跡の廃絶・建替えに際し、柱穴に土器を投棄する例はいくつかみられるが、炉跡にこうした土器を置く例はなく、今後の類例を待ってこれらの土器の性格について検討してゆきたい。

住居跡内出土の他の遺物としては、少量の土器片が出土したのみである。

第4号住居跡（第6図）

本住居跡は、丘陵頂部より尾根線上で一段下がった南側の平坦面のやや西寄りに位置している。西半は流出し、壁も1/2程度が残存しているのみである。残存の平面プランは半円状を呈し、規模は南北520cm、壁高は東側で25cmである。本米はほぼ楕円形が想定され、長軸520cm、短軸470cm程度の規模であろう。柱穴は4個（P1～4）検出され、規模は径20～40cm、深さ47～55cmである。規模に若干のばらつきはみられるが、配置等から本住居跡はこれらを主柱穴とする4本柱の構造であったと考えられる。柱間距離は160～170cmである。壁溝は残存する壁の3/4で確認された。規模は幅10～25cm、深さ5cmで、溝内には径10～15cm、深さ10～15cmの小ピットが断続的に掘り込まれている。住居跡の床面中央には、炉跡とみられる掘り込みが検出された。平面プランは辺が丸みをもつ長方形で、規模は長辺140cm、短辺110cm、深さ20cmである。埋土中に炭を含む焼土が認められた。遺物は埋土から壺形土器・甕形土器が多数出土した。

第1号土壇（第8図）

本土壇は、丘陵頂部平坦面のはほぼ中央に位置し、第1号住居跡の南西約8.5mのところにある。平面プランは不整形な長方形で、規模は、検出面で長辺174cm、短辺108cm、底面で長辺126cm、短辺71cm、深さ25～32cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はわずかに凹む。土壇の主軸は尾根線にはほぼ直交している。遺物は出土せず、性格・時期は明らかにし得ない。

第2号土壇（第8図）

本土壇は第1号土壇の南東側に並んで掘り込まれている。平面プランは不整形な長方形で、規模は検出面で長辺144cm、短辺131cm、底面で長辺153cm、短辺86cm、深さ51cmである。断面形は逆台形で、底面はほぼ水平である。土壇の主軸は尾根線にはほぼ平行して造られている。遺物は少量の土器片が出土したが、性格・時期については第1号土壇と同様不明である。

第3号土壇（第9図）

本土壇は丘陵頂部より尾根線上で、一段下がった南側平坦面の南西側の縁辺に位置し、第4号住居跡の東側約2mのところ掘り込まれている。平面プランは長方形で、規模は検出面で長辺177cm、短辺107cm、底面で長辺153cm、短辺86cm、深さ51cmである。主軸はN61°Eで、尾根線にはほぼ平行している。断面形は逆台形で底面は水平である。遺物は、少量の土器片が出土した。性格・時期は不明である。

テラス状遺構（第7図）

テラス状遺構は、丘陵の南西斜面に位置する。第3号住居跡から南へ約7mのところあり、急斜面でやや谷状の部分に造られている。等高線に沿って楕状に長く、規模は北西—南東9.1m、北東—南西1.3m、深さ35cmを測る。平坦面は斜面に沿って北東から南西へゆるやかに傾斜している。平坦面直上から弥生土器の壺形土器・甕形土器・鉢形土器等が平坦面の中央と南西端の2ヶ所に集中して一括投棄されたような状態で出土した。このうち、22・25・27・29は完形に近い形で出土した。また、地山から浮いた状態で流れ込むように壺形土器・甕形土器・高杯形土器が出土した。しかし、柱穴・溝・土壇等の施設はみられず、テラス状遺構の性格を明らかにする資料は得られなかった。

(3) 遺物

本遺跡からは多量の土器片及び鉄器・石器が出土した。土器の器種については、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器・器台形土器が確認された。その大部分は特にテラス状遺構からの出土である。以下、各

遺物について述べる。なお、個々の土器の詳細については、後掲する観察表を参照されたい。

土 器 (第10図～第13図36)

出土した土器は、甕形土器や鉢形土器を中心に分類すると、形態や手法から大きく新旧2つの様相に分けることが可能である。このうち古い様相の土器はテラス状遺構の床面上から完形に近い土器が出土したものを中心に、第1・4号住居跡の埋土のものもこれに含まれると思われる。器種は甕形土器(22・25・27・29・30)が大半を占め、その他に壺形土器(10)・鉢形土器(3・11・26・28・31)などがある。これらの土器の特徴は、甕形土器についてみると、総じて、口縁部が「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめるかわずかに肥厚するもので、凹線文・沈線文などもほとんど施されておらず、いわゆる上深川(Ⅲ)類として従来位置付けられているものにあたる。

新しい様相の土器は、第1～3号住居跡出土土器やテラス状遺構上層土器群などからなる。器種は古い様相の土器と同様、甕形土器(1・5・9・15～18・33)が多く、その他に壺形土器(13・14)・鉢形土器(2・19・20)・高杯形土器(34・36)・器台形土器(4)などがある。このうち、甕形土器(1・5・9・15)についてみると、いずれも口縁部は「くの字」状に外反し、端部は器厚を減じつつ丸くおさめており、従来上深川(Ⅲ)類に分類されているものである。なお、4・8・16～18・33については、従来上深川式として分類される土器には見られないもので、非在地系のもと考えられるものである。

鉄 器 (鉄鎌) (第13図37)

第3号住居跡から東方向に約10mの斜面から出土した。全長11.5cm、刃部長9.4cm、現存最大幅3.5cm。背部の厚さ0.2cmを測り、身の背部及び刃部はほぼ直線的な小型の直刃鎌である。木質の付着は認められなかった。鉄鎌についてはおおまかにみて大型鎌から小型鎌へ、曲刃から直刃への変遷の方向性も示されている。本例は小型で直刃であることから考えて、比較的後出する部類に入るものと思われる。

石 器 (砥石) (第13図38)

第3号住居跡から出土したもので、大部分を欠失し全体の形は復元できないが、2つの研磨面をもち、部分的に擦痕を残す。研磨面の表面はなめらかだが凹凸がある。長さ6.6cm、幅4.5cm、厚さ2.2cmで、色調は淡褐色を呈す。

(4) 小 結

調査の結果、丘陵の尾根の平坦面や斜面から竪穴式住居跡4軒、土壇3基、テラス状遺構1を検出し、これらの遺構や調査区から土器・鉄器・石器が出土した。以下、若干の検討を加え、本遺跡の位置付けを行いたい。

出土した土器は先述したとおり古い様相と新しい様相に分けることが可能である。特にテラス状遺構土器群は、古い様相を示す完形に近いものが多く出土している。器種的には甕形土器と鉢形土器に限られるものの、単一の特徴を有しており、一括資料としての価値は高いものと思われる。甕形土器は口縁部が「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめ、わずかに肥厚気味のものもみられるが、凹線文や沈線文はほとんど施されず、胴部最大径が中位に下がり気味である。鉢形土器も口縁部の形状は甕形土器に似ている。こうした土器は、いわゆる上深川Ⅲ式に当てはまり、弥生時代後期中葉にあたると思われる。テラス状遺構の廃絶時この時期と考えられる。また、第1号住居跡出土の鉢形土器(3)や、第4号住居跡出土のものも同様に上深川Ⅲ式と考えられる。

新しい様相のものは、甕形土器を中心にかなりバラエティがある。形態的には上深川式といわれるもの

縮ちゅうに入るものと、畿内系や山陰系と考えられるものなどがあり、多様性を示している。第1号住居跡出土の1、2号住居跡出土の5、あるいは第3号住居跡出土の6・7・9はいずれも口縁部を丸くおさめており、いわゆる上深川Ⅲ式に当てはまる。ところで、16～18・33は口縁部が内湾気味に外反し、端部を肥厚させる形状から、典型的な布留型甕ではなく布留傾向型甕^(注6)に形態的に類似している。県内の類例としては神辺御嶺遺跡E地点SD09出土の土器がある。こうした土器は、畿内では「庄内式」の新段階から「布留Ⅰ式」の古段階にみられるようである。8は第3号住居跡から出土した二重口縁をもつ甕形土器の小破片で、不明確であるが、山陰地方では大木観現山1号窯^(注8)や小谷遺跡^(注9)から似たものが出土している。また、第1号住居跡出土の鼓形器台(4)は、受部の断面がゆるやかに8字を窪くもので、筒部・脚部を欠失しているため判然とはしないが、鷺尾A区5号系^(注10)に類似するものがある。

以上のことから、各住居跡の営まれた年代を従来の上深川式といわれる土器編年をもとに示すと、弥生時代後期中葉に第4号住居跡・テラス状遺構が、弥生時代後期後葉に第1号住居跡が、そして、弥生時代後期終末に第2・3号住居跡が造られていたことになる。しかし、第3号住居跡においては、他地域では古墳時代初頭に位置づけられる土器を共伴しており、上深川式土器に基いた従来の年代観に疑問をなげかけるものであり、この観点から見れば、本遺跡の営まれた年代は前述よりもやや下る時期として位置づけておく必要があろう。

注

1. 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977年。
2. (財)広島県埋蔵文化財調査センター「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(Ⅳ) 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書、第55集、1987年。
3. (財)広島県埋蔵文化財調査センター「石鏡概現遺跡群・歯ヶ崎遺跡発掘調査報告」—県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査— 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書、第39集、1985年。
4. 松崎寿和・潮見 浩「第二編 先史時代の広島地方」『新修広島市史』第一巻、1961年。
潮見 浩「広島県安佐郡高陽町上深川遺跡」『弥生式土器集成』資料編、1958年。
5. 米田文孝「弥生後期型壺から布留型壺へ」—作成技法の変遷を中心にして— 『ヒストリア』第97号、大阪歴史学会、1982年。
6. 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「神辺御嶺遺跡」。1981年。
7. 鳥取県八東郡出雲町教育委員会「大木観現山古墳群」。1979年、花谷めぐむ。
8. 注7に同じ。
9. 注7に同じ。
10. 注7に同じ。

第1表 下沖3号遺跡出土土器観察表

番号	出土位置	種類	径 (cm)	器形について	調整、成形について	備 考
1	第1号住居跡埋土	甕形土器	口径 28.4	口縁部は「くの字」状に強く外反し、端部は唇厚を感じつつ丸くおさまる。	口縁部外面は横ナデ、内面は縦方向のハゲ目を施す。胴部内面はへり削りを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂粒を少量含む 焼成 良好
2	第1号住居跡埋土	鉢形土器	口径 19.3	口縁部は「くの字」状に極めて強く外反し、端部は丸くおさまる。体部は平底状によく整る。	口縁部は横ナデを施す。体部外面は上部1/3までがナデ、それ以下はハゲ目、内面はハゲ目後ナデを施す。	色調 黄褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
3	第1号住居跡埋土	鉢形土器	口径 18.0	口縁部は強く外反気味に立ち上がり、端部は平たくおさまる。体部は整りが少ない。	口縁部外面は横ナデ、内面は縦方向の細かいへり削りを施す。体部は内面とも縦方向の粗かいへり削りを施す。	色調 黄褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 良好 外面にスス付着
4	第1号住居跡埋土	甕形土器	口径 24.8	甕形甕台の受部と思われる。体部から口縁部にかけて大きく外反し、端部はさらに広がっており、唇厚を減しつつ尖り気味におさまる。体部と底部の接合は明確である。	受部外面はナデ、内面はへり削り後、へり削りを施す。	色調 淡黄褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
5	第2号住居跡床面	鉢形土器	口径 16.4	口縁部は「くの字」状に強く外反し、やや両曲気味で、端部は唇厚を感じつつ丸くおさまる。胴部は球形に近いものと思われる。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面はナデ、内面は斜方向のへり削りを施す。	色調 外面：淡赤褐色～黄褐色 内面：黄褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 良好 胴部外面にスス付着
6	第3号住居跡埋り込み + テラス状遺構上 埋土層部	甕形土器	口径 15.8 胴部最大径 17.8 底径 3.6 器高 24.6	口縁部はやや両曲気味に外反し、端部は丸くおさまる。胴部は甕形形に近い反胴形で胴部最大径も中心にさきわたって近い上半にある。底は平底である。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面は上半が縦方向のハゲ目後ナデ、中央～下半がナデ、内面は斜方向のへり削りを施す。	色調 赤褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調 胴部外面にスス付着
7	第3号住居跡埋り込み	甕形土器	口径 16.6 胴部最大径 23.6	口縁部は「くの字」状に強く外反し、端部は唇厚を感じつつ丸くおさまる。胴部は球形に近いものと思われる。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面はナデ、内面は斜方向のへり削りを施す。胴部中央以下はへり削りで薄くなっている。	色調 褐色 胎土 細～中砂粒を多量に含む 焼成 軟調
8	第3号住居跡埋り込み	甕形土器	口径 17.5	二重口縁の破片である。甕口縁部外面には朝顔な縁がつき、口縁部は外反気味に唇厚を増しながら立ち上がり、端部は平たくおさまる。	口縁部は横ナデを施す。	色調 黄褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 良好
9	第3号住居跡埋土	甕形土器	口径 14.8 胴部最大径 12.2	口縁部は「くの字」状に長く外反し、端部は薄く感じつつ丸くおさまる。胴部は球形に近いものと思われる。	口縁部はハゲ目後ナデを施す。胴部外面は斜方向のハゲ目、内面は斜方向のへり削りを施す。胴部中央～下半はへり削り状で割欠文を施す。	色調 赤褐色 胎土 細砂粒を含む 焼成 良好
10	第4号住居跡埋土	甕形土器	口径 12.0	口縁部はゆるやかに外反し、端部は上下に広張り、平たくおさまる。胴部は筒が張りないものと思われる。	口縁部外面は横ナデ、内面はハゲ目後ナデを施す。胴部外面は縦のハゲ目、内面は縦方向のへり削りを施す。口縁部端部及び胴部外面の頸部以下にはクシ歯状工具による割欠文を施す。	色調 褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 良好
11	第4号住居跡埋土	鉢形土器	口径 11.0 底径 5.9 器高 7.2	体部から口縁部にかけて内両気味に立ち上がり、端部は平たくおさまる。底面は大底の上げ底である。	口縁部～胴部外面はハゲ目後ナデ、内面は縦方向のへり削り後ナデを施す。底面と体部の境の外面及び底面内面には指痕圧痕を施す。	色調 黄褐色 胎土 粗砂粒を含む 焼成 やや軟調 体部下半に黒炭あり
12	第4号住居跡埋土	甕形土器	口径 5.8	底面は平底で、胴部にかけては直線的にのびる。	胴部外面は縦方向のハゲ目後ナデ、内面はへり削りを施す。胴部外面は斜方向のハゲ目後ナデ、内面はハゲ目を施す。	色調 褐色～暗褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 良好
13	テラス状遺構上 埋土層部	甕形土器	口径 19.0	口縁部は両曲気味に外反し、端部は斜下方向に転倒し平たくおさまる。	口縁部～胴部内面は縦方向のハゲ目後ナデ、胴部外面はハゲ目を施す。胴部上面にはクシ歯状工具による11本の痕状文を施し、端部にはクシ歯状工具による割欠文を施す。端部は貼り付けで、接合部分にはクシ歯状工具による割欠文後胎土をぬり付け層でおさまっている。	色調 黄褐色 内面と端部の一部に赤色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整、成形を施す	備考
14	テラス状遺構上層土層群	壺形土器	口径 13.2	口縁部は頸部で直立後、両面気味に外反し、頸部は丸くおさめられる。胴部は張りが少ないと思われる。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面は調整不明、内面は斜方向のヘリ削りを施す。	色調 褐色 胎土 粗砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
15	テラス状遺構上層土層群	壺形土器	口径 18.4 胴部最大径 20.3	口縁部は「くの字」状に外反し、均一の厚みもち胴部は丸くおさめられる。胴部は張りが弱い瓦胴と思われる。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面はヘケ目後ナデ、内面は頸部以下2.5cm位までナデ、以下斜方向のヘリ削りを施す。胴部外面にはヘリ状工具による割戻文を施す。	色調 赤褐色 胎土 粗砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
16	テラス状遺構上層土層群	壺形土器	口径 12.8	口縁部は「くの字」状に強く外反し、胴部は平坦にナデを、やや内側に肥厚する。胴部は肩の張らないものと思われる。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面は斜方向のヘケ目後ナデ、内面はヘリ削りを施す。	色調 外面：瑠璃褐色 内面：黄褐色 胎土 細砂粒を含む 焼成 良好
17	テラス状遺構上層土層群	壺形土器	口径 15.5	口縁部は「くの字」状に強く外反し、外面はややゆるみ気味で、胴部は外面に肥厚気味である。胴部は肩の張らないものと思われる。	口縁部は平直なナデを施す。胴部外面は斜方向のヘケ目後ナデ、内面は頸部以下1.4cm位からヘリ削りを施す。	色調 外面：淡赤褐色 内面：黄褐色 胎土 粗砂粒を含む 焼成 良好
18	テラス状遺構上層土層群	壺形土器	口径 17.3	口縁部は「くの字」状に外反し、やや内側にゆるみ、胴部は内外に肥厚し、平坦である。胴部は肩の張らないものと思われる。器壁は細くて薄手である。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面は頸部以下ヘケ目後ナデ、内面はヘリ削りを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 粗砂粒を含む 気泡を含む 焼成 良好 口縁部内面に黒斑あり
19	テラス状遺構上層土層群	台付鉢	口径 11.0 底径 6.7	口縁部、体部は碗状で内凹気味に立ち上がり、口縁端部は懸縁を呈しつつ丸くおさめられる。台部は斜め外下方に両面気味に開き、端部は尖り気味におさめられる。	口縁部、体部外面はヘケ目後ナデ、接合部以下はヘリ削り、内面はヘリ削りを施す。台部内面はヘケ目を施す。	色調 瑠璃褐色 内面：黄褐色 胎土 やや軟調 一部に黒斑あり
20	テラス状遺構上層土層群	台付鉢	口径 15.2 器高 8.5 底径 6.5	口縁部、体部は碗状で内凹気味に立ち上がり、口縁端部は懸縁を呈しつつ丸くおさめられる。台部は斜め外下方にのび、端部は丸くおさめられる。	口縁部は横ナデ、体部外面はヘケ目後ナデ、内面はヘケ目後体外面のヘリ削りを施す。	色調 赤褐色 胎土 粗砂粒を多量に含む 焼成 軟調 体部外面に黒斑あり
21	テラス状遺構上層土層群	底形	底径 5.2	底部は平直である。	胴部外面はヘケ目後ナデ、内面はヘリ削り後ヘケ目を施す。	色調 黄褐色 胎土 粗砂粒を多量に含む やや軟調
22	テラス状遺構下層土層群	壺形土器	口径 17.5 胴部最大径 18.5 底径 4.5 器高 24.5	口縁部はゆるやかに外反し、端部は平たくおさめられる。胴部は張りが弱い瓦胴で、胴部最大径は中位に近い比率にある。底部は大型の平底である。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面は斜方向のヘケ目、内面は頸部よりやや下がったところから下方斜方向のヘリ削りを施す。	色調 外面：淡赤褐色 内面：黄褐色-淡赤褐色 胎土 粗砂粒を含む 焼成 やや軟調 胴部外面に黒斑あり
23	テラス状遺構下層土層群	壺形土器	口径 16.5 胴部最大径 17.9 底径 5.3 器高 24.4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめられる。胴部は張りが弱い瓦胴で、胴部最大径は比率にある。底部は大型の平底である。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面は斜方向のヘケ目、内面は斜方向のヘケ目削りを施す。胴部外面の頸部直下にはクレン状工具による割戻文を施す。	色調 外面：淡赤褐色-赤褐色 内面：黄褐色 胎土 粗砂粒を多量に含む 焼成 軟調 胴部外面に黒斑あり
24	テラス状遺構下層土層群	壺形土器	口径 16.4 胴部最大径 18.3	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は強くナデを四角をなし、わずかに内側に肥厚する。胴部は張りが少ない瓦胴で、胴部最大径は比率にある。	口縁部外面は横ナデ、内面はヘケ目後、頸部直下が見える。胴部外面はヘケ目、内面はヘリ削りを施す。胴部外面の頸部直下にはクレン状工具による割戻文を施す。	色調 淡赤褐色 胎土 粗砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調 胴部外面に黒斑あり
25	テラス状遺構下層土層群	壺形土器	口径 12.6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はヘリ状工具による1条の懸縁の前縁がめぐる。胴部は肩が角張るが、張りは少なくすんどう形である。	口縁部は横ナデを施す。胴部外面は斜方向のヘケ目、内面は頸部よりやや下がったところから下方斜方向のヘリ削りを施す。胴部外面の頸部直下にはクレン状工具による割戻文を施す。	色調 赤褐色 胎土 粗砂粒を含む 焼成 やや軟調
26	テラス状遺構下層土層群	鉢形土器	口径 23.2 胴部最大径 20.1	口縁部は両面気味に大きく外反し、端部は角張って下方にやや肥厚気味である。体部は張りが少ないと思われる。	口縁部はヘケ目後ナデを施す。胴部外面はヘケ目、内面はヘリ削りを施す。口縁端部の土層に1条の直線文を引き、胴部外面の頸部直下にはクレン状工具による割戻文を施す。	色調 外面：淡赤褐色 内面：瑠璃褐色 胎土 粗砂粒を若干含む 焼成 やや軟調

番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形について	調整、成形について	備考
27	テラス状遺構下 掘土部群	甕形 土器	口径 14.6 胴部最大径 14.0 底径 3.2 器高 13.7	口縁部は「くの字」状に外反し、胴部は角垂り下方にわずかに肥厚気味である。胴部は盛り、底部は小さな上げ底である。	口縁部は横ナゲを施す。胴部外面はハケ目後ナゲ、内面は斜方向のへう割りを施す。胴部外面の腹部以下にはクシ歯状工具による刻文を施す。	色調 外面：黄褐色～赤黄褐色 内面：赤黄褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 軟調
28	テラス状遺構下 掘土部群	鉢形 土器	口径 18.8 胴部最大径 16.7 底径 4.7 器高 12.7	口縁部は「くの字」状に外反し、胴部は平たくおさまるが、下方にわずかに肥厚気味である。胴部最大径は最上位にあり、底部に向かって盛りが少なくなっている。底部は平底である。	口縁部外面は横ナゲ、内面はハケ目後ナゲを施す。胴部外面は斜方向のハケ目、内面は上半が斜方向、下半が斜方向のへう割りを施す。	色調 外面：赤褐色～黄褐色 内面：赤黄褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
29	テラス状遺構下 掘土部群	甕形 土器	口径 15.7 胴部最大径 14.5	口縁部は「くの字」状に外反し、胴部は平たくおさまる角垂って終わる。胴部は筒がやや張るものである。	口縁部は横ナゲを施す。胴部外面は斜方向のハケ目後ナゲ、内面はへう割りを施す。	色調 赤褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
30	テラス状遺構下 掘土部群	甕形 土器	口径 11.0 胴部最大径 10.7	口縁部は短かく外反し、胴部は平たくおさまる。胴部は筒が角垂るずんどう形と称される。	口縁部外面は横ナゲ、内面は斜方向のハケ目を施す。胴部外面は斜方向のハケ目、内面は斜方向のへう割りを施す。口縁部には凹線状の幅広の直線文がめぐる。	色調 赤褐色 胎土 中・中砂粒を含む 焼成 良好
31	テラス状遺構下 掘土部群	鉢形 土器	口径 15.4 器高 6.5	体厚はやや狭い筒状を呈し、筒直気味に立ち上がり、口縁部は器厚を減じつつ丸くおさまる。底部は丸底と思われる。	外面は磨減が著しく調整不調。内面はハケ目後へう割りを施す。	色調 外面：赤褐色 内面：暗褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
32	テラス状遺構下 掘土部群	甕形 土器	口径 3.2	胴部は丸みをおびた筒状と思われ、底部は厚い平底である。	外面はハケ目後ナゲ、内面はへう割りを施す。	色調 外面：淡赤褐色 内面：赤褐色 胎土 細・中砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
33	調査区	甕形 土器	口径 16.8	口縁部は「くの字」状に外反し、やや外側がよくらむ。胴部は外側は丸く肥厚させる。胴部は筒が直線的に広がる。	口縁部は外面は横ナゲ、内面はハケ目後ナゲを施す。胴部外面はハケ目、内面は斜方向のへう割りを施す。	色調 黄褐色 胎土 微細砂粒をわずかに含む 焼成 良好
34	調査区	高坏	口径 26.8	耳部の口縁部・体部は外側気味に大きく外反し、胴部は平たくおさめ下方にわずかに肥厚させる。体部と底部の境には明確な線があり、底部は丸みをおびている。	外面はていねいなナゲ、内面は細かいへう割りを施す。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂粒を若干含む 焼成 良好
35	調査区	甕形 土器	口径 1.1	底部は小さな平底で突出させている。	胴部外面はナゲ、内面は斜方向のハケ目を施す。	色調 外面：黄褐色 内面：赤褐色 胎土 細砂粒を多量に含む 焼成 やや軟調
36	調査区	高坏	口径 14.6	胴部部の破片で外下方に大きく外反し、胴部は丸くおさまる。	胴部外面はハケ目、内面は横ナゲを施す。	色調 明赤褐色 胎土 微細砂粒を若干含む 焼成 良好

微細砂粒 ～1mm未満の粒
細砂粒 1～2mm程度の粒
中砂粒 2～3mm程度の粒
粗砂粒 3mmより大きい粒

IV 下沖5号遺跡

(1) 遺跡の概要

下沖5号遺跡は、南から延びる低丘陵が石内川のつくる沖積地に向って南及び北に緩く延びた部分に立地し、標高は35m前後、水田からの比高21mを測る。前述した下沖3号遺跡は、本遺跡から北東へ200m離れた位置にある。

今回、検出した遺構としては、竪穴式住居跡18軒（礎で替え分は除く）、掘立柱建物跡6棟、住居跡状遺構2カ所、土壇1基があげられる。また、遺物としては、縄文時代早期と考えられる石器類（石鏃、スクレーパー、剣片等）、弥生時代の土器、石器（磨製石斧、石鏃等）、鉄器（鍬、刀子、ノミ、鉄鏃）等である。

遺構は、その配置から南北2群に分けられ、それぞれ尾根の頂部平坦面を広場状の空地とし、それを中心として、掘立柱建物跡、比較的大型の竪穴式住居跡、さらにそれを取り巻くようにして斜面から小型の竪穴式住居跡を検出した。なお、前述した広場状の空地からは、南北両群に対応するように焼土帯が検出された。

掘立柱建物跡については、立地が竪穴式住居跡とは明らかに異なる尾根上平坦面に造られており、1間×1間のもも含めて、掘立柱建物跡群として一括して取扱った。また、斜面部分に分布する小型の竪穴式住居跡については、急斜面に造られているため、柱穴はもとより掘り方の大半を失っているものもかなりあり、中には住居跡として疑点の残るものも含まれていた。しかし、これらは、いずれも盛土をほどこした床面を有し、壁溝も明瞭に壁をめぐっていることを確認し得たため、すべて竪穴式住居跡として認定した。

なお、本遺跡においては、樹木の伐倒後、調査前の表面観察の時点で、遺構の存在する地点をほぼ推定しえた。そのため、全体を50cmコンタで、必要に応じて部分的に25cmコンタで地形測量を行い発掘調査に備えた。その中で、第1号住居跡のみ、かなりの規模の掘り方を持っているにもかかわらず、遺構の存在を予想しえなかったことは、注目される。

(2) 遺 構

第1号住居跡（第15図）

本遺跡の所在する丘陵最高所から北側に派生する尾根の中央部分に位置する竪穴式住居跡である。掘り方内部からは、多量の炭化材及び焼土を検出し、焼失住居と考えられた。

平面プランは、北東側にわずかにはり出したいびつな五角形を呈しており、規模は東西方向540cm、南北方向520cmを測る。北側の端が、尾根上平坦面の縁辺、傾斜変換点あたりに位置しており、床面の形状も若干不整形となっていることから、床面が若干流失していると考えられる。しかし、残存状態の良い南東部分から判断して、それほど大きな崩れはなく、比較的残存状態のよい住居跡といえよう。

壁は、最高所である東側で壁高32cmを測り、しだいに壁高を減じながら傾斜変換点あたりで消滅する。壁溝は、幅6cm～15cm、深さ4cm～7cm、現存する壁に接してめぐっており、西端及び東端においても傾斜変換点あたりできえている。なお、北側部分についても一部270cmにわたって溝を検出した。また、傾斜変換点あたり、壁溝が西側で消滅する地点の南側から、一辺70cm程度、深さ10cm前後の方形の掘り込みと小ピット列を検出した。この掘り込みは、住居跡の掘り方の上層部から、外部に方形にはり出すように

掘りこまれており、形状から住居跡に付属する入口等の施設と考えられる。

床面からは、ピット11個が検出されており、その内、位置関係、形状、規模及び底面レベルから主柱穴と考えられるものは、P1・P3・P5・P6・P7である。これらは、径34cm～40cm、深さ65cm～70cmを測り、柱穴間210cm前後の等間隔でなっている。また底面レベルもほぼ一致している。また、柱穴の位置関係だけをみれば、P2・P5・P6・P7の4個の柱穴を主柱穴とする考え方もできよう。しかし、P2が他の3本に比して底面レベルが40cmも高く、P1・P3・P5・P6・P7が内部から多量の炭化物を出したのに対して、P2からは炭化物が出土していないことから、P2はこの住居跡が焼失した時点では、すでに使用されていなかったことが考えられる。その時、前述したごとく北西側のプランが若干外につきだしたような形状を呈しているのに着目すれば、本来隅丸方形あるいは円形の平面プランをとりP2を含む四本柱の住居であったものを、北東部を拡張し、柱穴も深く掘り変えて五本柱の住居としたという想定も可能であろう。また、床面中央から一辺95cm前後、深さ10cm程度の方形の掘り込みを検出した。内部には、炭の多く混入した暗黒褐色土が充満しており、位置、形状からみて本住居跡に伴う竈跡と考えられる。

ところで、前述したごとく本住居跡内からは多量の炭化材を検出した。また、最大20cmの厚さで床面から焼土が検出されており、部分的にはあるが床面から10cmぐらい上で、固く焼けしまった焼土層も検出された。炭化材は、主に壁に近い側で30cm、中心部で10cm程度床面から浮いた状態で検出された。炭化材は、主に壁に近い側で30cm、中心部付近で10cm程度床面から浮いた状態で検出された。炭化材は、全体に北西部分より南東部分が良好な残存状態を示し、柱材と推定しうる炭化材も西に向けて倒れこんだ状態を示していることから、本住居跡が西側に向って焼け落ちたことが想定できよう。また、南東部分の炭化材の出土状態をみると、幅14cm前後の平たい炭化材が、7cm～8cm間隔で放射状に並んだ状態で検出された。これは、草葎根の種木として考えた場合、分布が密であり、これらが丸太材とは考え難いことから、^{注1)}板状の用材等で屋根が構成されていた可能性を指摘しておきたい。なお、この想定が正しいとするならば、屋根上には草及び土で目張が施されていたことが考えられ、前述したとき南東部での焼土の出土状態も首肯できよう。このことについては、いづれにしろ可能性を列記したにすぎず、今後の類例の増加を待ってさらに検討を加えたい。

遺物としては、床面から弥生土器数点が出土しており、その中で図示しえたものは底部2個体分(1・2)である。本住居跡の時期は、これらの土器から、弥生時代後期前葉から中葉にかけての時期と考えられる。

なお、前述したごとく、大部分の住居跡が調査前の地形観察の時点で掘り方の存在を予想しえたのに対して、本住居跡のみその存在を予想しえなかった。また、本住居跡が焼失した時点で放棄された後にも、直近で人々の生活が継続していたにもかかわらず、焼土及び炭化材はまったく攪乱をうけていなかった。以上のことから、本住居跡は、焼失後埋めもどされていた可能性があることも指摘しておきたい。

第2号住居跡(第16図)

第1号住居跡の南約2mに隣接するこの住居跡は、遺跡の北に伸びる尾根の中央線よりやや西寄り、頂部平坦面が急斜面に変わる変換点付近から検出された。本住居跡は、径500cmを測る円形に近いプランを呈している。壁高は最高47cmを測るが、立地の関係上、西側の壁の大半は失われている。壁溝は幅3～15cm、深さ4～7cmで、壁遺存部分については全周している。

規模・位置関係等から主柱穴と考えられるピットは4か所ありP1～P4、径15～30cm、深さ24～44cmを測る。また、この他に床面からは径3～12cm、深さ10cm前後のピットが6か所検出された。これらのピットは、60cm前後の等間隔で壁に沿うように並んでいる。このことから、これらのピットは本住居

跡に伴う何らかの施設と考えられるが、その性格は不明である。

床面の中央付近には径40cm前後、深さ8cmを測る不整形の掘り込みが検出された。内部には炭化物等は見られなかったが、その位置から炉跡の可能性はある。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は、第43図4・5であり、その形態から本住居跡の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

第3号住居跡（第16図）

第1号住居跡の東1.5mに隣接するこの住居跡は、遺跡の北に伸びる尾根の中央線よりやや東寄り、頂部の平坦面が急斜面に変わる変換点付近から検出された。本住居跡は立地の関係で大部分が失われているが、遺存部分は東西270cm、南北80cmで、壁高は最高18cmを測る。壁溝は東西壁の一部でとぎれるが、幅6～20cm、深さ2cm前後で巡らされている。

床面と思われる範囲からは径12～16cm、深さ44～49cmを測るピットが2ヶ所検出された（P1・P2）。これらは、住居跡の壁面に対してやや歪んだ配置となっているが、その規模・形態等から本住居跡の支柱穴と考えられる。

本住居跡の床面からは炭化物が出土している。焼土等は検出されなかったが、火災にあった可能性があることから、前述の1号住居跡が焼失していたことと何らかの関連がある可能性がある。

本住居跡から時期判定の可能な遺物は出土せず、本住居跡の時期は不明である。

第4号住居跡（第18図）

第1号住居跡の西1m、レベル差で0.5m下ったところに位置する竪穴式住居跡である。斜面にあるため南東の壁及び床面の一部を残すのみで、他は流失している。平面プランは、残存部から、隅丸方形と推定され一辺3m前後の規模を有すると考えられる。壁高は最高所で29cm、壁溝は残存部を全周し、幅は4～10cm、深さ2cm前後である。床面及び斜面からピット5個を検出したが、位置関係及び底面レベル等からみて、本住居跡の支柱穴は、P1・P2と考えられる。しかし、P1は特に口径が小さく、支柱穴とするには無理があることから、明言はさけておきたい。

なお、東壁の隅角から、壁を15cm程度横に掘り込んで造られた土壇を検出した。上端部の口径50cm、高さ25cm、底面は一辺50cmの方向を呈している。内部からは、底面についた形で土器片(7)が出土している。

本住居跡の時期は、土壇内から出土した土器から弥生時代後期前葉と考えられる。

第5号住居跡（第19図）

この住居跡は第1号住居跡の北約5mに位置し、遺跡の北に伸びる尾根の先端、緩やかな斜面が急斜面となる変換点付近から検出された。遺存部分は東西壁340cm、南北壁25cm、壁高最高13cmを測り、残存部分の形態から方形のプランとなると考えられる。壁溝は2～18cm、深さ2～6cmで、壁の遺存する部分については、南側のごく一部を除いて、全周している。

床面と思われる範囲から柱穴と考えられるピットが2ヶ所検出されており（P1・P2）、径9～16cm、深さ26～28cmを測る。これらは、住居跡の壁面に対してやや西側による配置となっているが、規模等から本住居跡の支柱穴と考えられる。

本住居跡に伴うと考えられる土器は、いずれも細片で図示しえなかった。しかし、その形態から本住居跡の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

第1号掘立柱建物跡(第20図)

この建物跡は1号住居跡の東1.3mに位置し、遺跡の北に伸びる屋根上の平坦面から検出した。棟方向はN44°Wで、桁行360～370cm、梁行120～160cmを測る1間×2間の掘立柱建物跡と考えられる。

柱穴は径22～27cm、深さ28～57cmを測り、柱穴底面レベルはほぼ一致する。柱間はP2～P3間が200cm、P3～P4間が220cmであることを除けば、桁行の柱間は180cm、梁行の柱間は160cmを測り、桁行及び梁行の各々の柱間は、ほぼ等間隔となる。

柱間の数値から判るようにP3が外側(北方向)に張り出し、建物としてはかなり歪な形態となるため、本建物跡は1間×1間となる可能性もある。しかし、南側の桁行の柱穴列(P4～P6)は、柱間が等しく直線的になっていることから、P4～P6は一体のものと考えられる。また、全ての柱穴の規模・形態・底面レベルは、ほぼ同じであり、周辺からは他の柱穴は検出されなかった。以上のことから、P1～P6の柱穴を一体のものとしてとらえ、1間×2間の掘立柱建物跡とした。

この掘立柱建物跡からは土器(43図8)が出土しており、その特徴から本建物跡の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

第6号住居跡(第21図)

屋根上平坦面の中央部分、最高所に近い地点から検出した整穴式住居跡である。平面プランは、隅丸方形を呈し、南北350cm、東西410cmを測る。壁は、南東側が最も高くして53cm、西に下るにつれて次第に高さを減じ、北西側の壁は一部壁溝を残すのみである。壁溝は、西の隅を一部除いて全周しており、幅5～10cm、深さ2～5cmを測る。床面から柱穴と考えられるピットを5個検出しており、そのうちP1・P2・P4・P5が主柱穴と考えられる。口径27～35cm、深さ20～50cmを測るが、底面レベルは、中央ピットをはさんで南北方向が浅く、東西方向が深い。また、床面中央付近からは、一辺60cm、深さ10cm前後の方形の掘りこみが検出された。この掘り込みの内部には炭化物が充填しており、北西方向に40cmの範囲で焼土面も広がっていることから、炉跡と考えられる。

また、住居跡掘り方外から、幅20～60cm、深さ10cm前後の溝を検出した。この溝は120～170cmの間隔をもって、住居跡の掘り方に沿うように本住居跡をとりまいていることから、本住居跡に伴う溝と考えられる。溝は、南東側中央最高所の一部と、南西側西半分及び北西側からは検出されなかった。また、この溝内からは、径10cm前後、深さ10～20cmの小ピットが約70個検出された。その分布の様子を概観すれば、①本住居跡の最高所である南東側に小ピットの分布が集中し、周辺で低くなるに従ってその数が減少している。②南東側の小ピットについてみれば、5～7個を1つの単位として、ほぼ80cmの間隔で分布していることが観察される。また、この溝の性格を考える時、本遺跡中で本住居跡のみが赤色の粘質土中に掘りこまれた極めて水はけの悪い住居であることを忘れることはできない。つまり、本住居跡の住人にとって、雨水等をどう処理するかは強い関心事であったと思われる、この溝は、配置の状況から排水溝と考えられる。また、小ピットは、80cmの間隔で分布していることなどから、雨水等の排水を有効に行うため、屋根の檜木を溝内に葺下し、それを固定するために打ちこんだ杭の痕跡ととらえておきたい。ただ、その場合、本住居跡の上屋構造が、著しく大きなものとなるため疑問が残される。

遺物は、住居跡床面から弥生土器(24)及び刀子(73)が、壁溝内及び壁溝上から鈍(72)及び砥石(75)が出土しており、掘り方外の溝からも土器2個体分が出土している。本住居跡の時期を住居跡内遺物から考えるなら、土器24は「くの字」状に反する口縁部が器厚を減じつつたちあがり端部を平たくおさめるという特徴を持ち、後期後葉のものと考えられる。また、鈍(72)は、形態的にみて古墳時代前半に盛行するものに

類似したものと考えられる。^{※2)}また、外周溝内の土器(26・27)は、その形態から弥生時代後期末葉から古墳時代初頭に位置づけられるものであり、それが溝内に完全に埋没していたことから、少くともこれらの土器が埋没した時点では、本住居跡は使用されていなかった可能性が高いと考えられる。以上のことから、本住居跡は後期末葉から末葉にかけての住居跡と考えられる。

なお、本住居跡の外周溝東側に近接して、第3号掘立柱建物跡が位置しており、その位置関係からこれら2つの建物が並存していた可能性は低く、この建物跡が造られたころには、すでに本住居跡が放棄されていた可能性も考えられよう。

第7号住居跡(第22図)

本住居跡は、尾根上平坦面縁辺部分南西側に位置し、最大の規模を有している。

平面プランは長円形を呈し、長径780cm、短径は推定で640cmを測る。本住居跡は、地山を最高65cm程度掘りこんで造られており、西側については盛土されていたためか、床面1/4程度が流失している。壁溝は、幅5～15cm、深さ2～7cmの規模で現存する壁を全周しており、南栗から2/3くらいのところまで消失している。また、本住居跡南西、壁溝が消失する地点の北側で、方形の掘り込みと小ピット列を検出した。方形の掘り込みは、南北90cm、東西60cm、深さ14cm前後で、その外縁にそって径6～10cm、深さ10cm前後の小ピットがL字状に並んでいる。位置、形状から考えて、本住居跡に付属する施設と考えられることから、ここでは一応入口等の施設を想定しておく。

柱穴と考えられるピットは、床面から23個検出されている。これらを口径及び深さで分類するならば、

(A) 径30～38cm、深さ73～81cm — [P1・P3・P4・P5・P6・P7・P9・P10・P11・P12]

(B) 径25～40cm、深さ69～59cm — [P15・P16・P17・P18]

(C) 径20～25cm、深さ40～49cm — [P20・P21・P22]

(D) 径15～20cm、深さ32～15cm — [P2・P8・P13・P14・P19・P23]

の四種類に分れるようである。この中で特に、(A)に分類された10本のピットについては、口径、深さとも他のピットより優れており、位置関係及び柱穴間隔等から主柱穴としてふさわしいことから、本住居跡は10本の主柱穴によって支えられた住居跡といえよう。また、床面中央からは、P15・P16・P17・P20・P21・P22によって形成された方形のピット列が検出された。これらはそれぞれ(B)及び(C)に分類されるピット群であり、礎で替え等による個々の対応関係は示せないにしても、これらのいずれかが対応しながら、四角形の小屋組みを形成していたことが想定できる。これらのピット群を、本住居跡に先行する住居跡の痕跡と考えることもできようが、①北西側と南東側で底面レベルに大きな差があることから、これらによって構成される柱穴群は、主柱穴としては想定しにくい、②床面中央部の方形ピットの各角に柱穴がそれぞれ対応して掘り込まれていることから、本住居跡との関連が想定できるということから、これらのピット群を、本住居跡に伴う柱穴群として取り扱うこととした。その場合、これらのピットは、主柱穴の造る小屋組みを支える、副次的な四本柱の小屋組みを形成していたと考えられる。また、本住居跡の形状から、P1及びP7が棟木を直接支える主柱穴と考えられ、その棟木のラインの直下に、P8・P19・P24・P23がほぼ直線上に並んでいることから、これらのピットが棟木を支えるための副柱穴である可能性もあろう。また、その際、中央ピットをはきんでP8に対応する位置にP14とP13が並んでおり、これら2本の柱で棟木を支えていたことも考えられよう。床面中央からは、南北125cm、東西90cm、深さ13cm前後の長方形のピットが検出された。内部には炭化物が充満し、かなり強い火が燃やされたためか、掘り方上端部の北側半分が焼土化し、さらに北東側には、35cm四方にわたって焼上帯がのびていた。以上のような位置関係及び検出状況から、本住居跡

に伴う炉跡と考えられる。また、この炉跡をはきんで、北東側及び南西側に130cm離れた位置から焼土帯を検出しており、これは副次的な炉跡、あるいはかがり火のごときものの痕跡とも考えられよう。

以上のように、本住居跡の構造を考えると、2本の主柱穴と6本の副柱穴によって棟木を支え、10本乃至は8本の主柱穴で小屋組を組み、さらに中央部において四本柱の副次的な小屋組によってそれを支えるという、極めて丁寧で、かつ豪壮な上屋構造を想起させ、床面中央部の巨大な炉跡や周辺の焼土帯などと合わせ考えた時、何らかの特別な役割を持った住居跡と考えることもできよう。

なお、本住居跡の床面からは、大きさ10～30cmの上面の平らな角礫が5個検出されており、これらはいずれも床面から5～10cmの高さで水平に置かれていた。また、壁溝内からは、10cm前後の大きさの角礫4個がほぼ等間隔で検出された。住居跡内から出土するような礫については様々な考え方があがるが、現状ではその性格は明確にしない。ただ、床面の検群についてみれば、①上面を水平に保つ努力がされている、②床面から10cm程度の高さに上面が保たれており、レベル的にはほぼ同一である、という特徴を指摘できよう。これは、他の住居跡の場合にも共通する特徴と考えられ、住居跡内の礫を作業台とする説に、疑問をなげかけるものである。また、本住居跡の北西部からは、径10cm前後、深さ10cm前後の小ピットが多数に検出された。その分布の様子をみると、小ピットは、それぞれ壁溝が消失するあたりから始まり、予想される本住居跡の床面の北限にそって分布している。このような小ピットの分布状態は、後述する第9号住居跡においても同様に観察しようである。これらの小ピット列の性格については明確にしたいが、その分布範囲をみたとき、本住居跡の斜面部分、床面が盛土によって形成されていたと想定される範囲に分布が限られることを指摘しておきたい。

本住居跡内から出土した遺物としては、弥生土器(31)及び石器(石鏃)(77)があげられる。本住居跡の時期は、内部から出土した土器及び周辺の土器の出土状態から、弥生時代後期前葉から中葉のころと考えられる。

第8号住居跡(第23図)

第7号住居跡の南西3.2mに隣接するこの住居跡は、遺跡の南西に伸びる尾根頂部の緩斜面上、東側斜面寄り部分から検出された。本住居跡の平面プランは隅丸方形を呈し、南北420cm、東西490cmを測る。壁高は最高45cmを図り、南側の壁は検出できなかった。壁溝は北側の一部、東側及び南東側を除いて幅3～14cm、深さ4～11cmで巡っている。

形状・配置等から主柱穴と考えられるピットは4ヶ所(P1～P4)あり、径25～28cm、深さ24～45cmを測る。P1～P4の各柱穴間の距離は、P1-P2間257cm、P2-P3間282cm、P3-P4間256cm、P4-P1間231cmを測り、P3の位置が若干ずれている。

床面中央付近からは南北40cm、東西50cmを測るほぼ長方形の掘り込みが検出された。この掘り込みは、内部に炭化物を含むこと及びその位置から炉跡と考えられる。

本住居跡の周辺からは、径9～21cm、深さ9～27cmを測るピットが、120～280cmの間隔で14ヶ所検出された(P5～P18)。これらのピットは、住居跡から70～120cm離れて掘り方に沿うようよう配置されていることから、本住居跡に伴うものと考えられる。一般に住居跡のプランに沿って周辺に並ぶピットの性格としては、垂木尻を受ける杭等の跡が想定されている^(注3)。ただ、本住居跡の場合にそう考えると、南側のピットは、その立地の関係から北側のものよりも70～100cm低いレベルにあり、主柱穴を結ぶラインからの距離も北側のものと比べて20～40cm短くなっていることから、北側の屋根が急勾配になり、上屋の形は歪んだものとなる。以上のことから、ここではこのピットを一応垂木尻を受ける杭等の跡とするが、南側

のものに関しては、垂木を途中で支える副支柱、あるいは側壁を構成していた杭等^(注4)の跡となる可能性もあることを指摘しておく。

本住居跡の床面からは、大きさ20cm前後の上面が平坦な石が検出された。これらの石の上面には作業等に使用された痕跡はなく、その性格は不明であるが、上面のレベルがほぼ一致し、床面の隅に置かれているという特徴をもつ。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は細片で図示し得なかったが、その特徴から弥生時代後期後葉から古墳時代初頭と考えられる。

なお、南西側で溝のとされる部分から径3～8cm、深さ5cm前後を測る11個のピットが東西方向に並んで検出された。これらのピットの東側の並びは、ゆるく北側へ曲がり、残存する東壁の方へ伸びていることから、本住居跡の南限にあたるものと考えられる。同様のピットの並びは、第7号住居跡にもみられ、その性格については明言し難いが、第7号住居跡と同様床面の盛土部分に分布が限られることを指摘しておく。

第9号住居跡(第24図)

この住居跡は、遺跡の南西に伸びる尾根の突端の斜面上より検出された。第8号住居跡の南東約40mに位置し、レベル差3mを測る。本住居跡の遺存部分は南北390cm、東西310cmを測り、平面プランは南壁が不整形に張り出してはいるが、基本的には円形と考えられる。土層観察によると、本住居跡は北側の地山面を最大46cm掘り込み、南側に盛土を施して床面としている。このため、南側の壁面と床面の一部は検出できなかった。壁溝は幅6～15cm、深さ2～5cmで、壁遺存部分については全周している。

床面には、規模・形状等から柱穴と考えられるピットは3ヶ所(P1～P3)あり、径10～17cm、深さ16～62cmを測る。このうちP1・P2は底面レベルが一致しており、P3は他のものに比べて30cm前後浅いことから、P1・P2が主柱穴で、P3は補助的な支柱を立てたものと考えられる。

床面中央付近から南北75cm、東西55cmを測るほぼ方形の掘り込みを検出した。この掘り込みは、内部に炭化物を含むこと及びその位置から灰跡と考えられる。

東側の壁の外側に隣接して南北90cm、東西130cm、深さ15cmを測る長方形の掘り込みを検出した。掘り込みの北東及び南東の角には径8～17cm、深さ30～40cmのピット各々1個ずつ、南側の壁には径2～4cm、深さ4～7cmの小ピットが4ヶ所存在している。この掘り込みは住居跡の張り出し部分に対応しており、本住居跡に伴う施設であると考えられる。なお、その性格であるが、東西両角のピットがその規模及び形状から柱穴と考えられ、その上に土層の存在が予想できることや、掘り方の方向が掘立柱建物群の存在する丘陵の頂上平坦面を意識していると考えられることから、本住居跡の出入口となる可能性がある。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は第46図35であり、本住居跡の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

なお、本住居跡の床面から土壌が検出されたが、切り合い関係から住居跡に先行するものと考えられるため後述する。

第10号住居跡(第25図)

本遺跡中最大規模の第7号住居跡の北西2m、レベル差で1.5m下ったところに位置する竪穴式住居跡である。斜面を掘りこんで造っているため、壁及び床面は、南東側の壁とその周辺1/4程度を残すのみであった。残存部の形状から、一辺420cm程度の隅丸方形の平面プランをもつと考えられ、壁高は最高所で18cmを測る。壁溝は残存部分をほぼ全周しており、幅10～28cm、深さは最深部で6cm程度で、若干幅広といえよう。床面からは、柱穴と考えられるピットが2本検出されており、径30～34cm、深さ25～28cmで、底面レベルはほぼ一致している。位置及び形状から見てこれら2本のピットが主柱穴と考えられるが、それ

それ北東及び南西の角に寄った位置に掘り込まれていることから、本住居跡は四本柱の竪穴式住居跡と考えられる。

なお、本住居跡北東隅から、壁溝にそって完形に近い7個体の土器が、おりかさなるように出土している(第26図)。その出土状態を見ると、①全体的に土器が南西方向から北東方向へ動いている。②北東にある土器の上に南西にある土器がたおれこんでいる。③土器48の底部周辺で、その上と下から土器47の破片が出土している。④土器45と46が口縁部を接している。以上のようなことが観察できる。このことから、①これらの土器は、北東方向へたおれたものである。②土器45と46、47と48はかさねられていた可能性が高い、ということが推測でき、さらにこの推測が正しければ、これらの土器は口を下にしてふせて置かれていたことになる。このように考えると、これらの土器の示している状態は、日常生活の中で、使用していない土器を、住居の片隅にかさねふせておいた状態を示しているものと考えられよう。ただ、貯蔵用の土器といわれる壺形土器がここに含まれていないことは、食糧のみを持ち出して、あとは住居と共に放棄されたことを示しているとは考えられないだろうか。いずれにしろ、本住居跡のこれらの土器は、日常生活における土器の構成を示す好資料と考えられる。ただ、その際、①十分使用にたえる土器が7個体も住居内に放置されていること、②本住居跡が放棄された後も、周囲に住居が造られ、人々の生活が続いているにもかかわらず、これらの土器が無視されつづけていることなどの点で、かなり奇異な感じをうける。本住居跡と同様に、住居内に土器を残したまま放棄された例としては、管見するところ芳か谷遺跡第3号住居跡^(注5)と岡谷遺跡第2号住居跡^(注6)がある。岡谷遺跡の場合、やはり壺形土器が出土しておらず、類似した例といえるが、本住居跡が放棄後も遺跡としては継続しているのに対して、前述の2例とも住居跡の放棄をもって遺跡が断絶している点が異なっている。いずれにしろ、住居跡内に土器及び鉄器等が放置される例は少く、その意味については、今後の類例の増加をまって、さらに検討を加えていきたいと考える。

本住居跡の時期は、これらの土器からみて弥生時代後期中葉と考えられる。

第11号・12号住居跡(第27図)

これらの住居跡は、第7号住居跡の北3.5mに位置し、遺跡の存在する丘陵頂部の西側斜面から検出された。床面レベルはほぼ一致しており、両者は重複していた可能性がある。

第11号住居跡の壁面は、南北240cmにわたって円弧状に遺存しており、壁高最高11cmを測る。床面と推定される範囲から径14～22cm、深さ14～31cmのピット4ヶ所を検出した。このうち主柱穴は、その配置からP1・P2と考えられる。P1・P2の間からは焼土が検出されており、その位置から炉跡と思われる。

第12号住居跡は、遺存する南北壁240cm、東西壁90cm、壁高最高26cmを測る。壁溝は幅7～18cm深さ1cm前後を測り、東壁の一部でのみ検出した。床面と推定される範囲からは径18～21cm、深さ25～30cmのピット2ヶ所を検出した。これらは、その形態及び位置から本住居跡に伴う柱穴と考えられる。住居跡の南東隅、床面範囲内と思われる部分から焼土が検出されたが、やや壁面に寄り過ぎていてと考えられることから、その性格は不明である。

両住居跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり、その時期は不明である。

なお、両住居跡の間にも焼土面が検出されていることから、第11・12号住居跡の他にもう1軒の住居跡が重複している可能性もあるが、確認できなかった。

第13号住居跡(第28図)

この住居跡は、第6号住居跡の南約5mに位置し、丘陵頂部平坦面が西側傾斜面に変わる変換点付近から検出された。本住居跡の遺存部分は南北240cm、東西120cm、壁高最高20cmを測る。壁溝は幅10～18

cm、深さ1～4cmを削り、壁の遺存部分についてはほぼ全周している。

本住居跡の床面と推定される範囲から径6～16cm、深さ17～25cmのピット4ヶ所を検出した。壁面に対して歪んだ配置となるが、規模・底面レベル等から、P1及びP2が本住居跡の主柱穴と考えられる。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり、その時期は不明である。

なお、本住居跡の北側に接して南北2.6m、高さ最高18cm前後を測る掘方を検出した。溝、柱穴等は検出されずその性格は不明であるが、他に住居跡等があった可能性もある。

第14号住居跡(第29図)

第2号住居跡の南西約8.5mに位置するこの住居跡は、遺跡の北に伸びる尾根の西側斜面から検出された。この住居跡は、南北350cm、東西190cmを測る隅丸長方形のプランを呈する。斜面を30cm前後を掘り込み、盛土を施すことによって構築されたと考えられ、西側の壁は検出できなかった。壁溝は、幅6～25cm、深さ14～21cmの規模を持ち、北側で110cm、南側で190cm前後の長さを測る。南側の壁溝は完存しており、その西端が北方向へ屈曲している。

床面からはピット5ヶ所を検出した。このうち形状・底面レベル等から主柱穴と考えられるものは、P1及びP2で径12～20cm、深さ15～21cmを削り、これらはプランに対して若干歪んだ配置となっている。

本住居跡に伴うと考えられる土層は第48図53の脚台部のみである。脚台部は厚くがっしりとした造りをしており、指頭圧痕が明瞭に残っている。同様の特徴は第50図68も有していることから、明言はし難いが、ここでは一応それと同時期、弥生時代後期前葉としておく。

本住居跡は、斜面部分に盛土を施して構築されているにもかかわらず、その遺存状態は非常によく、後述する西側斜面の住居跡のほとんどが、その遺存部分の規模・形状から、本住居跡と同様のものであったと推定される。

第15号住居跡(第30図)

第10号住居跡の西側4m、レベル差で2m下った位置にある竪穴式住居跡である。急斜面に造られているため、床面の西側半分は流失している。平面プランは、残存部分の形から隅丸方形と考えられる。残存部分の壁高は最高所で41cmを測り、幅12～20cm、深さは最深部で7cm程度のかかり幅広の壁溝が、残存する壁を全周している。床面からは、ピット及び焼土が検出された。位置関係から、主柱穴と考えられるピットはP1・P2であり、P1が径12cm深さ18cm、P2が径10cm深さ10cmで、底面レベルはほぼ一致している。ただ、主柱穴とするには、口径、深さとも小規模であり、若干の疑問を残す。また、床面中央部にあるP3は、南北方向60cm、東西方向50cm深さ10cm前後を測り、北側から焼土が検出されていることから炉跡と考えられる。ただ、内部から明瞭な炭化物の出上がみられなかったため、若干の疑問が残る。

本住居跡に、直接伴う遺物はなく、時期は明瞭にしがたい。

第16号住居跡(第31図)

第9号住居跡の北約3mに位置するこの住居跡は、遺跡の南西方向に伸びる尾根の西側斜面から標高33mのコンタラインに沿って、約12mにわたって検出され、少なくとも6軒分の重複が認められる。これらの住居跡は、出土状態から、短期間に連続して建て替えられたと推定され、後述する第17号住居跡と同様に、平面プランの上でも隅丸方形ないしは隅丸長方形の同一形態をとると考えられるため、第16号住居跡として一括して扱い、記述の便宜上a～fの記号をふった。

これらの住居跡は、斜面上に立地する関係上、地山面を掘り込み、盛土を施して床面を構築している。このため、本住居跡の遺存状態は極めて悪いが、土層観察の結果、明らかに壁溝が存在することや、住居跡a・

b・d・f は、遺存部分の規模・形態から、前述の第14号住居跡と同様のプランを有すると考えられること、また、床面の確認できなかつた部分からも遺物が同一レベルで検出され、盛土による床面が想定できることから住居跡とした。^(注3)

住居跡 a は、遺存部分の西壁 420cm、南西隅部 30cm、壁高最高 35cm を測る。壁溝は幅 8～20cm、深さ 1cm 前後を測り、壁の遺存部分について全周している。

住居跡 b は、住居跡 a の北側に位置し、同住居跡より 13cm 低位に床面を有する。本住居跡は、検出時の平面の切り合い関係から、住居跡 a に対し後発するものと考えられる。遺存部分の東壁は 160cm、南壁隅部 70cm を測り、壁溝は幅 8～18cm、深さ 1～3cm の規模で、壁の遺存部分について全周している。

住居跡 c は、その南側で住居跡 b と重複しており、b 住居跡の上方約 5cm に床面を有し、残存する東壁 130cm、壁高最高 20cm を測る。壁溝は、壁遺存部分については全周しており、幅 4～8cm、深さ 1cm 前後を測る。

住居跡 d は、その南側で住居跡 c と重複している。両者の床面は、ほぼ同レベルであり、住居跡 e の溝が d の溝を切っていることから、本住居跡は、住居跡 e に先行するものと考えられる。残存する南西壁は長さ 200cm、壁高最高 13cm を測り、壁溝は幅 2～9cm、深さ 2～5cm で、壁遺存部分については全周している。

本住居跡の床面からは径 14cm、深さ 9cm のピットが検出された。本住居跡は床面の大半が失なわれているため、確認されたのは 1ヶ所のみである。しかし、第14号住居跡を基に推定できる本住居跡の平面プランにおける位置やその形態から、本住居跡に伴う支柱穴と考えられる。

住居跡 e は、その南側で住居跡 d と重複している。両者の床面はほぼ同レベルであり、残存部分の形態を見ると、住居跡 d の溝が本住居跡の溝を切っていることから、本住居跡は住居跡 d より後発するものと考えられる。本住居跡の遺存部分は、東壁 140cm、北壁 90cm、壁高最高 21cm を測る。幅 4～9cm、深さ 1cm 前後で壁の北東部及び東部の一部について存在する。

住居跡 f は、その南側で住居跡 e と重複しており、住居跡 e の上方 4cm に床面を有する。遺存部分の東壁 100cm、北壁 50cm、壁高最高 21cm を測り、壁溝は、幅 6～11cm、深さ 1cm 前後で壁遺存部分について全周している。

以上の住居跡のうち、出土した遺物からその時代が判断できるものは、住居跡 a（細片で図示し得なかつた）、住居跡 b（第49図57）及び住居跡 d（第49図58）のみである。住居跡 a は弥生時代後期前葉から中葉、住居跡 b は弥生時代後期中葉、住居跡 d は弥生時代後期後葉の頃のものと考えられ、これらの住居跡は、弥生時代後期前葉から後葉の間に営まれたものと考えられる。

第17号住居跡（第32図）

本住居跡は、第16号住居跡の北東 7m のほぼ同レベルの位置から検出された竪穴式住居跡である。検出された壁溝及び壁面への掘り込みの状態から判断して、最低でも 5 回以上にわたる建て替えがあったものと考えられる。壁溝は、5条検出されており、幅 5～12cm、深さは最深部で 4cm 程度を測り、掘削をくりかえしたため比較的浅い感じをうける。平面プランについては、残存する壁溝の形状等から、一辺 350cm 程度の隅丸方形と考えられ、5 回の建て替えともほぼ同じ平面プランをとると考えられる。柱穴と考えられるピットは床面から 5 個検出されたが、位置等から個々の対応関係も明確にせず、壁溝との対応関係も明言しえない。なお、中央の比較的大規模なピットの周辺からは、焼土が 2ヶ所検出されており、それぞれの時期に炉跡等の施設があった可能性を指摘できよう。

本住居跡内から出土した遺物には、多数の弥生土器がある。これらの遺物の出土状態を概観すれば、上方からの流れこみと考えられる多量の遺物が、主に中央部分、bの床面に集中している。また、地山直上から出土した本遺構中最も古い様相を示す土器は、中央部から南西よりのaの床面を中心とした比較的低い位置から出土している。これらの遺物の出土状態から考察すれば、本住居跡内で最初に造られたのは、最古相の土器の出土するaであり、弥生時代後期前葉と考えられる。また、本住居跡が放棄された時点での遺構は、上方からの遺物の流れこみがbの床面の範囲内には限られていることから、一応bととらえておきたい。時期については、流れこみの遺物が全般的に弥生時代後期中葉のものに限定されていることから、本住居跡が放棄された時期は、弥生時代後期中葉をそれほど下らない時期と考えられよう。以上のことから、本住居跡は、弥生時代後期前葉から中葉にかけて5回以上にわたって連続して建て替えられた住居跡ということができよう。

第18号住居跡(第33図)

この住居跡は、第17号住居跡の北0.8m、床面のレベルで1m低い地点から検出されたものであり、本遺跡中最も低い位置にある。住居跡の遺存部分は南北300cm、東西120cm、壁高は最高33cmを測る。壁溝は幅4～16cm、深さ1～8cmの規模で、壁遺存部分について全周している。本住居跡は、その規模及び形態から第14号住居跡と同様のプランを有すると考えられる。

本住居跡の床面から、径17～22cm、深さ9～15cmのピットを3ヶ所検出した。その配置及び底面レベル等からP1及びP2が、本住居跡の支柱穴と考えられる。

本住居跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり、その時期は不明である。

第1号住居跡状遺構(第34図)

遺跡の南西に伸びる尾根線中央よりやや東寄りの傾斜面上、第8号住居跡の南西約3.3mの地点から東西220cm、南北40cm、高さ最高25.4cmを測る段を検出した。この段の壁に沿って幅5～8cm、深さ2～4cmの溝が巡っており、壁から28～190cm離れて、径10cm前後、深さ27～58cmのピットが4ヶ所(P1～P4)検出された。この段を住居跡と考えた時、P1～P4は支柱穴として想定できそうであるが、底面レベルに最高36cmの差があることや、P1～P4の配置がかなり歪になることから支柱穴とは断定できなかった。

本遺構は、比較的平坦な部分に位置しているにもかかわらず、他に柱穴の存在が予想し得なかったため、建物の想定が難しく、ここでは一応住居跡状遺構とした。

第2号住居跡状遺構(第35図)

第15号住居跡の東1.5mのところから検出した遺構である。現状では、斜面を35cm程度掘り込んで床をつくり出しており、北側寄りの部分では、幅6～8cm、深さ3cm程度の壁溝と考えられる溝も90cmにわたって検出された。また、床面からは柱穴と考えられるピットが2個検出されており、P1径28cm、深さ20cm前後、P2径40cm、深さ20cm前後を測り、底面のレベルもほぼ一致する。この段状の遺構は、他の斜面の住居跡と同じ形態の竪穴式住居跡と考えることもできようが、①支柱穴と考えられる柱穴がプランに対して著しくねじれた位置にある。②床面は壁直下からゆるく傾斜しており、明確に床面とは認定しきれない。③壁溝と考えられる溝もごくわずかしか検出されていない。④他の斜面の住居跡に比して、埋土中の遺物の量が極端に少い。以上のようなことから、竪穴式住居跡とするには疑問が多いため、ここでは一応住居跡状遺構としておきたい。

時期についても、明確に時期決定しうる遺物もなく、不明である。

第2号掘立柱建物跡（第37図）

第6号住居跡の東約3mに位置するこの建物跡は、遺跡の存在する丘陵頂上平坦部より検出された。棟方向はN59°Wで桁行560cm、梁行220cmを測る1間×3間の建物跡である。

柱穴は、径22～28cm、深さ13～14cmを測り、底面レベルはほぼ一致する。桁行の柱間は190cm、梁行の柱間は180cmを測り、桁行及び梁行の柱間はほぼ等間隔である。P6・P7には柱痕跡が残っており、各々径18cm及び25cmの柱が使用されていたと推定できる。なおP1・P2・P3は、柱穴の掘り方の形状が他のものと異なり、複数の柱穴が重複しているかのような状況を呈していることや、P7の内部には底面に到る途中に若干の平坦面が残存していること、また、南端にあるP4・P5が他のもの比べて細いことから、本建物跡には建て替えの可能性があるが確認できなかった。

柱穴内からは土器（第50図69）が出土しており、その形態から本建物跡の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第38図）

第3号掘立柱建物跡は、第2号掘立柱建物跡の南西約4mに位置し、遺跡の存在する丘陵頂上の平坦部より、後述する第4号掘立柱建物跡と重複して検出された。棟方向はN43°Wで、桁行340cm、梁行230cmを測る。1間×2間の建物跡である。

柱穴は径18～28cm、深さ32～57cmを測り、底面レベルはほぼ一致する。桁行の柱間は170cm、梁行の柱間は230cmを測り、桁行及び梁行の各々の柱間は、ほぼ等間隔である。

本建物跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり、その時期は不明である。

第4号掘立柱建物跡（第39図）

この建物跡は、前述の第3号建物跡と重複して検出された。柱間は220cmを測る1間×1間の建物跡である。柱穴の配置から、建物方向が後述の6号掘立柱建物跡と一致すると考えられるため、棟方向はN57°Wと推定される。柱穴は、径18～26cm、深さ19～36cmを測り、底面レベルは、ほぼ一致する。本建物跡に伴うと考えられる遺物は皆無であり、その時期は不明である。

第5号掘立柱建物跡（第40図）

この建物跡は、第3号建物跡の南西約4mに位置し、第2・3・4号建物跡と同様に丘陵頂上平坦部から、後述の第6号掘立柱建物跡と重複して検出された。棟方向はN44°Wで、桁行360cm、梁行240cmを測る。

柱穴は、径26～38cm、深さ18～37cmを測り、底面レベルはほぼ一致する。桁行の柱間は180cm、梁行の柱間は240cmを測り、桁行及び梁行の各々の柱間は、ほぼ等間隔である。

柱穴内からは土器（第50図70）が出土しており、その形態から本建物跡の時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。

第6号掘立柱建物跡（第41図）

この建物跡は、前述の5号建物跡と重複して検出された。柱穴の配置から棟方向N51°Wと推定され、桁行240cm、梁行180cmを測る1間×1間の建物跡である。

柱穴は、径15～26cm、深さ30～39cmを測り、底面のレベルは、ほぼ一致している。

本建物跡に伴うと考えられる遺物は検出されず、その時期は不明である。

第1号土壌（第42図）

この土壌は第9号住居跡の床面から検出された。土層観察の結果、第9号住居跡の張床と考えられる真砂土が土壌上を覆っていることがわかり、平面的にも第9号住居跡の壁溝が本土壌を切っていることから、本

土壇は第9号住居跡に先行するものと考えられる。

掘り方の平面形は長円形を呈し、長軸160cm、短軸50～60cm、深さ20～30cmを測り、断面形は底部がやや凹底状を呈する逆台形である。

掘り方の北西部の壁には、幅6～12cm、深さ10～20cmの浅い段があり、重複の可能性もあるが、土層断面からは確認できなかった。

本土壇の内部から遺物が検出されなかったため、その時期及び性格は不明である。

(3) 遺物

本遺跡からは弥生土器、鉄器、石器等が出土した。以下その概略について述べる。

弥生土器（第43図～第50図）

遺跡全体から大量の弥生土器が出土した。これらのうち壘形土器についてみると、口縁部が「くの字」状に外反し、端部はつまむことにより肥厚させるもの、あるいは平たくおさめるものがほとんどであり、端部に粘土を貼りつけて肥厚させているもの、端部をうすくおさめるものは、全体的にみて少いという傾向を示している。

本遺跡内からは、住居跡内及び住居跡附近に3ヶ所、斜面に2ヶ所、計5ヶ所の土器溜りが検出されている。ここでは各土器溜りより出土した土器の時期傾向及びそれらの土器の出所を検討してみる。

第6号住居跡南側土器溜りは、第6号住居跡と第13号住居跡の間に位置する土器溜りである。出土した土器のうち図示したものは、10・12・25・28～30であり、全体としては25・30のような本遺跡では比較的古い時期に属するものが多いように思われる。この土器溜りは頂上平坦面附近にあることから、流れ込みの状況を呈しているが、さほど二次的移動はしていないと考えられる。

第9号住居跡南西土器溜りは、遺跡の南西に伸びる尾根の突端、第9号住居跡とは尾根線をはきんで反対側に位置する土器溜りである。出土した土器のうち、図示したものは37～41であり、全体としては41のような本遺跡においては比較的古い時期に属するものが多いように思われる。この土器溜り内の土器と第9号住居跡に流れ込んだ土器がかなり接合していることから、この土器溜りの土器は丘陵のかなり高いところ、頂部附近から流れ込んだものと考えられる。

第2号住居跡西側土器溜りは、第2号住居跡の西側にはほぼ隣接して検出されたものである。出土した土器のうち図示したものは11・13～15であり、全体としては11の形態をもつものが多い。また、全体的に薄手のものが多く、他所で出土したスス付着の土器と比較して、ススの付着が著しいものが多いという特徴を有する。丘陵の地形及び本土器溜りの上方にある住居跡の位置関係から、これらの土器溜りは、第2号または第4号、特に第2号住居跡から流れ込んだ可能性が強い。

第14号住居跡土器溜りは、同住居跡の内部より流れ込みの状態で検出されたものである。出土した土器のうち図示したものは51・52で、全体としては52の形態をもつものが多い。14号住居跡は遺跡の北西に伸びる尾根の西側斜面にあることから、南西に伸びる尾根頂部平坦面上の住居跡からの流れ込みは考えにくいこと、また、1号・2号・6号・14号住居跡の位置関係から、6号住居跡からの流れ込みと考えるのが最も妥当であるといえよう。

第17号住居跡内土器溜りは、同住居跡内部より流れ込みの状態で検出されたものである。出土した土器のうち図示したものは60・62・63・64・66・67で、全体としては62及び63の形態をもつものが多い。17号住居跡の上方には多くの住居跡があり、これらの土器がどの住居跡から流れ込んだかは明らかでない。

鉄 器 (第 51 図 71 ~ 74)

1. 袋 鑿 (71)

第 16 号住居跡から流れ込みの状態で出土したものである。鍛造品で、刃先を欠失しているが、現存長 87 mm、袋部長 48 mm を測り、その形態から袋鑿と考えられる。茎部は最大幅 17 mm、厚さ 10 mm を測り、断面は逆台形を呈する。茎部はかなりしっかりとした造りをしており、この鑿は叩鑿の可能性がある。袋部は最大幅 24 mm を測る。茎部に続く部分を薄く平らに伸ばした後、折り曲げることによって袋部をつくっており袋状斧との類似性から国産の可能性が強いとされているものである。^(註7)

2. 鉋 (72)

第 6 号住居跡内溝内部から出土したものである。全長 140 mm、刃部長 31 mm、茎部長 109 mm を測る完形品で、刃部は関で直線状に鋭く屈曲している。刃部は、鍛形をしており、最大幅 12 mm、厚さ 4 mm を測る。断面は三日月形を呈し、明瞭な鑄とわずかな裏すきを有している。茎部は、それより若干せまくなり、幅 9 mm、厚さ 3 mm を測る。茎部裏には、関から 17 mm あたりから木質が残存し、表及び側面に糸等で巻いた痕跡がみられる。このことから、柄を凹状に掘りくぼめてさしこむ形式のものでなく、板状の柄に鉋をのせ、糸を巻きしめて固定する装着方法が考えられよう。

3. 刀 子 (73)

第 6 号住居跡壁溝内から出土したものである。全長 108 mm、刃部長 68 mm、茎長 40 mm を測る茎刀子である。刃部は先反りがかかなり強く、最大幅 8 mm、厚さ 2 mm を測る。刃部断面は若干中央でふくらみ、茎との境目に直角に片閃をつくっている。刃部中央附近には、はっきりとした砥ぎ減りが見られ、かなり使用されたものと思われる。茎は、関から除々に細くなっており幅 5 ~ 7 mm、厚さ 2 mm を測る。断面は長方形で、木質等の附着は見られなかった。

4. 鉄 鏃 (74)

2 号住居西側斜面の表土中から検出されたものである。基部の一部を欠失しているが、全長 33 mm、刃部長 15 mm、最大幅 19 mm、厚さ 2 mm を測る無茎三角形形式鉄鏃である。基部には腸状がなく平基式のものである。^(註8)

石 器 ^(註9) (第 51 図 75 ~ 第 52 図)

1. 砥 石 (75)

第 6 号住居跡床面から出土したものである。全長 107 mm、最大幅 39 mm、最大厚 29 mm を測り、全面に使用痕が顕著に認められる。なかでも長辺の 4 面は、中央部が著しく凹んでおり、この 4 面を特に使用していたと考えられる。使用石材は流紋岩である。

2. 石 鏃 (第 52 図 76・77)

遺跡全体から打製石鏃 15 点が出土した。

76 は西側斜面の表土中から出土した。全長 18 mm、最大幅 15 mm、厚さ 3 mm を測り、二等辺三角形を呈する。側縁は直線的で、基部には深い抉りが入る。磨滅のため一部不明瞭な部分もあるが、細かい剝離によって鏃身全体を調整しており、非常に丁寧なつくりとなっている。使用石材は流紋岩である。

77 は第 7 号住居跡内から出土したものである。全長 17 mm、最大幅 16 mm、厚さ 3.5 mm を測り、正三角形を呈する。側縁は若干丸みをおび、基部にはごく浅い抉りが入る。やや細かい剝離調整が周辺部だけに施され、中央附近には大きな剝離面が残っていることから、76 にくらべ雑なつくりとなっているように感じられる。使用石材は流紋岩である。

この遺跡全体から大量の剣片、石核1点、石畿未製品1点が出土した。未製品は基部に深い抉りの入るものであり、遺跡の頂上平坦面、調査範囲の東限の調査区から出土したものである。同調査区からは石核も出土しており、調査範囲の東側にはなだらかな尾根がまだ続いていることから、調査範囲の東側に石器製作に関連する遺構の存在する可能性もある。

3. 石^(注10) 斧(第52図80)

2号住居跡西側土器だまりよりやや下方の斜面から出土したものである。基部端側を欠失しているが、現存長113mm、最大幅63mm、厚さ40mmを測る太型蛤刃石斧である。刃はかなり鋭いことや、割れ口の方から見て刃縁の左端が若干後退しているが、刃縁は石斧の長軸に対してほぼ左右対象となっていることから、製作後、短期間の内に折れたものと思われる。使用石材は緑色片岩であり、四国産の可能性^(注10)がある。

4. その他の石器(第52図78～79)

その他本遺跡からは石匙(78)、ナイフ型石器(79)が出土した。石匙は、遺跡の北西に伸びる尾根の頂上平坦面から出土したもので、一部欠失しているが、全長16mm、最大幅30mmを測る。ナイフ型石器は、遺跡の北西に伸びる尾根の頂上平坦面から出土したもので、全長46mm、最大幅17mmを測り、縦長剣片を素材として使用している。両者とも使用石材は流紋岩である。

(4) 小 結

本遺跡からは、竪穴式住居跡18軒(建て替えを除く)、掘立柱建物跡6棟、住居跡状遺構2ヶ所、土塊1基を検出した。また、遺物としては、縄文時代の石器類を若干含むが、弥生時代後期の遺物が大部分を占めており、遺構はすべて弥生時代後期に属すると考えられた。なお、今回の調査範囲は、丘陵先端部に限られており、さらに東側に平坦面が延びていることから、遺跡の範囲はさらに広がる可能性が高いといえるが、南側住居跡群については、東側に遺構のない地域が広がっているため、これを一つの完結した住居跡群ととらえることとした。

本遺跡における集落の変遷を、内部及び周辺から出土した土器を参考にして概観すれば以下ようになる。

本遺跡で、最も古く位置づけられる土器を出土したのは、第2号掘立柱建物跡である。出土した土器は、「くの字」状に外反する口縁部、厚く肥厚させた口縁端部を持つ弥生時代後期前葉の土器であり、これとはほぼ同じ特徴を持つ土器は、第4号住居跡、第16号住居跡、第17号住居跡から出土している。また、周辺の遺物の出土状態等から、前述の住居跡とはほぼ同時期に造られたと考えられるものに第1号住居跡と第7号住居跡がある。なお、尾根上の平坦面については、第2号掘立柱建物跡を除いて、他に建物の存在を想定しえず、この平坦面は広場状の空地であったものと考えられる。これらの遺構の分布状態をみると、広場状の空地を挟んで北及び南の尾根上平坦面縁辺部に竪穴式住居跡が1軒づつ造られているようである。これらの住居跡は、床面積でみれば最大のものとそれにつく規模のものである。また、これら南北2軒の住居跡の中間点に、第2号掘立柱建物跡が造られている。さらに、丘陵斜面にも、これらの住居跡と同時か、あるいは若干前後する時期に、1～2軒の比較的小型の竪穴式住居跡が造られている。

これに続く時期としては、「くの字」状に外反する口縁部、ほぼ同じ厚さで平たくあるいは丸くおさまった口縁端部を持つ土器を伴う時期の遺構が考えられる。この時期の遺構としては、第1号住居跡、第1号掘立柱建物跡、第7号住居跡、第9号住居跡、第10号住居跡、第16号住居跡、第17号住居跡があげられる。また、調査区全域から出土した土器の内、この時期に属するものが大半を占め、時期不明の住居跡埋土中に多く流入していたことから、時期不明の住居跡の中にもこの時期に含まれるものが相当数あると考えられる。

また、第2号住居跡、第3号住居跡、第6号住居跡についても、周辺の遺物の出土状態等からみて、造営がこの時期にさかのぼる可能性が高い。

本遺跡中、最も新しい時期の土器としては、9の土器があげられよう。これは、前述した下軒3号遺跡での土器の共存関係等から、弥生時代後期末葉の土器と考えられる。これとほぼ同時期の土器を出土した遺構としては、第2号住居跡、第6号住居跡、第8号住居跡、第16号住居跡、第5号掘立柱建物跡がある。これらは、いずれも「くの字」状に外反する口縁部、器厚を減じつつ平たく、あるいは丸くおさめる口縁端部という特徴を持つ土器を伴っている。ただ、第6号住居跡については、伴う土器が若干古い様相を示しており、住居外周溝底面や第6号住居埋土中の土器の中に他の遺構に伴う土器と同様の新しい様相を示す土器が含まれていることから、早い段階で使用されなくなった可能性が高い。また、尾根上平坦面南側に位置する4棟の掘立柱建物跡については、少なくとも第3号掘立柱建物跡が第6号住居跡との位置関係から同時存在することが考え難く、南に隣接する第5号掘立柱建物跡と棟方向、柱間数など類似しており、強い関連を有していると考えられることから、第3号掘立柱建物跡も第5号掘立柱建物跡と同様に、本遺跡中最後の時期に属する遺構と考えられる。また、第4号掘立柱建物跡と第6号掘立柱建物跡についても、棟方向、柱間数など共通する点が多く、相互の位置関係などから考えても、強い関連を持った掘立柱建物跡と考えられるが、時期については明確にしがたい。

以上のように、本遺跡は、弥生時代後期前葉から末葉にかけて営まれた集落であり、住居跡数及び出土遺物の数量からみて、弥生時代後期中葉を中心とする遺跡と考えられる。集落構成の変遷を概観すれば、広場状空閑地を挟んで南北にそれぞれ1～2軒の大型の竪穴式住居跡が造られ、それを中心として尾根上平坦面に掘立柱建物跡1～2棟、及び斜面に1～数軒の小型住居跡が分布するという構成が当初からみられ、個々の数に多少の増減はみられるものの、最後まで一貫して続いているようである。特に、斜面の住居跡については、残存状態からその大部分が第14号住居跡に類似したプランをとる小型の住居跡と推定され、かなり頻繁に建て替えを繰り返しているものもあることから、尾根上縁辺部の竪穴式住居跡に比して、極めて寿命の短い住居跡であったものと考えられる。また、立地の点からみても、かなりの急斜面に造られており、その性格について若干の疑問点が残される。ただ、いずれの住居跡からも特殊な遺構や遺物は検出されておらず、焼土等の生活痕跡もみられることから、通常の住居跡と考えて大過なかならう。その際、本遺跡中最低所急斜面に造られた第16号住居跡及び第17号住居跡が、他に平坦な場所が多くあるにもかかわらず、本遺跡成立後の早い段階から現在地に造られ、それ以後、遺跡が終息するまで連続と建て替えを繰り返しているという事実は、住居占地に対する何らかの規制の存在を想起させ、注目される。

また、本遺跡でみられるこのような集落の構成は、石内川を挟む対岸1.2kmのところに位置する浄安寺遺跡でもみられ、①浄安寺遺跡が弥生時代後期中葉から後葉にかけての集落であるのに対し、本遺跡が後期全般を派して存続している。②遺物の点では、青銅器や玉類、多量の鉄器などが出土しており優れている。③本遺跡では、尾根上平坦面から掘立柱建物跡6棟が検出されているが、浄安寺遺跡からは発見されていない、という点等で若干相違するところもあるが、尾根上平坦面の広場状空閑地を中心として、尾根上平坦面縁辺部分に位置する比較的大型の住居跡、斜面の小型住居跡という基本的な集落の構成は、極めて類似した様相をみせている。このことから、本遺跡でみられるこのような集落構成は、石内川流域のある時期の比較的大規模な集落においては普遍的にみられるものとも考えられ、斜面の小型住居についても、その評価について、類例の増加を待ってさらに検討を加える必要性を感じる。

いずれにしても、石内川流域においては、近接する地域から、同一時期の集落が多く発見されており、今後

の発掘調査の進展に伴ってさらに増加することが予想される。これは、生産基盤を単に谷水田に求めるだけでなく、より広い地域に生産基盤を求める必要性を暗示するものであり、このような地域の核の一つとなるのが、下沖5号遺跡であり、浄安寺遺跡であると考えて大過なからう。

- (注1) 宮本長二郎「住居と倉庫」『弥生文化の研究』7 弥生集落 雄山閣 1986
板倉稲穂の類例としては、大阪府鬼塚遺跡(大阪市 1979)がある。
- (注2) 古瀬清秀「古墳出土の鏡の形態の変遷とその役割」『考古論集』 1977
- (注3) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告』 1977
- (注4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅱ) 1987
- (注5) 広島市教育委員会「広島経済大学構内遺跡発掘調査報告」 1984
- (注6) 広島市教育委員会「岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告」 1985
- (注7) 岡村秀典「鉄と工具」『弥生文化の研究』 5 道具と技術Ⅰ 雄山閣 1985
- (注8) 大村直「弥生時代における鉄器の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻3号
後藤守一「上古時代鉄器の年代研究」『日本古代文化研究』河出書房 1942
- (注9) 石材については、広島大学理学部教授沖村雄二先生の御教示を得た。
- (注10) 石斧の各部の名称については、佐原真「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集』 1977

〈参考文献〉

- 『弥生文化の研究』7 弥生集落 雄山閣 1986
『岩波講座 日本考古学』4 集落と祭祀 岩波書店 1986

第2表 下沖5号遺跡出土土器観察表

番号	出土位置	器種	口径 (cm)	器形について	調整、成形について	備 考
1	第1号住居跡	不明	口径 4.8	平底の底部を有する。	厚縁が著しく調整不明	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 内面に黒斑あり
2	第1号住居跡	不明	口径 5.1	底部は若干凹底を呈する。	外面 厚縁が著しく調整不明 内面 ヘラ削り	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
3	第1号住居跡	甕形土器	口径 1.3	尖りぎみの底部を指で押入、凹底としている。	外面 ハケ目 内面 ヘラ削り	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：良好 内面に黒斑あり
4	第2号住居跡		口径 13.2	口縁部は外反し、端部は丸くおさめている。	内外面とも横ナデ	色調：黄褐色 胎土：密 焼成：良好 外部にスス附着
5	第2号住居跡	甕形土器	口径 13.4	口縁部は外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ 内面 口縁部ハケ目の後ナデ、以下ヘラ削り	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
6	第2号住居跡埋土中	甕形土器	口径 13.3	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り 削りの位置は唇曲点直下で口縁直下にヘラ状工具による押引紋を施している。	色調：黄褐色 胎土：密 焼成：やや良 外面にスス附着
7	第4号住居跡内土塊	鉢		口縁部は外反し、端部は胎土をはりつけることによって肥厚させている。	厚縁が著しく調整不明	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
8	第1号坑立柱埋物群	不明		口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ、以下厚縁が著しく調整不明 内面 口縁部横ナデ、唇曲部ナデ 以下ヘラ削り 削りの位置はやや高い	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
9	第6号住居跡南西土器だまり	甕形土器	口径 9.3 底径 1.6 胴部最大径 16.6	大きく傾いた胴部に、直立ぎみに外反する口縁部を有し、端部は平たくおさめている。 底部は尖りぎみである。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目の後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ハケ目	色調：黄褐色 胎土：密 焼成：良好 胴部内外面に黒斑あり 胴部外面に丹塗あり
10	第6号住居跡南西土器だまり	甕形土器	口径 13.3	口縁部は、直立ぎみに立ちあがりゆるく外反する。	内外面ともナデ	色調：黄褐色 胎土：密 焼成：良好
11	第2号住居跡南西土器だまり	甕形土器	口径 17.5 胴部最大径 18.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナデ、唇曲部ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部ハケ目の後ナデ、以下ヘラ削り 削りの位置はやや高い	色調：黄褐色 胎土：密 焼成：やや良 外面にスス附着 内面に黒斑あり
12	第6号住居跡南西土器だまり	甕形土器	口径 20.3	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は胎土をはりつけることによって下方に肥厚させ、2本の凹線を含めておさめている。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り	色調：黄褐色 胎土：密 焼成：やや良 外面にスス附着
13	第2号住居跡南西土器だまり	甕形土器	口径 3.4	底部は指で押入ることによって凹底としている。	外面 ハケ目の後ナデ 内面 ナデ	色調：黄褐色 胎土：密 焼成：やや良 外部にスス、内面に黒斑
14	第2号住居跡南西土器だまり	不明	口径 3.7	平底の底部をもつ。	外面 ハケ目 内面 ナデ	色調：赤褐色 胎土：密 焼成：やや良好 外面に黒斑あり

番号	出土位置	種類	法量 (cm)	形状について	調査、成形について	備考
15	第2号住居跡南西土器だまり	不明	口径 5.0	平底の底から内側きみに立ち上がる縁部を有する。	外面 下半へう割りの後ハケ目 内面 へう割りの後ナゲ	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
16	表	土器 土器	口径 21.6	口縁部は短く直立した後外反する。	外面 口縁部横ナゲ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナゲ、以下へう割り	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
17	表	土器 土器	口径 16.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことにより肥厚させている。	外面 口縁部横ナゲ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナゲ、以下へう割り	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良 外面に黒斑あり
18	表	土器 土器	口径 11.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は丸くおさめている。	外面 口縁部横ナゲ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナゲ、器向部へう割りの後ナゲ、以下へう割り	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
20	表	土器 鉢	口径 6.8 底径 2.2	手づくね土器である。	内外面ともナゲ	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良 内外面に黒斑あり
21	表	土付鉢	口径 15.2 底径 6.6 高さ 13.1	器台部はハ字状に開き端部はやや肥厚している。 胴部は外反きみに立ちあがり端部は丸くおさめている。	外面 ハケ目の後ナゲ、以下ナゲ 内面 ハケ目の後ナゲ、底部へう割りの後ナゲ	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良 内面に黒斑あり 外面にスズ附着
22	第6号住居跡	土器 土器	口径 18.8	口縁部は外反し端部は丸くおさめている。	外面 口縁部上半横ナゲ、以下ハケ目 内面 口縁部上半横ナゲ、以下へう割り状上具によるナゲ	色調：赤褐色 胎土：密 焼成：やや良
23	第6号住居跡	土器 土器	口径 16.3	外反する口縁端部を内面上方へ強く折り曲げて複合口縁とし、端部は平たくおさめている。	内外面ともに口縁部上半横ナゲ、下半ナゲ 口縁部上半に6条の波状紋を施す。	色調：淡赤褐色 胎土：密 焼成：良好
24	第6号住居跡	土器 土器	口径 17.1	口縁部はゆるく外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部ハケ目の後横ナゲ 内面 口縁部横ナゲ	色調：淡赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
25	第6号住居跡南西土器だまり	土器 土器	口径 20.1	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土をはりつけることにより肥厚させ、2条の凹線を施す。	外面 口縁部横ナゲ、以下ハケ目の後ナゲ 内面 口縁部横ナゲ、量曲部ナゲ、以下へう割り 割りの位置は低い。 口縁直下に8本道のクシ歯状工具による刺状紋を施している	色調：外面 赤褐色 内面 淡黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟
26	第6号住居跡外側溝	瓦 瓦		瓦環の製部である。	外面 ハケ目 内面 シヨリ成形の後ナゲ 字帯を差し込んで接合した痕跡あり シヨリ成形の際についた指の痕が外部に、内部にはシヨリ痕	色調：内外とも赤褐色 胎土：密 焼成：やや軟
27	第6号住居跡外側溝	土器 土器	口径 13.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はうすくおさめている。	外面 厚縁が断しく調査不明 内面 口縁部横ナゲ、以下へう割り 割りの位置は器底点まで	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟
28	第6号住居跡南西土器だまり	土器 土器	口径 17.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさめている。	外面 口縁部横ナゲ、以下ハケ目の後ナゲ 内面 口縁部横ナゲ、以下へう割り 割りの位置はやや高い	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 外面にスズ附着
29	第6号住居跡南西土器だまり	土器 土器	口径 10.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は丸くおさめている。	外面 口縁部ハケ目の後ナゲ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナゲ、以下へう割り 割りの位置はやや高い	色調：赤褐色 胎土：密 焼成：やや良

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整、成形について	備 考
30	第6号住居跡南側土器だまり	甕形土器	口径 5.4	底面は指で押え凹状になっている。	外面 厚縁が著しく肉離不明。 内面 上部2/3へう割り、以下ナデ	色調：外面 赤褐色 内面 暗赤褐色 胎土：粗 焼成：やや軟 底面付近に黒痕あり
31	第7号住居跡	鉢	口径 24.0	口縁部はゆるく外反し、底面は平たくおさまっている。	外面 口縁部にハケ目の後横ナデ、以下ナデ 内面 口縁部にハケ目の後横ナデ、以下へう割り	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
32	第7号住居跡西側土中	甕形土器	口径 16.0	口縁部は「くの字」状に外反し、底面は指でつまむことにより平たくおさまっている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナデ、以下へう割り 割りの位置は胎土直下まで 口縁直下に4本線のクシ歯状工具による刺突紋を施している。	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
33	第7号住居跡埋土中	不明	口径 7.1	やや凹みを呈する甕形である。	外面 へう割り後ナデ 内面 へう割り	色調：外面 淡黄褐色 内面 淡赤褐色 胎土：密 焼成：やや良
34	第9号住居跡埋土中	甕形土器	口径 8.3	外反する口縁部に粘土をつけて内縁上方に拡張し、整合口縁としている。	内外面とも口縁部上半ハケ目の後ナデ、以下ナデ	色調：赤褐色 胎土：密 焼成：良好
35	第9号住居跡	甕形土器	口径 11.2 底径 2.0 胎高 15.5 胎大径 13.5	口縁部は「くの字」状に外反し、底面はつまむことにより肥厚させている。 底面は指で押え凹状としている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナデ、胎直部ナデ 以下へう割り 割りの位置は胎土直下まで	色調：淡黄褐色 胎土：密 焼成：良好 外反の背筋から底縁にかけて黒痕あり
36	第9号住居跡埋土中	台付鉢	口径 13.1 底径 7.9 胎高 13.3	口縁部は「くの字」状に外反し、底面はつまむことにより肥厚させている。 胎直部は指でつまむことにより肥厚し、底面はつまむことにより肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ 内面 口縁部横ナデ、以下へう割り 割りの位置は胎土直下まで 口縁直下に径5mmの竹管による刺突紋を施している。	色調：淡黄褐色 胎土：密 焼成：良好 内面底部及び背筋部に黒痕あり
37	第9号住居跡南側土器だまり	甕形土器	口径 10.6	口縁部はわずかに外反し、底面は平たくおさまっている。	外面 横ナデ 内面 口縁部横ナデ、以下へう割り	色調：淡赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
38	第9号住居跡南側土器だまり	台付鉢	口径 6.0	胎直部は指でつまんで整形し、胎直部はつまむことにより肥厚させている。	外面 胎直部ハケ目、胎直部胎直までナデ、以下横ナデ、底縁へう割りの後ナデ 内面 へう割り	色調：淡赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良 内面底部及び胎直部に黒痕
39	第9号住居跡南側土器だまり	不明	口径 6.1	底面は指で押え凹状としている。	外面 ハケ目の後ナデ 内面 へう割りの後ナデ	色調：外面 赤褐色 内面 淡赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好 胎直部に黒痕あり 外面に赤色顔料施者
40	第9号住居跡南側土器だまり	不明	口径 3.9	底面は指で押え凹状としている。	外面 ナデ 内面 へう割りの後ナデ	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：良好 内面底部に黒痕あり 外面に黒痕より赤変
41	第9号住居跡南側土器だまり	甕形土器	口径 16.5 胎直部胎大径 18.0	口縁部は「くの字」状に外反し、底面はつまむことにより肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナデ、胎直部ナデ、以下へう割り、割りの位置はやや高い、	色調：淡赤褐色 胎土：やや密 焼成：良好 口縁部から胎直部にかけて粘土はりつけの痕跡あり
42	第10号住居跡	甕形土器	口径 18.5 底径 8.8 胎高 22.1 胎直部胎大径 21.2	口縁部は「くの字」状に外反し、底面は指でつまむことにより肥厚させている。 底面は指で押えることにより凹状としている。	外面 口縁部横ナデ、胎直部ハケ目胎直部下方ハケ目の後ナデ 内面 口縁部ハケ目の後横ナデ、以下胎直部ナデ、以下へう割り、割りの位置はやや高い 口縁直下にはへう割り工具による押引紋を施している。	色調：内外とも黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 胎直部外反面に黒痕あり。

番号	出土位置	種類	法量 (cm)	形状について	調整、成形について	備考
43	第10号住居跡	土師器	口径 15.5 底径 7.5 器高 12.3	口縁部は「くの字」状に外反し、 肩部は平たくおさまっている。 胎土は丸くおさまっている。 底面は指で押入凹底としている。	内外面とも厚縁が著しく調整不明	色調：淡赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 胴部内面に黒炭あり
44	第10号住居跡	土師器	口径 16.8 底径 7.5 器高 29.0 胴部最大径 20.6	口縁部は「くの字」状に外反し、 肩部は指でつまむことによって肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目の後ナデ 内面 口縁部横ナデ、胴部直ナデ、以下へり削り、削りの位置は低い。 胴部付近にへう状工具による1cmの沈線を施している。 口縁直下にへう状工具による押引線を施している。	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 胴部及スズ附着 体部にスズが厚く附着
45	第10号住居跡	土師器	口径 13.0 底径 3.3 器高 13.7 胴部最大径 14.1	口縁部は「くの字」状に外反し、 肩部は指でつまむことによって肥厚させている。 底面は指で押入凹底としている。	外面 口縁部横ナデ、以下調整不明 内面 口縁部横ナデ、胴部直ナデ、以下へり削り、削りの位置は低い。	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 口縁部及胴部にスズ附着 内面に黒炭あり
46	第10号住居跡	高坏	口径 24.1	口縁部はゆるく外反し、 肩部は平たくおさまっている。 口縁部と身体部の境目には明確な段を有する。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ	色調：淡赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟
47	第10号住居跡	鉢	口径 25.9 底径 8.6 器高 14.4	口縁部は「くの字」状に外反し、 肩部は平たくおさまっている。 底面は指で押入ることによって凹底としている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部横ナデ、胴部直ナデ、以下へり削り、削りの位置はやや高い	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
48	第10号住居跡	土師器	口径 18.0 底径 4.0 器高 32.4 胴部最大径 22.9	口縁部は「くの字」状に外反し、 肩部はつまむことによって肥厚させている。 底面は指で押入ることによって凹底としている。	外面 口縁部横ナデ、以下厚縁が著しく調整不明 内面 口縁部横ナデ、胴部直ナデ、以下へり削り 口縁直下にへう状工具による押引線を施している。	色調：暗赤褐色 胎土：粗 焼成：良好 胴部及スズ附着
49	第12号住居跡	土師器	口径 15.2	口縁部は大きく外反し、 肩部は胎土を効りつけることによって肥厚させ、3条の凹線を施している。	内外面とも横ナデ	色調：黄褐色 胎土：粗 焼成：良好 外面にスズ附着
50	第14号住居跡	土師器	口径 6.2	底面は指で押入凹底としている。	外面 厚縁が著しく調整不明 内面 へり削り	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 内面に黒炭あり
51	第14号住居跡	土師器	口径 8.2 底径 3.3 器高 11.4 胴部最大径 10.4	口縁部はゆるやかに外反し、 肩部は平たくおさまっている。 底面は平底である。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目の後ナデ 内面 口縁部横ナデ、以下へり削りの後ナデ	色調：淡赤褐色 胎土：粗 焼成：やや軟 胴部にスズ附着
52	第14号住居跡	土師器	口径 13.4	口縁部は「くの字」状に外反し、 肩部は平たくおさまっている。	外面 口縁部ハケ目の後ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部ハケ目の後ナデ、以下へり削り	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 胴部にスズの附着が著しい
53	第14号住居跡	土師器	口径 8.6	胎土は指で成形し、 肩部は丸くおさまっている。	外面 口縁部及び胎土はハケ目の後ナデ、底面ナデ 内面 へり削り	色調：黄褐色 胎土：粗 焼成：良好 外面及び内面に黒炭あり
54	第14号住居跡	土師器	口径 17.2	口縁部は「くの字」状に外反し、 内周みに立ち上がり、 肩部はつまむことによって肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ 内面 口縁部横ナデ、胴部直ナデ、以下へり削り 口縁直下に、へう状工具により上下2段にわたって押引線を施している。	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 口縁部外面にスズ附着

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整、成形について	備 考
55	第14号住居跡土器だまり	壺形土器	口径 18.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさまっている。	外面 口縁部横ナデ、臍部ハケ目の後ナデ、以下ナデ。 内面 口縁部横ナデ、臍部ハケ目の後ナデ、以下へう割り、割りの位置は低い。	色調：黄褐色 胎土：肌 焼成：やや軟 外面にスス附
56	第14号住居跡土器だまり	壺形土器	口径 20.4 底径 22.8	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことにより肥厚させている。	外面 厚感が著しく調整不明、以下へう割り。 内面 口縁部横ナデ、臍部ハケ目、以下へう割り。	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：軟
57	第16号住居跡土器	壺形土器	口径 16.1	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさまっている。	外面 口縁部ハケ目の後ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目の後ナデ、臍部ナデ、以下へう割り。	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
58	第16号住居跡土器	壺形土器	口径 15.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は丸くおさまっている。	外面 口縁部厚感が著しく調整不明、以下ハケ目。 内面 口縁部厚感が著しく調整不明、以下へう割り。 口縁直下にへう状工具による押引紋を施す。	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 外面にスス附
59	第17号住居跡土器	壺形土器	口径 10.5 底径 5.7 器高 10.7 臍部最大径 13.6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことにより下方に肥厚させている。 底部は若干凹みを呈する。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目の後ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下へう割り、割りの位置は臍部点まで。 口縁直下に5本のクシ歯状工具による波状紋を施す。	色調：淡黄褐色 胎土：肌 焼成：良好 外面底面及び内面に黒炭あり
60	第17号住居跡埋土中	壺形土器	口径 12.7	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は丸くおさまっている。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ。 内面 口縁部横ナデ、臍部ナデ、以下へう割り、割りの位置はやや高い。	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
61	第17号住居跡埋土中	壺形土器	口径 16.6	口縁部は「くの字」状に外反し、内裏がみに立ち上がり、端部はつまむことにより肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ、以下厚感が著しく調整不明。 内面 口縁部横ナデ、以下へう割り、割りの位置は臍部点まで。	色調：赤褐色 胎土：肌 焼成：良好
62	第17号住居跡埋土中	壺形土器	口径 13.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はつまむことにより肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目の後ナデ。 内面 口縁部横ナデ、臍部ナデ、以下へう割り、割りの位置は高い。	色調：赤褐色 胎土：肌 焼成：良好 外面に黒炭あり
63	第17号住居跡埋土中	壺形土器	口径 7.0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たくおさまっている。	外面 口縁部ハケ目の後ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目の後ナデ、臍部ナデ、以下へう割り。	色調：赤褐色 胎土：肌 焼成：やや良 臍部外面にスス附
64	第17号住居跡埋土中	壺形土器	口径 15.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土を貼りつけることにより肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、臍部ナデの直ぐにへう割り、以下へう割り、割りの位置は低い。	色調：黄褐色 胎土：肌 焼成：やや良
65	第17号住居跡埋土中	壺形土器	口径 17.9	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は粘土を貼りつけることにより肥厚させ、2本の凹線を施している。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ。 内面 口縁部横ナデ、臍部ナデ、以下へう割り、割りの位置は高い。 口縁下部にへう状工具による押引紋を施している。	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良 臍部外面にスス附
66	第17号住居跡埋土中	高坏		高坏の筒状部である。	外面 へう割り。 内面 ナデ。 内面にシボリ痕あり。 筒の三方肉に丸いスカシを施している。	色調：赤褐色 胎土：肌 焼成：良好
67	第17号住居跡埋土中	高坏	口径 19.2	筒部は「ハの字」状に開き、端部は平たくおさまっている。	外面 ハケ目、端部横ナデ。 内面 ナデ、端部横ナデ。 筒部には三方肉に丸いスカシを施している。	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器形について	調整、成形について	備 考
68	第17号住居跡	鉢	口径 19.8 底径 5.8 器高 10.6	口縁部は粘土を貼りつけて肥厚させ、2条の凹線を施している。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目、 底平ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘリ削り。	色調：赤褐色 粘土：やや粗 気味：やや良 内外面に黒灰あり
69	2号孤立性雑物跡	壺形土器	口径 13.5	口縁部は「くの字」状に外反し、 踵部は粘土を貼りつけることにより 肥厚させている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部ハケ目の横ナデ、 踵部ナデ、以下ヘリ削り、 割りの位置は低い。 口縁直下にも本調のクシ歯状工具 による刺突紋を施している。	色調：黄褐色 粘土：やや粗 気味：やや良 外面に黒灰あり
70	5号孤立性雑物跡	壺形土器	口径 13.2	口縁部は「くの字」状に外反し、 踵部はうすくおさめている。	外面 横ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘリ削り。	色調：赤褐色 粘土：南 気味：やや良

V 和田 1 号 遺 跡

(1) 遺跡の概要

本遺跡は、八幡川と石内川の合流点付近の肥沃な沖積地をみおろす低丘陵上に立地している。遺跡の立地する場所は、水田や畑として利用されており、旧地形はほとんど残されていない。現状では、調査区の南限あたりで、水田が急に段差をもって低くなっていることから、谷地形を埋め立てたものと推測できた。周辺の遺跡としては、谷をはさんで、南側に、縄文早期の土器や石器、弥生土器や土師器を出土した利松住古遺跡、弥生前期や後期の土器及び須恵器を出土した利松遺跡がある。

検出した遺構は、住居跡 14 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土壇 8 基、古墳 1 基などがある。主な遺物は、縄文時代のもと考えられる石器、弥生時代前期及び後期の土器、石器（磨製石斧、石きり、石鏃等）、古墳時代の遺物として、須恵器、土師器、馬具、刀装具他が出土している。

(2) 和田古墳

1. 調査前の状況

本古墳は、以前畑として利用されており、調査前にその存在は知られていなかった。調査の結果、方形の掘り方を検出するとともに、掘り方内部から須恵器及び鉄器が出土した。また、掘り方内の南東隅からは 2 個の石材を、掘り方南端からは閉塞施設と考えられる礫群を検出し、さらに周囲からは周溝が検出されたことなどから、古墳と確認することができた。本古墳は、かなり削平を受けており、墳丘及び掘り方の大部分が失われていたが、掘り方の東側及び南端のみは一段高い畑として開墾されていたため、掘り方の他の部分に比べて遺存状態がよかった。

2. 外 観

墳丘は大部分が削平されていたが、古墳の東側から幅 0.9～2.5m、深さ 0.3m 前後の溝が約 10m にわたって円弧状に検出された。古墳の遺存状態が極めて悪いため墳丘規模は明確にできないが、溝の形状及び規模から直径約 10m の円墳と考えられる。また、地山面の形状から、旧地形は東側よりも西及び北側のほうが高かったと考えられるため、溝は古墳の北及び西側にも巡らされていたと推定される。

3. 内部主体

内部主体も墳丘と同様にその大部分が失われており、掘り方の一部と若干の石材を検出したのみである。掘り方は、長さ 790cm、幅 110～330cm、深さ 4～39cm を測り、その形態から、南側に開口するものと考えられる。掘り方内部の南東隅から 40～90cm を測る 2 個の石が、また北西隅から 20～35cm を測る 3 個の石が、ほぼ地山面について検出された。これらの石は、掘り方内部の位置関係から、石室の側壁の最下段の石材の一部と考えられる。

また、掘り方の南端中央付近から、10～35cm の角礫群が地山上に積み重なった状況を持って検出された。この付近は、一段高い畑となっているため他の部分よりも遺存状態がよいことから、この礫群は原位置を保っていると考えられる。また、礫群と掘り方の位置関係から、これらの礫群は、本古墳に伴う閉塞施設であり、その範囲は羨道部分の範囲を示していると考えられる。以上のことから、羨道部分の規模は長さ 130cm、幅 90cm 前後と推定される。

羨道部分の北側、掘り方の東壁及び奥壁から内側へ約 70cm 離れたところから、周囲より若干高い平坦面を

検出した。この平坦面は、やや攪乱を受けてはいるものの、遺物の分布範囲はその平坦面上にはは限られており、その広がりや東限及び西限が、各々側壁の最下段の石材の一部と思われる石の内側の面と一致していることから、玄室の床面であると考えられ、玄室は長さ470cm、幅160cm前後の規模をもつと考えられる。

以上のことから、本古墳の石室は、長さ600cm、最大幅160cm前後の比較的小規模のもつと考えられる。

なお、玄室の側壁に当たるとと思われる部分から二ヶ所、奥壁に当たるとと思われる部分から一ヶ所、角礫群が検出された。これらの角礫群は、地山面に接しており、分布範囲が側壁の石材があったと思われる範囲に限定されている。これらの角礫群は、石材の抜き取りの時、破砕されたものである可能性がある。

4. 出土遺物

本古墳の掘り方内部からは、鉄器及び須恵器が出土したが、後世の攪乱が著しく、原位置を保っていたと考えられるものは、後述の甕のみである。ただ、出土状況を見ると、馬具は玄室入口付近に集中しており、その他の鉄器は玄室の床面にかなり散在している。

須恵器（第80図45～48、55、56）

無蓋高杯1点、無蓋高杯の杯部及び高杯の脚部各1点、平瓶1点、甕1点が出土した。詳細は観察表に譲るが、それらの特徴は以下のとおりである。

無蓋高杯（46）は、長脚二段高杯と呼ばれているものである。口縁部は外上方に立上り、その外面に二段のふい稜を有する。脚部には長方形の透しを二段にわたって相対する二方向に刻んでおり、脚端部は上方に肥厚させ丸くおさめている。

無蓋高杯の杯部分（47）は、形態的には前述の46とほぼ同じであるが、外面に巡らされている稜が一段である点に違いがある。

高杯の脚部分（48）の端部は、上下に延し鋭くしている。脚部の中央と思われる付近には凹線が二条施されているため、透しが二段になる可能性があるが、欠失しており確認できなかった。

平瓶の体部は、いずれもやや丸みを帯び、上面はやや偏平で、裝飾等はみられない。底が丸みを帯びたもの（56）と、やや凹底状を呈するもの（55）がある。

甕は、ラッパ状に開く比較的高い口頸部を有し、口縁部はふいながらも段をなして外反する。この甕は、義道部の開塞施設付近から出土したもので、古墳内から出土した遺物中原位置を保つと考えられる唯一のものである。

鉄器（第81図・82図）

馬具（66～80）

轡・爪形金具（66）

轡は、二連式轡、単条線引手を有し、轡の外側の環に引手及び鏡板を結合させている。鏡板は環体で、立開の一部が残存している。立開の残存部分は、ほぼ長方形で、その面角は円弧状に伸びており、中央付近にあけられた孔に鉄棒を隔めている。以上のような残存部の形態から、立開は鉸具造りの構造をもち、鏡板全体は呂字形を呈すると考えられる。引手は、先端の円環の一方をくの字状に折り曲げて引手壺としている。轡は二連式で、一方の轡は2つの環が90°ねじれている。

鏡板には2製の爪形金具が鑲着していた。これは、後述する金具類と同様の形態を有しており、革金具と考えられる。

なお各部の計測値は以下のとおりである（単位mm）。

鏡板 環体 58×41 立開基部 2×11

引手	全長 157	引手壺径 33
銜	全長 90	環 径 23×27 (引手の連結間)
金具	全長 41	幅 23 厚さ 3

鞍(79)

凸字状の輪金、足、円形座金具からなり、1点のみが出土した。輪金は全長 48 mm、幅は最高 37 mm (推定)を測り、幅 10 mm の鉄板を2つに折り曲げて輪金に糊めて2本の足としており、欠損しているが残存長 64 mm を測る。足の一方は欠損部に近づくにしたがって細くなるのに対し、もう一方は欠損部に至るまで同じ幅のままである。以上のような残存部の形態から、この鞍は、足の一方のみを鞍橋に通し、折り曲げることによって固定されていたと推定できる。座金具は径 34 mm、厚さ 4 mm を測る円径のものである。

鉸 具 (77, 78, 80)

3点が出土した。77・78は、大きさ・形状がほぼ同一であり、一組のものと考えられる。輪金は楕円形を呈し、その基部に鉄棒を糊めて刺金としているが、一方の刺金はその一部を欠失している。輪金部分の全長は 70 mm 前後、最大幅 40 mm 前後で、完存する刺金は全長 75 mm を測る。80は全長 50 mm、幅 30 mm を測る。刺金は無いが、その形状から鉸具となる可能性もある。

鐙 (76)

幅 10 mm 前後の鉄板をコの字状に曲げており、その形態から、木製蓋鐙の上端に取り付けた鐙金具の一部と考えられる。出土したものは1点のみである。

革金具 (67～75)

出土総数は13点で、そのうち9点を図示した。全て鉄製の円頭鉤を打っており、その形態及び計測値は以下の通りである(単位 mm)。

67	爪形	中高の横断面形	5 鉤	全長 49	最大幅 23	厚さ 3
68	爪形		3 鉤	全長 49	最大幅 22	厚さ 2.5
69	爪形		2 鉤	長さ 31	最大幅 22	厚さ 2
70	爪形		2 鉤	長さ 28	最大幅 20	厚さ 2.5
71	爪形	中高の横断面形	2 鉤	長さ 30	最大幅 24	厚さ 3
72	爪形		2 鉤	長さ 31	最大幅 21	厚さ 2
73	爪形	中高の横断面形	2 鉤	長さ 27	最大幅 19	厚さ 2
74	爪形		2 鉤	長さ 25	最大幅 24	厚さ 3
75	方形		4 鉤	長さ 24	最大幅 22	厚さ 3.5

これらの金具の裏面から皮革質は検出できなかったが、同形態の金具の裏面に皮革質が残っていた例があり(注2)革金具とされていることから、本金具もそれにならった。

釘 (57)

総出土点数は7点で、そのうち1点のみを図示した。断面正方形で全長 123 mm、頭部1辺 10 mm 前後を測る。端部の一方は平坦で、他の一方は尖っていることから釘と考えられる。

鉄 鐙 (58～61)

出土総数は8点で、そのうち4点を図示した。これらはその形態から2種類に分類できる。

58・59は長頸鐙で鍔身の面側に刃を有し、刃部は先端のみにある。一部欠損しているため詳細は不明であるが、その形態から端刃棘篋被擊箭式鐙(注3)になる可能性がある。58は残存長 140 mm、最大幅 7 mm、刃部長

16mmで、59は残存長91mm、幅8mm、刃部長21mmを測る。

60・61は逆三角形の鎌身を有し、刃部は茎と直交している方頭庄4)広根斧箭式鎌である。60は全長105mm、刃部幅28mm、身部長66mm(いずれも推定)、茎長40mmで、61は残存長81mm、刃部幅24mm(推定)、身部長54mmを測る。

刀装具(62～64)

鐔、鞘尻金具及び鞘の貴金具の一部と思われるものが出土したが、刀身は発見できなかった。鐔(63)は、長径62mm、短径43mm、断面長方形で厚さ3～4mmを測る倒卵形鐔である。中央の孔は長径26mm、短径15mmを測る。鞘尻金具(62)は、全長56mm、断面はやや偏平な倒卵形であり、長径30mm、短径18mmを測る。柄寄りの端部は外側に肥厚し、鞘尻は丸みをおびている。貴金具(64)は、幅24mm、厚さ2mmの鉄板を折り曲げて造られている。残存するのは全体の1/2程度と思われるが、その形態から断面は六角形を呈していたと考えられる。

石 突 (65)

断面は円形で、その一端は欠失しているが袋状を呈し、現存長は110mmを測る。先は出土しなかったが、その形態から矛の石突と考えられる。

5. 小 結

和古墳は、横穴式石室を主体部とする径10m前後の円墳である。本古墳は、墳丘の削平、石材の抜き取り等の擾乱が激しく、墳丘の築造方法、平面形態等の多くの点について明らかにしなかった。ここでは、出土した遺物に若干の検討を加えまとめにかえたいと思う。なお、須恵器の時期決定については、田辺昭三氏の編年庄5)を参考とした。また、馬具の時期決定については、本古墳と同形態の馬具が出土している「湯舟坂2号古墳」庄6)における編年を参考とした。

須 恵 器

本古墳内出土の須恵器は、高杯3点、平瓶2点、甕1点である。

高杯には、杯部外面の稜の数や脚端部のおきめ方等、細かな点で違いが見られる。しかし、高杯脚部に施されている二条の凹線までの高さや、脚底径はほぼ一致している。また、杯部の高さ、口径ともほぼ一致しており、3点の高杯は同一のプローションになると考えられる。以上のことから、これらの高杯は同一時期のものである可能性が強く、その時期は6世紀の後半と考えられる。

平瓶には底部の形状に差が見られる。しかし、平瓶においては、丸底のものや平底あるいは凹底のものが併存しており、底部の形状のみから時期差を認めることは困難である。出土した平瓶の形態を見てみると、両者とも体部は丸みをおびて稜はなく、小型化が進んでいるという特徴をもつ。以上のことから、これらの平瓶は7世紀中頃に造られたものと考えられる。

甕は、口頸部の基部が細く、口縁部はにぶいながらも段をなして外反していることから、その時期は7世紀前半頃のものと考えられる。

馬 具

本古墳から出土した馬具は、轡、鞍、銚、鉸具、革金具である。ここでは、その残存形態から時期判定の可能な轡、鞍を取り上げてみる。

轡は鉄製で、環状の鏡板を有するものである。鏡板を詳しく見ると、立間は鏡板から直接造り出されている。また、立間の基部にあけた穴に鉄棒を挿まれていることから、この鉄棒は刺金となり、この立間は鉸具造りであったことがわかる。さらに、立間の残存部の形状から、鉸具状の立間の環部と鏡板の環体は離れ、

鏡板全体は呂字形を呈すると考えられる。以上のような鏡板の特徴から、この轡は6世紀末～7世紀初頭のものと考えられる。

鞍は凸字形の輪金に、幅の狭い足を揃めて可動式のものとしている。足の残存状況から、この鞍は足的一方のみを轡橋に通し、折り曲げることによって鞍に固定されていたと推定される。以上のような形態や、推定される装着方法から、この鞍は6世紀末～7世紀前半のものと考えられる。

これらの馬具は、攪乱を受けてはいるものの、玄室入口付近から集中して出土しており、その数も1組分を越えるものではないことから、一体のものとする方が妥当であろう。よって、この馬具の時期は轡の時期、すなわち6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

古墳内から出土した遺物の時期は以上のとおりであり、本古墳は古墳時代後半～終末のものと考えられる。また、高杯と平瓶の時期にかなりの差があることから、1回以上の追葬がなされた可能性もあるが、遺物が攪乱を受けているため明言は避けた。

(3) その他の遺構

第1号住居跡(第57図)

南西にのびる低丘陵の南側斜面に造られた竪穴式住居跡である。斜面につくられていたため、壁及び床の1/2程度が、流失していた。残存部の状況から一辺350cmの方形住居と考えられる。壁に明瞭な角をもって、掘り込まれており、壁高は最高所で28cmを測る。壁溝は幅2～5cm、深さ2～5cmを測り、中心部あたりで、地盤の岩盤のためか若干不整形となるが、残存する壁を全周している。床面からは、柱穴と考えられるピットは検出されおらず、壁溝内からピット5個を検出したのみである。このため本住居跡は、無柱穴の住居跡と考えられる。

なお、本住居跡床面、南西角、床面の消失するあたり、壁によった位置で焼土が検出されており、炉等の施設があったことが考えられる。

遺物としては、細片のため図示するにはいたらなかったが、端部は欠失するものの口縁部は「くの字」状に外反し、器厚を次第に減じる形状のもので、弥生後期末葉から古墳時代初頭のころのものと考えられる。

第2号住居跡(第58図)

1号住居の南西、和田古墳の主体部と壁を接する位置に、隅丸方形の掘り込みを検出した。柱穴と考えられるピットは検出しえなかったが、床面も平らに掘られており、壁溝と考えられる幅5cm前後、深さ1～6cmの溝が壁面を全周していることから、若干小形ではあるが、隅丸方形のプランを持つ竪穴式住居跡と考えられる。平面プランは、東側の隅が若干不整形になっており、東西190cm、南北205cmを測る。壁高は北側の隅が最も高く20cm、西側の隅が最も低く6cmを測る。前述したごとく、内側から柱穴と考えられるピットはまったく検出されず、床面及び壁溝内から径8cm前後、深さ2～7cm程度の小ピット9個を検出したのみであった。

遺物は土器片及び石鍾と考えられる石器1点が出土した。石鍾は東側、床面から出土した。また床面からは、10～20cmぐらいの礫10個が出土している。特に東側隅からは、床面に水平に置かれた石鍾の上に礫4個が積み重ねられた状態で出土しており、この石鍾が特殊な扱いをうけていた感を呈し、注目される。

なお、東側の壁から柱穴と考えられるピット1個を検出した。切り合い関係から、明らかにこのピットが本住居跡の壁溝を切って掘り込まれていることから、本住居跡とは無関係のものであり、後続する掘立柱建物跡に伴う柱穴と考えられる。

本住居跡の時期については、相伴すると考えられる遺物が前述の石鏝と、土器細片のみであり、明確にしがたい。ただ、本住居跡の東側壁面及び壁溝が、後述する弥生時代後期末から古墳初頭の第1号掘立柱建物跡によって切られていることから、それ以前に造られた住居跡であることは明白である。また、本住居跡埋土中から出土した土器片の中には、細片のため器形は明確にしがたいが、文様等から弥生時代前期と考えられるものが出土しており、床面直上から出土した土器片も含めて他の土器片もすべて胎土・色調・厚み等が類似していること、本住居跡の東側8mの位置に、弥生前期の袋状土壌が存在していることなどを合わせ考えたとき、本住居跡も前期の遺構となる可能性が高い。

第3号住居跡(第59図)

第2号住居跡及び和田古墳の南西3mのところの位置する小型の竪穴式住居跡である。平面形は隅丸方形を呈し、南側が低くなって1/4程度消失している。規模は、1辺250cmと推定され、壁高は、最高所で15cmを測る。壁溝は、残存する壁面の北側2/3程度に巡り、幅3~10cm、深さ4cm前後を測る。床面からは、柱穴と考えられるピットは検出されず、壁溝内からは径4cm前後、深さ3cm前後の小ピット10個が検出されたが、性格については不明である。

遺物はまったく出土しておらず、時期については明記しがたいが、前述の第2号住居跡と規模・形態とも共通する点が多いことから、第2号住居跡との関連を想起させられる。

第4号住居跡(第60図)

本住居跡は、調査区中央部東側にあり、南に向う小規模な谷地形の堆積土中に掘りこまれた竪穴式住居跡である。平面プランは方形で、一辺230cmを測るきわめて小形のものであり、西側の壁を欠失している。壁溝は、北東の角から東壁に沿って80cmの範囲で検出され、幅16cm、深さ3cm前後を測る。ピットは壁沿いに5個検出されたが、口径・深さ共に一定せず、性格は不明であり、一応無柱穴の住居跡ととらえておきたい。また、北側の壁の西角によったあたりから、壁に接した状態で焼土が検出された。焼土は、南北80cm、東西80cmの範囲に、8cmの厚さで分布しており、かまど等の施設があったものと考えられる。

時期については、遺構に伴う須恵器(52)が口縁の径も小さく立上りもきわめて小規模になっていることから、7世紀前半のころのものと考えられる。

第5号住居跡(第61図)

本住居跡は、第4号住居跡の南、前述した谷地形の埋土中に掘りこまれた竪穴式住居跡である。平面プランは、小形の方形を呈し、壁高は、最高所で15cm、壁溝は、西壁で50cm程度の長さにわたって検出され幅は、4cm前後、深さは6cm前後を測る。南側及び東側の壁を消失しており、規模は明確にしがたいが、北西の角から、北壁沿いに220cm離れた地点から、一辺100cm程度、厚さ15cm前後の焼土帯がはさまっており、第4号住居跡の状況などから、一辺300cm程度の小形方形の住居と考えられる。焼土帯は、壁に接して存在していることから、かまど等の施設があったものと考えられる。

遺物としては、土師器(40)及び須恵器破片が出土しており、土師器の形態から時期は古墳時代後半から終末と考えられる。

第6号住居跡(第62図)

本住居跡は、調査区中央部西側、丘陵尾根線上に位置している。本遺跡の立地する畑及び水田は、尾根を削平して谷地形を埋め立てて造成したと考えられ、本住居跡の立地するあたりから西側にむけて、最も削平の著しい地点であった。そのため本住居跡もこの影響を受けたためか、壁溝の一部及び柱穴を残すのみであった。

本住居跡の平面形は、残存部から判断して方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。残存部の壁高は、最高所で4 cm、壁溝は、残存部を全周し、幅9～4 cm、深さ4 cm程度を測る。また、残存する壁溝の角から130 cm前後の地点で、柱穴と考えられるピット2個を検出した。径は23 cm前後、深さは14 cmを測る。位置関係から、本住居跡の主柱穴の一部と考えられ、このことから本住居跡の規模は明確にしたいが、4本柱の方形住居となる可能性が高い。

また、残存する北側壁溝の延長線上、角から120 cm位離れた地点から一辺50 cm前後の三角形の焼土帯が検出された。この焼土帯が壁に接するように広がっていることから、かまど状の施設を有していたことも考えられよう。

なお、壁溝内から径8 cm前後、深さ3 cm程度の小ピット3個を検出したが性格等は不明である。

時期については、遺物等が出土しておらず不明である。

第7号住居跡（第63図）

本住居跡は、第6号住居跡の南西5 mのところに位置しており、開墾時に削平をうけていたと考えられる。特に、畑の段が南西中央部を横切っているため、半分が削平されていた。壁高は最高所で22 cm、壁溝は幅4～10 cm、深さ3～5 cmを測り、残存部を全周している。床面からはピット6個が検出されており、主柱穴としては、壁面との位置関係からP1、P2、P3があげられよう。ただ、底面のレベルもそろわず、大きさもP1が径44 cm、深さ27 cm、P2が径15 cm、深さ41 cm、P3が径34 cm、深さ15 cmと不揃いであることから、明言はさけておきたい。また、壁溝内及び周辺から、ピット7個が検出されており、特に壁溝内に掘り込まれたP5、P6、P7は北東の角のP6を中心に、ほぼ等間隔に位置している。本住居跡に伴う柱穴と考えられる。これらは、幅は30～40 cm、深さ20 cm前後で、底面レベルもほぼ一致している。しかし、これらの柱穴と床面の柱穴との関係など、不明確な点が多く、これらの柱穴の性格については、明確にしたい。

時期も、遺物が出土していないため、明確にしたい。

第8号住居跡（第65図）

本遺跡の所在する丘陵の縁辺部分、調査区の南端から住居跡が重複して検出された。住居跡は、東側を通る湿気の多い谷地形をさけるように並んでいる。現状では、水田の造成時にかなりの部分が削平されており、保存状態はきわめて悪かった。住居跡として確認しえたのは6軒分であるが、柱穴その他の存在から、他に多数の重複があったものと考えられる。

本住居跡は、前述した住居群の中で最も北に位置する住居跡である。西側1/2程度を欠失しており、残存部から一辺320 cm前後の方形竪穴式住居跡と考えられる。壁高は、北東側で28 cmを測り、壁溝は南東壁前半を除いて、残存部を全周している。規模は、幅3～8 cm、深さ4～9 cmである。床面からは、柱穴と考えられるピット6個が検出されているが、それぞれ口径も異なり、底面レベルも一定しておらず、位置関係等からも本住居に伴う柱穴を特定しえなかった。

遺物については、土器細片のみであり、時期についても不明である。

第9号住居跡（第65図）

第8号住居跡の西側に重複して検出された竪穴式住居跡である。現状では、北側の角から130 cm前後を残すのみで、平面プランは方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。残存部分の壁高は、最高所で10 cmを測り、壁溝が全周している。壁溝の規模は幅6～10 cm、深さ20 cm前後を測る。柱穴については、本住居跡の床面と考えられる範囲から、多数検出されているが、いずれも口径、底面レベルとも一定せず、

本住居跡に伴う支柱穴は特定しがたい。

遺物は、床面から高杯(36)及び壺形土器(38)等が出土している。これらの中で、高杯に目をやれば、杯部だけの出土ではあるが、平らな杯底部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部を有しているもので、比較的古式の様相を示している。本住居跡の時期は、これらの土器の特徴から、古墳時代初頭から前半にかけての時期と考えられる。

第10号住居跡(第65図)

本住居跡は、第8号住居跡及び第9号住居跡の南側につくられた住居跡である。

現状では高さ5cm程度の北側の壁面を110cmにわたって検出したのみで詳細は不明であるが、表土をはいだ段階での、表面観察により第8号及び第9号住居跡を切って、つくられていることを確認した。平面プランは残存する北壁が直線的に東西にのびていることから、他の住居と同じく方形プランをとっていると考えられよう。

なお、本住居跡の西どりの第12号住居跡は、その東側の壁が2ヶ所消失しており、その部分の床面レベルが本住居跡とはほぼ一致することから、前後関係は明確にしないが、本住居跡と第12号住居跡の間に切り合い関係が存在している可能性がある。

本住居跡に伴う遺物は検出されておらず時期は不明である。ただ、前述したごとく、古墳時代初頭から前半にかけての時期と考えられる第9号住居跡を切って造られており、後述する古墳時代末葉の土壌によって本住居跡が切られていることから、少なくとも古墳時代の住居跡であることは確実であろう。

第11号住居跡(第67図)

第10号住居跡の南側、第12号住居跡と重複して第11号住居跡がつくられている。現状では、北西の角を、1m程度残すのみであった。残存部の形状及び周囲の状況から方形の竪穴式住居跡と考えられ、壁高は最高所で12cmを測るが、壁溝は検出しえなかった。

なお、第12号住居跡外の中央東側で焼土を確認しており、レベル的にみて本住居跡に伴うと考えることもできる。遺物等は出土しておらず、時期は不明である。なお、表面観察の結果、第12号住居跡の上に第11号住居跡が造られていることが観察できた。このことから、少なくとも、第11号住居跡は第12号住居跡より後出する住居跡と考えられる。

第12号住居跡(第67図)

第11号住居跡の南に重複して造られている竪穴式住居跡である。本住居跡は、南側の壁及び床を第13号住居跡によって削りとられており、規模等明確にしがたい。ただ、西壁及び東壁に目をやれば、西壁については、壁に対して壁溝の上端の線が東に傾いており、東壁についても壁が東に傾いている状況が見てとれる。また、東壁の壁溝が、北壁から200cmのところまで途切れて、屈曲していることを合わせ考えた時、この東壁が本住居跡に伴うものでなく、第12号住居跡より若干東に傾けて掘りこまれた別の住居跡の壁となる可能性もあろう。その際は、第12号住居跡、第13号住居跡と合わせて、一辺260cm程度の方形住居跡3軒分の重複の可能性も想定できよう。

残存部の壁高は最高所で25cmを測り、壁溝は西側が一部不明確ではあるが、残存部をほぼ全周しているものと考えられる。壁溝の幅は5～25cm、深さ5cm前後を測る。床面からは、内部に石材を伴うピット1個(P1)と上面の平らな礫1個を検出した。これは、本住居跡の南側を切りこんで造られた第13号住居跡の床面及び掘り方上端部から検出された同様のピット(P2)及び礫と対応していると考えられ、位置関係から一見して本住居跡の支柱を支える施設と考えられた。しかし、ピットの底面レベルと礫の上面レベルは、

それぞれ対応するピット及び礫の間ではほぼ一致するものの、礫とピットの間では40 cm以上のレベル差が存在していることから、これらが本住居跡に伴う施設である可能性はきわめて低いと考えられる。これらのピットや礫に伴う建物跡については、礫の東側については削平が甚しく、ピットの西側については調査範囲外であるため明確にはしえなかった。ただその配置及び検出状態を考慮すれば、本住居跡の東側及び西側に前述のピット及び礫を伴う建物跡がそれぞれ存在する可能性も考えられよう。

なお、本住居跡の西壁中央付近から、南北30 cm、東西50 cm、厚さ10 cmの範囲で、壁から若干はみ出すような状態の焼土帯が存在しており、その位置及び出土状態から、かまど状の施設の痕跡とも考えられよう。

時期は、削平も甚だしく遺物も出土しなかったため明確にはしがたい。ただ、後述する古墳時代中頃の第13号住居跡によって南端を切られており、平面プラン、立地、焼土の位置・形状などが第13号住居跡に類似していることから、第13号住居跡よりは若干さかのぼるものの、それほど大きくは隔たらない時期の住居跡と考えられる。

第13号住居跡（第67図）

本住居跡は、第12号住居跡の南側を掘り込んで造られた竪穴式住居跡である。南東の角と南の壁の大部分及び南側の床面の一部を欠失しているが、残存部から一辺260 cm程度の小型の方形住居と考えられる。残存部の壁高は最高所で27 cmを測り、壁溝は北壁で110 cm、西壁で180 cm、東壁は南端から30 cmの範囲で検出された。壁溝の幅は5～10 cm、深さ4～8 cmを測る。床面からは、前述した石材を有するピットを除いて、柱穴と考えられるピットを5個検出しているが、いずれも底面レベルが異なり、平面的にも主柱穴としての配置が想定しえないため、一応無柱穴の方形住居としておきたい。

なお、東壁中央付近から、南北60 cm、東西80 cm、厚さ15 cmの範囲で、壁面から若干張り出すような状態で焼土帯が検出されており、住居跡内での位置関係及び形状から、かまど等の施設とらえることもできよう。

遺物は、床面上から、土器2個体分(37・39)が出土している。土器39を見ると、長胴ぎみの胴部に内湾ぎみに立上る口縁部、内側に肥厚したにぶい段をもつ口縁端部などの特徴をもった甕で、古墳時代中頃から後半にかけての時期を比定できよう。土器37についても、ほぼ同じ時期と考えられることから、この住居跡の時期は、古墳時代中頃から後半にかけての時期と考えられる。

第14号住居跡（第68図）

南群の住居跡の最南端、本遺跡中最低所に造られた竪穴式住居跡である。後世の削平が著しく、北壁及び東壁の一部をのぞいて壁が消失しており、床面も東南の角を中心に1/3程度が消失している。

残存部分から判断して、方形プランを呈する竪穴式住居跡で、規模は、北壁の西端が若干まがりをはじめていることから、一辺380 cm程度と推定される。残存する壁高は北東の角がもっとも高く16 cmを測り、壁溝は、残存部を全周して、幅3～10 cm、深さ3～5 cmを測る。なお、北壁から若干南よりの位置で、幅4 cm前後、深さ3 cm前後の溝を1 mにわたって検出した。これは、建て替え等の痕跡とも考えられるが、他に証拠もないことから明言はさけておきたい。

床面からは、柱穴と考えられるピット4個を検出しているが、位置関係等から主柱穴と考えられるのはP1とP2である。P1は、径21 cm、深さ10 cmを測り、P2は径12 cm、深さ17 cmで、底面レベルはほぼ一致している。ただ、口径の点で双方にかなりのへだたりがあることから、主柱穴とするには疑問が残る。

出土遺物としては、土師器及び須恵器の細片のみであり、時期は明確にしがたい。

第1号掘立柱建物跡（第68図）

本建物跡は、古墳の埴内から検出したもので、第1号住居跡の西5 mに位置し、第2号住居跡の北壁を

切って柱穴を掘りこんでいる。本遺跡中最高所、尾根上平坦面に立地しており、第2号住居跡の残存状況から判断して、それほど大きな削平は受けていないものと考えられることから、掘立柱建物跡と認定した。

柱間は、P1-P2が210cm、P3-P4が220cm、P2-P3が164cm、P4-P1が186cmを測り、東西方向が南北方向より長くなることから、棟方向はN 61°Wをとると考えられる。柱穴は、径30～40cm、深さ34～57cmを測り、底面レベルはほぼ一致している。

遺物は、柱穴内(P3)から土器2個体(30, 31)が出土しており、その形態的特徴から、弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。

第1号土壌(第69図)

第1号住居跡の南3m、第2号住居跡の北東6.5mのところを位置する円形の土壌である。南東へ向かってゆるやかに傾斜する斜面に掘り込まれている。後世の削平をかなりうけていと考えられるものの北東側は南西側に比べて比較的保存状態がよい。現状では上端部の径130cm、底径115cmを測り、底面は南東にわずかに傾斜している。深さは50cmを測り、底部より上端部のほうが若干せり出している。南西側は、最も削平をうけており、深さ20cmを測る。最も保存状態のよかった北西部分から推定すると、断面袋状を呈すると考えられる。その形状から貯蔵穴と考えられる。

遺物は、弥生時代前期の土器の底部と考えられるもの(1)が底面近くから出土しており、本土壌に伴うと考えられることから、本土壌の時期は弥生時代前期と考えられる。

第2号土壌(第70図)

第6号住居跡の南50cmのところを位置するプラン楕円形の土壌である。上端部は長径112cm、短径86cmを測り、底面は長径92cm、短径64cmを測る。深さは53cmであるが、周辺の遺構がかなり削られていたことを考え合わせると、元来はもっと深かったものと考えられる。土壌内から遺物は出土しておらず、性格、時期とも明確にしがたいが、形状から、一応は貯蔵穴と考えておきたい。

第3・4・5号土壌(第71図)

調査区の西側を南西に走る尾根の縁辺部、中央付近に位置しており、プランはかなり不整形となっている。

第3号土壌は、底面の径70cm、上端部の径115cm、深さは南側10cm北側18cmを測るほぼ円形の土壌である。

第4号土壌は、若干長円形の土壌である。南側の底面が第3号土壌と重複しているために失われており、やや不整形となっている。上端部の長径280cm、短径250cm、底面径220cmを測り、深さは北側で50cm、第5号土壌底面から10cmを測る。

第5号土壌は、東側を第4号土壌と重複しているために1/2以上が失われており、本来は主軸をN 87.5°Eにとる長方形の土壌と考えられる。残存部の底面で長さ60cm、幅50cmを測り、深さは西側で20cmを測る。底面は、わずかに東側に傾斜している。

第3・4・5号土壌の切り合い関係、性格、時期については、明確にしがたかった。第3・4号土壌についてみると、若干不整形ではあるが円形、長円形というプランをとっており、また断面形状を復元的に考慮するなら貯蔵穴ととらえられよう。第5号土壌は、形状から墓塚と考えられ、直近にある第7号土壌との関係が注意される。また、時期については、直接伴う遺物がなく明言しがたいが、内部埋土及び周辺から、小量の弥生時代後期の土器、須恵器とともに比較的少量の弥生時代前期の土器が出土している。

第6号土壌(第72図)

本土壌は第3号、4号、5号土壌の西側に接するようにして検出された土壌である。後世の削平をかなり

うけており、現状では、不整形な長方形プランを呈している。主軸をN 44°Eにとり、本来は、幅80cm、長さ180cm程度の長方形の掘り方を有していたと考えられる。深さは最深部である南西側で55cmを測る。形状から墓塚と考えられる。深さは北側が最も深くて48cm、南側が最も浅くて14cmを測る。床面には、7個の石材が検出されており、中央部の6個については、①床面から若干ういた位置にあり、石材の底面のレベルは中央が低く、周辺が高い。②土壌中央北東よりの位置から、丸く並べ置いたような状態で出土している。以上の点から墓標石として、墓塚上に並べて置かれたものが、内部に落ち込んだものと考えられる。また、その直下及び周辺から、出土した同一個体の土器(32)は、粗雑な甕とはいえ、その出土状態から、この墓塚に供献された土器と考えられる。

遺物としては、土壌内から出土した土器(32)があげられる。この土器は、長胴化した胴部に強く外高する厚い口縁部をもつ甕で、本土壌の時期はその器形の特徴から、古墳時代後半から終末のころのものと考えられる。

第7号土塚(第73図)

第7号土塚は第6号土塚の北側2m、調査区西側を南西にのびる尾根の縁辺部に位置する。周辺は開墾時に特に削平を受けた地域であり、本土塚についても最深部でわずかに4cmを残すのみであった。南側の部分については後世の溝によって削平されており欠失している。残存部の形状から、主軸をN 39°Eにとる長方形の土塚と考えられ、形状から墓塚と考えられる。残存部は底面で幅85cm、長さ85cmを測り、底面からは比較的平たい石材3個が出土している。この石材は石棺の一部である可能性もあろう。

また、本土塚の内部及び周辺から、土器が多数出土した(34・35)。これは、本土塚に供献ないしは副葬されていた土器が削平によって攪乱を受け、周辺に散乱したものと考えられる。特に土塚内から出土した35の土器は球形の胴部に若干内高きみに外反する口縁部をもつ甕であり、口縁部は、内側に赤色顔料を塗付した痕跡を残している。これは本土塚が墓塚であり、内部及び周辺から出土した土器が、本土塚に係る遺物であることを証拠立てている。

本土塚の時期は、前述した土器の形態から弥生時代末葉から古墳時代初頭のころと考えられる。

第8号土塚(第74図)

南側住居跡群が廃棄された後に、その上から掘りこんだと考えられる土塚である。後世の削平が著しく、掘り方壁面を2~7cm程度残すのみであった。

掘り方は、主軸をN 85°Wにとる若干隅丸の長方形のもので、底面の幅40cm、長さ140cmを測る。底面には、上面が平らな長方形の石材2個が、主軸に直交するように水平にならべられており、床面からの高さは、東側の石材で11cm、西側の石材で14cmを測る。また西側の石材については、北側に10cm前後の石材2個を敷いて上面を水平に保つ努力をしている。また、東側の石材に接するように、その東側から須恵器の蓋1個(49)が出土している。その出土状態をみると、床面から5cm程度浮いており、あたかも蓋を上向きに置いたかのような出土状態を示している。

このことから、前述した2個の石材は、1/3程度が土に埋められており、6~9cm程度底面からつき出した状態でおかれていたことが考えられる。以上のことから、2つの石材の性格を推測すれば、木棺等を置く棺台として利用されていたと考えられ、須恵器は本土塚に副葬されたものと考えられる。

時期は、内部から出土した須恵器の形態から、古墳時代終末のころと考えられる。

なお、本土塚の東端及び西端から、円形の落ちこみ2ヶ所を検出した。東端のものは、形状的には柱穴と考えられ、若干北側にずれていることから、本土塚に先行する住居跡群に伴う柱穴と判断した。また西

側のものについては、本土壤の中央部に掘り込まれているが、形状も不整形で本土壤との関係については、明言をさけておきたい。

(4) その他の遺物

本遺跡からは、古墳関連以外の遺物として弥生土器（前期、終末～古墳初頭）、土師器、須恵器及び石器が出土した。以下、その概略について述べる。

土 器（第75図～80図）

個々の土器の特徴は後掲の観察表に譲り、ここでは、前期弥生土器の中で最も量の多い甕形土器の特徴、各時代の土器の出土傾向について述べる。

弥生時代前期の土器は（1～29）、第4号住居跡の北側から集中的に出土した（中央部東側土器溜り）。このうち甕形土器について見ると、口縁部が外反するもの（外反口縁）と、口縁部に粘土を貼り付け「逆L字」状に突出させたもの（貼付口縁）の2種類があり、全体的には貼付口縁のものが大半を占めている。これらの甕の口縁部直下に施されている篋溝沈線について見ると、4条のものが大半を占めるが、無文あるいは2条のものも若干存在し、1点のみの出土ではあるが、25のように7条を数えるものもある。以上のような甕形土器の特徴から、中央部西側土器溜りの土器群は、弥生時代前期でも後半のものと考えられる。^{注7)}

弥生時代終末～古墳時代初頭の土器（30・31・34・35）は、第1号住居跡及び第1号掘立柱建物跡内部、第7号土壌周辺から出土した。これらの土器には、30のように上深川Ⅲ式に分類できるものと、34・35のように球形の胴部を持ち上深川Ⅲ式に分類しにくいものもある。

土師器は（32・33・36・37・39～42・44）第6号土壌内部、第4・5号住居跡及び第8～14号住居跡の内部や周辺から出土した。32・33・40・41は、口縁部がゆるく外反あるいは外湾し、長胴となるものである。また、39は、口縁部は内湾ぎみに立上りがって外反し、端部は内側に肥厚させて丸くおさめており、長胴となるものである。

古墳関連以外の須恵器は、主に第4・5号住居跡周辺で出土した。坯身について見ると、54のように大型化はしているが、たちあがり若干退化しているものや、52のように小形化し、たちあがりは口縁部をわずかに内傾させるだけのものがある。なお、第14号住居跡周辺からも須恵器が出土したが、細片で図示し得なかった。

石 器（第83・84図）^{注8)}

1、磨製石斧^{注9)}（第83図81～83）

81は、中央部西側土器だまりより若干北よりの表土中より出土した。全長98mm、幅17mm、厚さ12mmを測る柱状片刃石斧である。前主面及び後主面の基端部よりの部分には鋭打痕が残っており、後主面の基部には若干の凹みがあることから、斧身に接着する際のすべり止めを考慮していた可能性がある。使用石材はザクロ石礫石緑色片岩であり、四国産の可能性がある。

82は、中央部南西土器だまりの南側の調査区の表土中から出土した。全長72mm、最大幅21mm、厚さ18mmを測る抉入片刃石斧である。よく研磨されており、前主面基部及び抉入部に鋭打痕は残っていない。刃部の減りは左側に片寄っている。使用石材はホルンフェルス（熱変質泥質岩）で四国産の可能性がある。

83は、中央部西側土器だまりから南に2区面離れた調査区の表土中から出土した。全長132mm、最大幅54mm、厚さ45mmを測る大型始刃石斧である。刃縁はつぶれて先端は全体的に甘い感じとなっている。中でも刃縁中央付近はつぶれが著しく、刃縁が失われて3mm程度の幅をもった面となっている。また、基端面

は打撃を受け、表面がかなり荒れた状態となっていることから、使用時に基端面を打撃するような使用法、例えば、楔の様な使用をされていた可能性がある。使用石材は角閃石輝石安山岩で、四国産の可能性はある。

2, 石 錘 (第83図84)

第2号住居跡の床面、一ヶ所にまとめて置かれていた3個の石の下から1点のみが出土した。径約45mm、厚さ13mmを測る円盤状の石の両端を打ち欠いて石錘としている。使用している石材は、緑泥石雲母結晶片岩である。この石はやわらかく細工がしやすいうえに、鉄分を多く含む比重が重いという特徴を有しており、錘として加工するのに適したものである。1例のみの出土であり、他に類例を見つけることができなかったため即断はできないが、石材の選定に関して何らかの考慮がなされたのかもしれない。

3, 石 鏃 (85)

遺跡全体から打製石鏃33点が出土した。85は中央部西側土器だまりから出土したものである。全長24mm、最大幅16mm、厚さ3.8mmを測り、平面形は二等辺三角形を呈する。側縁は直線的で、基部にはごく浅い抉りがみられる。周辺にはやや細かい剝離調整を施し、中央付近には大きな剝離面を残す。使用石材は珪質変成岩である。本遺跡出土の石鏃は基部に浅い抉りの入るものまたは抉りの無いものが大半を占めている。また、全体的に剝離調整が荒く、形の整っていないものがほとんどで、85はもっとも丁寧なつくりのものである。

4, 石 錐 (86)

この石錐は、中央部西側土器だまりから出土したものである。全長26mm、最大幅8mm、厚さ4mmを測り、その形態から石錐と考えられる。頭部と錐部の境目はなくほぼ幅が一定した棒状錐であり、両側縁からの剝離調整によって断面は菱形となっている。使用石材は流紋岩である。

5, 石 槍 (87)

調査範囲のはほぼ中央西側寄りの調査区委土中から出土した。先端部及び基部を欠失しているが、残存長31mm、残存最大幅24mm、厚さ6mm前後を測り、その形態から石槍と考えられる。両側縁から中央付近にまで達する長い剝離調整を施して刃部を造り出しており、断面は菱形凸レンズ状になっている。使用石材は流紋岩である。

6, スクレイパー (88)

中央部西側土器だまりから出土したものである。全長67mm、最大幅31mm、厚さ11mmを測り、その形態からスクレイパーと考えられる。縦長の剝片を使用しており、剝片のシャープな先端に片側から簡単な剝離調整を施すことによって、剝片の長辺に刃部を造り出している。使用石材は流紋岩である。

(5) 小 結

今回の調査で、古墳1基、住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土壌8基を検出し、和田1号遺跡は、弥生時代前期から古墳時代の複合遺跡であることがわかった。ただ、遺構の大部分は削平されておりその詳しい内容については明らかにしえなかったが、古墳時代の住居跡や弥生時代前期の土器及び柱状片刃石斧等の弥生時代の石器のセット等は、広島市域の歴史を解明していくうえで、極めて貴重な資料を得ることができたといえる。特に、本道跡から検出された弥生時代終末から古墳時代にかけての住居跡について見てみると、その立地の違いに関して興味深い状況がみられるため、ここでは、両時代の住居跡の立地の違いに絞って、若干の考察を加え小結とした。

弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡と確認されたのは、第1号住居跡と第1号掘立柱建物跡である。こ

れらは、遺跡のある丘陵の尾根状の最高所、標高 24 m (付近を流れる川からの比高 11 m) の付近にある。

これに対して、伴出する遺物から古墳時代の住居跡と確認されたものは、第 8 号 (古墳時代前葉) 及び第 13 号 (古墳時代中葉) の住居跡である。これらは標高 20 m (付近を流れる川からの比高 7 m) の付近にある。第 8 号住居跡について見ると第 9・10 号住居跡と重複しており、平面観察から、第 8 号→第 9 号→第 10 号の順番に建てられたものと考えられる。また、第 8 号土壌 (古墳時代終末) が、第 10 号住居跡を切っていることから、第 9・10 号住居跡は、少なくとも古墳時代終末以前に造られたことは確実であると考えられる。

この他、標高 20 m 付近には第 11～14 号住居跡が存在する。第 11～13 号住居跡は重複しており、平面観察から、第 12 号住居跡が第 11・13 号住居跡に先行することは明らかであるが、第 11・13 号住居跡の先後関係は明確ではなく、その時期等は不明である。また、第 14 号住居跡は、床面から須恵器の細片が出土していることから、古墳時代中葉以後のものと考えられるが、その時期は限定できなかった。しかし、立地、形態等を同じくする第 8 号及び第 13 号住居跡が古墳時代の住居跡であり、周辺からは古墳時代のものと思われる須恵器及び土師器のみが出土していることから、第 8～14 号住居跡を一括してとらえ、古墳時代の住居跡とした。なお、これらの住居跡の他に建物跡が、調査範囲の西側に想定できることから、集落は調査範囲の西側、すなわち丘陵の下方へ広がる可能性がある。

以上のように弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡と古墳時代の住居跡の立地についてみると、両者の比高はわずか 4 m であるが、前者が尾根上にあるのに対して、後者は丘陵縁辺部に位置していることがわかる。

従来の調査では、広島市域では弥生時代後期から古墳時代初頭に丘陵上に位置していた集落は、古墳時代前葉以後継続しておらず、遺跡も確認されていなかった。このため古墳時代前葉になると集落は他の場所へ移動すると考えられていたが、古墳時代の集落がどのような立地を取るかは明らかではなかった。本遺跡は、古墳時代の住居跡を明確に検出した初例であり、その立地が丘陵縁辺部にあることから、古墳時代になると、丘陵の下方へ集落が移動することを示す一つの例となる可能性があり、貴重な資料といえるであろう。

(注 1) 奈良県教育委員会『葛城石光山古墳群』1976

(注 2) 久美浜町教育委員会『湯角坂 2 号墳』1983

(注 3) 後藤守一「上古墳時代鉄鏡の年代研究」『日本古代文化研究』河出書房 1942

(注 4) (注 3) に同じ

(注 5) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

平安学遺考古クラブ『陶邑古窯址群 I』1966

(注 6) (注 2) に同じ

(注 7) 松崎寿和・潮見浩「広島県中山遺跡」『日本農耕文化の生成』1961

広島県立埋蔵文化財センター『亀山遺跡』—第 5・6 次発掘調査概報— 1986

(注 8) 石材については、広島大学理学部教授 神村雄二 先生の御教示を得た。

(注 9) 石斧の各部の名称については、佐原真「石斧論 — 横斧から縦斧へ —」『考古論集』1977

< 考文獻 >

榎崎彰一編『世界陶磁器全集』2 日本古代 小学館 1979

杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成 本編』1～■ 東京堂出版

金関聖・佐原真編『弥生文化の研究』5 道具と技術 I 雄山閣 1985

第3表 和田1号遺跡出土土器観察表

番号	出土位置	器種	口径 (cm)	胎形について	調整、成形について	施 装	考
1	第1号土溝	不明	口径 7.5	平底の底部から外反ぎみに立ち上がる胴部をもつ。	外面 ハケ目の後ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調：内外とも茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
2	中央部東側土器だまり	甕形土器	口径 21.7	口縁部に粘土帯を貼りつけて「逆L字」状に突出させている。	内外面ともナデ。 口縁部部に肩目を有し、口縁直下に4条のヘラ指沈線を施す。	色調：内外とも黄褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
3	中央部東側土器だまり	甕形土器	口径 15.6	内反ぎみに立ち上がる胴部にゆるく外反する口縁部を有する。	内外面とも口縁部頂ナデ。以下ナデ。 胴部に2本のヘラ指沈線を施す。	色調：内外とも茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
4	中央部東側土器だまり	甕形土器	口径 23.0	口縁部に粘土帯を貼りつけて「逆L字」状に突出させ、胴部はややふくらむ。 口縁部内面には貼りつけの際についてと思われる指痕が残る。	内外面とも口縁部頂ナデ。以下ナデ。 口縁部部に肩目を有し、口縁直下に4条のヘラ指沈線を施す。	色調：外面 暗茶褐色 内面 淡茶褐色 胎土：粗 焼成：やや軟	
5	中央部東側土器だまり	甕形土器	口径 15.8	口縁部に粘土帯を貼りつけて「逆L字」状に突出させており、口縁部内面には、貼りつけの際についてと思われる指痕が残る。	外面 口縁部頂ナデ、以下ヘラ磨き。 内面 口縁部頂ナデ、以下ナデ。 口縁部部に肩目を有する。	色調：内外面とも暗茶褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟	
6	中央部東側土器だまり	甕形土器	口径 16.6	大きく外に曲った胴部から内反ぎみに立ち上がる胴部にゆるく外反する口縁部を有する。	内外面とも口縁部頂ナデ。胴部ナデ。 胴部に2条のヘラ指沈線を施す。	色調：外面 暗茶褐色 内面 茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
7	中央部東側土器だまり	甕形土器	口径 12.8	大きく外に曲った胴部から内反ぎみに立ち上がる胴部にゆるく外反する口縁部を有する。 胴部大径となる付近に指痕が残る。	外面 口縁部頂ナデ、胴部厚成が著しく調整不良。以下ヘラ磨き。 内面 口縁部頂ナデ、以下ナデ。 胴部に3条のヘラ指沈線を施す。	色調：内外面とも茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
8	中央部東側土器だまり	不明	口径 6.1	平底の底部から内反ぎみに立ち上がる胴部をもつ。	外面 ハケ目の後ナデ。 内面 ナデ。	色調：内外面とも暗茶褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良 外面にスス付着	
9	中央部東側土器だまり	甕形土器	胴部大径 23.5	胴部は大きく外に曲り、胴部上方を割ることによって、胴部無間隙をつくり出している。	内外面ともナデ。 胴部を2条の負設沈線で上下に区切って絞準帯を構成し、羽状文を施す。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：微 焼成：良好	
10	中央部東側土器だまり	不明	口径 10.4	平底の底部から外反ぎみに立ち上がる胴部をもつ。 底部・胴部間に粘土帯を貼りつけたと思われる指痕が残る。	外面 ナデ。 内面 ヘラ削りの後ナデ。	色調：内外面とも淡茶褐色 胎土：微 焼成：良好	
11	中央部東側土器だまり	不明	口径 9.2	平底の底部から内反ぎみに立ち上がる胴部をもつ。	外面 ナデ。 内面 ヘラ削りの後ナデ。	色調：外面 淡茶褐色 内面 暗茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
12	中央部東側土器だまり	甕形土器		口縁部はゆるく外反する。	内外面とも口縁部頂ナデ。以下ナデ。 口縁部部には厚成が著しいが、肩目があり、口縁直下に2条のヘラ指沈線を施す。	色調：内外面とも暗茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
13	中央部東側土器だまり	甕形土器		口縁部は強く外反する。	内外面とも口縁部頂ナデ。以下ナデ。 口縁部部に肩目を有し、口縁直下に4条のヘラ指沈線を施す。	色調：内外面とも暗茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
14	中央部東側土器だまり	甕形土器		口縁部に粘土帯を貼りつけて「逆L字」状に突出させ、胴部はややふくらむと推定される。	内外面とも口縁部頂ナデ。以下ナデ。 口縁部部に肩目を有し、口縁直下に3条のヘラ指沈線を施す。	色調：内外面とも黄褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	
15	中央部東側土器だまり	甕形土器		口縁部に粘土帯を貼りつけて「逆L字」状に突出させている。	内外面とも口縁部頂ナデ。以下ナデ。 口縁部部に肩目を有し、口縁直下に4条のヘラ指沈線を施す。	色調：内外面とも暗茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好	

番号	出土位置	形状	流量 (cm)	断面について	調整、虎形について	備考
16	中央部東側土器 だまり	壺形 土器		口縁部に粘土層を貼りつけて「逆 し字」状に突出させている。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ。 口縁部には厚縁が著しいが、刻目を 有する。	色調：内外面とも暗茶褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
17	中央部東側土器 だまり	壺形 土器		口縁部に粘土層を貼りつけて「逆 し字」状に突出させ、胴部はやや ふくらみ可能性がある。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ。 口縁部には刻目を有し、口縁直下 に4条のへう指状線を施す。	色調：内外面とも暗茶褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
18	中央部東側土器 だまり	壺形 土器		口縁部に粘土層を貼りつけて「逆 し字」状に突出させており、胴部 はややふくらむと考えられる。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ。 口縁部には刻目を有する。	色調：内外面とも黄褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
19	中央部東側土器 だまり	壺形 土器		口縁部に粘土層を貼りつけ、「逆 し字」状に突出させている。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ。 口縁部には刻目を有する。	色調：内外面とも黄褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
20	中央部東側土器 だまり	壺形 土器	口径 36.8 胴部最大径 52.8	内径に立ち上がる幅広い頸部に ゆるく外反する口縁部を有し、 胴部はつまみ出すことによって下 方に肥厚させている。	外面 口縁部及び頸部ナデ、以下 へう磨き 内面 口縁部及び頸部へう磨き、 以下厚縁が著しく不明。 口縁部には1条のへう指状線及び 刻目を有し、頸部及び胴部最大径 附近に3条のへう指状線を施して いる。	色調：淡黄褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
21	中央部東側土器 だまり	壺形 土器		口縁部は強く外反する。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ。 口縁部には刻目を有し、口縁直下 に4条のへう指状線を施す。	色調：外面 黒 内面 茶褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
22	中央部東側土器 だまり	壺形 土器		口縁部は、粘土層を貼りつけ「逆 し字」状に突出させている。 口縁部内面に粘土層つけの跡に ついでと思われる指痕が残る。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナ デ。 口縁部には刻目を有し、口縁直 下に4条のへう指状線を施す。	色調：内外面とも暗茶褐色 粘土：やや粗 焼成：良好 蓋形土器(22)を伴出している。
23	中央部東側土器 だまり	壺形 土器	つまみ痕部径 6.9	胴部が平坦なつまみ部分から、傘 形に開く胴部を有する。	外面 つまみ部分ナデ、以下へう 磨き。 内面 へう磨き。	色調：外面 暗茶褐色 内面 淡茶褐色 粘土：粗 焼成：良好
24	中央部東側土器 だまり	壺形 土器	口径 27.8	口縁部は、粘土層を貼りつけ「逆 し字」状に突出させ、胴部はやや ふくらむ。	外面 口縁部横ナデ、胴部下へ う磨き。 内面 ナデ。 口縁部には刻目を有する。	色調：内外面とも暗茶褐色 粘土：粗 焼成：やや軟
25	表	土 器	口径 16.0	口縁部は、粘土層を貼りつけ「逆 し字」状に突出させている。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ。 口縁部には刻目を有し、口縁直下 に7条のへう指状線を施す。	色調：外面 黄褐色 内面 暗茶褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
26	表	土 器	口径 12.6	ほぼ真っ直ぐに立ち上がる頸部に ゆるく外反する口縁部を有する。	内外面とも口縁部横ナデ、以下ナデ。 胴部に3条のへう指状線を施した 後、それらに直交するように4 条のへう指状線を施す。	色調：外面 黄褐色 内面 暗茶褐色 粘土：密 焼成：良好
27	第6号土壇跡 原地山道上	不明	底径 8.3	平底の底部から外反りに立ち上 がる胴部を有する。	外面 ナデ。 内面 胴部厚部上半へう磨き、 以下ナデ。	色調：内外面とも暗茶褐色 粘土：粗 焼成：良好
28	表	土 器	不明	平底の底部から、内湾りに立ち 上がる胴部を有する。	内外面ともナデ。	色調：内外面とも暗茶褐色 粘土：やや粗 焼成：良好 胴部にスス附着 底部の一部は熱により変色して いる。
29	表	土 器	不明	平底の底部から内湾りに立ち上 がる胴部を有する。	内外面ともナデ。	色調：内外面とも茶褐色 粘土：やや粗 焼成：良好
30	第1号竪立柱礎 物跡柱穴内	壺形 土器	口径 15.2	外反する口縁部に粘土層を貼りつ けて内側上へ転倒し、複合口縁と し、口縁部直下に突縁を有する。	外面 口縁部上半横ナデ、下半ハ ケ目、以下ハケ目。 内面 口縁部上半横ナデ、下半ハ ケ目、以下へう磨き。 突縁には鋭めの刻目を有する。	色調：赤褐色 粘土：やや粗 焼成：やや良

番号	出土位置	形態	法量 (cm)	形状について	調整、成形について	備考
31	第1号竪立柱礎 物懸柱穴内	鉢形土器	底径 2.5 胴部最大径 12.7	球形の胴部から小さな平底を有する。	外面 ナデ。 内面 ヘラ削り。	色調：茶褐色 胎土：やや粗 焼成：やや軟 胴部にスス附着
32	第6号土壌内	鉢形土器	口径 16.7	口縁部は胴部から直線的に立ち上がって強く外反し、端部は丸くおさまる。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削りの後ナデ。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：密 焼成：やや軟 外面にスス附着 内面下半に黒煙あり
33	第7号土壌内	鉢形土器	口径 16.6	口縁部は胴部から直線的に立ち上がって強く外反し、端部は丸くおさまる。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削りの後ナデ。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：密 焼成：良好
34	第7号土壌内	鉢形土器	口径 17.0 胴部最大径 21.5	球形の胴部から外反する口縁部を有し、端部は丸くおさまる。	外面 口縁部横ナデ、以下厚紙が著しく調整不明。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
35	第7号土壌内	鉢形土器	口径 21.3 胴部最大径 25.3	球形の胴部からやや内湾きみに外反する口縁部を有し、端部は丸くおさまる。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：密 焼成：良好 口縁部内面に赤色顔料附着
36	第9号住居跡	高坏	口径 17.0 坏部底径 9.2	平らな坏部から、斜め上方へ直線的に立ち上がる口縁部を有し、端部は丸くおさまっている。	外面 ナデ。 内面 厚紙が著しく調整不明。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：密 焼成：良好 口縁部に黒煙あり。
37	第9号住居跡	鉢形土器	口径 4.6 底径 3.1 器高 8.5	ゆるく外反する口縁部、凹底を有する手取の土器である。	内外面ともナデ。	色調：内外面とも赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
38	第13号住居跡	鉢形土器	口径 15.6	口縁部はゆるく外反し、端部はうすくおさまる。	外面 口縁部横ナデ、以下ナデ。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削りの後ナデ。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：密 焼成：良好 外面に黒による赤炎あり。
39	第13号住居跡	鉢形土器	口径 20.0	口縁部は内湾きみに立ち上がり外上方に広がる。端部は内側に肥厚し、ふいば股を有する。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調：淡赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
40	第5号住居跡	鉢形土器	口径 17.8	直立きみに立ち上がる胴部に、ゆるく外反する口縁部を有し、端部は丸くおさまる。 長頸の壺になると考えられる。	外面 厚紙が著しく調整不明。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調：内外面とも淡黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
41	表	土 鉢形土器	口径 17.7	ゆるやかに内湾する胴部に、ゆるく外反する口縁部を有し、端部は丸くおさまる。 長頸の壺になると考えられる。	外面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調：茶褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
42	第7号土壌周辺	鉢形土器	口径 10.4	口縁部は直立きみに外反し、端部はうすくおさまっている。	外面 口縁部横ナデ、以下ハケ目。 内面 口縁部横ナデ、以下ヘラ削り。	色調：黄褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良
43	表	土 鉢形土器	胴部最大径 10.2	丸みを帯びた体部をわずかにへこませ、肥部としている。内面全体に黒煙残部が残る。	外面 厚紙が著しく調整不明。 内面 ナデ。	色調：赤褐色 胎土：やや粗 焼成：良好
44	表	土 高坏	口径 14.5	胴部は直線的に下り、裾部は屈曲して大きく外に開き、端部は丸くおさまる。 側外面には、シボリ成形の帯に似たと思われる凹凸が残る。	外面 ハケ目。 内面 胴部ヘラ削りの後ナデ、裾部ナデ。	色調：暗赤褐色 胎土：やや粗 焼成：やや良 外面に黒煙あり
45	和川古墳内	甕	口径 11.6 器高 13.6 器口径 3.3 胴部最大径 9.5	口縁部は基部が細く、ラッパ状に外反する。口縁部は頸部で、ふいば股をなして外反し、端部は丸くおさまる。口縁部の立ち上がり割合に1率。頸部及び胴部に2条の凹線を有する。	外面 ヘラ削りの後凹輪ナデ。 内面 口縁部、頸部ナデ。	色調：白灰色 胎土：密 焼成：不良

番号	出土位置	種類	法量 (cm)	断形について	調整、成形について	備 考
46	和 田 古 墳 内	高 环	口 径 11.2 器 高 14.1 胎底径 10.8 胎 高 10.3	口縁部は外上方に立ち上がり、肩部はとがる。体部には2段のふいばを有する。胎部には上下2段におたって長方形のスカシを相対する2方向に掘入している。胎部は上方に肥厚させて丸くおさめている。胎部の中ほど、スカシの境目に2条の凹線を出す。	内外面とも回転ナデ。	色調：灰色 胎土：密 焼成：堅緻
47	和 田 古 墳 内	高 环	口 径 11.7	口縁部は外上方に立ち上がり、肩部はとがる。口縁部と胎部との境目には1段のふいばを有する。	内外面とも回転ナデ。	色調：暗灰色 胎土：密 焼成：堅緻 外面に自然釉附着
48	和 田 古 墳 内	高 环	底 径 10.6	裾部はラック状に外反し、胎部は胎面の上下をのばし鋭くおさめる。胎部には、上下2段のわたって長方形のスカシを相対する2方向に掘入でいたと推定される。スカシの境目と繋がる部分には、2条の凹線が彫られている。	内外面とも回転ナデ。	色調：暗灰色 胎土：密 焼成：堅緻
49	第 8 号 土 塚	环 蓋	口 径 11.3 器 高 4.0	天井部から口縁部にかけて丸くならぬカーブを描き胎部はとがる。	外面 左回りの回転ヘナ削り。 天井部は直ナデ。 内面 天井部ナデ、以下回転ナデ。	色調：外面 灰色 内面 白灰色 胎土：密 焼成：堅緻 外面に胎土附着
50	表 土 塚	环 蓋	口 径 14.0 器 高 3.2	天井部は平皿。体部から口縁部にかけて丸くならぬカーブを描き胎部は丸くおさめる。	外面 天井部から1/4右回りの回転ヘナ削り、以下回転ナデ。 内面 回転ナデ、内面天井部にクタクタ目立つ。	色調：暗灰色 胎土：密 焼成：堅緻
51	表 土 塚	环 蓋	口 径 14.4 器 高 5.2	天井部から胎部は丸くならぬカーブを描く。口縁部は胎部直下に鋭く下り胎部は丸くおさめている。天井部には扁平なつまみを貼つけしている。	外面 天井部から1/5左回りの回転ヘナ削り、以下回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調：灰色 胎土：密 焼成：堅緻
52	第 4 号 住 居	环 身	口 径 8.9 受部径 10.6 器 高 2.4	立ちあがりは外筒ぎみに立ち上がり内筒し、胎部は鋭い。受部は外上方へのび胎部は鋭い。胎部は平皿で、体部は直筒ぎみに立ち上がる。	外面 底部右回りヘナ削り、体部回転ナデ。 内面 底形ナデ、体部回転ナデ。	色調：淡灰色 胎土：密 焼成：堅緻
53	表 土 塚	环 身	口 径 10.2 受部径 12.2 器 高 4.6	立ちあがりは短く内筒して立ち上がり、胎部はとがる。受部は鋭い。受部は水平に外筒へのび胎部は鋭い。胎部は平皿で、体部は丸くならぬカーブを描いている。	外面 胎部が著しく調整不明。 内面 回転ナデ。	色調：淡灰色 胎土：密 焼成：堅緻 外面に自然釉附着
54	表 土 塚	环 身	口 径 13.6 受部径 15.3 器 高 3.8	立ちあがりは内筒して立ち上がり、胎部は丸くおさめている。受部は外側に外筒へのび、胎部は丸くおさめている。口縁部との境目にはへうによる凹線を描いている。胎部は平皿で胎部は、ゆるやかなカーブを描いて立ち上がる。	外面 底部から1/2右回りの回転ヘナ削り、その他回転ヘナ削り、後回転ナデ。 内面 底部回転ナデの仕上げナデ、その他回転ナデ。	色調：暗灰色 胎土：密 焼成：堅緻
55	和 田 古 墳 内	平 皿	残存高 11.5	胎部全体は丸く、上面はやや扁平で胎部は凹線を出す。	外面 底部1/5回転ヘナ削り、その他回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調：灰色 胎土：密 焼成：堅緻 内外面に成形時の凹孔の痕あり
56	和 田 古 墳 内	平 皿	口 径 4.9 胎部最大径 15.6	口縁部は直筒ぎみに立ち上がり、胎部は丸くおさめる。胎部全体は丸く、上面はやや扁平で、胎部は丸みをおびている。	外面 口縁部直ナデ、胎部上半回転ヘナ削りの後回転ナデ、胎部下半1/2回転ナデ、以下回転ヘナ削り。 内面 口縁部直ナデ、以下回転ナデ。	色調：外面 灰色 内面 淡灰色 胎土：密 焼成：堅緻

VI 総 括

(1) 出土遺物について

今回調査した三遺跡からは、縄文時代早期、弥生時代前期、弥生時代後期～古墳時代後葉の多量の遺物が出土した。特に、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器は共伴関係が明確であり、中でも弥生時代後期中葉の土器については、良好な一括資料を2例検出した。

本遺跡群出土の弥生時代後期の土器を口縁端部の形状に着目して分類すれば、以下三つの形式に分かれるようである。

1. 〔下沖Ⅰ式〕 口縁端部は、大半のものが粘土をはりつけることによって肥厚させており、三条程度の凹線を伴うものと平坦にしあげたものが含まれる。口縁部の接合状態は肩部あたりから内側に厚く粘土をはりつけられ、口縁部屈曲点あたりはかなり厚手になる。内面のへらけずりは、比較的低い位置から行なわれている。外面の文様帯は、肩部あたりの比較的低い位置にある。今回出土の遺物としては、下沖5号遺跡に限られ、第2号掘立柱建物跡の柱穴内から出土した63の土器がその典型と考えられる。
2. 〔下沖Ⅱ式〕 下沖3号遺跡テラス状遺構下層及び下沖5号遺跡第10号住居跡の2ヶ所から、良好な一括資料を検出している。これを見ると、口縁端部を丸くあるいは平たくおさめるものと、端部周辺を強くつまむことによって若干肥厚させているものの2種類がある。いずれも、口縁部屈曲点周辺と口縁端部の厚さが同じであるところが共通している。また、口縁部の接合状態をみると、前述した下沖Ⅰ式と同様の状態を示すものと、口縁部屈曲点周辺のみが厚くなっており、前者に比して比較的薄く仕上げられているものがある。また、後者の大部分のものは、口縁部屈曲点あたりの内面に比較的平らな面を一段有し、後に「く」字状に外反させている。肩部外面の文様帯については、口縁部屈曲点に近い位置まで上っており、中にはまったく文様帯を持たないものも含まれている。
3. 〔下沖Ⅲ式〕 下沖3号遺跡において比較的多量に出土した形式のものである。口縁端部は、器厚を減じつつ平たくあるいは丸くおさめるものと鋭くとがらせるものの2種類がある。いずれも、口縁部屈曲点に比して口縁端部が相当薄くなるところが共通している。口縁部の接合状態については、①口縁部屈曲点内側に粘土をつけ、屈曲点からへらけずりを施しているため明瞭な線を有するもの、②屈曲点外側に粘土をつけ、外面をへら状の工具で削り落とすことなどによって口縁部を薄く仕上げるもの、の2種類がある。①は、口縁部屈曲点の器厚が胴部最大径部分より厚い点でⅡ式と共通する要素を有しており、②の場合、器厚はほとんど変わらないか薄くなるのが一般的である。外面肩部の文様帯は、ごくまれにかみられなくなる。なお、同形式の一括資料としては、水系は異にしているが、岡谷遺跡第2号竪穴式住居跡^(注1)出土の土器があげられよう。

これら3種類の土器は、同時期における形態の変化ととらえることもできようが、下沖Ⅰ式が形態の特徴から弥生時代中期終末の土器との類似性を有しており、下沖Ⅲ式の土器が、他の地域では古墳時代初頭と考えられる土器を伴出しているため、Ⅰ式→Ⅱ式→Ⅲ式の変化が時間差による変化と考えられた。なおⅡ式とⅢ式については、前述したごとく口縁部の接合状態から古新2段階に細分できる可能性もあろう。

また、下沖3号遺跡において、在地系の土器にまじって、系譜を異にする土器が少量出土しており、それを手がかりとして他地域との併行関係を考えてみると次のようになる。下沖3号遺跡第1号住居跡^(注2)からは、Ⅱ式新段階及びⅢ式古段階にまじって、山陰地方での編年で鷺尾Ⅲ式のものと同形的に類似した鼓形器台が

出土しており、第3号住居跡掘り込み内からは、 \blacksquare 式古段階及び新段階にまじって山陰地方の編年で小谷式^(注3)のものと同形的に類似した複合口縁の甕が伴出している。また、前述した第3号住居跡掘り込み内から出土した土器の底部と、畿内の編年で庄内式と布留式の間中に位置づけられる時期の土器に形態的に共通した土器が、テラス状遺構上層から混在した状態で出土していることは、前述した2例の併行関係から考えて首肯できよう。

以上のことから、①本遺跡群出土の土器は、時期的に \blacksquare 式 \rightarrow \blacksquare 式 \rightarrow \blacksquare 式と変化し、② \blacksquare 式と \blacksquare 式は、古新2段階に細分することが可能であること、③ \blacksquare 式については、古墳時代前葉に下る可能性が高いことが明らかとなった。このことから、 \blacksquare 式が弥生時代後期前葉、 \blacksquare 式が後期中葉、 \blacksquare 式が後期後葉から古墳時代前葉の時期と一応はとらえておきたい。また、下沖 \blacksquare 式・ \blacksquare 式・ \blacksquare 式はその形態の特徴から、太田川下流域で一般的に使用されている上深川 \blacksquare 式・ \blacksquare 式・ \blacksquare 式^(注4)それぞれ対応していると考えられ、さらに、従来弥生時代後期後葉から終末にかけての土器だといわれていた上深川 \blacksquare 式の土器についても同様に古墳時代前葉にまで時期的に下る可能性が高いといえよう。これは、太田川下流域に所在する矢ヶ谷遺跡^(注5)において、1号住居跡及び2号土壇から、上深川 \blacksquare 式古段階と考えられる土器と山陰地方の編年という鑑尾 \blacksquare 式と類似した形態の土器が伴出していることから裏づけられよう。また、下沖5号遺跡第6号住居跡から \blacksquare 式古段階の土器と共伴して古墳時代前葉の頃のものに類似した特徴を持つ甕^(注6)が出土していることや、太田川下流域の岩上山田遺跡第1号住居跡から \blacksquare 式新段階の土器と共伴して出土した定角式鉄鏝^(注7)が、庄内式併行期を若干下る時期のものと考えられていることから、前述した上深川 \blacksquare 式=下沖 \blacksquare 式の編年の位置づけが妥当なものであることを傍証しているといえよう。

以上のように、今回の調査の結果、下沖 \blacksquare 式=上深川 \blacksquare 式単純期の良好な資料を得ることができ、また下沖 \blacksquare 式=上深川 \blacksquare 式についても、下沖3号遺跡出土の遺物や岡谷遺跡第2号壁穴式住居跡出土の一括資料を合わせ検討した結果、 \blacksquare 式という形式設定が妥当であり、その時期が古墳時代にまで下る可能性のあることを明確にすることができた。なお、今回は、口縁部という部分の特徴に着目して、編年の可能性について検討を加えたに留まっており、今後はこれをたき台として、形態や製作技法を含めた総合的な観点から、編年をさらに深化させる必要がある。ただ、口縁部及びその接合状態の変化は、土器製作技法の変化、胎土の均質化、焼成技術、形態等と密接に結びついたものと考えられ、また、あらゆる器種に基本的に共通する特徴と考えられることから、これを手がかりとして整理を行った。その結果、従来いわれている弥生時代後期の上深川式土器を三期に区分する編年が高い妥当性を有しており、さらに、その終末の時期が古墳時代前葉にまで下る可能性があることを明らかにすることができたといえよう。

(2) 掘立柱建物跡について

今回の調査において、下沖5号及び和田1号遺跡から弥生時代後期に属すると考えられる掘立柱建物跡を計7棟検出した。

下沖5号遺跡で検出した掘立柱建物跡は6棟を数える。出土遺物から第2号掘立柱建物跡は弥生時代後期前葉、第1号掘立柱建物跡は弥生時代後期中葉、第5号掘立柱建物跡は弥生時代後期後葉のものであることが確認された。第3・4・6号掘立柱建物跡は、その時期を明らかにし得なかったが、周辺の遺物の出土状況から見て、弥生時代後期の遺構と考えられる。特に第3号掘立柱建物跡は、第5号掘立柱建物跡と建物方向、規模等の面で多くの共通点を持っており、互いにその存在を意識して建てられたものと考えられることから、両者は並存していた可能性が高いと言えよう。また、第4・6号掘立柱建物跡も、その建物方向・規模がほ

ば一致しており、両者は併存していたと考えられる。そして、両掘立柱建物跡は、第3・5号掘立柱建物跡と重複していることから、弥生時代後期前葉あるいは中葉に属するものと考えられる。

次に下沖5号遺跡における各遺構の立地について見ると、竪穴式住居跡は、丘陵頂上の平坦面や丘陵の北側に伸びる尾根(北尾根)の頂上平坦面の縁辺部あるいは斜面に位置している。このように丘陵頂部の平坦面を避け、その縁辺部や斜面に竪穴式住居跡を建てる集落は、市域の他の遺跡でも確認されており、当時の集落の在り方の一つを示すものと考えられる。^(注9)

このように丘陵頂上平坦面の縁辺部や斜面に立地する竪穴式住居跡に対して、第1号掘立柱建物跡は北尾根頂上の平坦面に、第2～6号掘立柱建物跡は丘陵頂上の平坦面に位置し、南北に分れる各竪穴式住居跡群の最高所にある。以上のことから、下沖5号遺跡は掘立柱建物を中心にして、その回りに竪穴式住居を配置する集落構成となっており、建物が集落内で特殊な役割を担っていたものと考えられる。

このような掘立柱建物跡の性格としては、一般に倉が想定されているが、他にも住居、作業小屋、集会所等も想定できる。^(注10)そこで、検出した掘立柱建物跡について見ると、想定される床面上からは炉跡等の生活の痕跡がまったく認められなかった。加えて掘立柱建物跡の内部及びその周辺からは、なんらかの作業等がなされたことを示す遺物も出土しなかった。以上のことから、これらの建物跡が住居あるいは作業所として使用された可能性は少ないと言える。また、掘立柱建物跡を集落内の集会所とするためには、一般の住居跡よりも大きな規模を持つ必要があると言える。そこで、本遺跡検出の掘立柱建物跡の規模について見ると、最も大きい第2号掘立柱建物跡においても梁間2.2m、桁行5.5mを測る程度であり、これに長方形の切妻屋根を想定しても、下沖5号遺跡の第1・2・5・6号住居跡(径5～6mの内径または4～5×3～4mの方形)と比較して特に大きい床面積になるとは考えにくい。よって、これらの建物跡が集会所となる可能性も少ないと考えられる。以上のことから、本遺跡の建物跡の性格としては、住居、作業小屋あるいは集会所のなものを想定するよりも、一般に言われているように倉を想定する方がより妥当であると考えられよう。^(注11)広島市域では、弥生時代後期になっても、なお貯蔵穴を使用している例が多いが、本遺跡内からは貯蔵穴が検出されなかったことも、掘立柱建物跡が倉として使用されていたことの傍証となるであろう。

なお、和田1号遺跡から検出された弥生時代終末～古墳時代初頭の1間×1間の掘立柱建物跡についても、立地・規模共に下沖5号遺跡のものに類似しており、倉と考えられる。また、上深川Ⅲ式に属する白禿遺跡SB2及びSB3^(注13)、上深川Ⅱ式に属する大明地遺跡SB4等も倉とされており、上深川Ⅱ～Ⅲ式の頃に、集落によっては、倉としての掘立柱建物に伴うものが現れるようである。以上のような倉としての建物の出現が何を意味するかは明らかにし得なかったが、このような集落の出現が、広島市域における上深川Ⅱ式以後の住居跡の増加傾向と軌を一にしていることは注目される。^(注12)

(3) まとめ

以上のように、今回調査を行った三遺跡は、弥生時代後期から古墳時代後葉にいたる遺跡群であり、特に、弥生時代後期から古墳時代前葉にかけての太田川流域及び八幡川流域を考えていく上で良好な資料を得ることができたといえよう。そこで、最後に弥生時代終末から古墳時代前葉の時代に焦点をしばり若干の考察を加えることでまとめにかえたい。

従来より、弥生時代後期の集落については、小河川を見おろす丘陵上で多数発見されており、それに続く時期の集落が発見されないことから、古墳時代になると集落の立地に大きな変化があったものと考えられてきた。

今回、和田1号遺跡で検出された住居跡のうち、標高20m周辺の丘陵縁辺部に位置する南側住居跡群は、ほぼ古墳時代前葉から後葉に至る時期のものであり、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡の検出された下沖3号遺跡・下沖5号遺跡との時期的な連続性を想起させ、注目される。また、前述の南側住居跡群周辺からは、上深川式土器の系譜をひくと考えられる土器は出土しておらず南側住居跡群中最古、古墳時代前葉に位置づけられる第9号住居跡が造られた時期には、弥生時代の伝統をひく上深川式土器が、日本中で画一化された形態を持つ土器にとってかわられていた可能性が高い。また、下沖3号遺跡でみられたように、上深川Ⅲ式古段階と新段階の間の時期に、上深川式土器とは系譜の異なる土器が、市内各所から少量混在した形で出土して^{注15)}おり、前述した土器の変化及び集落立地の変化が、これに続く時期に起きているととらえられることから注目される。

いずれにしても、明確な古墳時代の集落跡の調査は今回が初例であり、資料的にも少ないため、可能性を提示するに止め、明言はさけておきたい。しかし、弥生時代の伝統を引く土器の変質と集落立地の変化が、相前後して起っているという事実は、単に生産力の増大や農業技術の進歩、人口の増加等の要因だけでは説明しえない現象である。すなわち、前述したような変化が、弥生時代から古墳時代へと全国的に社会的変貌をとげつつあった時期に起っており、その変化が集落構成の変化や文化の変質と深く関係していると予想されるだけに、極めて注目すべき現象といえよう。

(注1) 広島市教育委員会『岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告』1985

(注2) 藤田憲司「山陰「龍尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号 1979

房宗寿雄「山陰地域」における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』第1集 1984

赤沢秀剛「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』第6号 1985

花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究」『島根考古学会誌』第4集 1987

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての山陰の土器の編年については、様々な意見があるようである。

ここでは一応、「小谷式」を布留Ⅰ式併行、「龍尾Ⅲ式」を庄内古段階あるいはそれを若干先行する時期ととらえておきたい。ただ、「小谷式」と「龍尾Ⅲ式」との間にもう一段階設定する考え方もあるが、編年も確立していないことから、あえてとりあげなかった。

(注3) 注2に同じ

(注4) 松崎寿和・潮見 浩『新修広島市史』I 1961

(注5) 矢ヶ谷遺跡発掘調査団『矢ヶ谷遺跡発掘調査報告』1984

(注6) 注2に同じ

(注7) 古瀬清秀「古墳出土の施の形態的変遷とその役割」『考古論集』1977

なお同時期の類例としては、金川遺跡SB-2出土の施がある。

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅱ 1987

(注8) 広島市教育委員会『若上山遺跡発掘調査報告』1988

(注9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅲ 1986

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅳ 1987

(注10) 基山町遺跡発掘調査団『千塔山遺跡調査報告』1978

岡山県山陽町教育委員会『山陽団地埋蔵文化財発掘調査概要』1977

(注11) 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 1978

(注12) 注1に同じ

広島県教育委員会『高瀬新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977

広島市教育委員会『末光遺跡発掘調査報告』1984

(注13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』 1987

(注14) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅱ 1987

(注15) 類例は以下のとおりである。

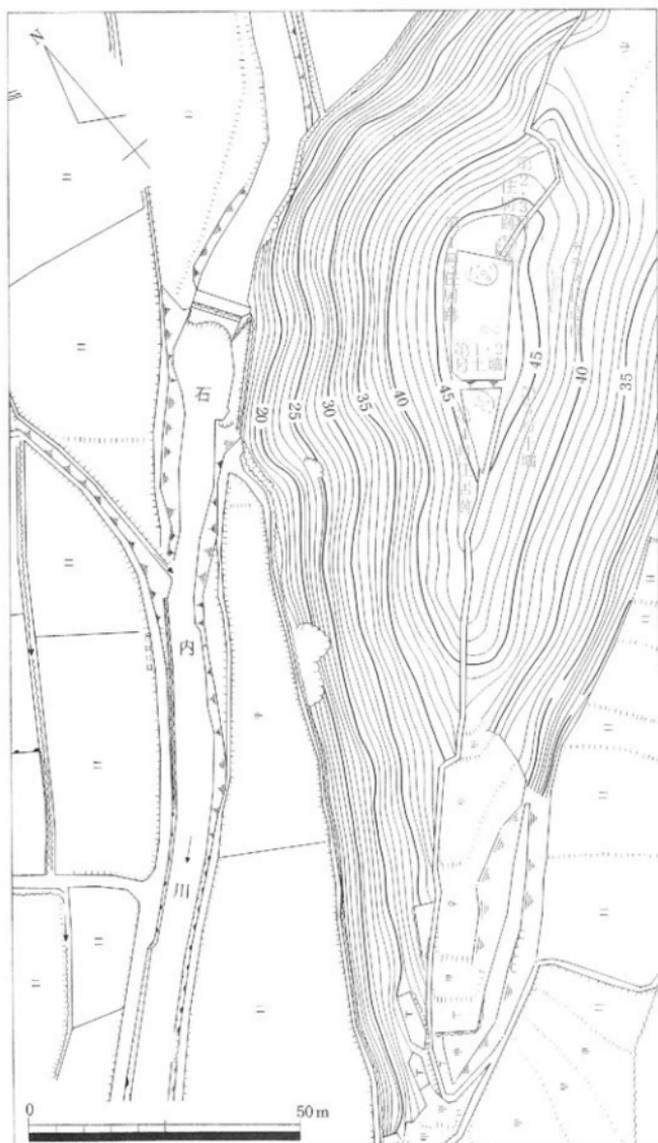
(遺跡名)

長尾城遺跡	佐伯区五日市町
岩上山田遺跡	安佐北区落合南三丁目
金川遺跡	安佐北区落合南町
大明地遺跡	安佐北区口田一丁目
矢ヶ谷遺跡	安佐南区大町

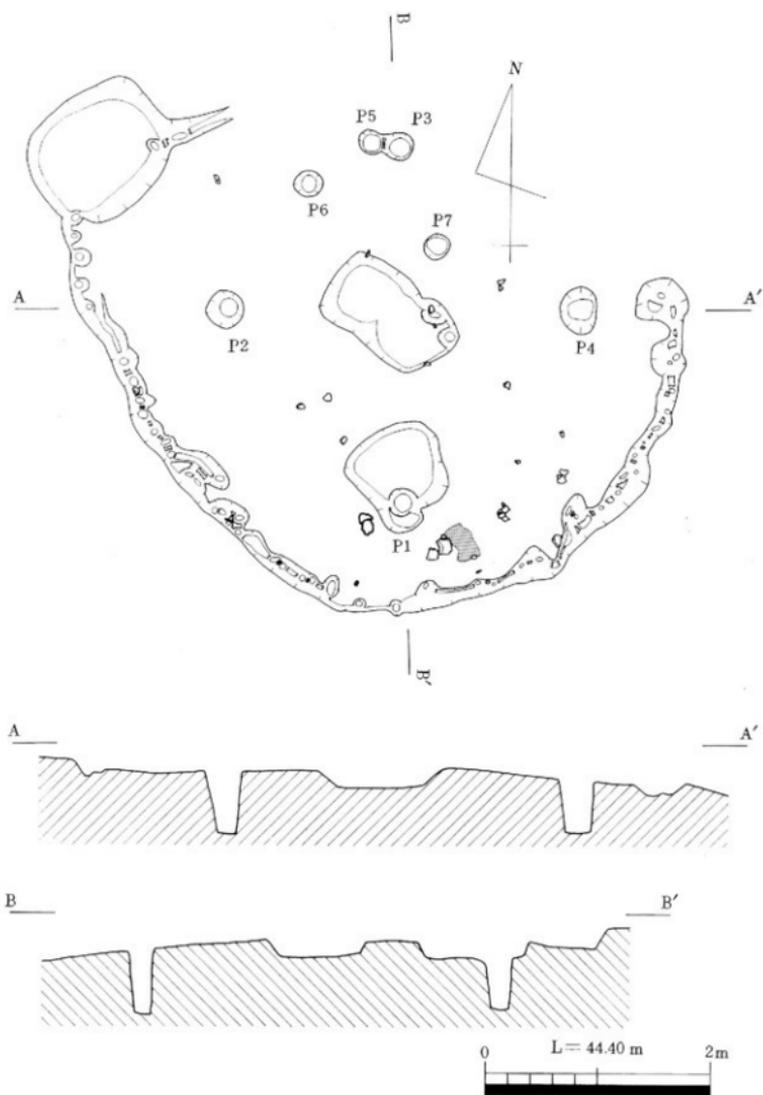
<参考文献>

『弥生文化の研究』7 弥生集落 有山園 1986

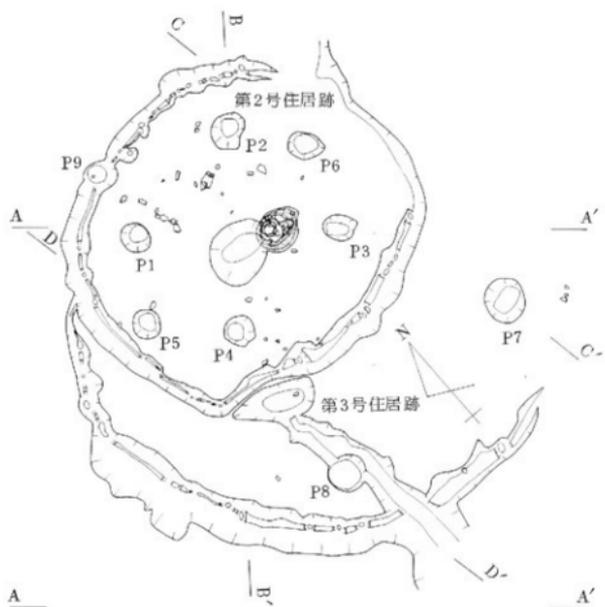
『岩波講座日本考古学』4 集落と祭祀 岩波書店 1986



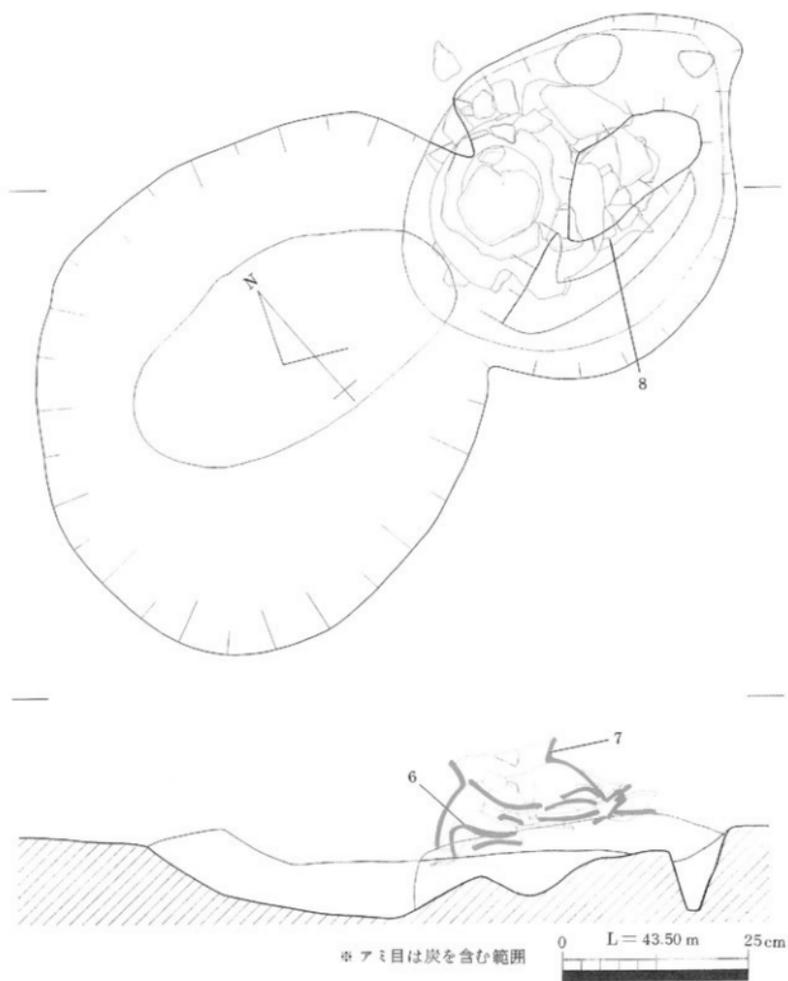
第2図 下沖3号遺跡周辺地形図及び遺構配置図



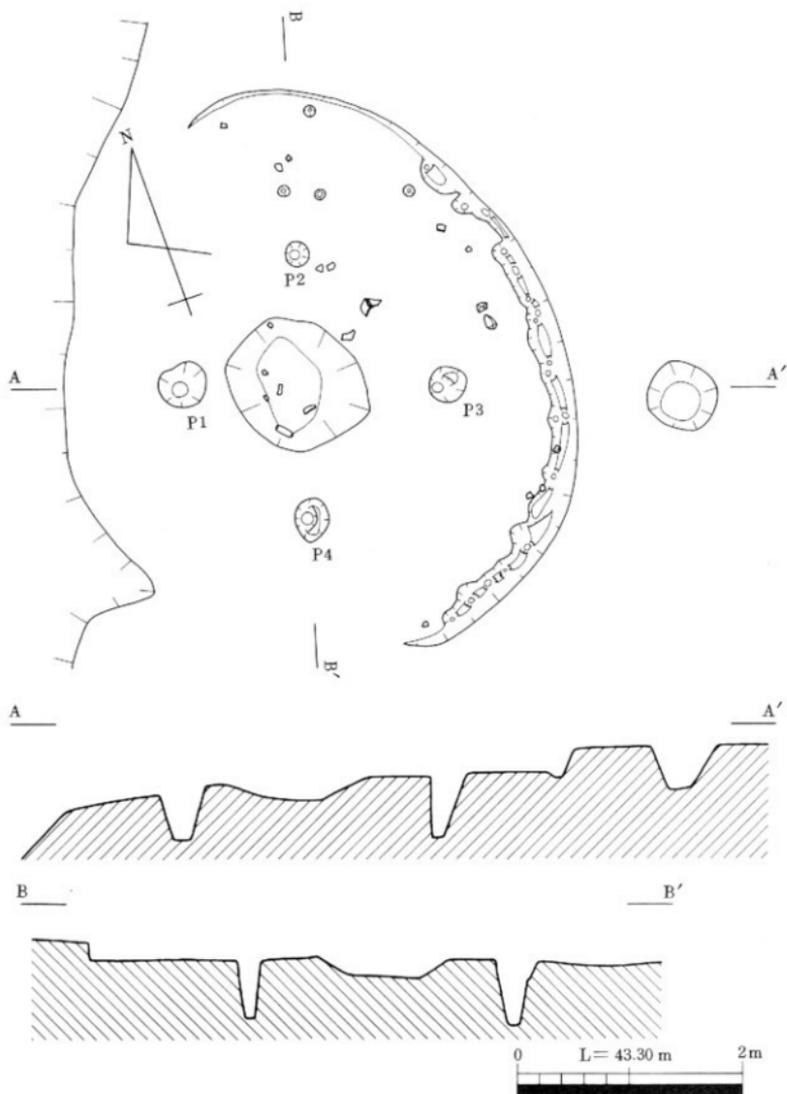
第3图 下冲3号遗址第1号住居跡实测图



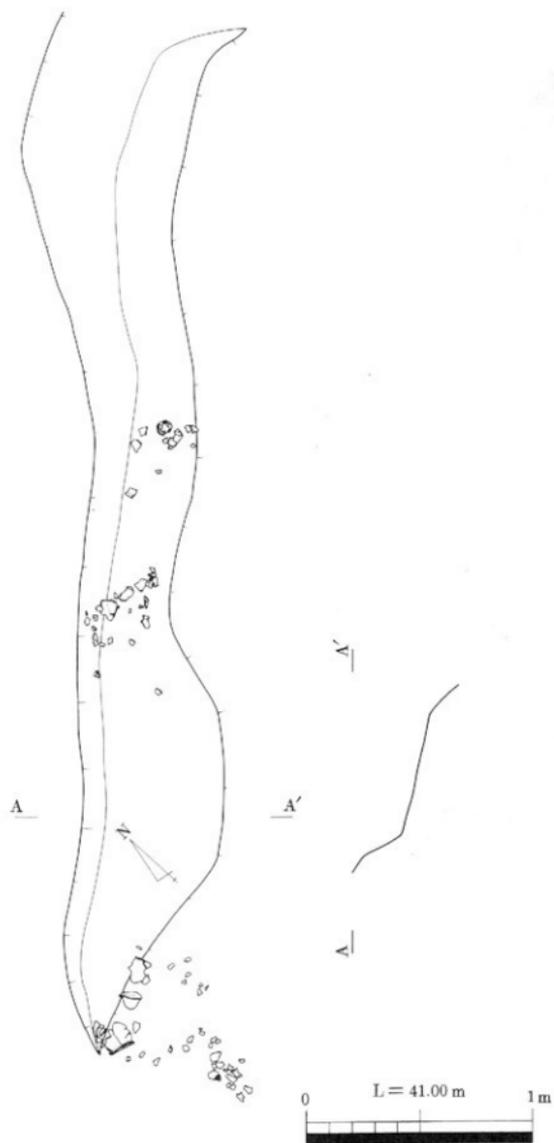
第4図 下沖3号遺跡第2・3号住居跡実測図



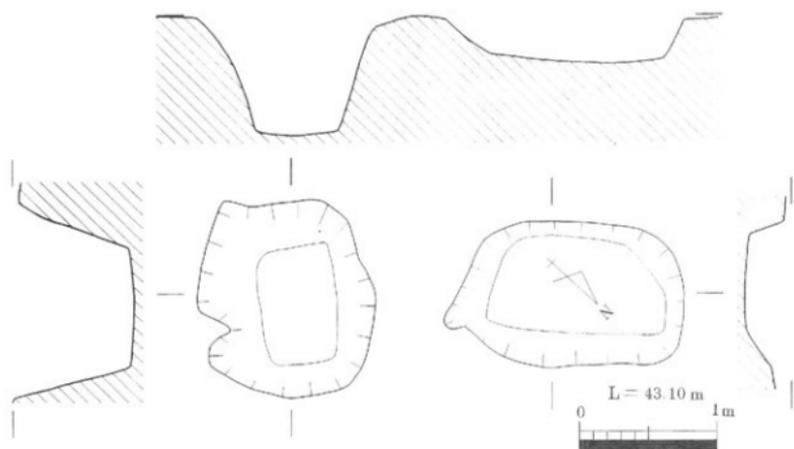
第5図 下沖3号遺跡第2号住居跡掘り込み内遺物出土状態実測図



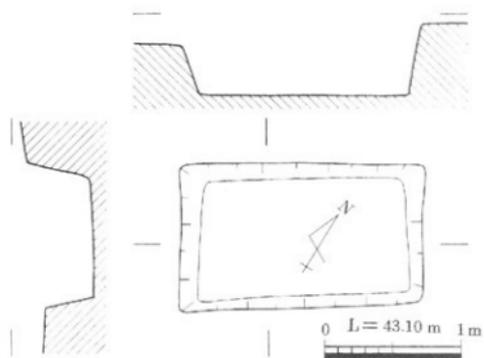
第6图 下冲3号遗址第4号住居跡実測図



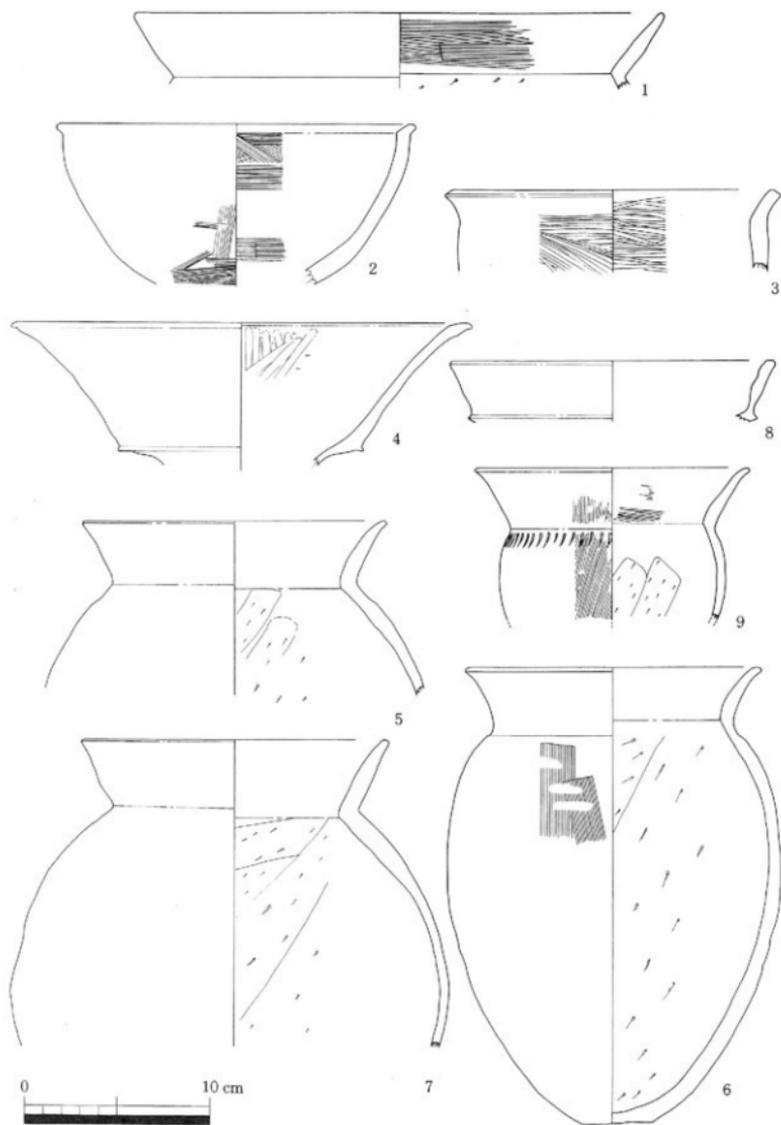
第7図 下沖3号遺跡テラス状遺構実測図



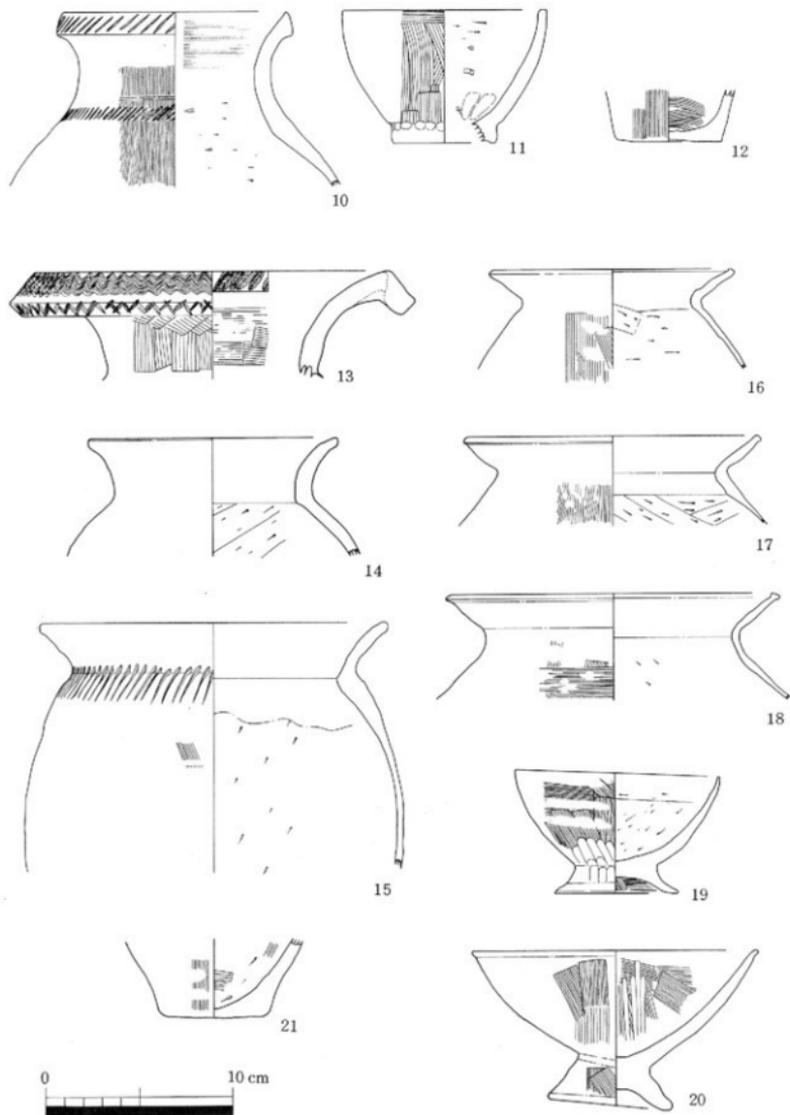
第8图 下冲3号遗址第1·2号土坑实测图



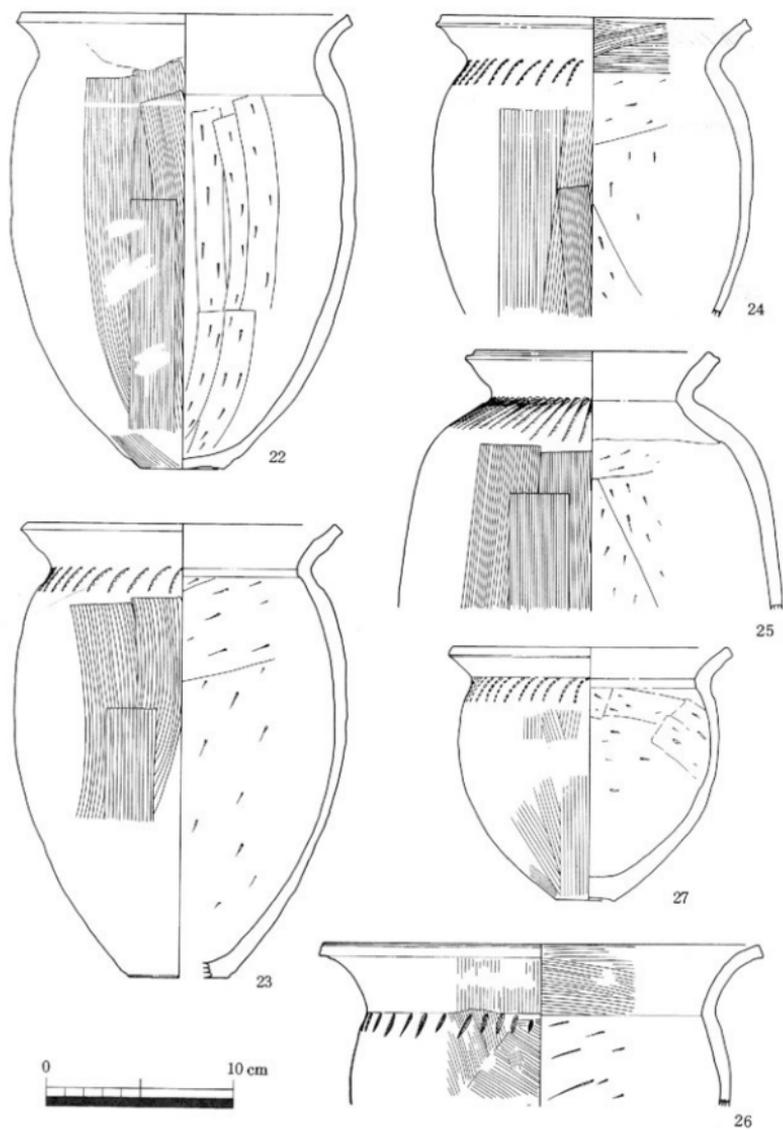
第9图 下冲3号遗址第3号土坑实测图



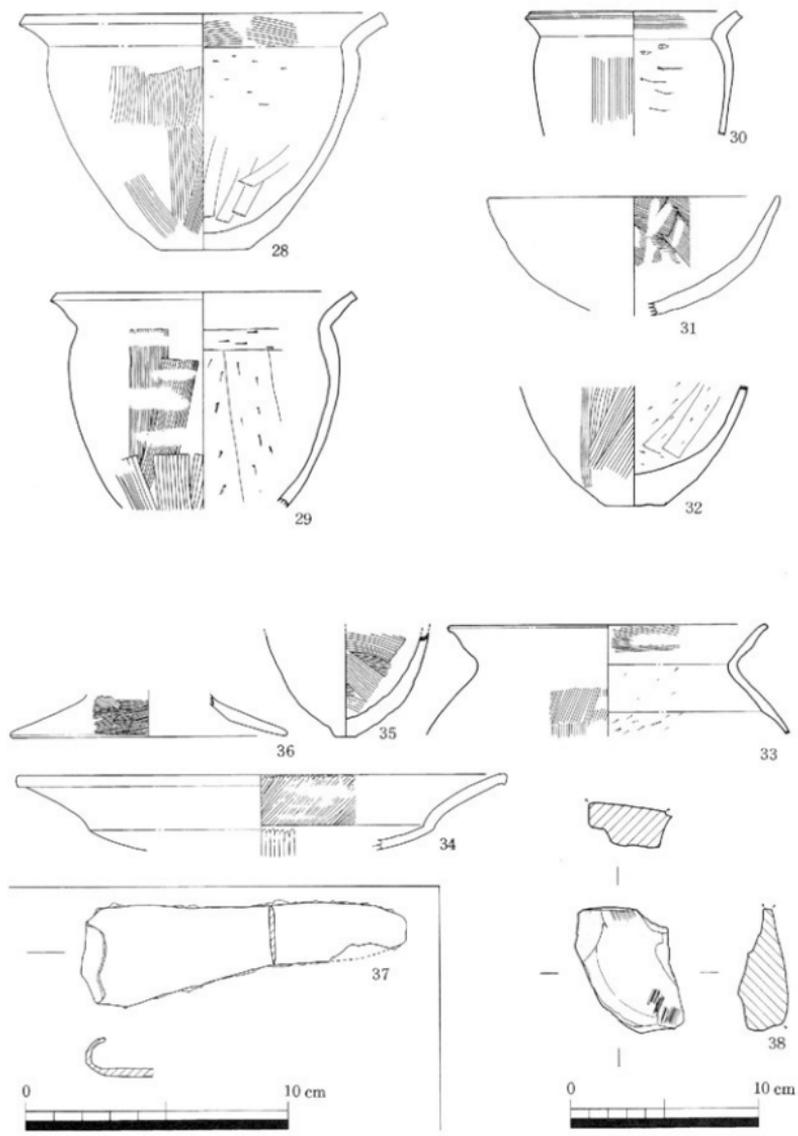
第10图 下冲3号遺跡出土土器実測図



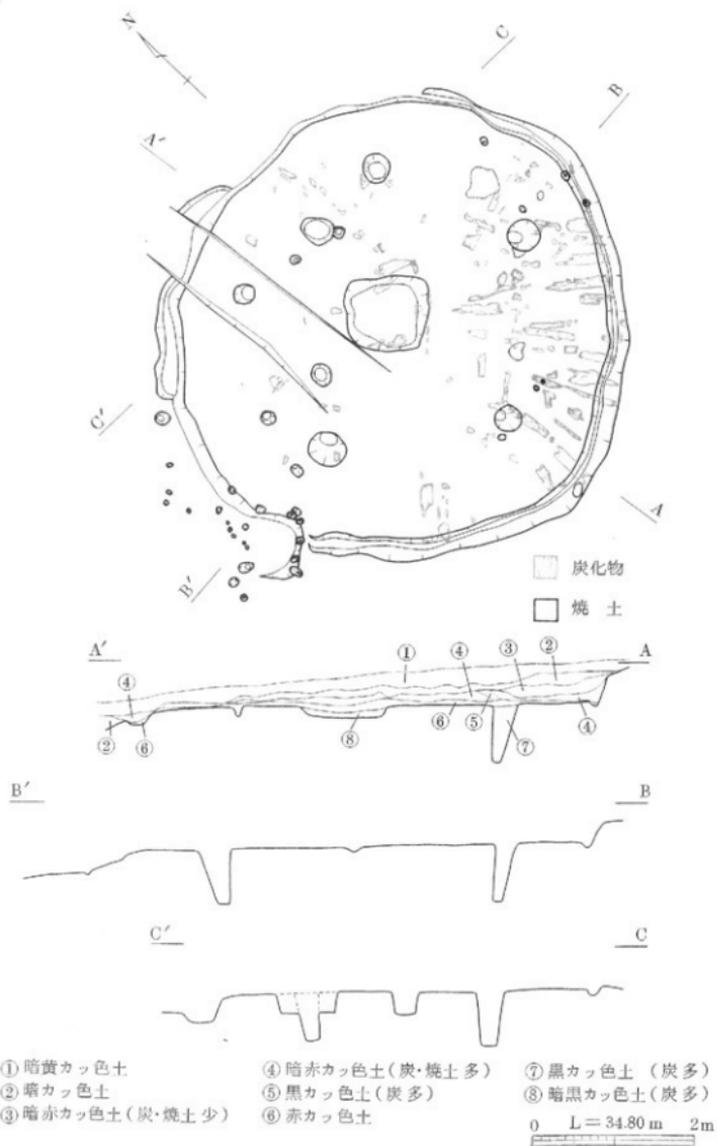
第 11 图 下冲 3 号遗址出土土器实例图



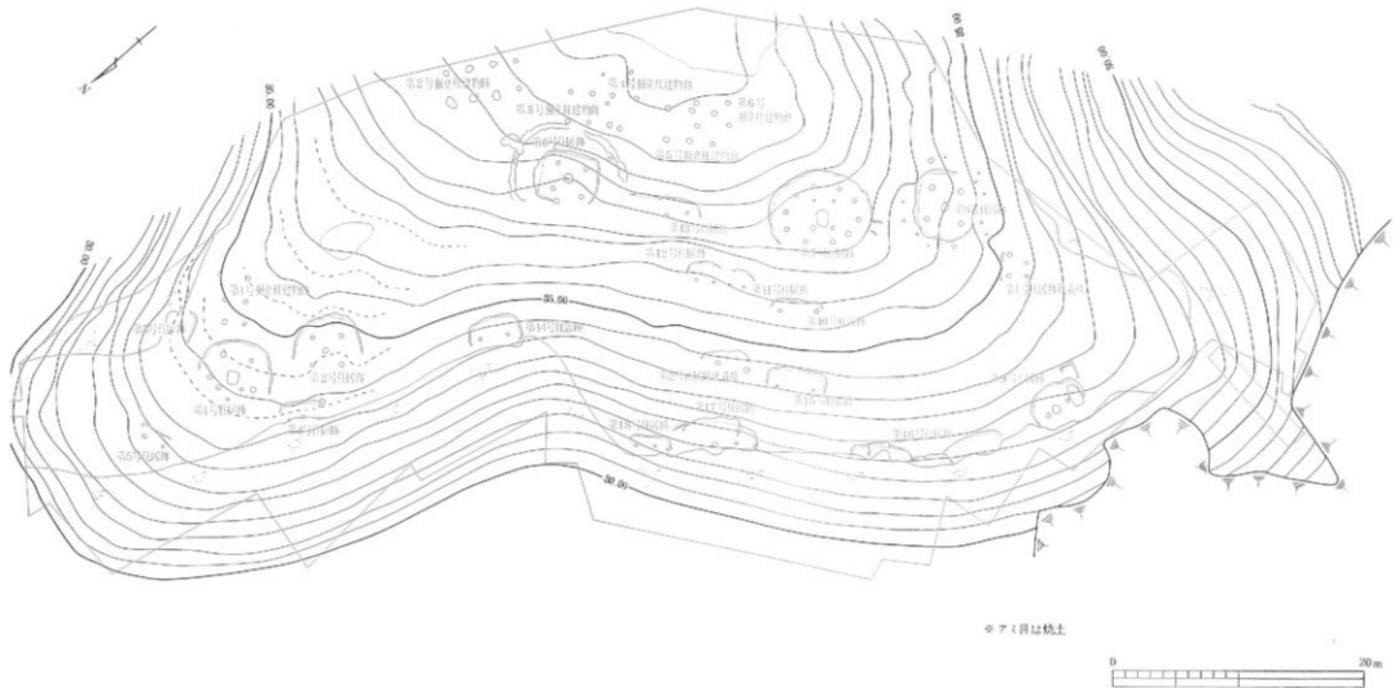
第12图 下冲3号遺跡出土土器実測図



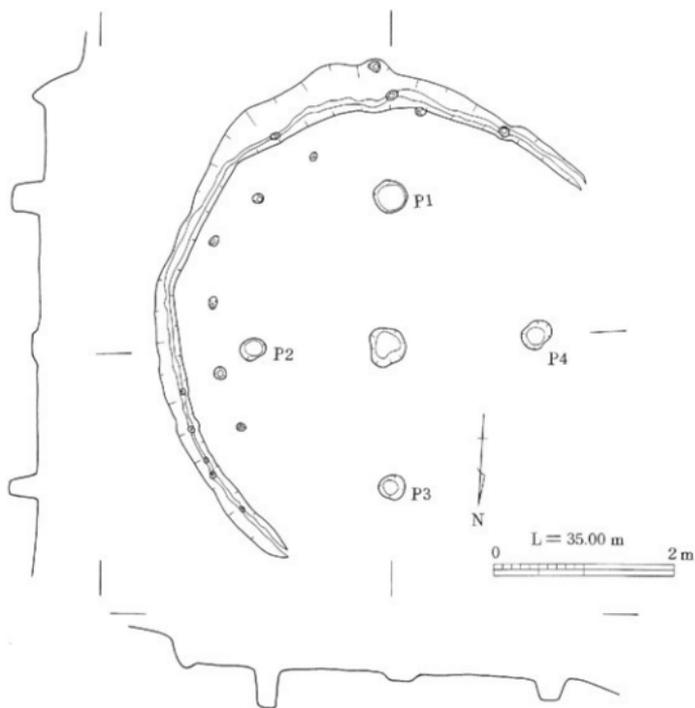
第13图 下神3号遺跡出土遺物実測図



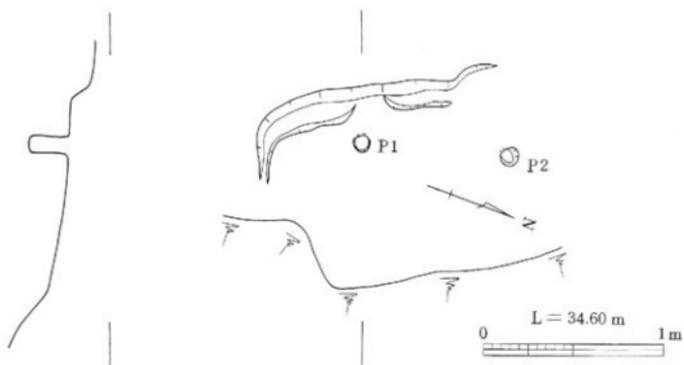
第15図 下沖5号遺跡第1号住居跡実測図



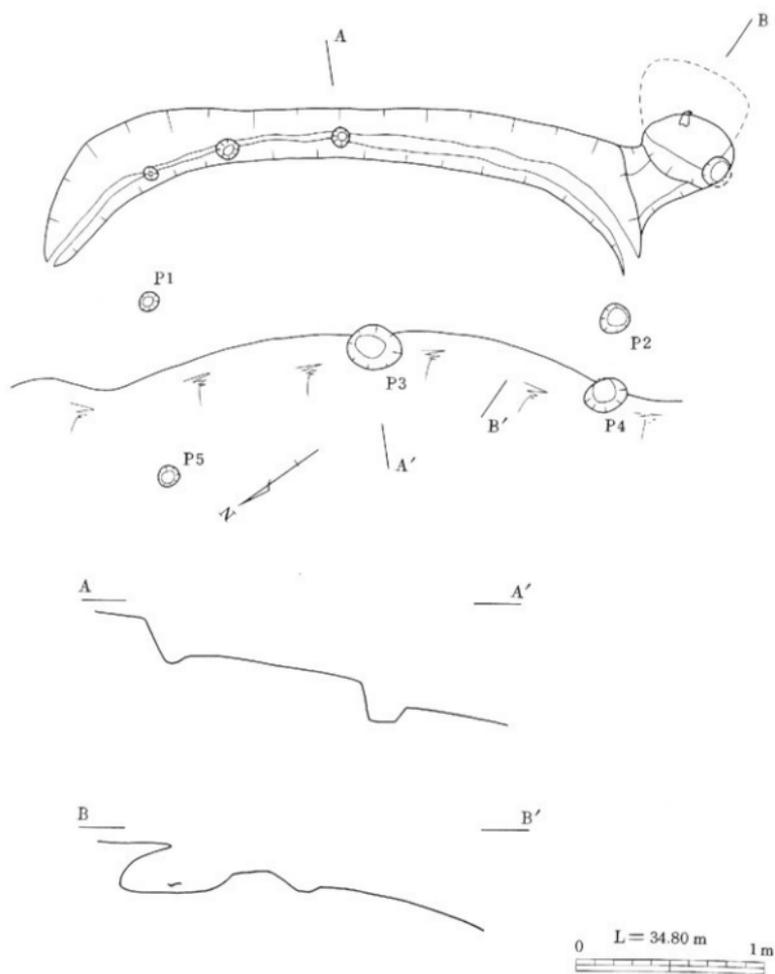
第14圖 下坪5号遺跡地形図及び遺構配置図



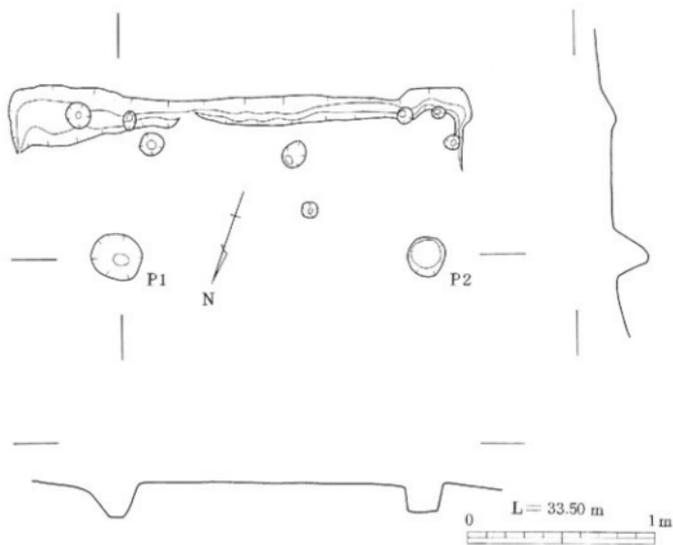
第16图 下冲5号遗址第2号住居跡実測图



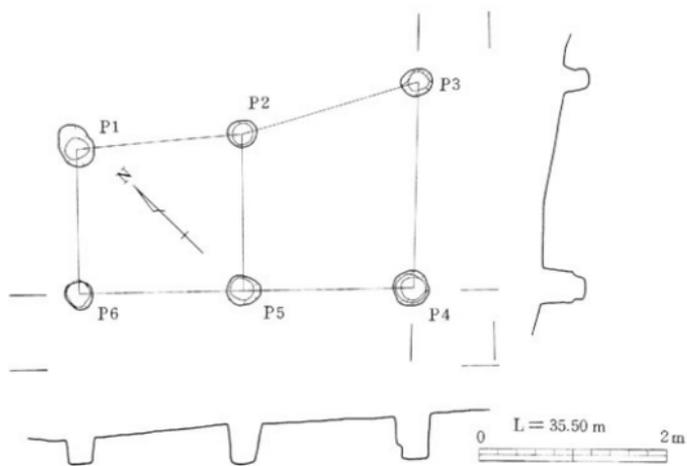
第17图 下冲5号遗址第3号住居跡実測图



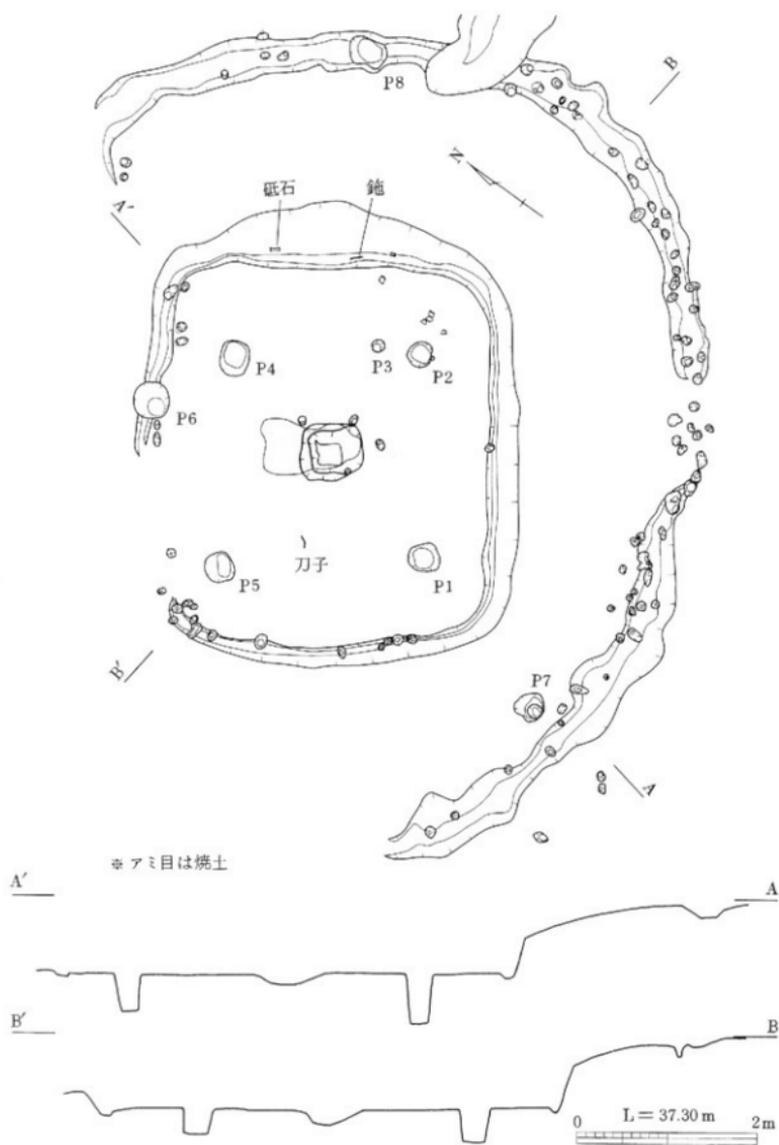
第18图 下冲5号遗址第4号住居遗迹实测图



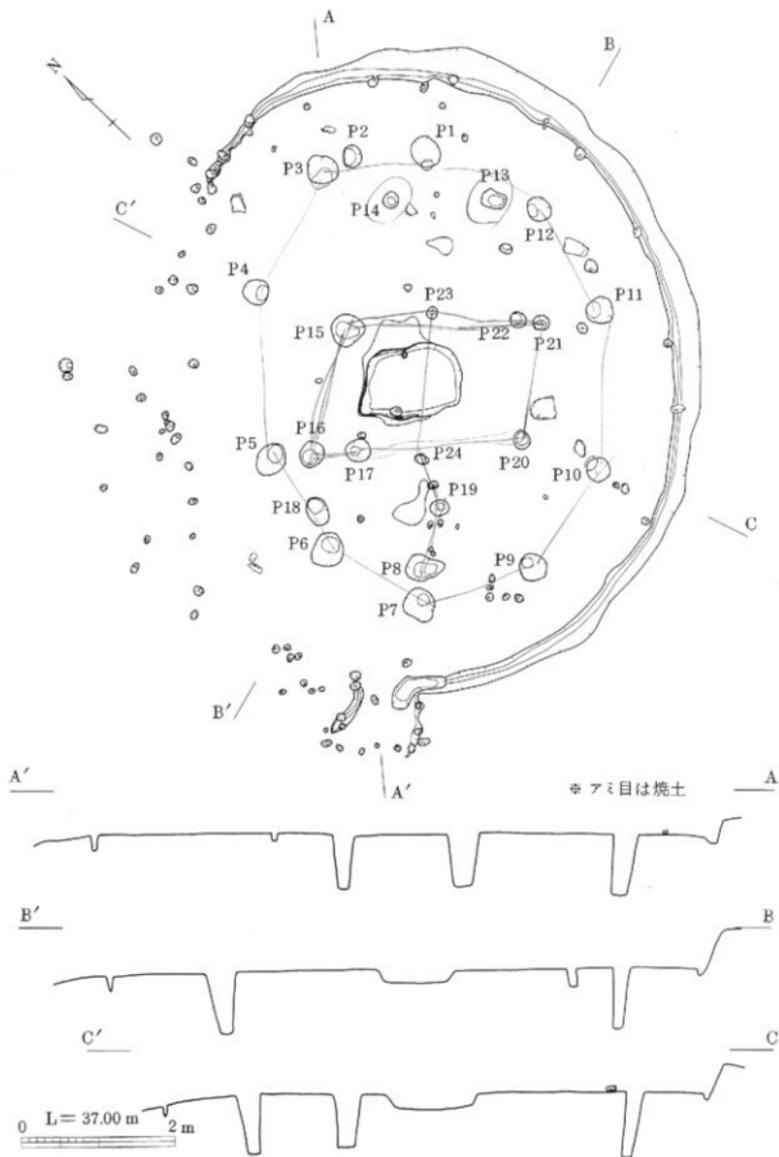
第 19 图 下冲 5 号遗址第 5 号住居跡実測図



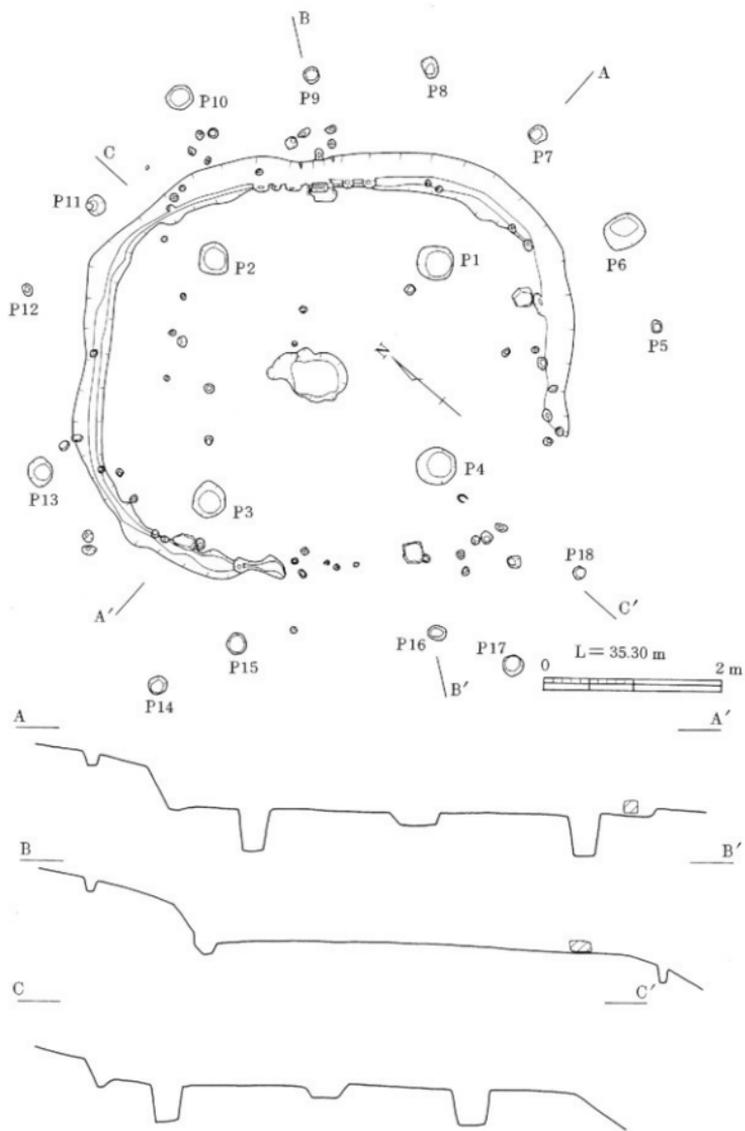
第 20 图 下冲 5 号遗址第 1 号掘立柱建物跡実測図



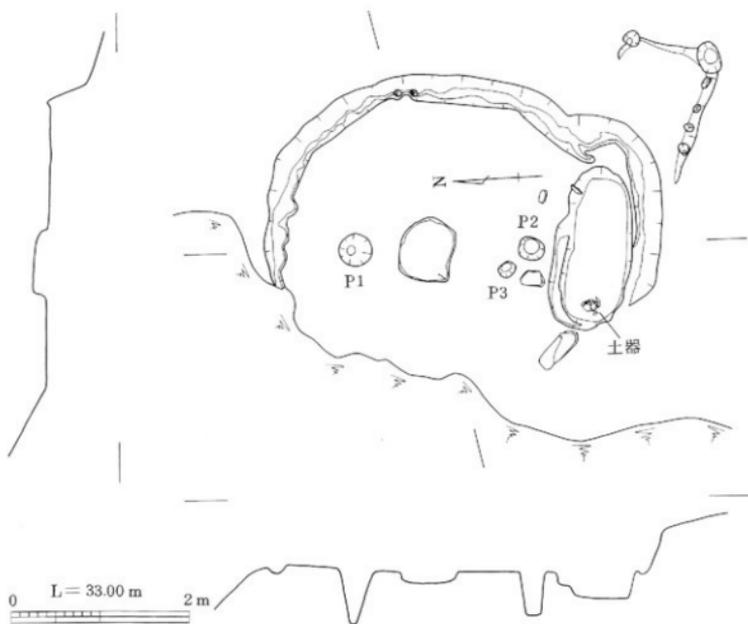
第21図 下沖5号遺跡第6号住居跡実測図



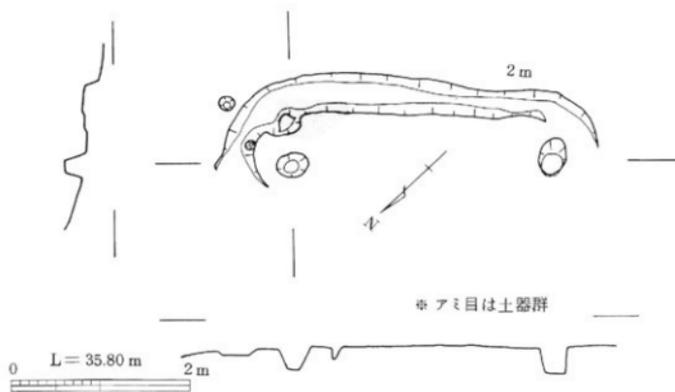
第22図 下沖5号遺跡第7号住居跡実測図



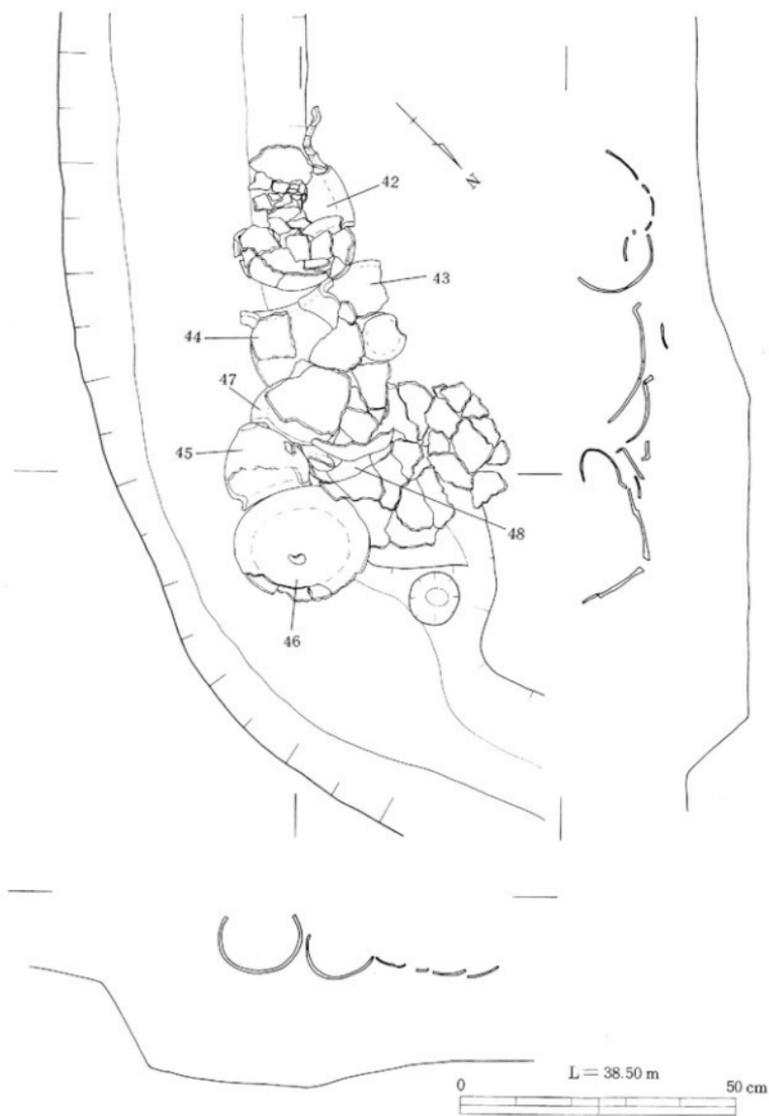
第 23 図 下沖 5 号遺跡第 8 号住居跡実測図



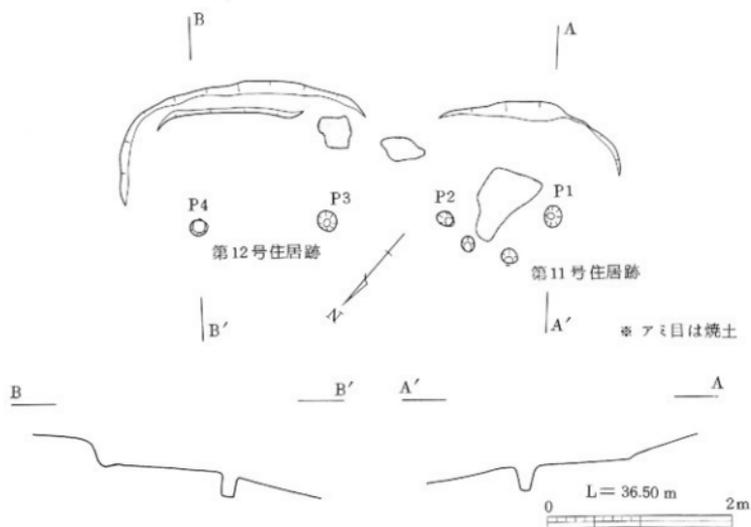
第24図 下沖5号遺跡第9号住居跡実測図



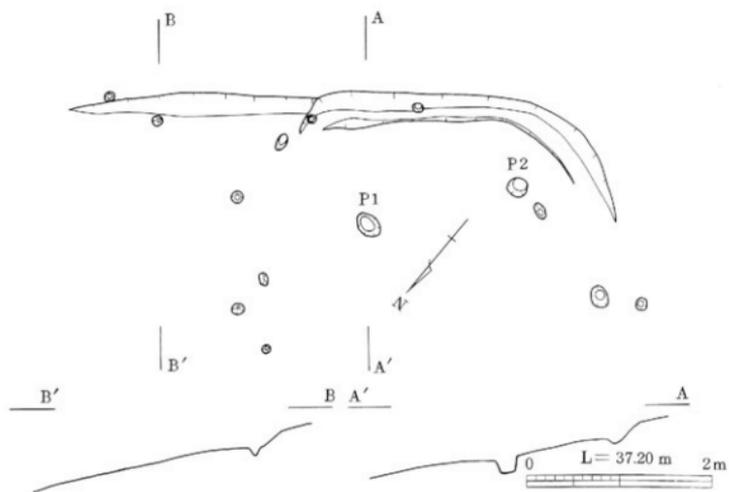
第25図 下沖5号遺跡第10号住居跡実測図



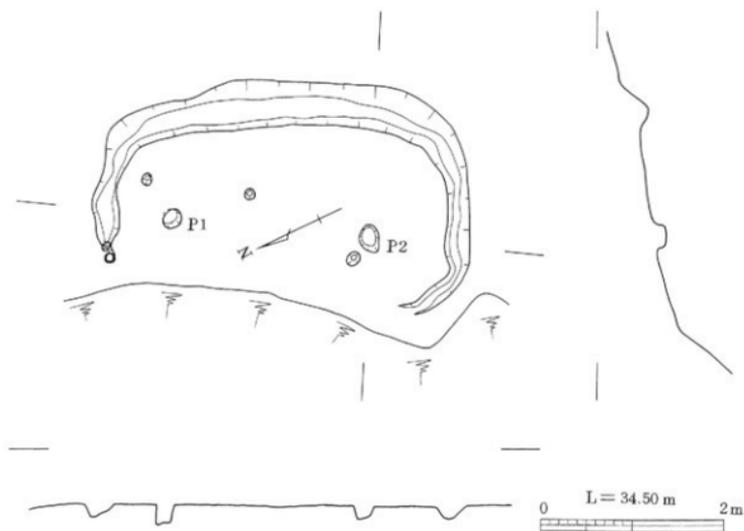
第 26 图 下冲 5 号遗址第 10 号住居跡内遺物出土状態



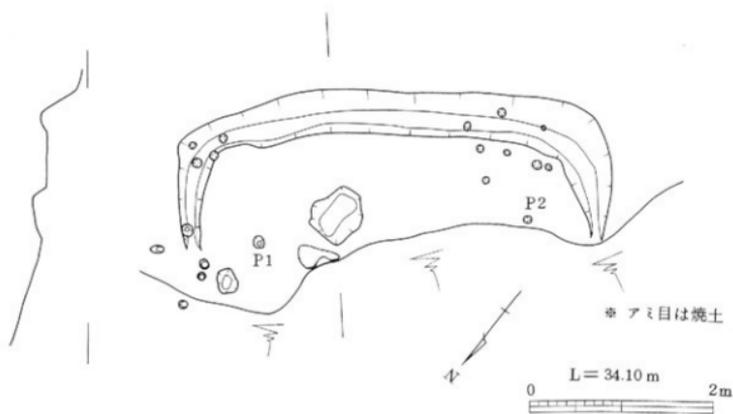
第27図 下沖5号遺跡第11・12号住居跡実測図



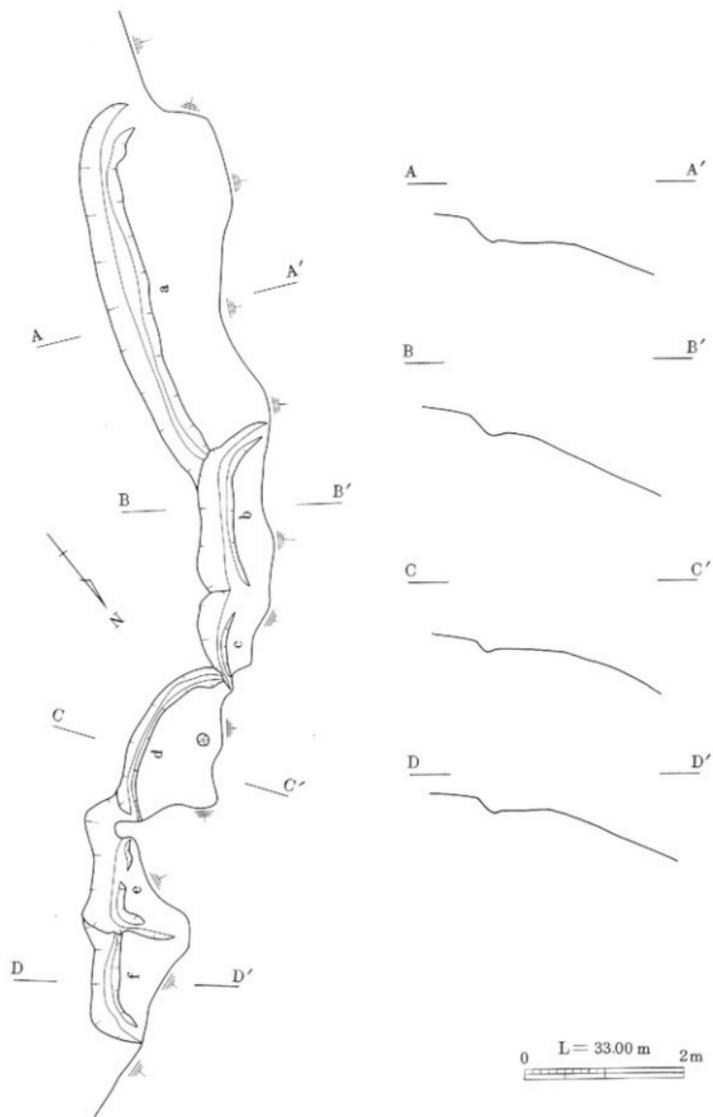
第28図 下沖5号遺跡第13号住居跡実測図



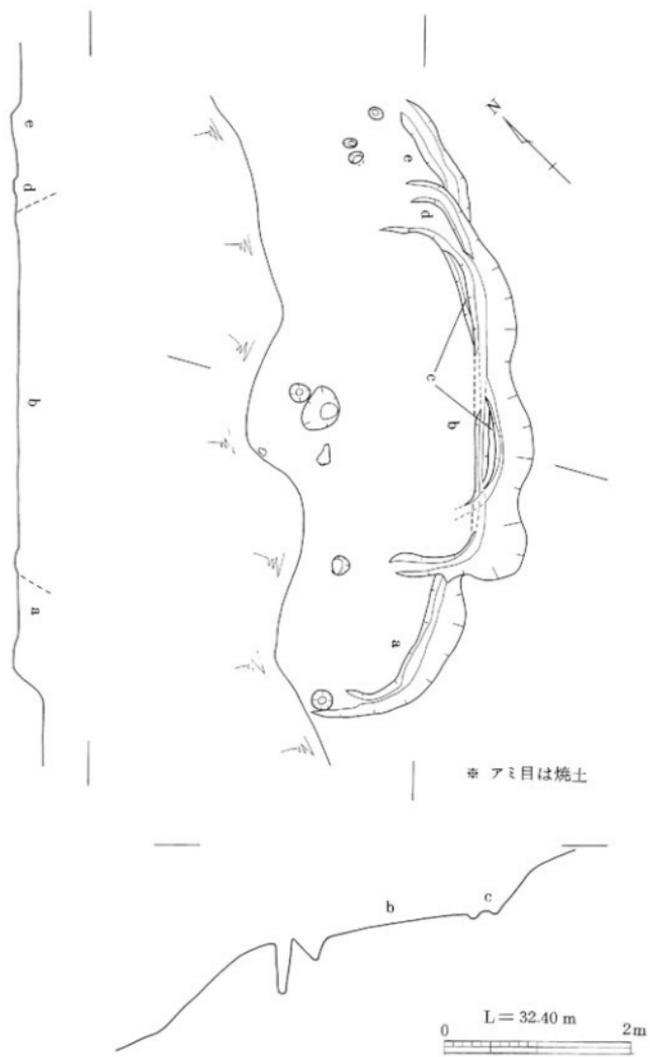
第29図 下沖5号遺跡第14号住居跡実測図



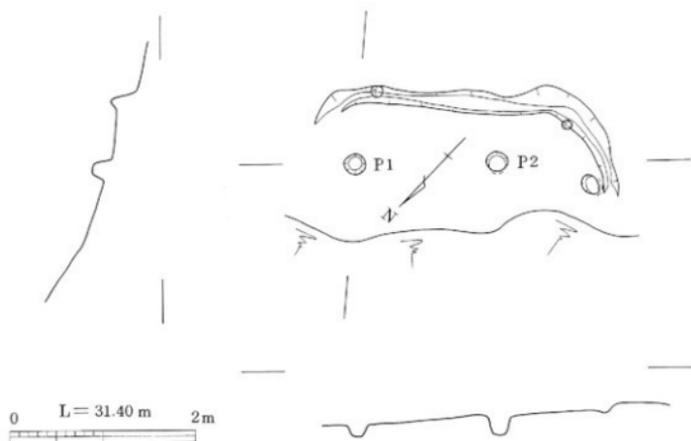
第30図 下沖5号遺跡第15号住居跡実測図



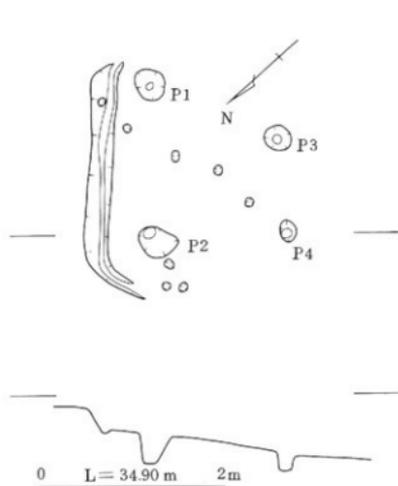
第31图 下冲5号遗址第16号住居踏实剖面



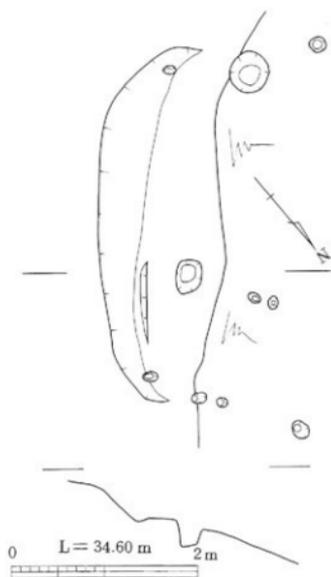
第32図 下沖5号遺跡第17号住居跡実測図



第33图 下冲5号遗址第18号住居跡実測图



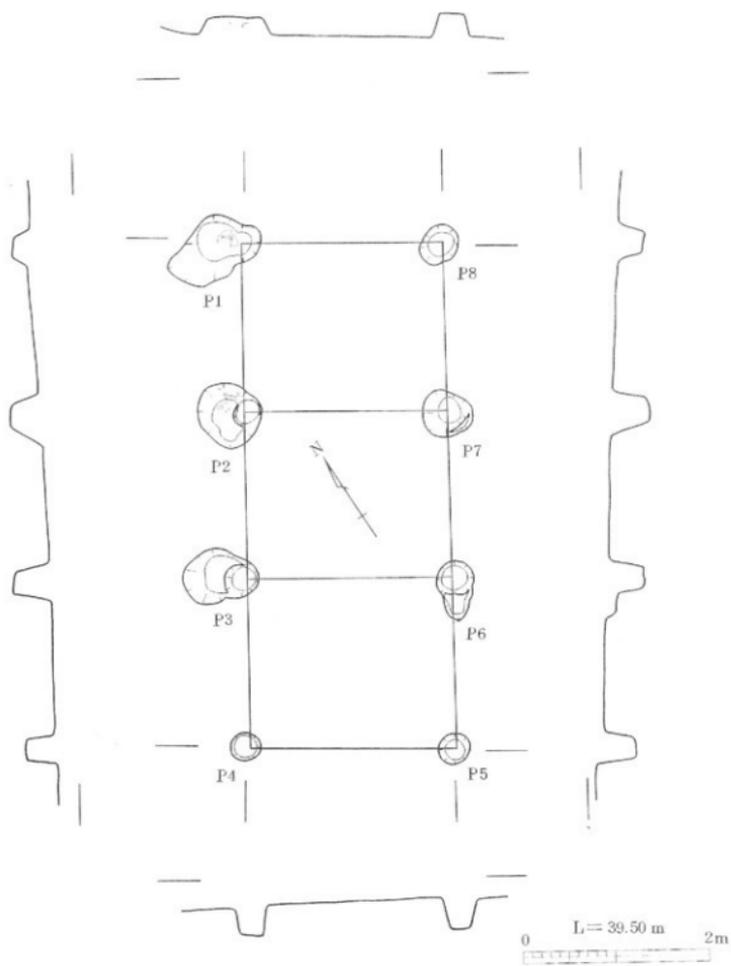
第34图 下冲5号遗址第1号住居跡遺構実測图



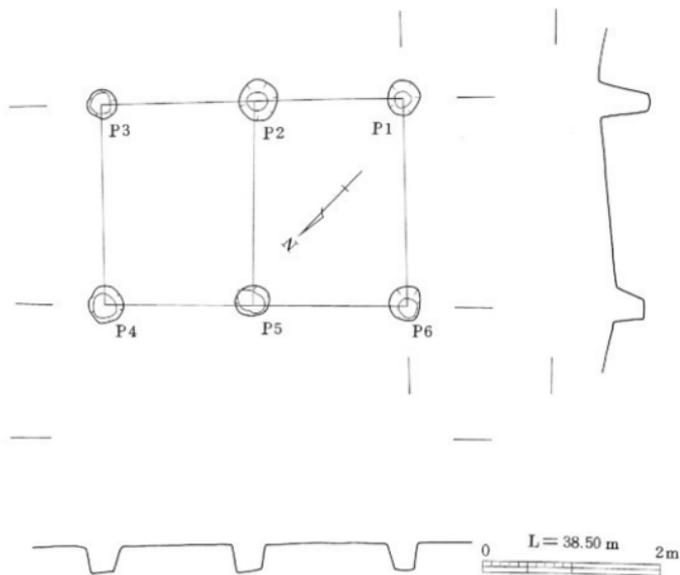
第35图 下冲5号遗址第2号住居跡遺構実測图



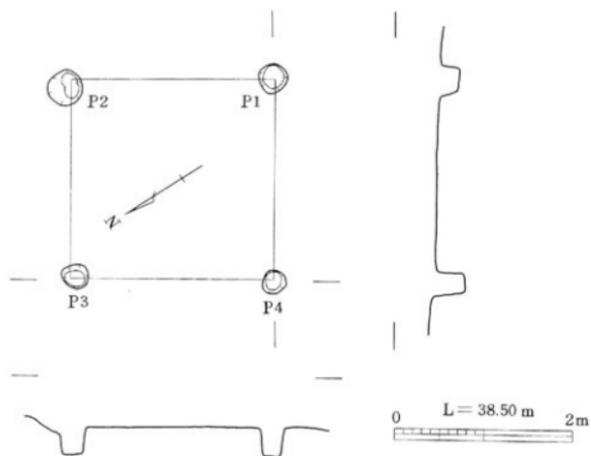
第36圖 下沖5号遺跡兩側掘立柱建物跡群遺構配置圖



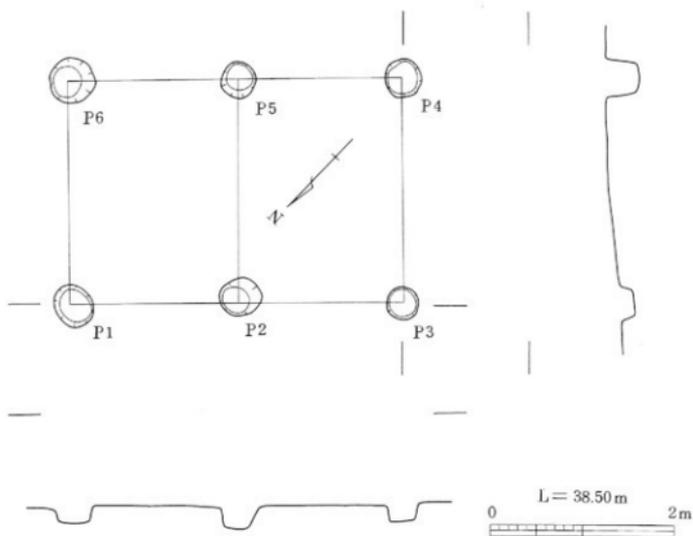
第 37 图 下冲 5 号遗址第 2 号掘立柱建物跡平面図



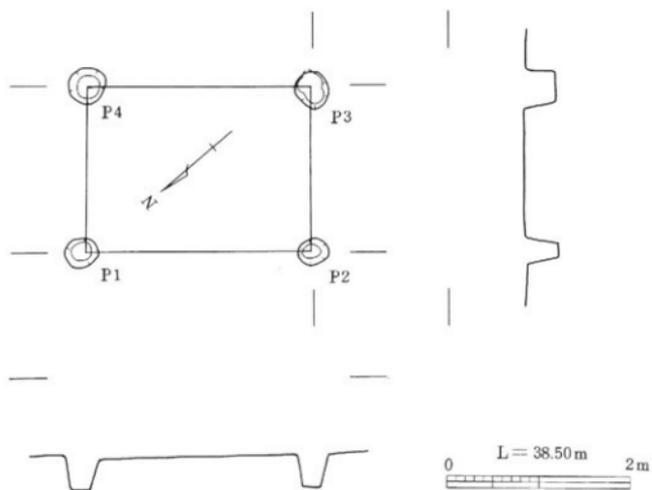
第 38 图 下冲 5 号遗址第 3 号掘立柱建物跡実測図



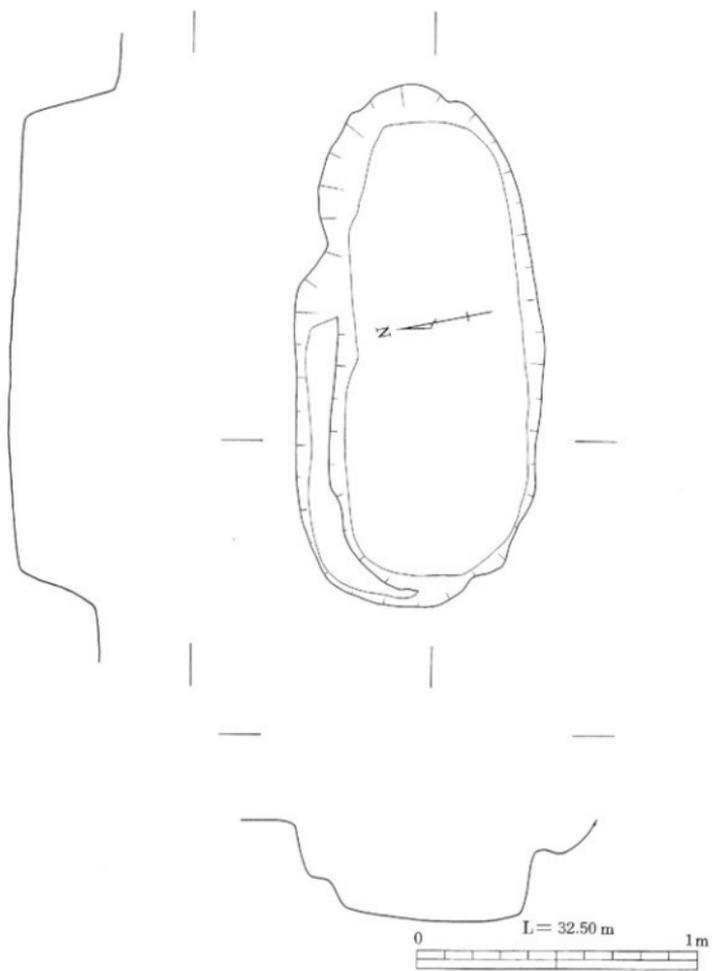
第 39 图 下冲 5 号遗址第 4 号掘立柱建物跡実測図



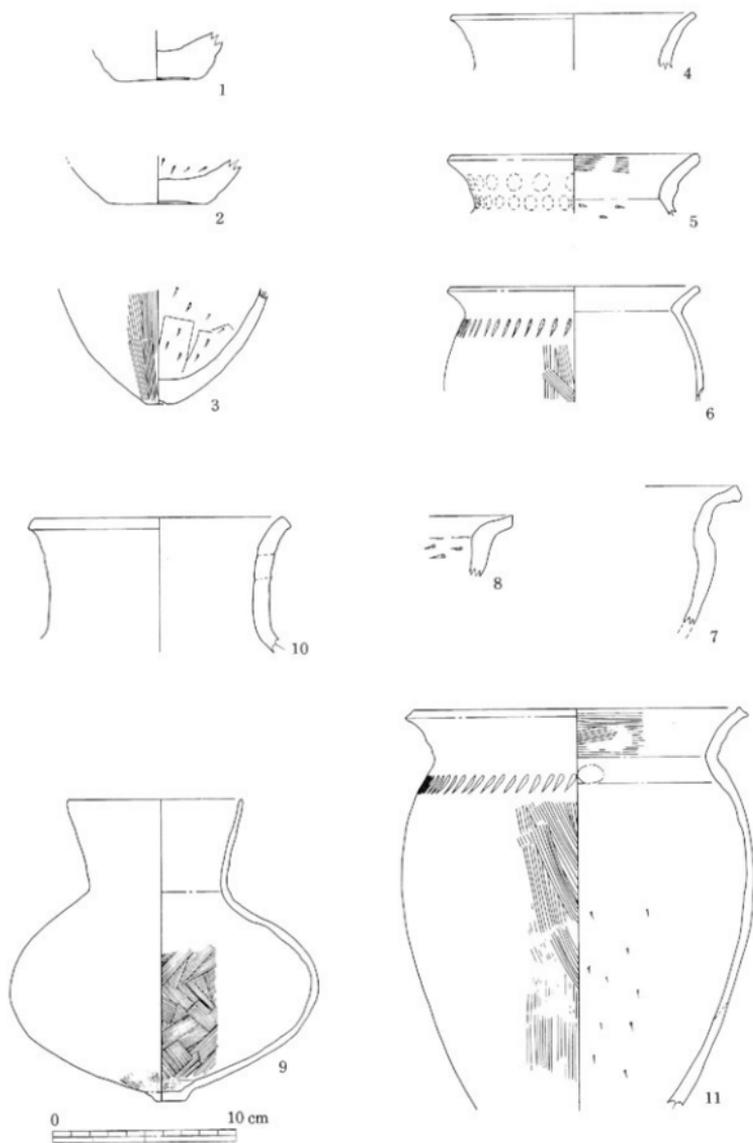
第40图 下冲5号遗址第5号掘立柱建物跡実測图



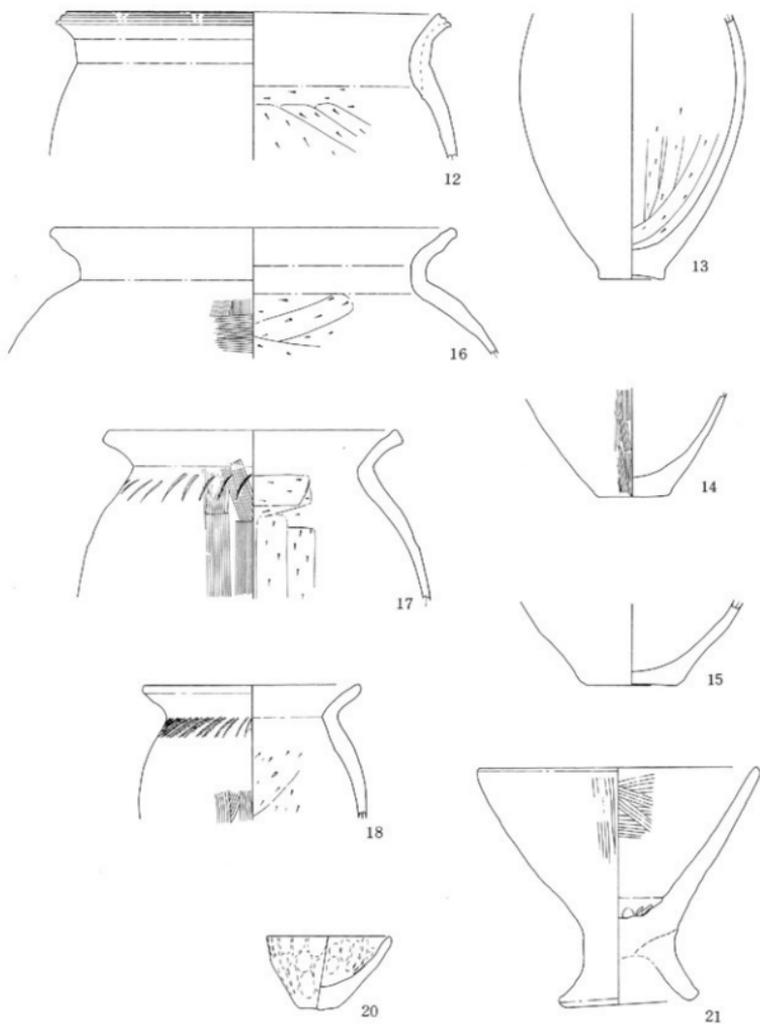
第41图 下冲5号遗址第6号掘立柱建物跡実測图



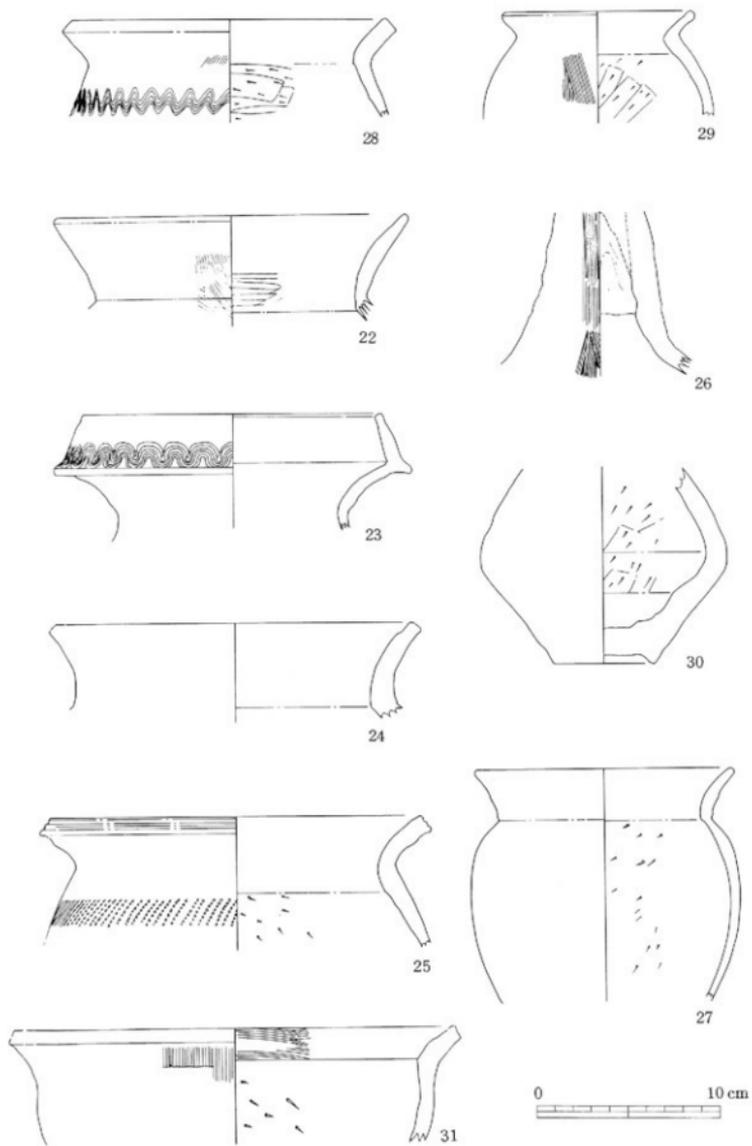
第 42 图 下冲 5 号遗址第 1 号土坑实测图



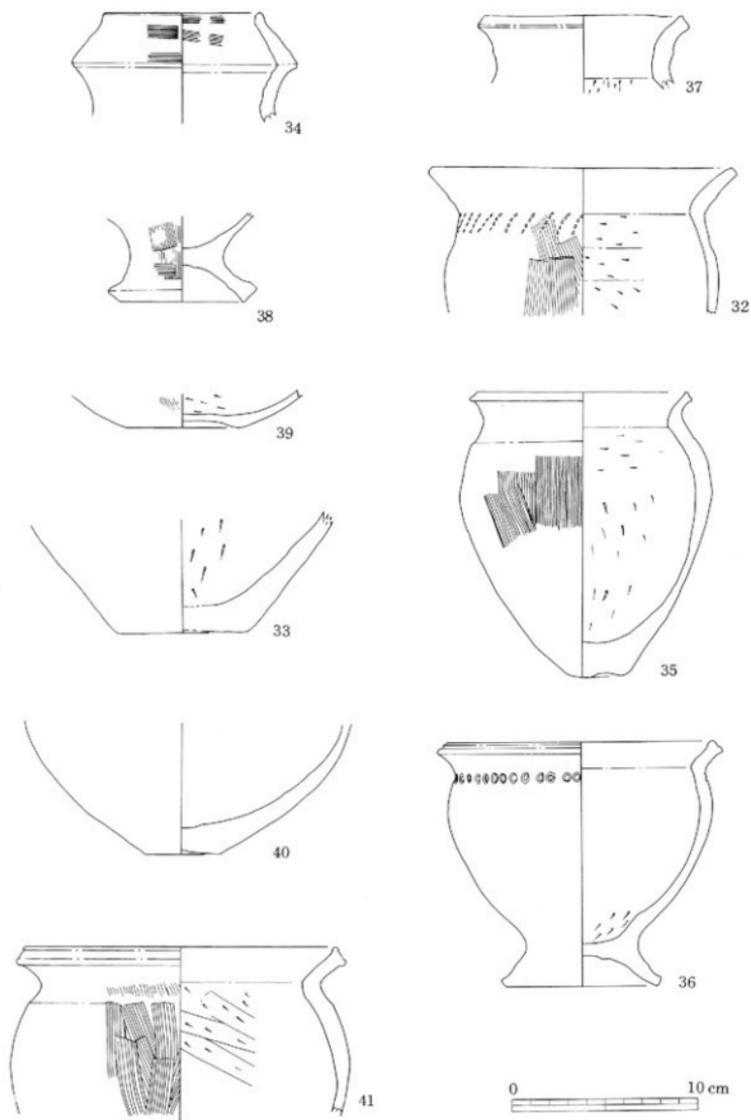
第43图 下神5号遺跡出土土器実測図(1)



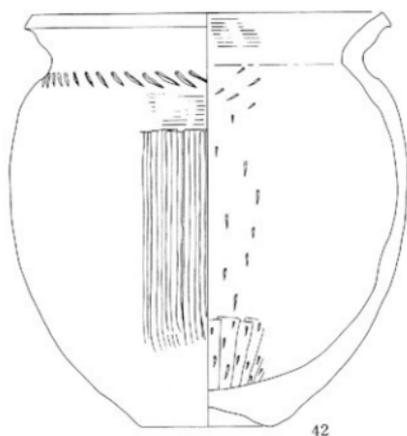
第44图 下神5号遺跡出土土器実測図(2)



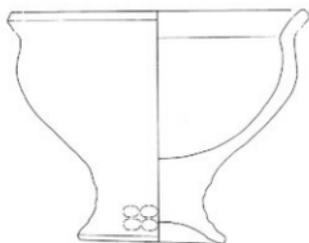
第 45 图 下冲 5 号遗址出土土器夹侧图 (3)



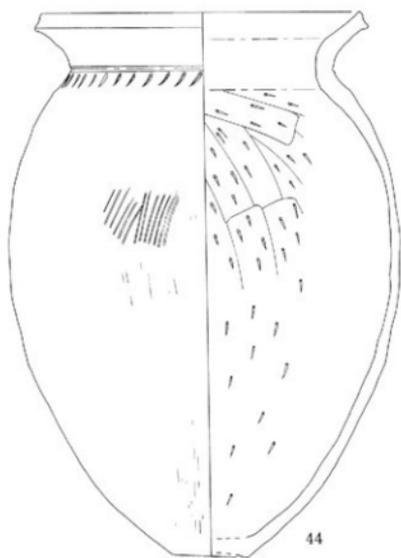
第46图 下冲5号遗址出土土器实测图(4)



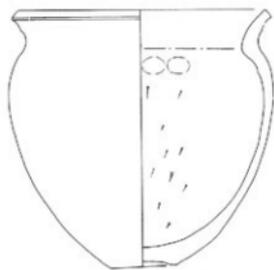
42



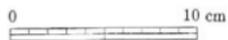
43



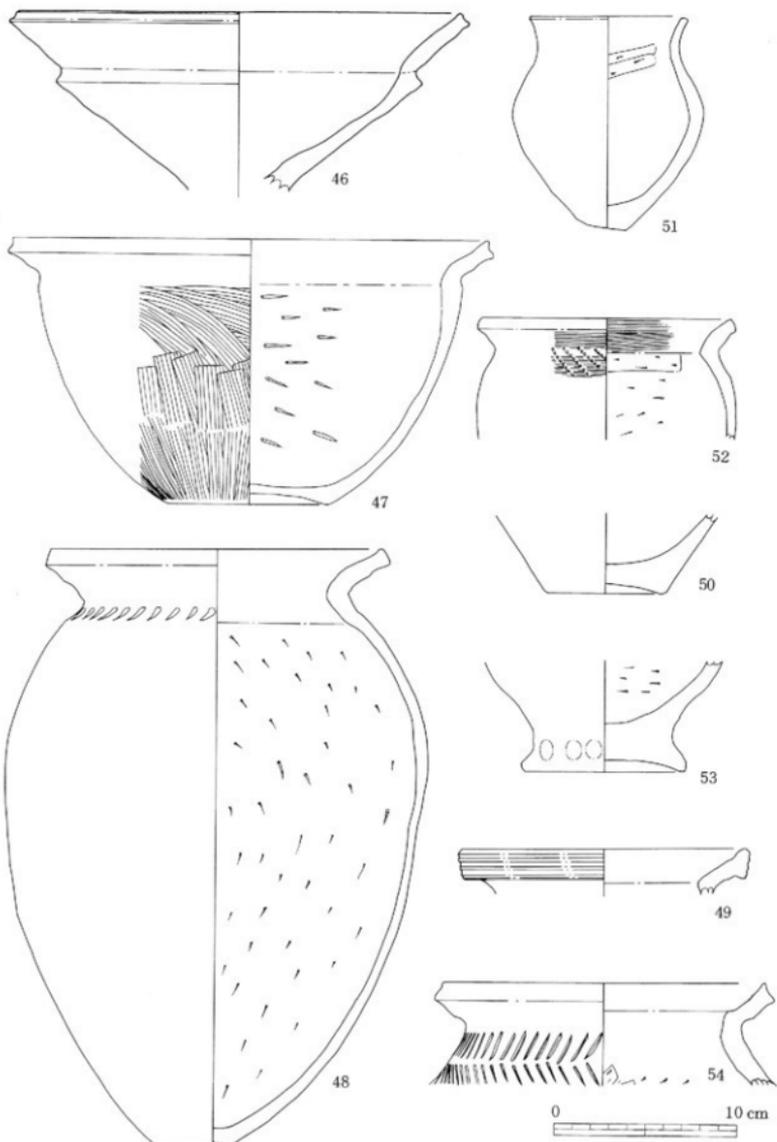
44



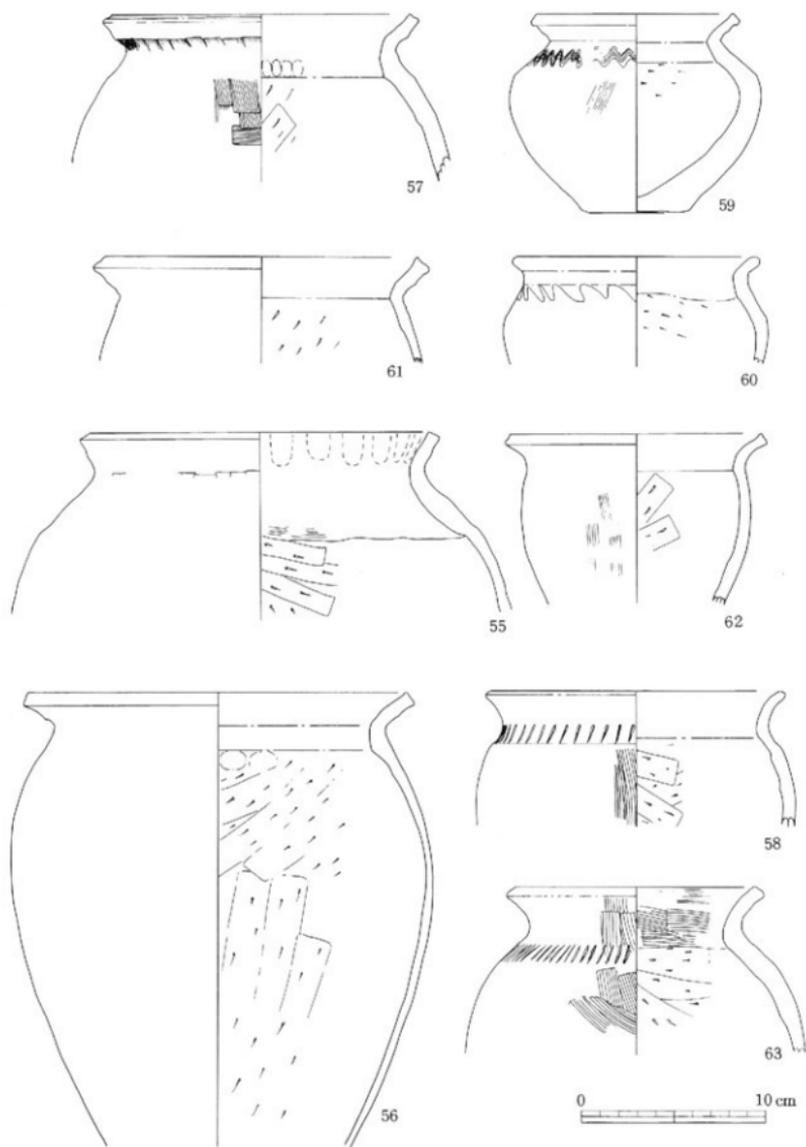
45



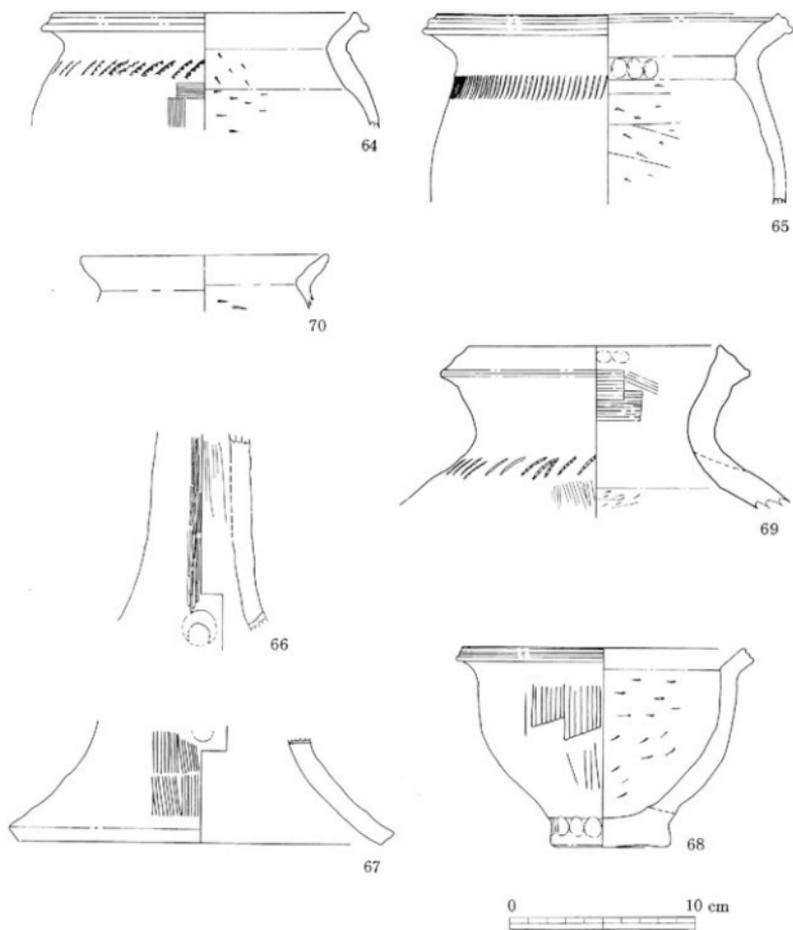
第47图 下神5号遗址出土土器实测图(5)



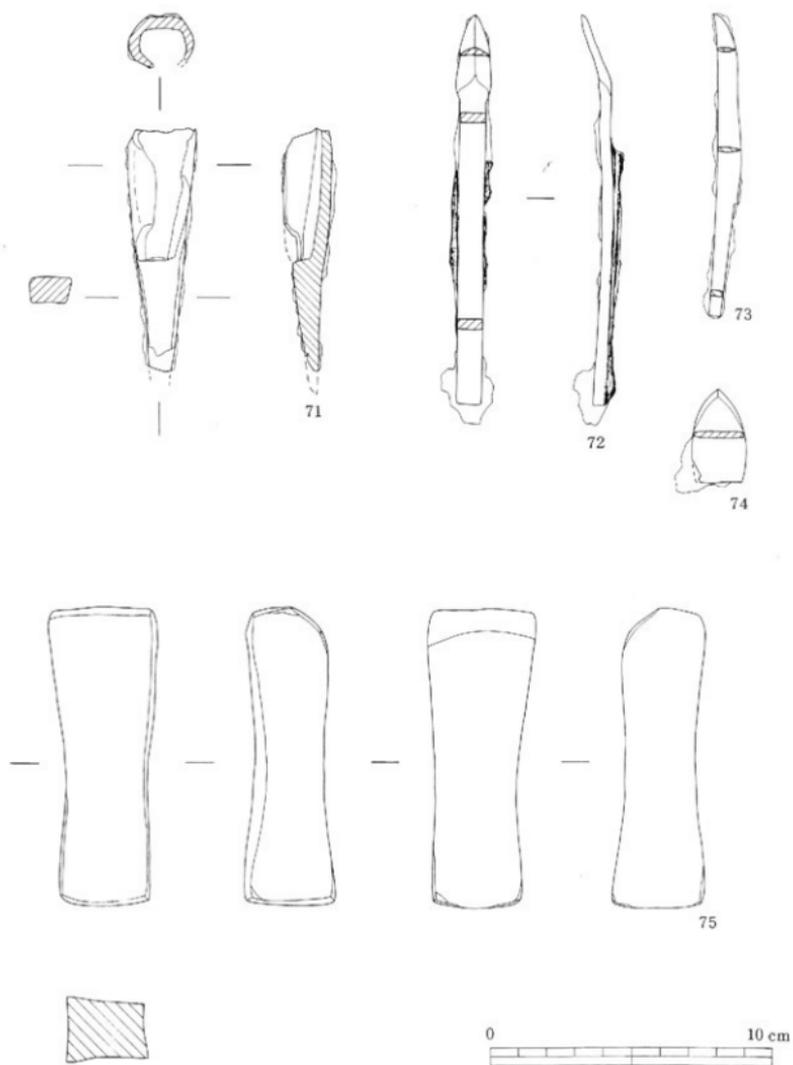
第48图 下冲5号遺跡出土土器実測図(6)



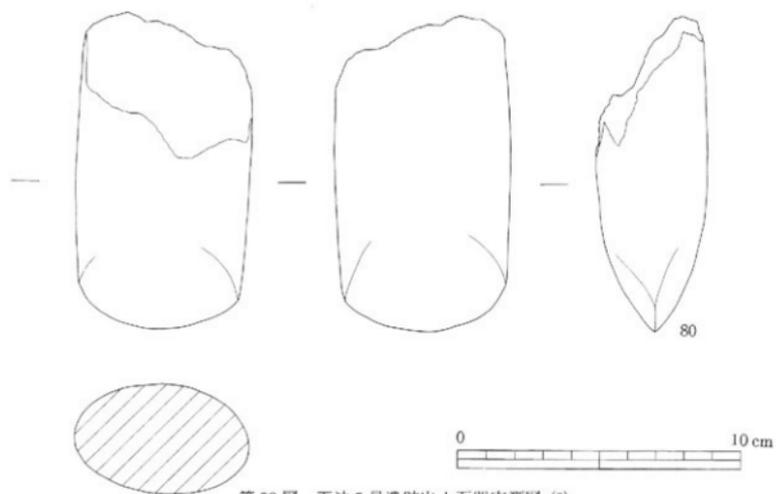
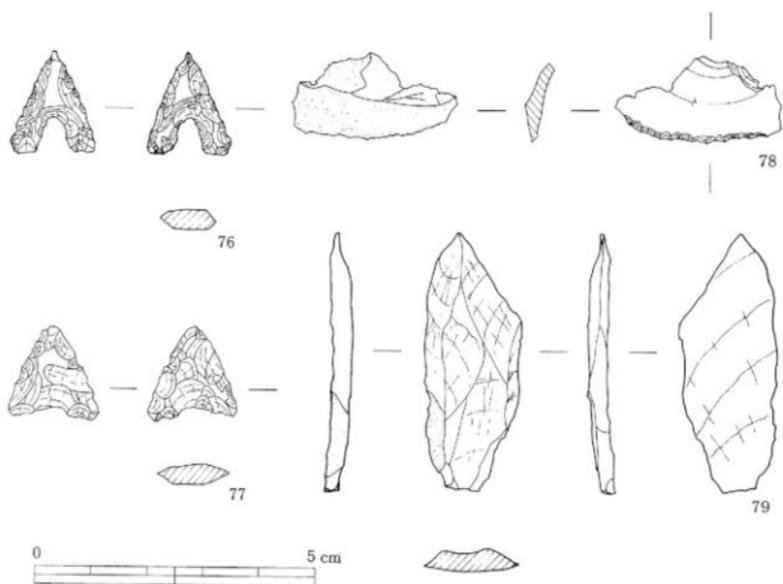
第49图 下冲5号遗址出土土器实测图(7)



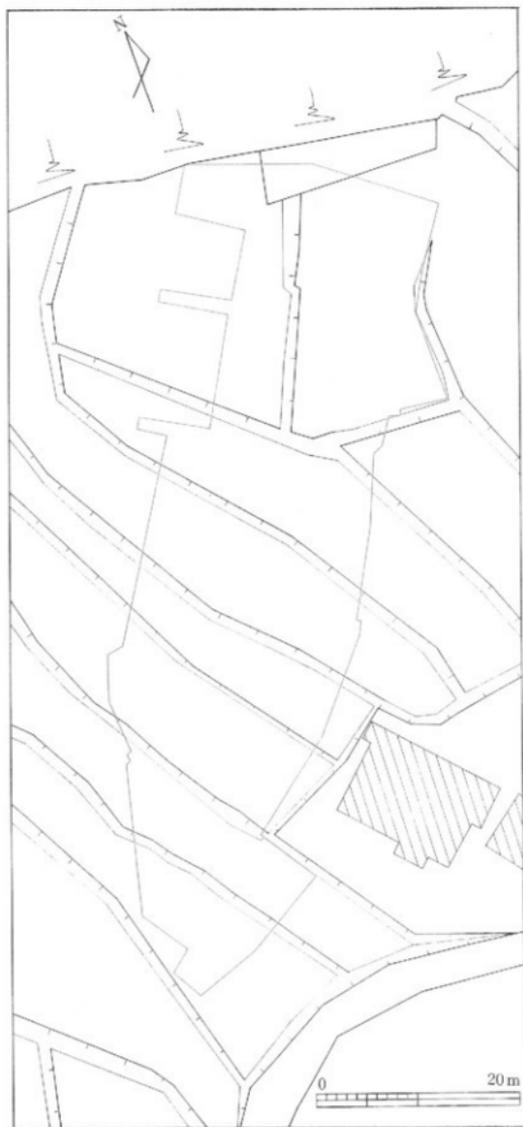
第 50 图 下冲 5 号遗址出土土器实测图 (8)



第 51 图 下冲 5 号遗址出土铁器及石器实测图 (1)



第 52 图 下冲 5 号遗址出土石器实测图 (2)



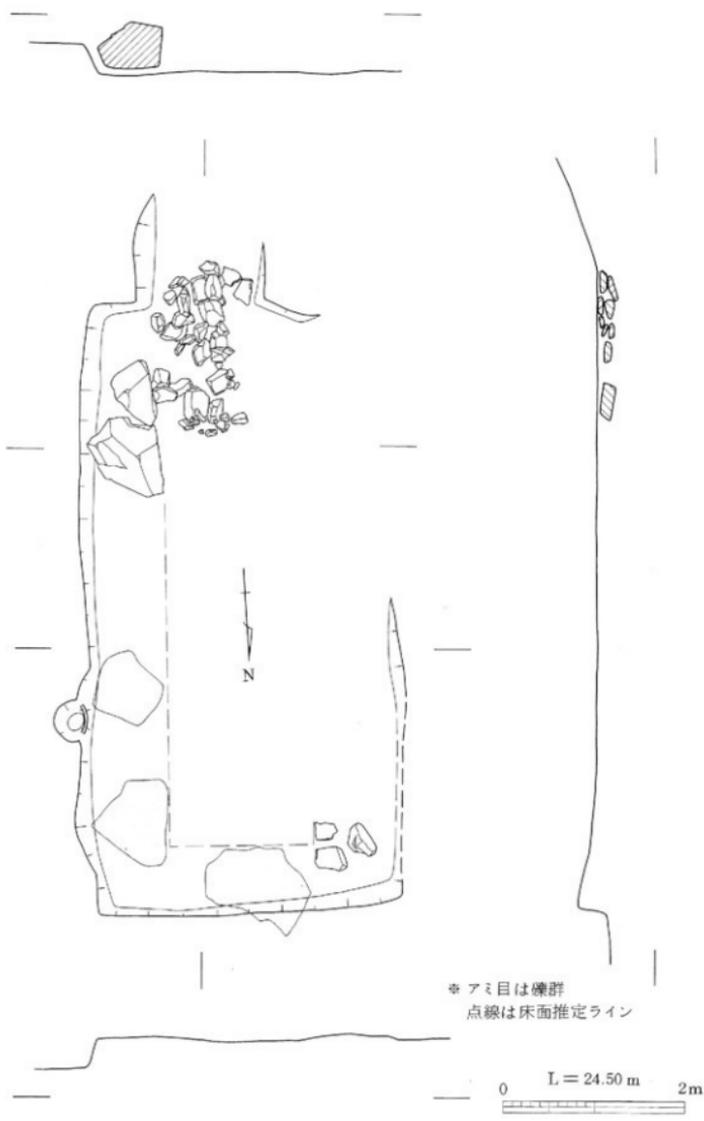
第53圖 和田1号遺跡周辺地形図



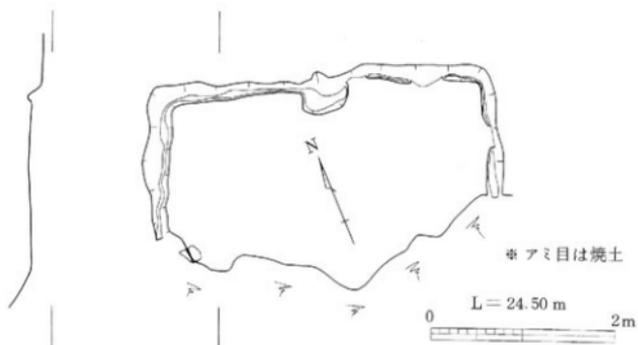
第 54 図 和田1号遺跡遺構配置図及び発掘後地形測量図



第55図 和田古墳周辺遺構配置図及び発掘後地形断面図



第56図 和田古墳主体部実測図



第 57 図 和田 1 号遺跡第 1 号住居跡



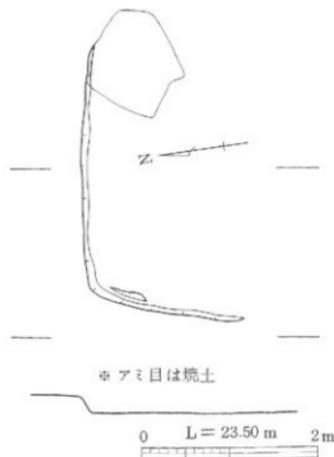
第 58 図 和田 1 号遺跡第 2 号住居跡



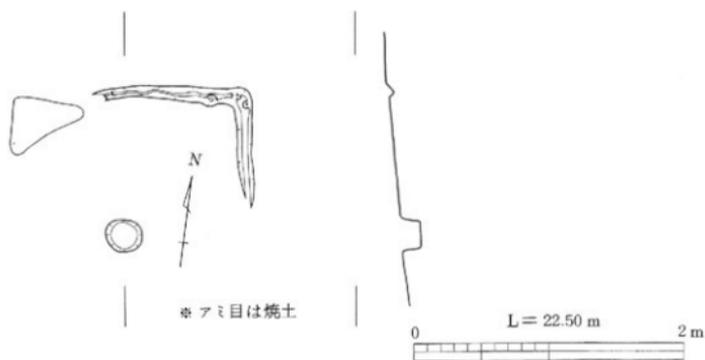
第59図 和田1号遺跡第3号住居跡実測図



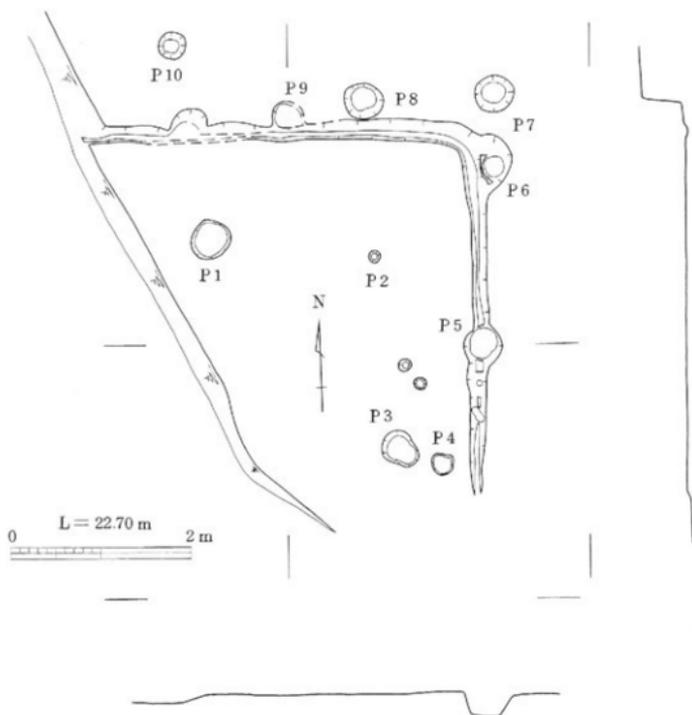
第60図 和田1号遺跡第4号住居跡実測図



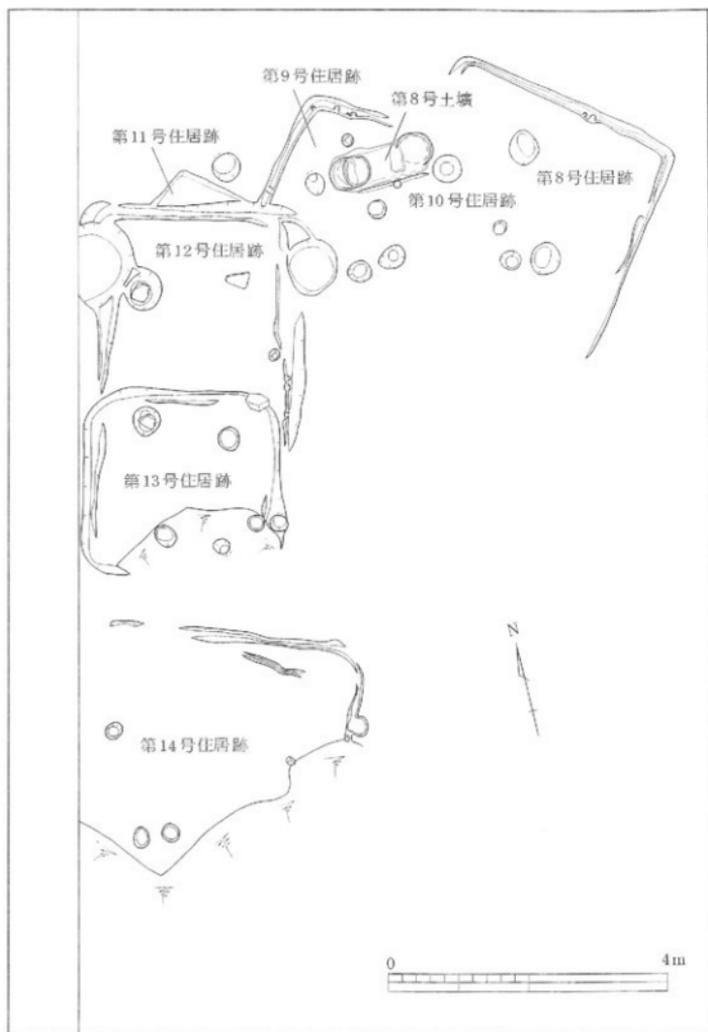
第61図 和田1号遺跡第5号住居跡実測図



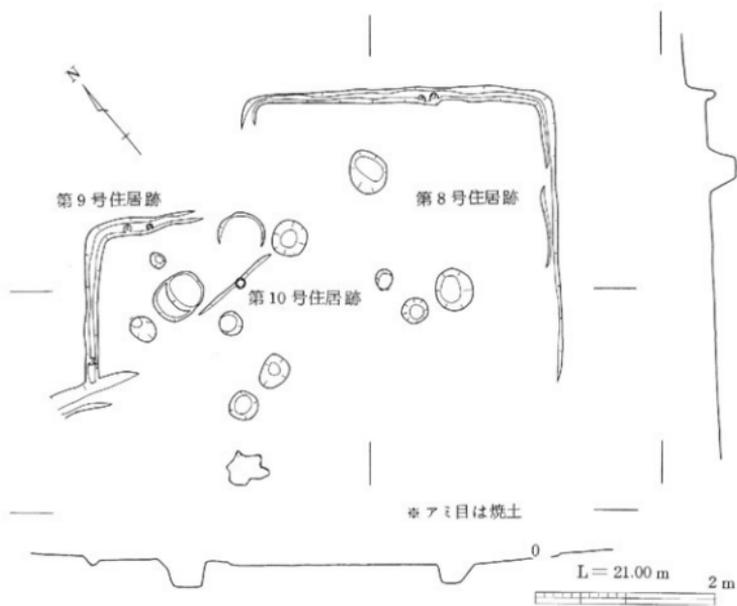
第62図 和田1号遺跡第6号住居跡実測図



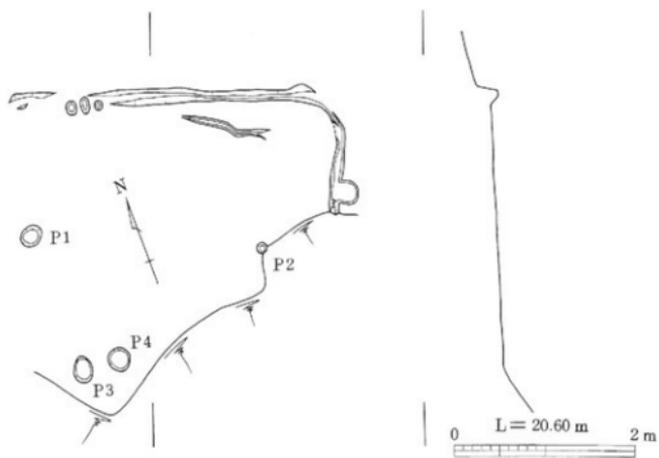
第63図 和田1号遺跡第7号住居跡実測図



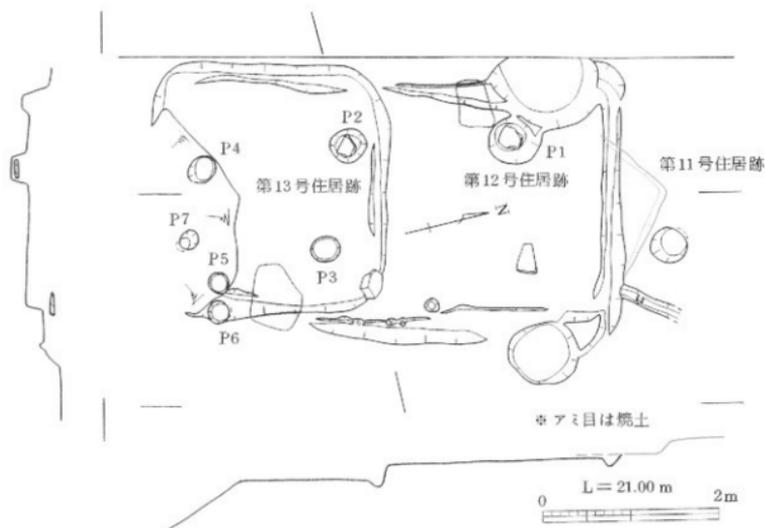
第 64 图 和田 1 号遺跡南側住居跡群遺構配置図



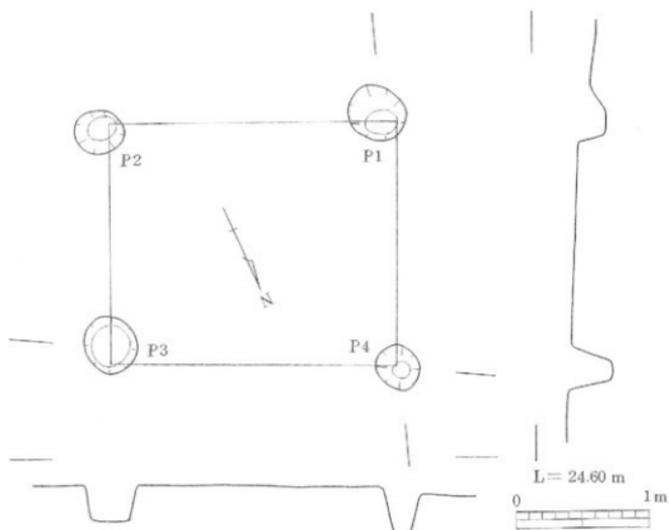
第65図 和田1号遺跡第8・9・10住居跡



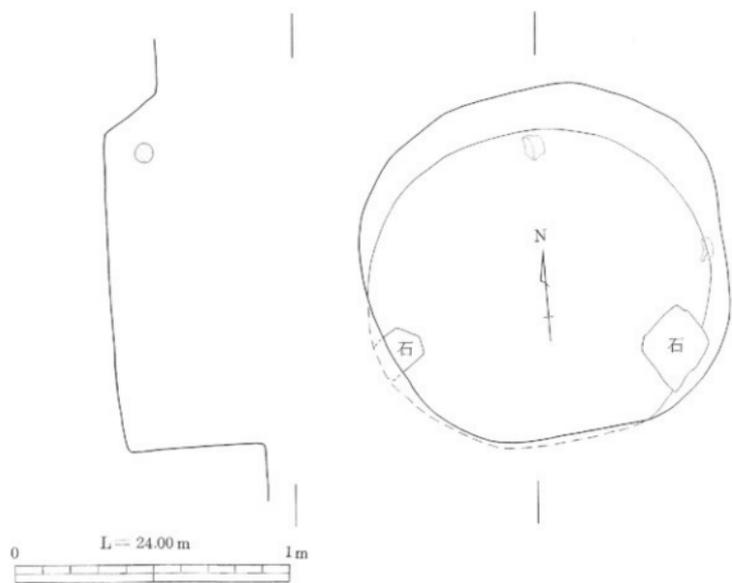
第66図 和田1号遺跡第14号住居跡



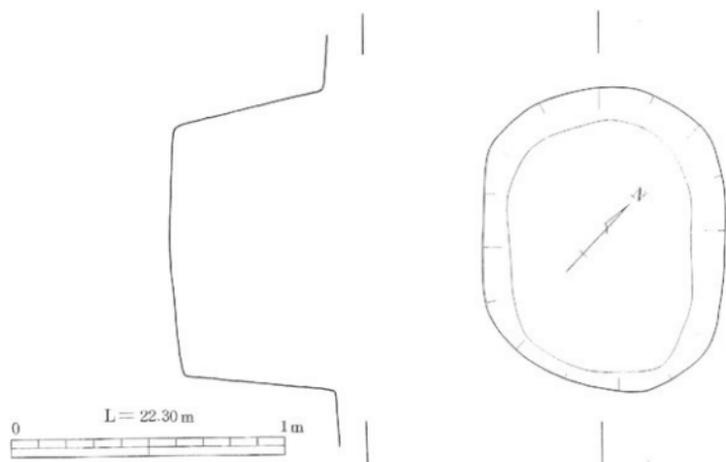
第 67 図 和田 1 号遺跡第 11・12・13 号住居跡



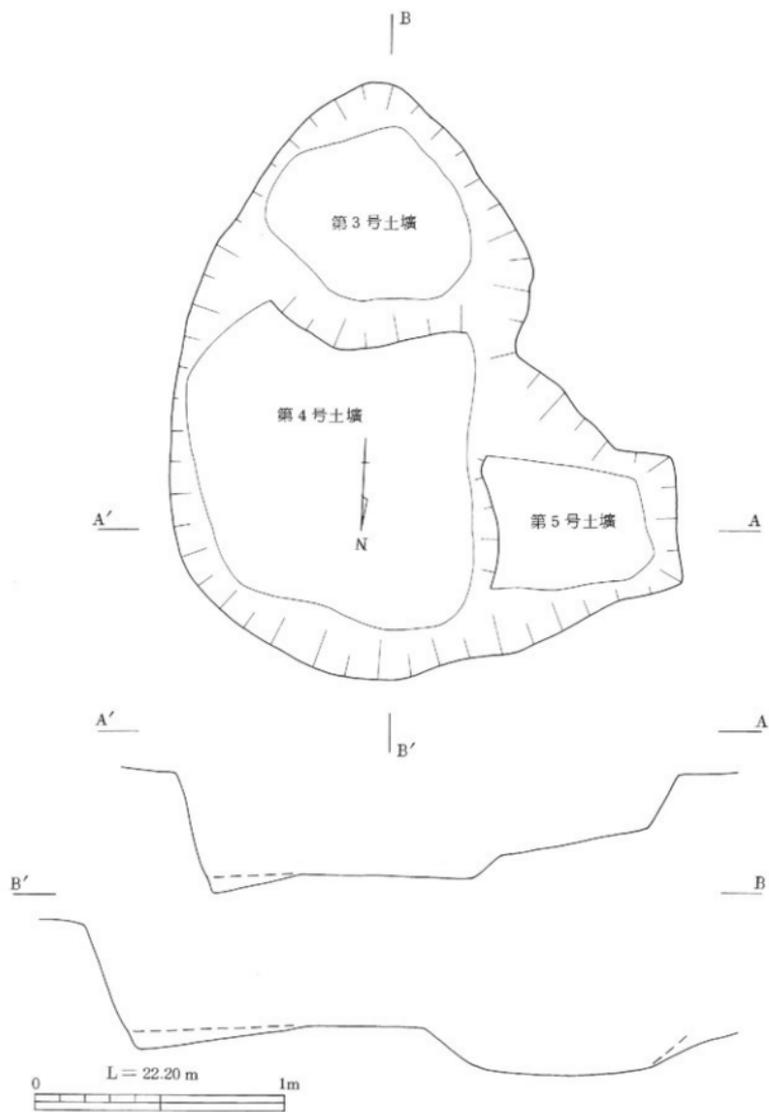
第 68 図 和田 1 号遺跡第 1 号挿立柱建物跡



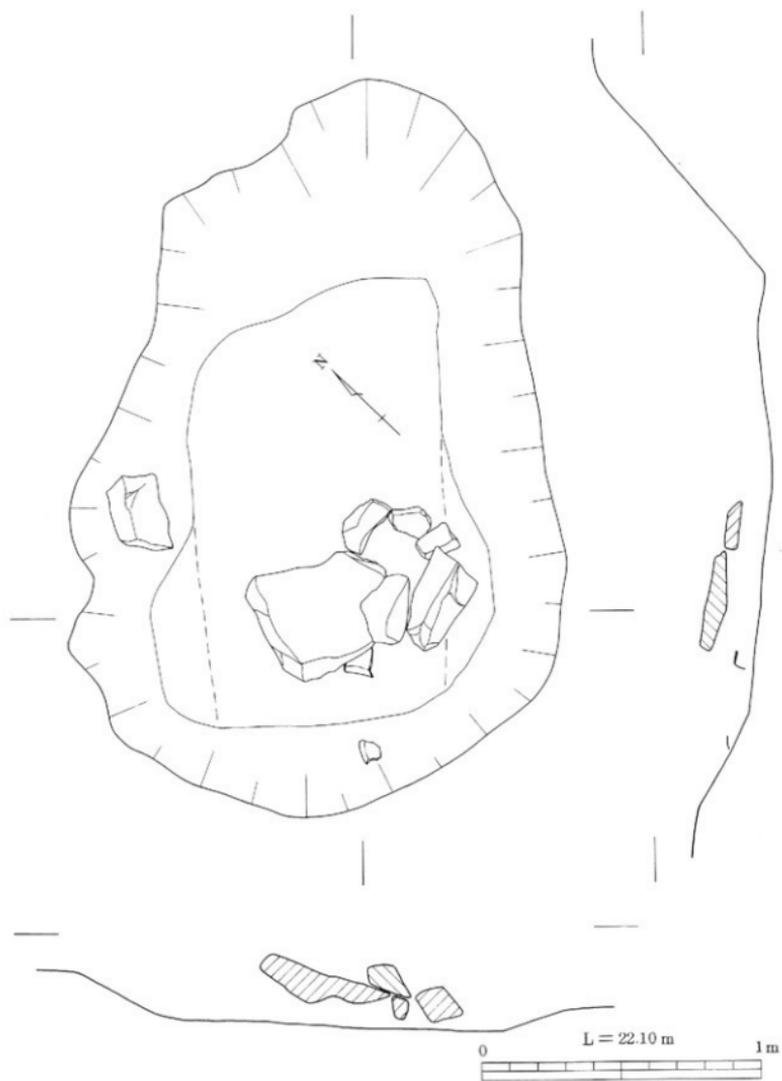
第69图 和田1号遺跡第1号土城



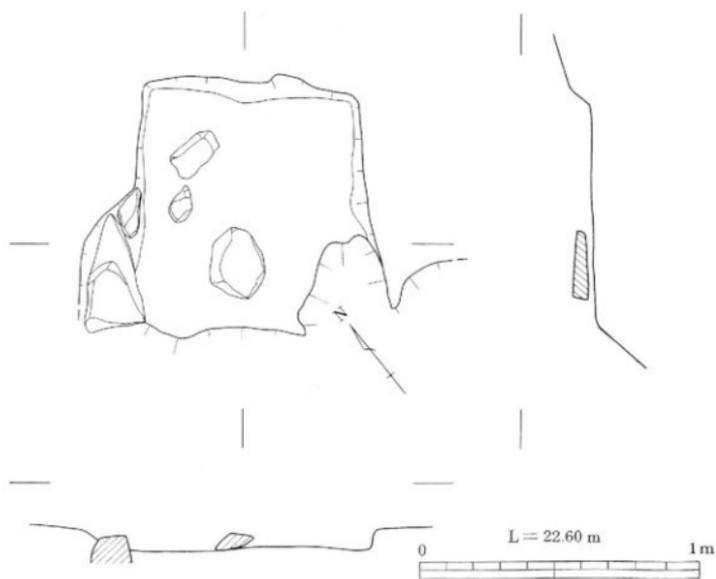
第70图 和田1号遺跡第2号土城



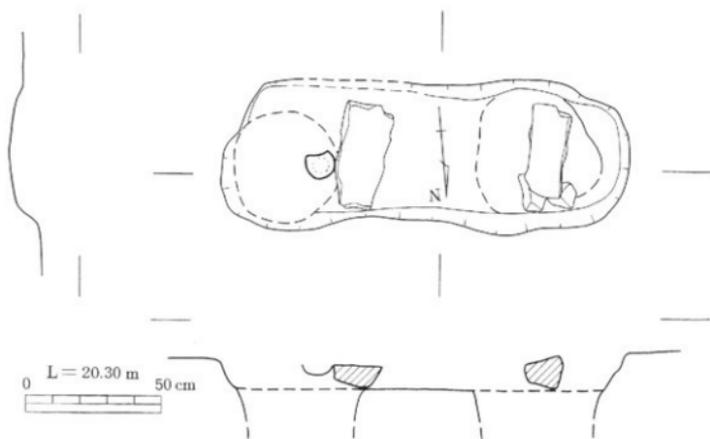
第71図 和田1号遺跡第3・4・5号土壇



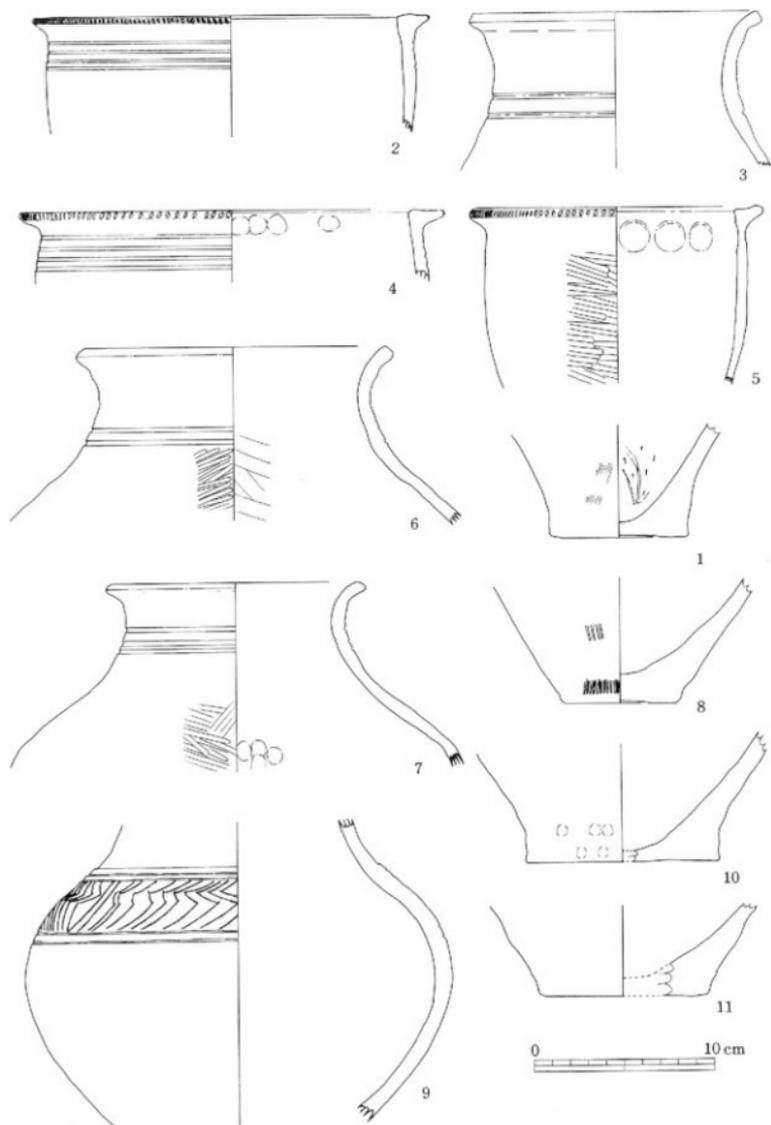
第72図 和田1号遺跡第6号土坑



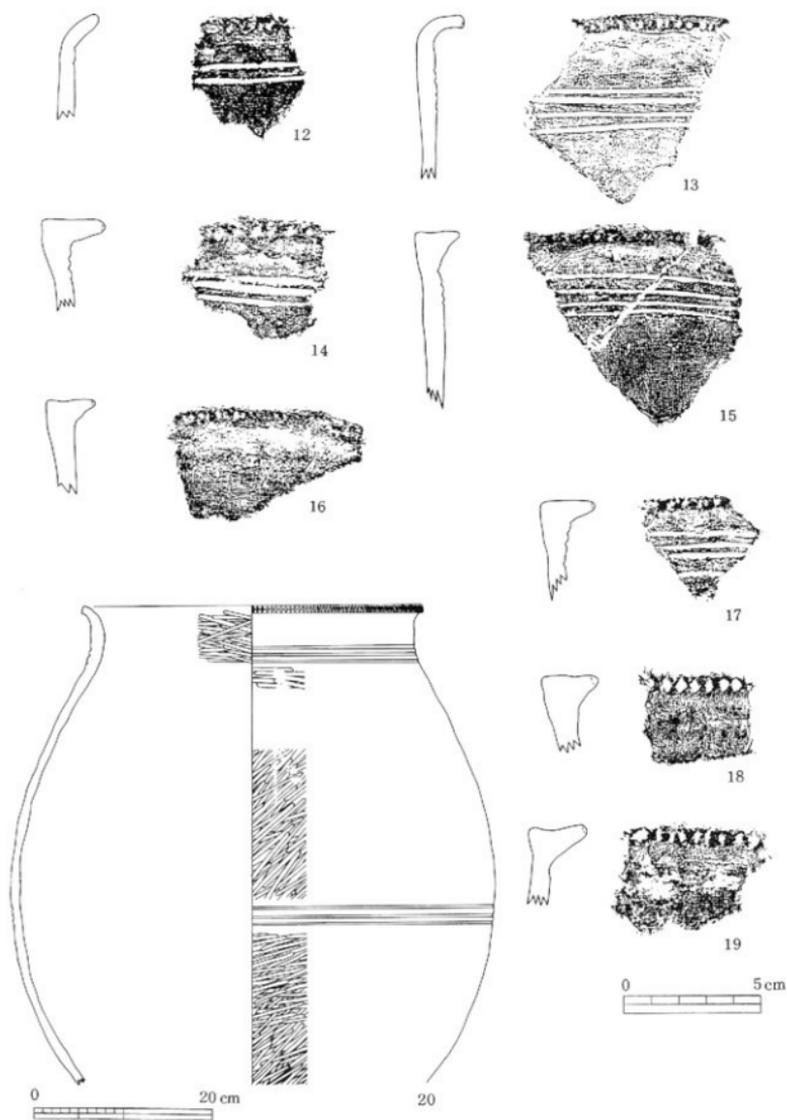
第73図 和田1号遺跡第7号土坑



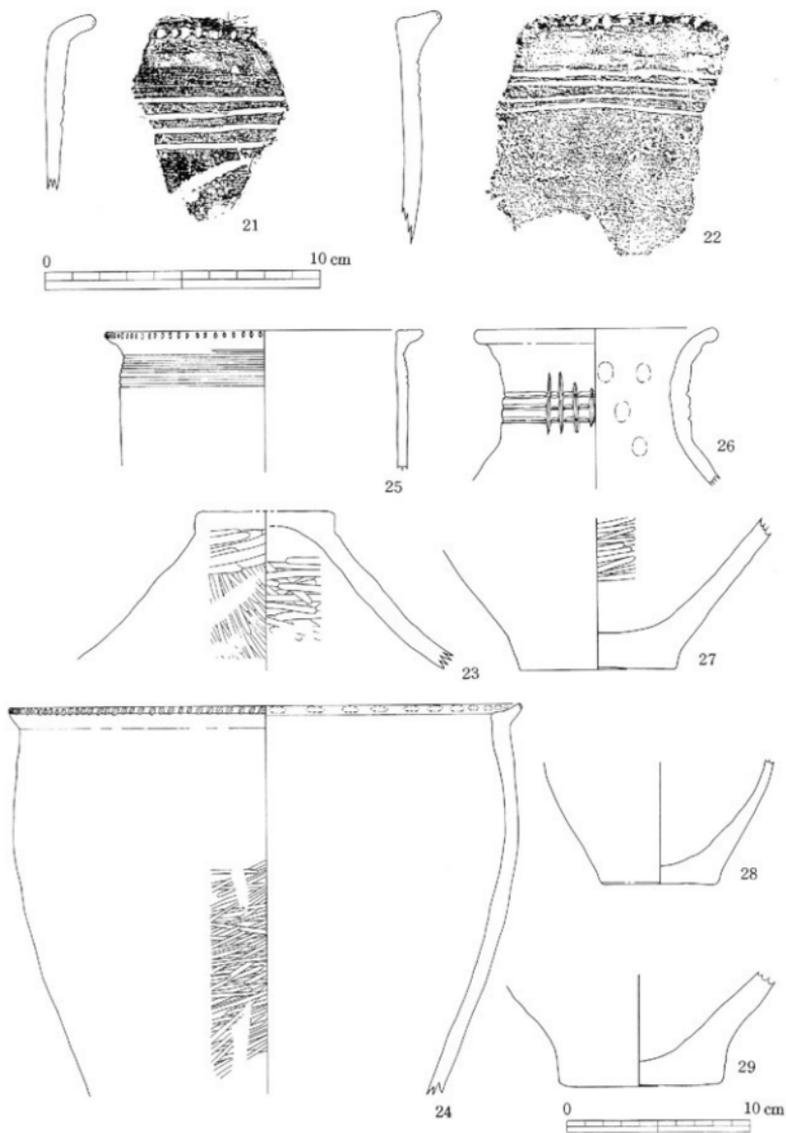
第74図 和田1号遺跡第8号土坑



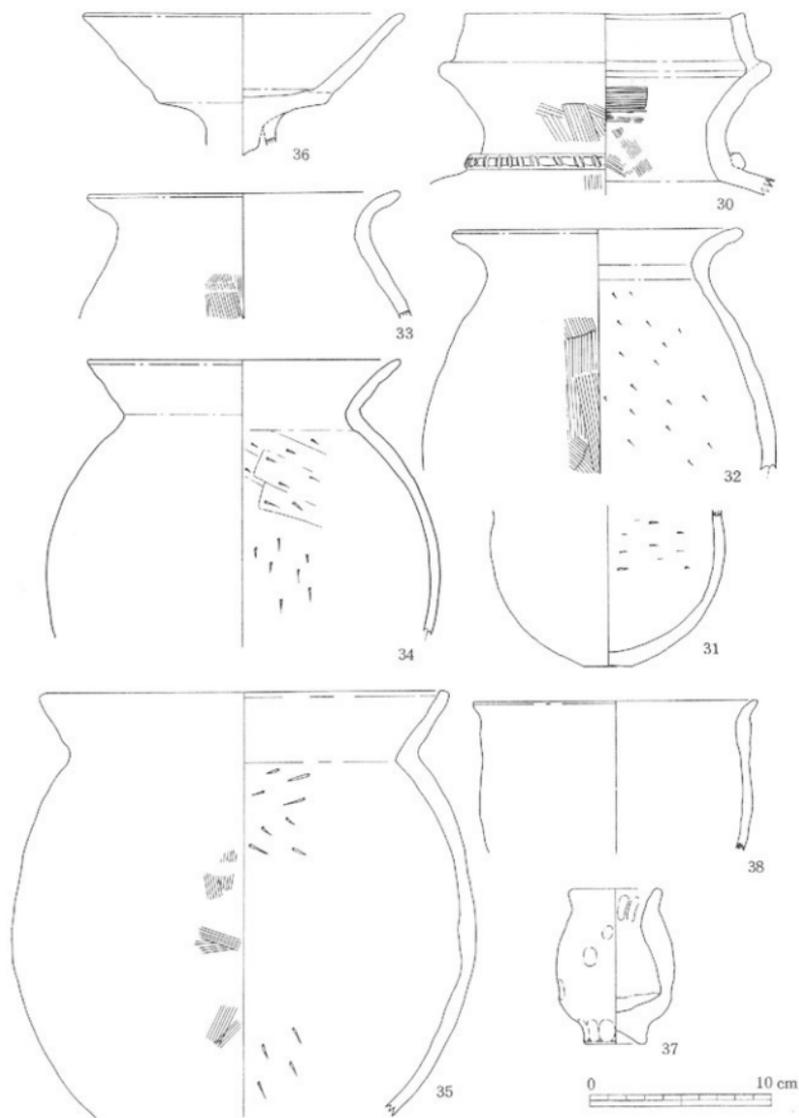
第75图 和田1号遺跡出土土器実測図(1)



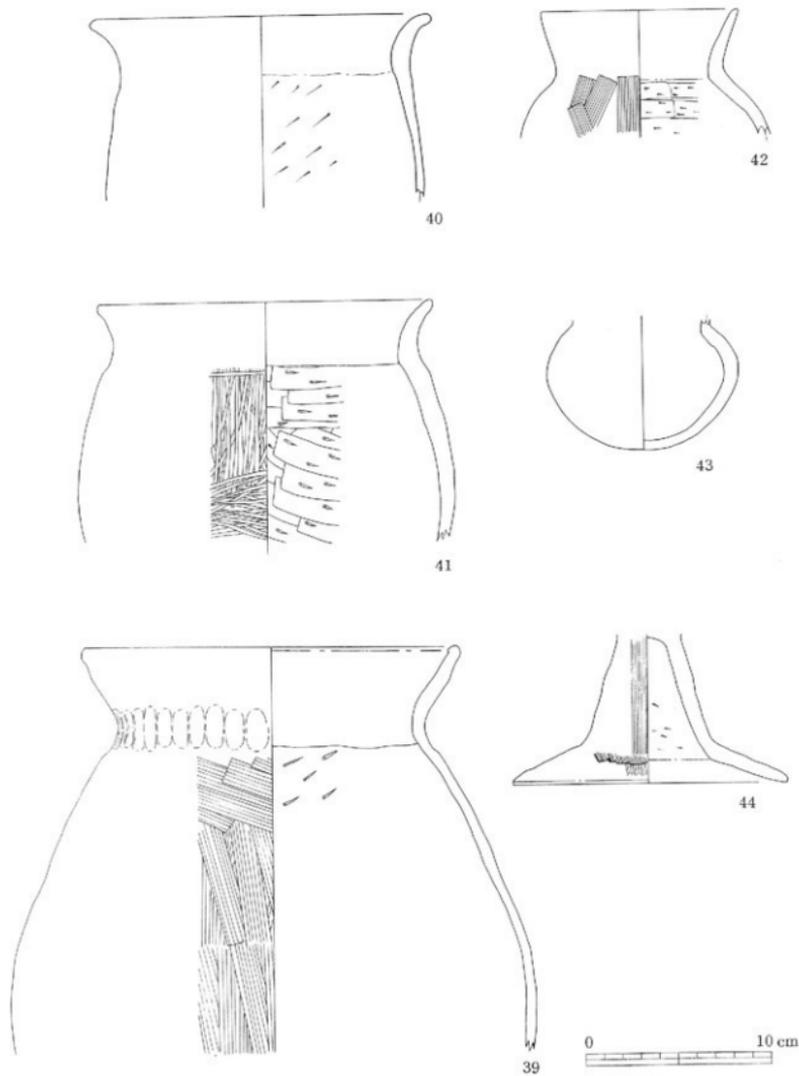
第76图 和田1号遺跡出土土器実測図(2)



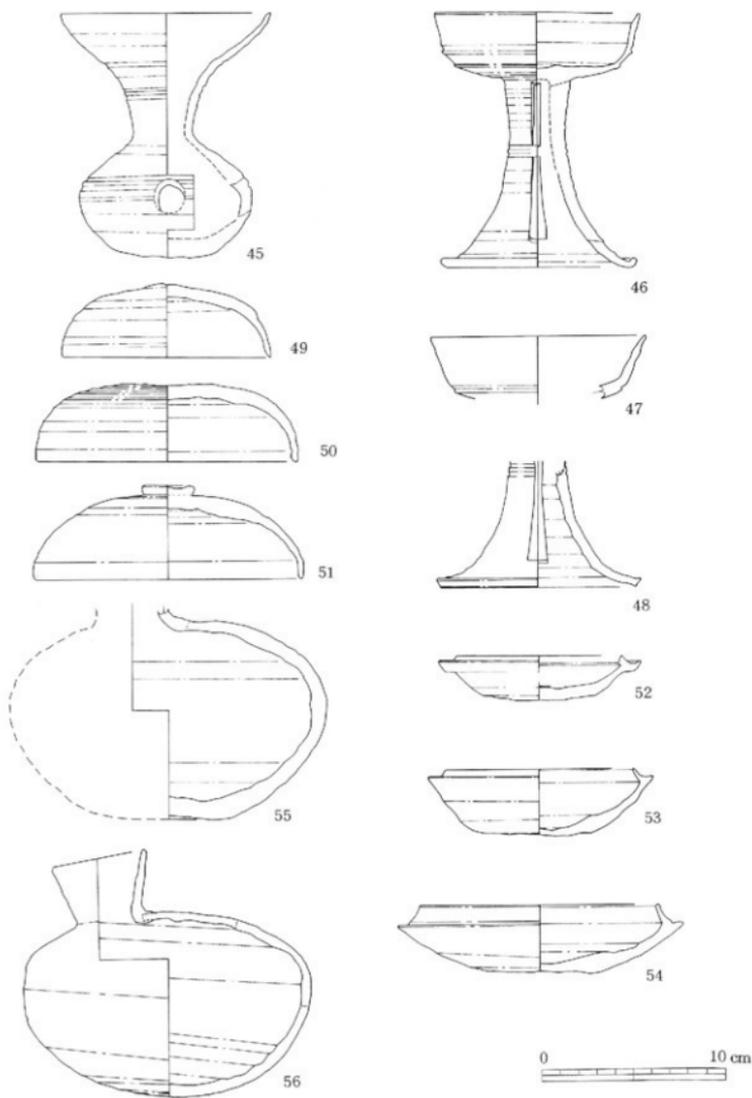
第77図 和田1号遺跡出土土器実測図(3)



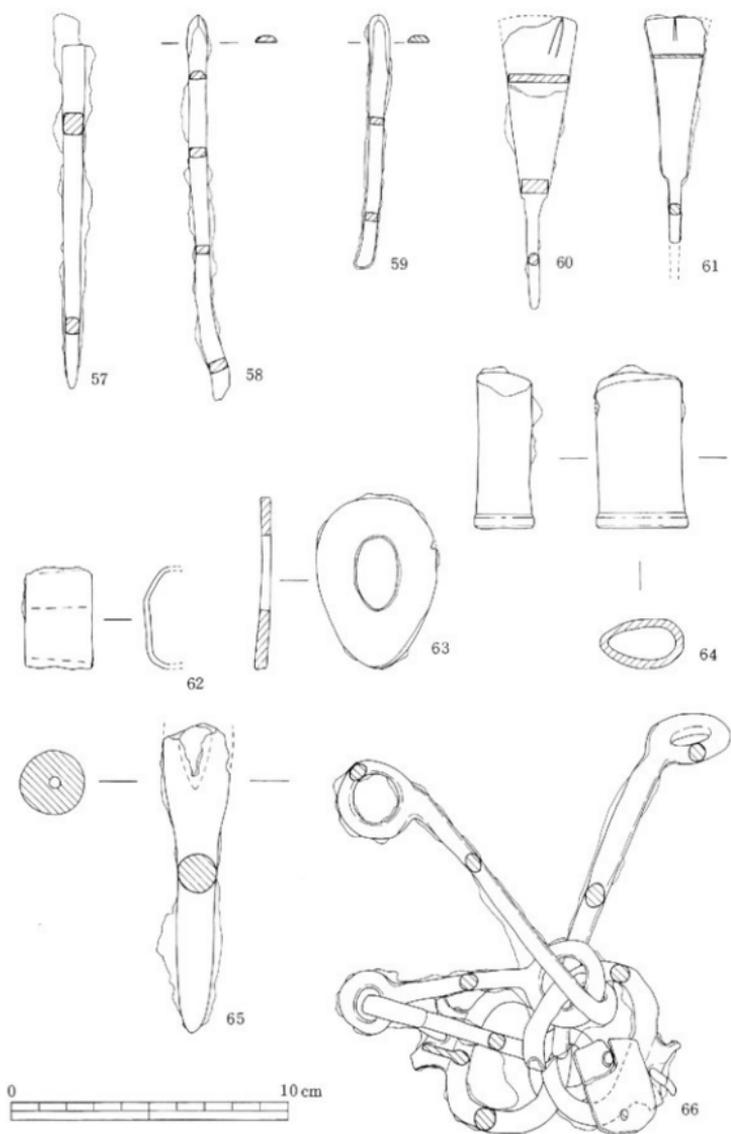
第78図 和田1号遺跡出土土器実測図(4)



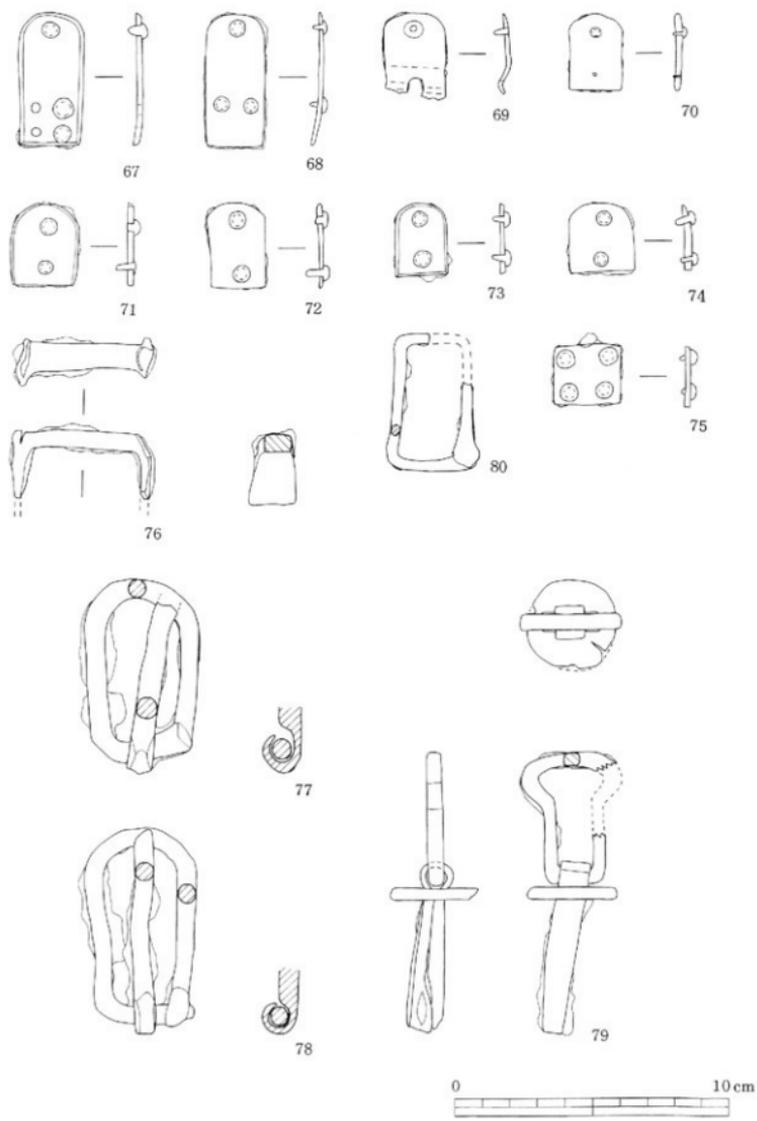
第79図和田1号遺跡出土土器実測図(5)



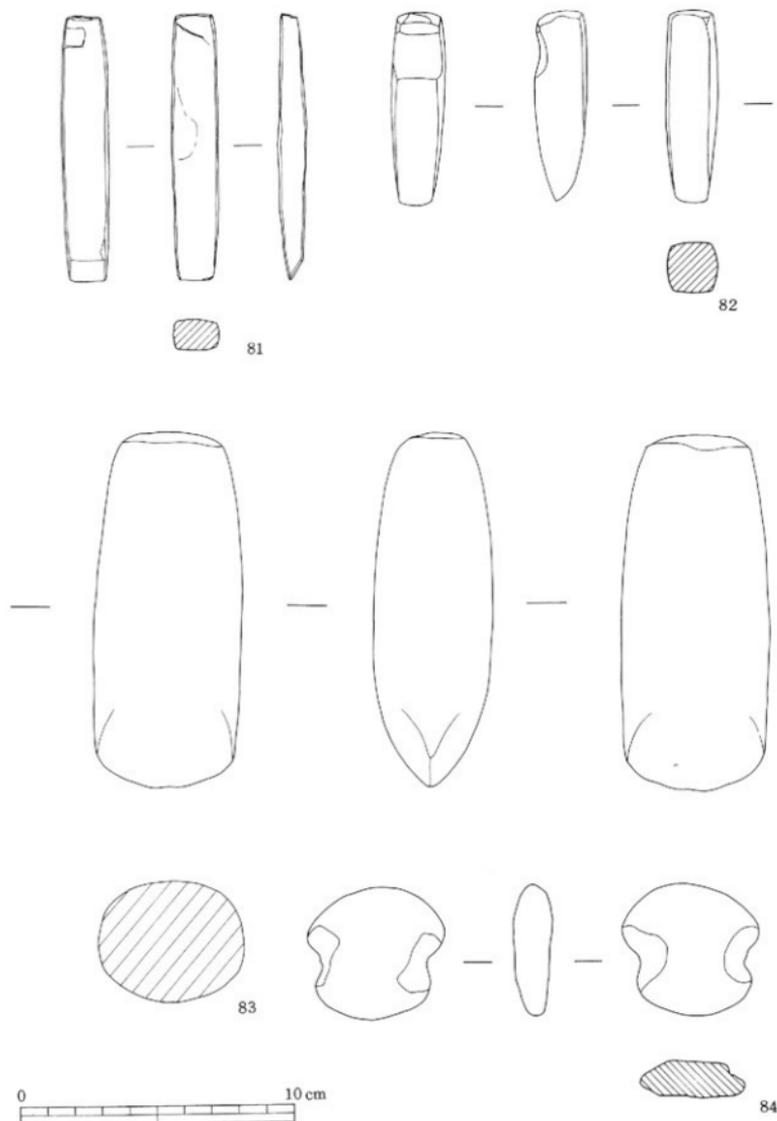
第80图 和田1号遺跡出土土器実測図(6)



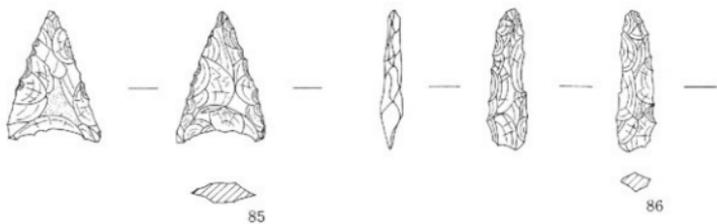
第 81 图 和田 1 号遺跡出土鉄器実測図 (1)



第82图 和田1号遺跡出土鉄器実測図(2)

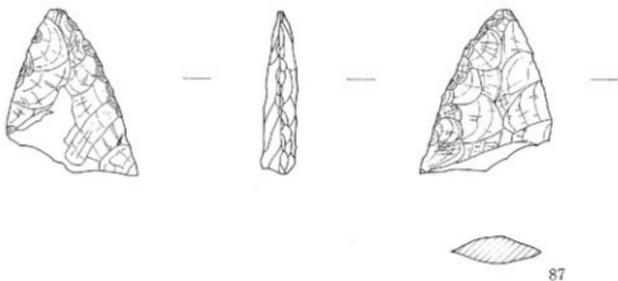


第83图 和田1号遺跡出土石器実測図(1)

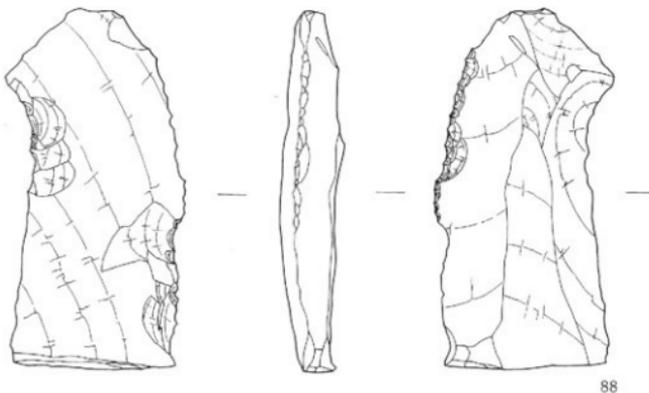


85

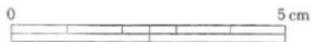
86



87



88



第84图 和田1号遺跡出土石器实测图(2)

圖

版



1. 下沖3号遺跡 2. 下沖5号遺跡 3. 和田1号遺跡

遺跡群全景



a. 下沖3号遺跡遠景(北西より)



b. 下沖3号遺跡近景(南西より)



a. 下沖3号遺跡第1号住居跡



b. 下沖3号遺跡第2・3号住居跡



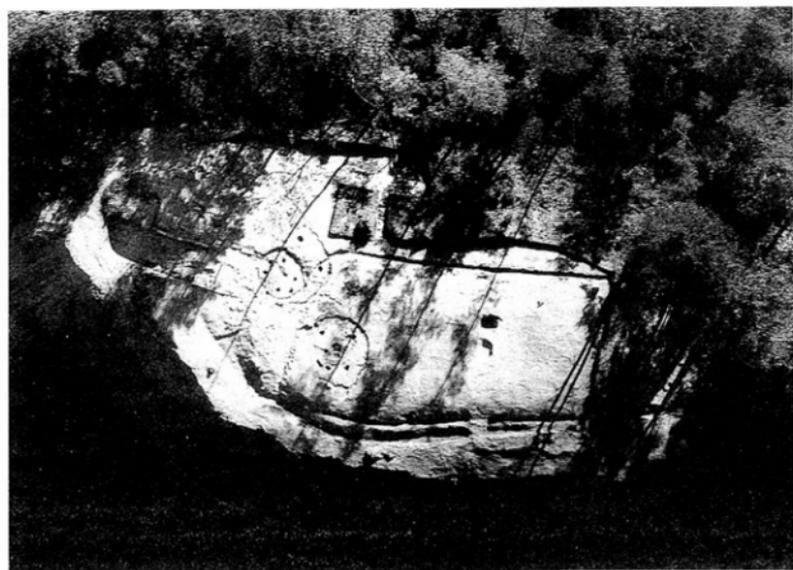
a. 下沖3号遺跡第3号住居跡掘り込み内土器出土状態



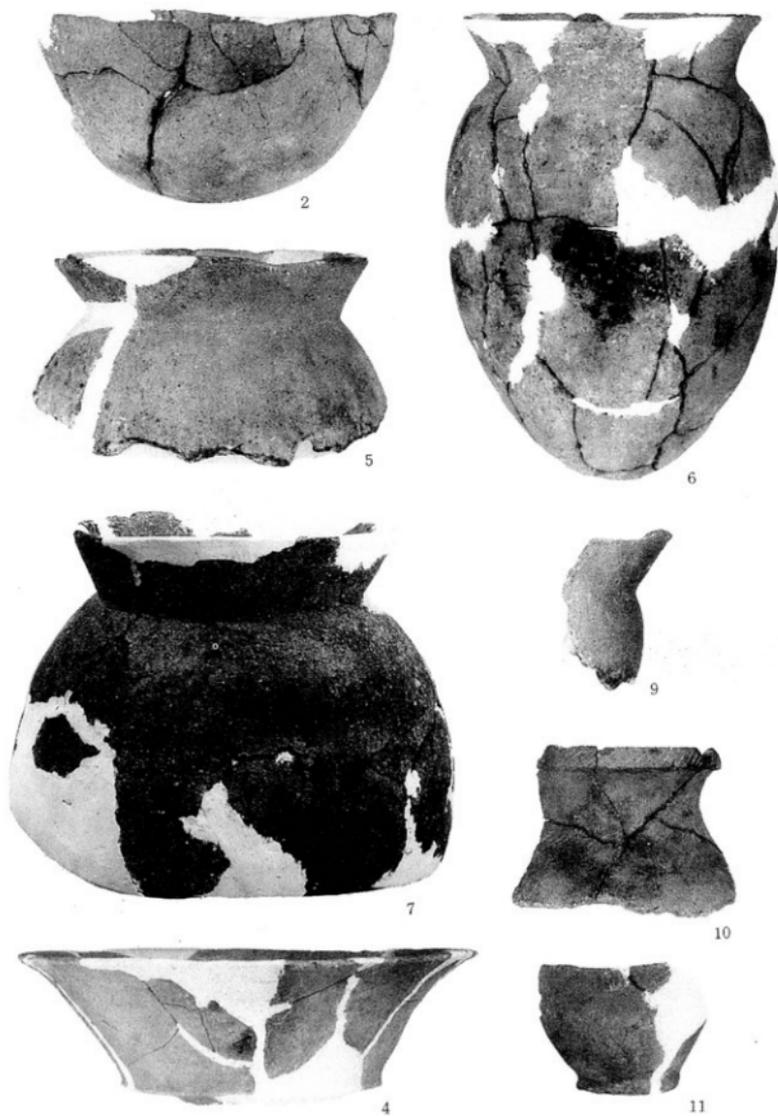
b. 下沖3号遺跡第4号住居跡



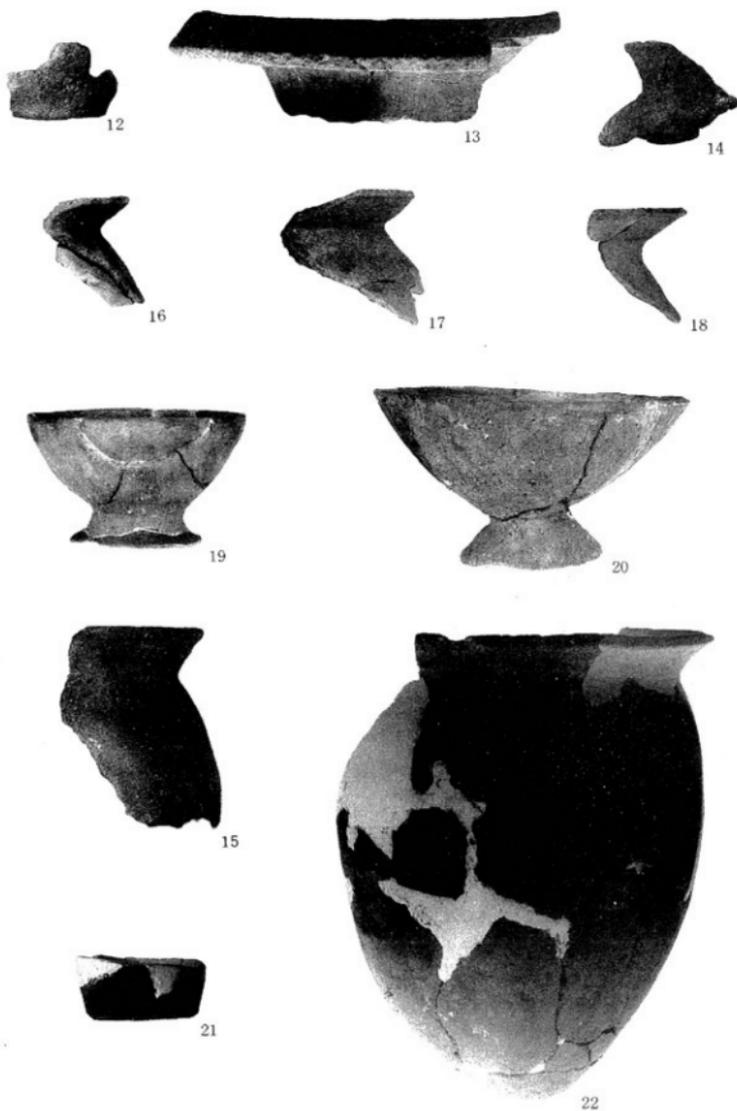
a. 下沖3号遺跡テラス状遺構上器出土状態(南西より)



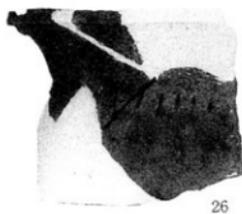
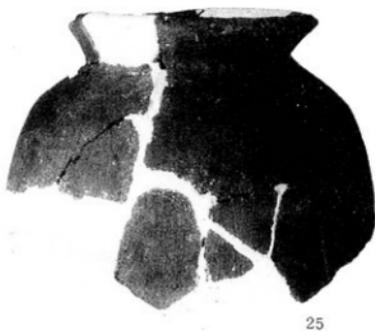
b. 下沖3号遺跡全景(航空写真)



下冲3号遗址出土土器(1)



下冲3号遺跡出土土器(2)





29



30



31



32



33



34



35



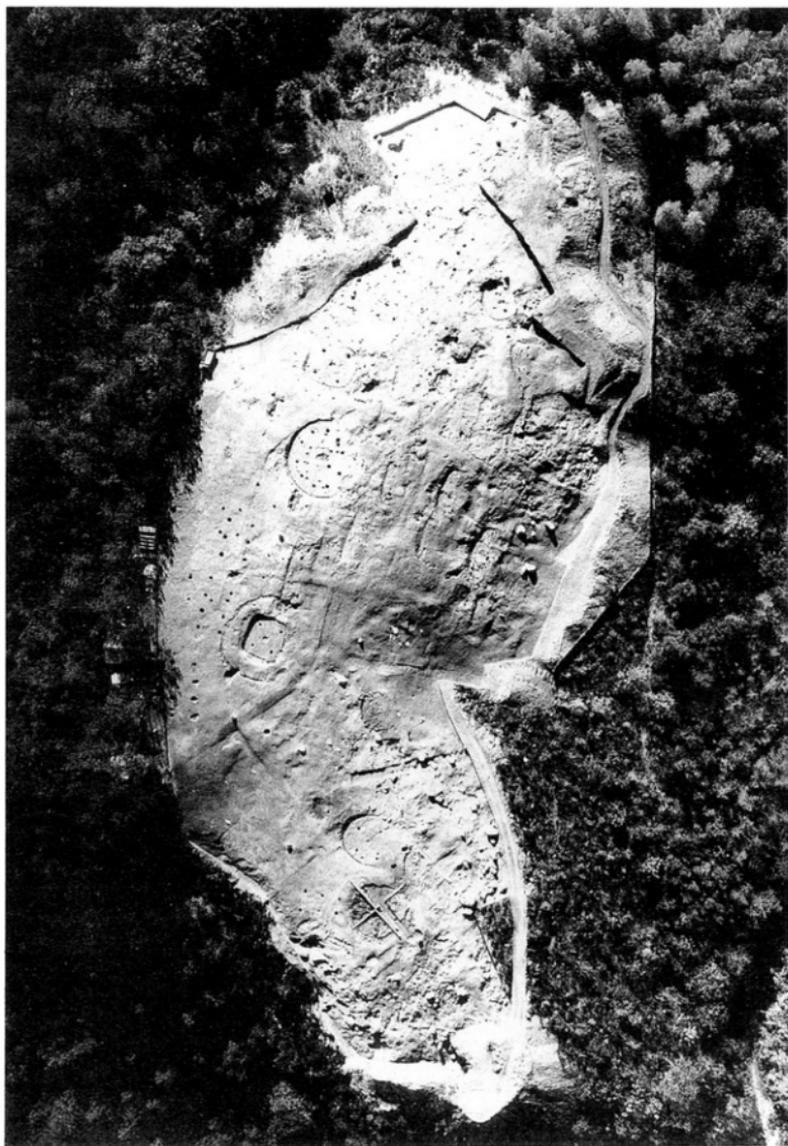
37



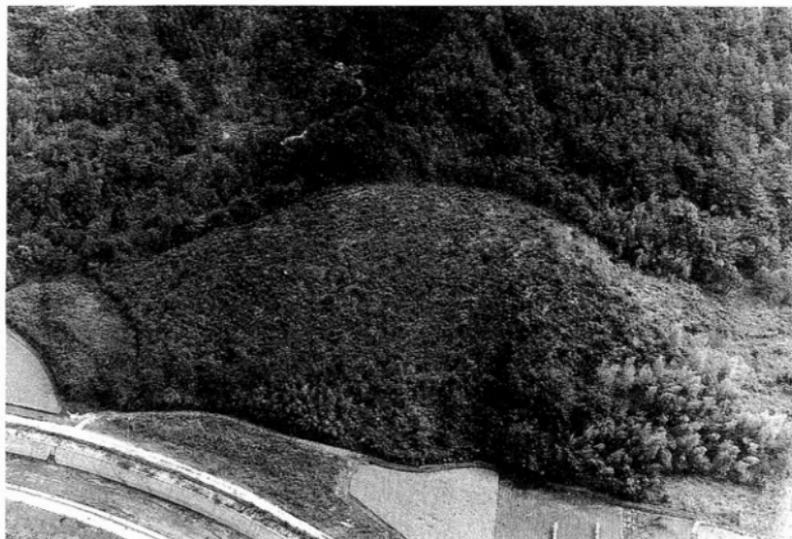
36



38



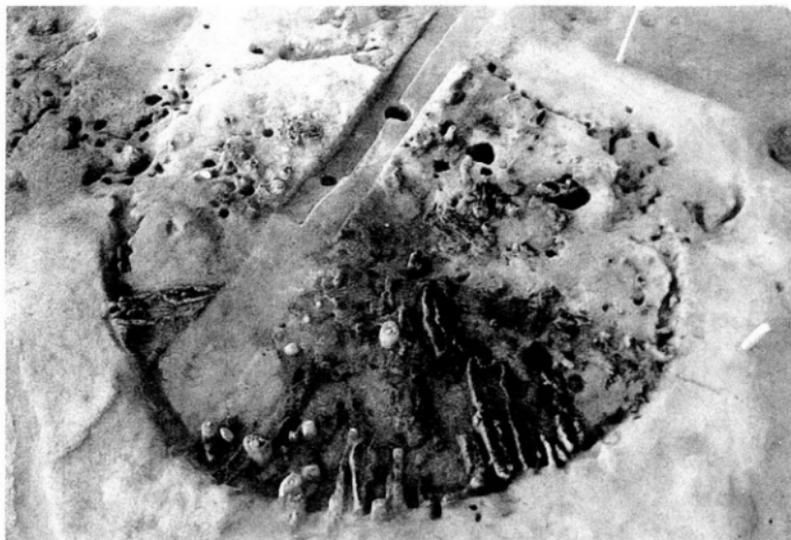
下沖5号遺跡全景(調査後)



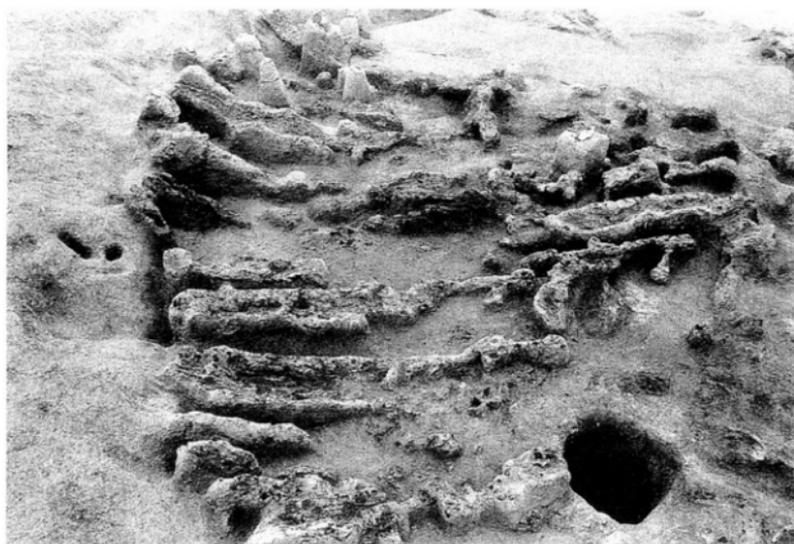
下沖5号遺跡全景(調査前)



下沖5号遺跡北側住居跡群



下冲5号遗址第1号住居跡



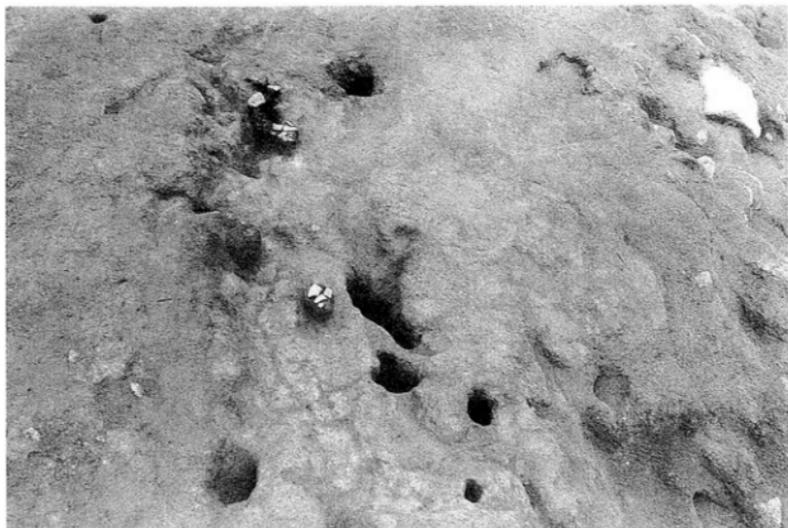
下冲5号遗址第1号住居跡灰化物出土状態



下中 5 号遗址第 1 号土房跡（完損後）



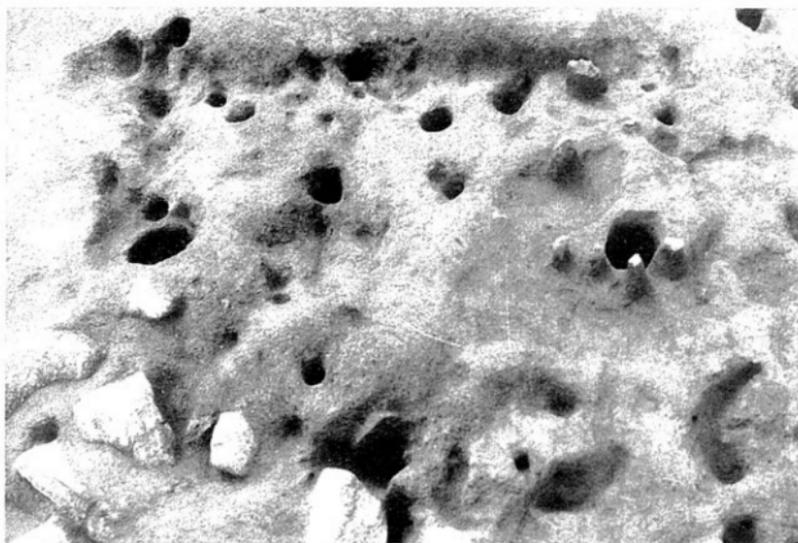
下中 5 号遗址第 2 号土房跡



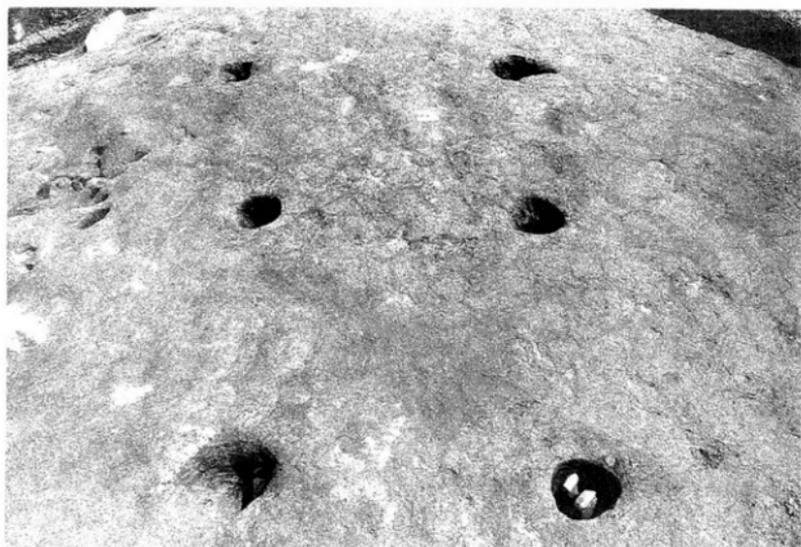
下冲5号遗址第3号住居跡



下冲5号遗址第4号住居跡



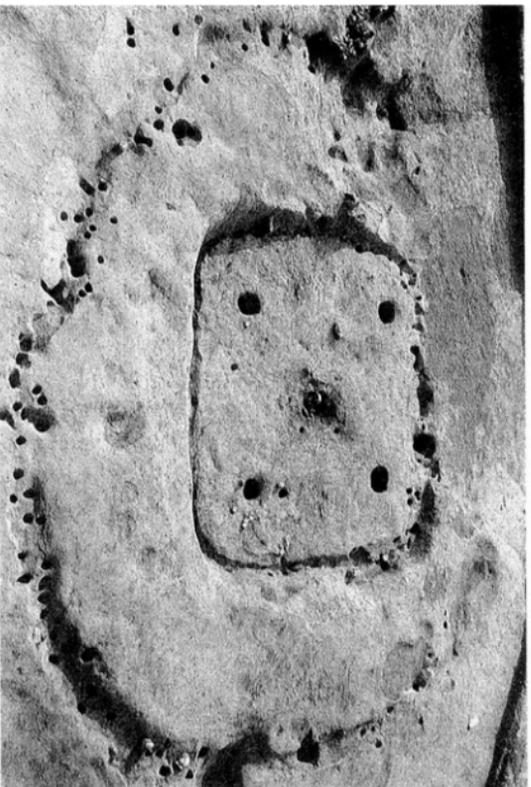
下冲5号遗址第5号住居跡



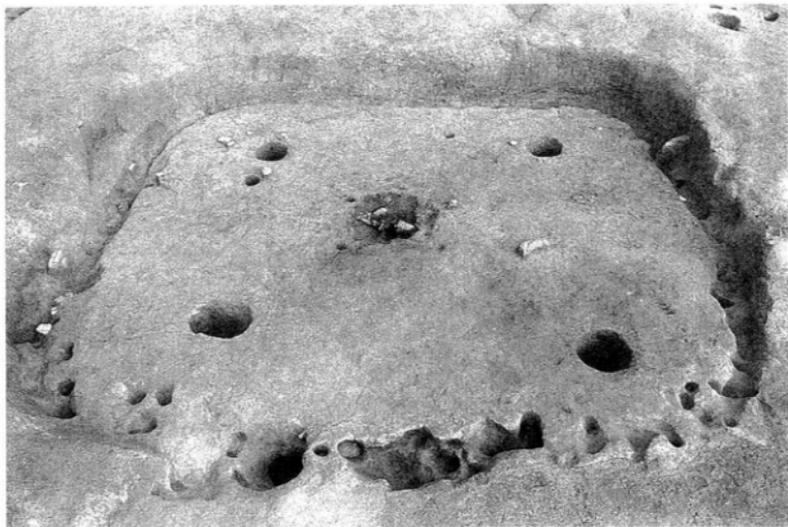
下冲5号遗址第1号掘立柱建物跡



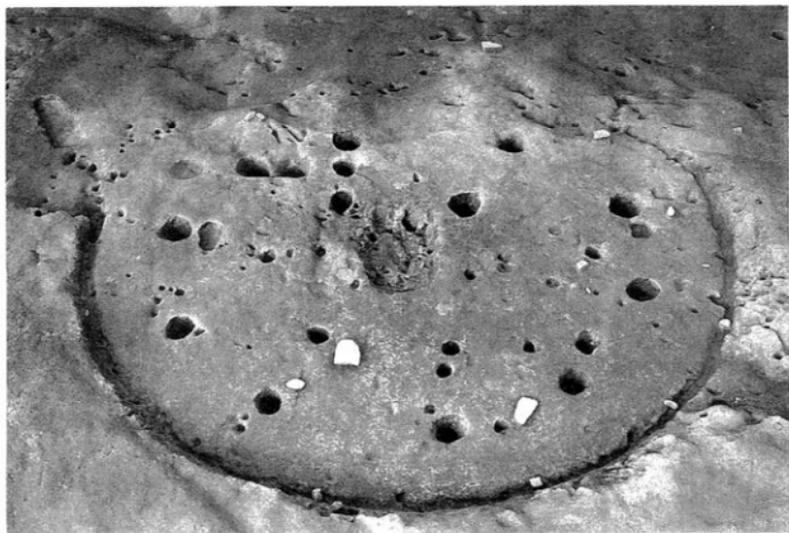
下州 5 号遺跡南側土器跡群



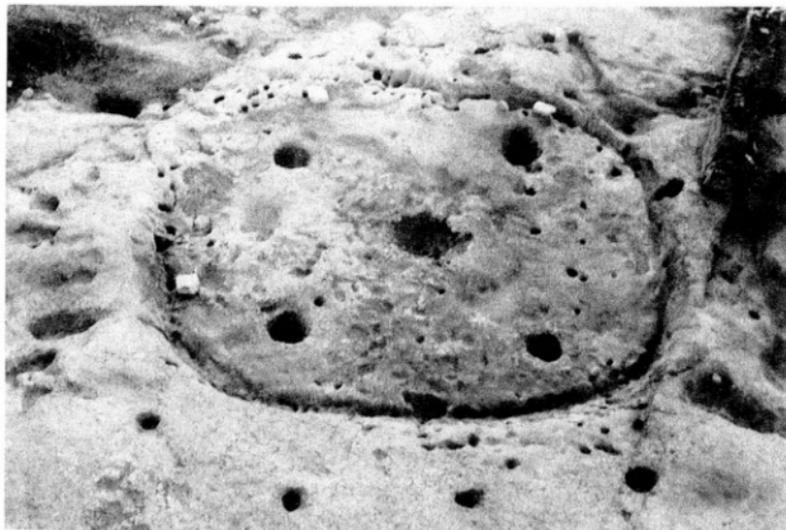
下州 5 号遺跡第 6 号住居跡 (遺構)



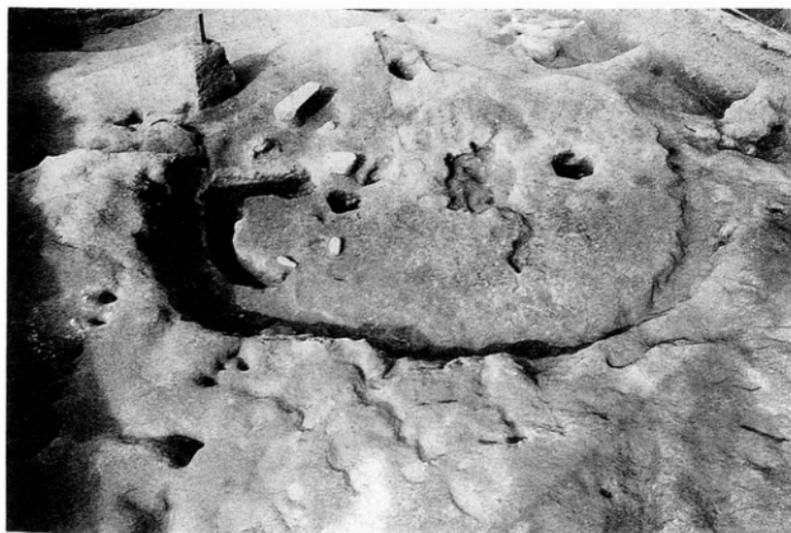
下沖5号遺跡第6号住居跡(近景)



下沖5号遺跡第7号住居跡



下冲5号遗址第8号住居跡



下冲5号遗址第9号住居跡



下沖5号遺跡南側住居跡群西側斜面部分(南西から)



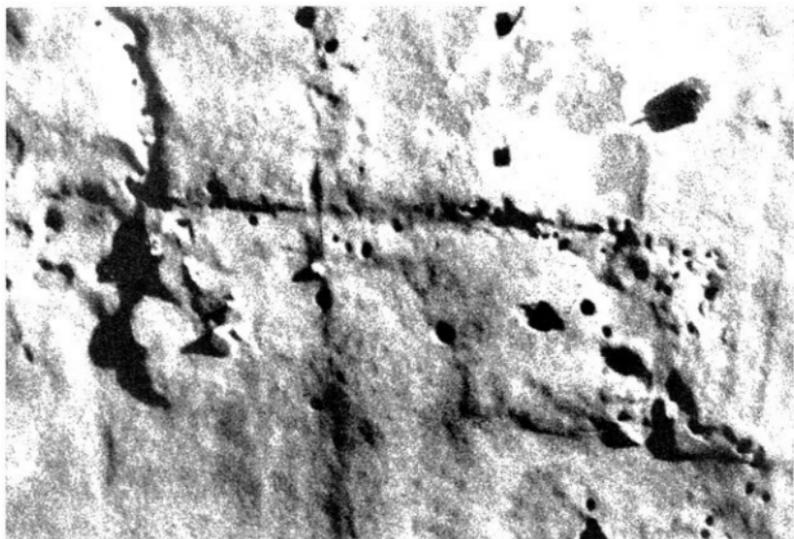
下沖5号遺跡第10号住居跡



下冲5号遗址第10号住居跡遺物出土狀態



下冲5号遗址第11・12号住居跡



下冲5号遗址第13号住居跡



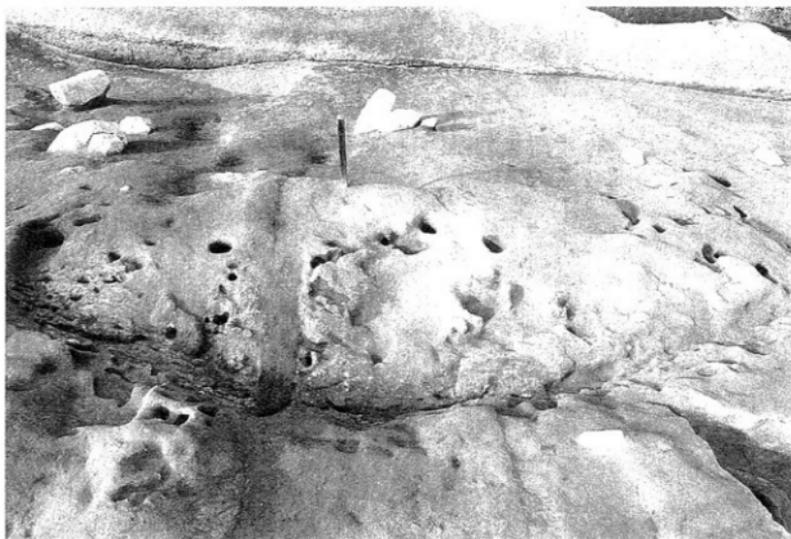
下冲5号遗址第14号住居跡



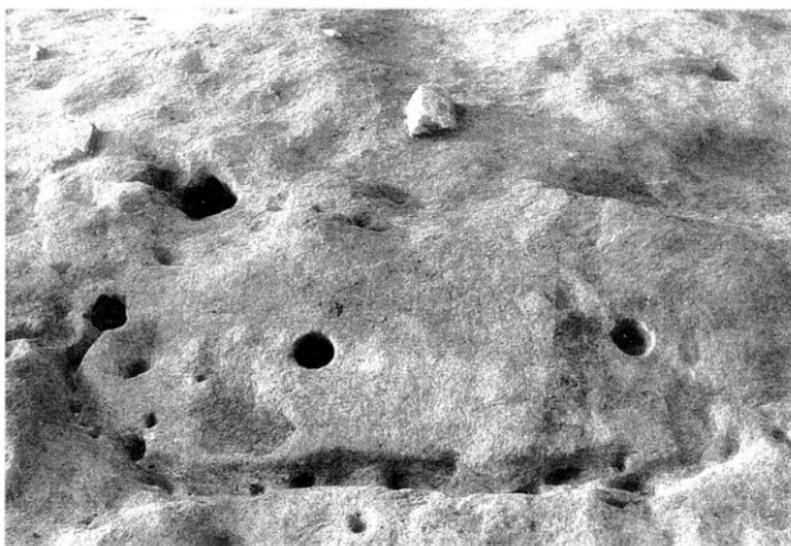
下冲5号遗址第15号住居跡



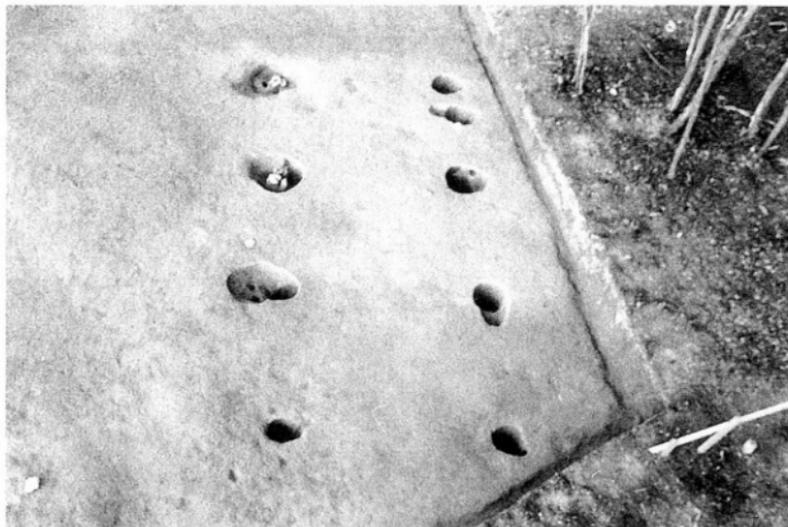
下冲5号遗址第16号住居跡



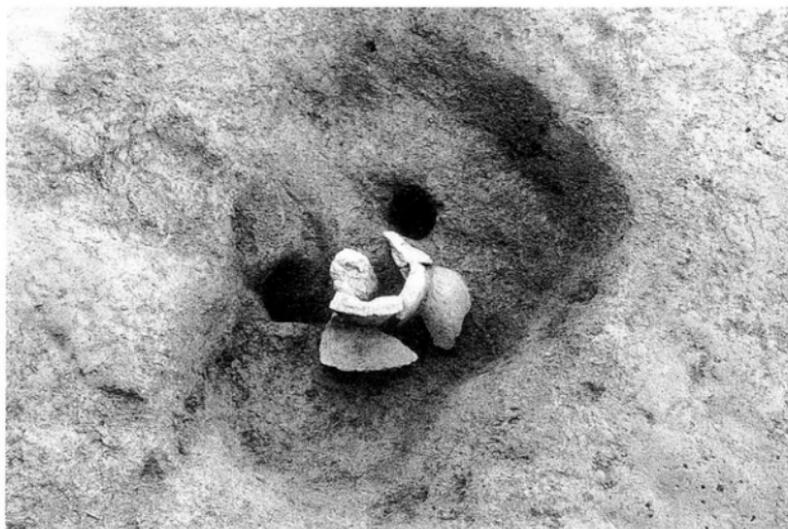
下沖5号遺跡第17号住居跡



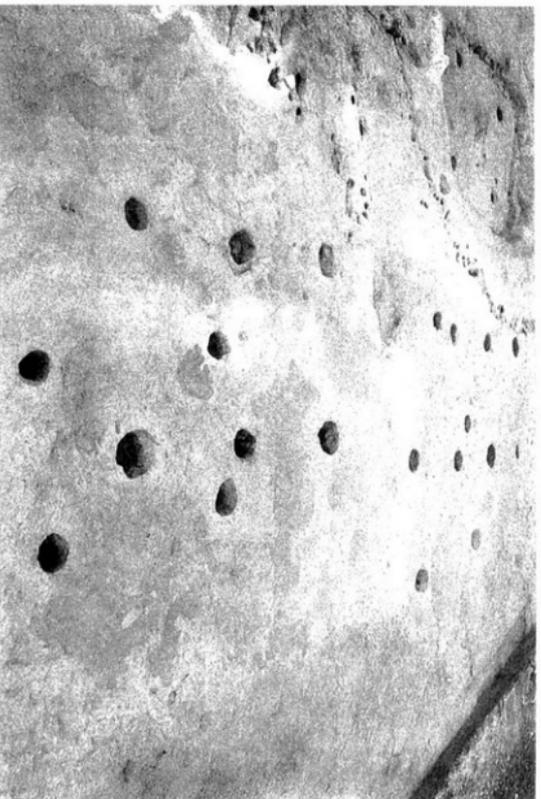
下沖5号遺跡第18号住居跡



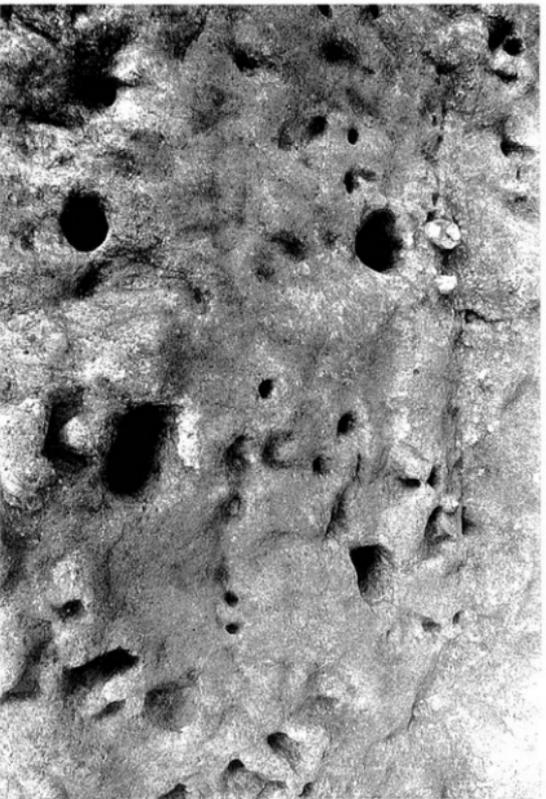
下沖5号遺跡第2号掘立柱建物跡



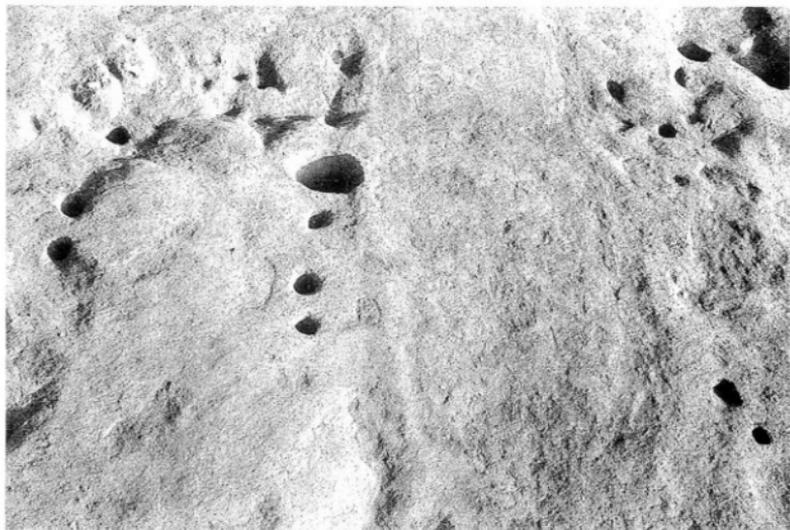
同 上 柱穴内遺物出土状態



下冲5号遗址第3·4·5·6号独立件建筑物(南上b)



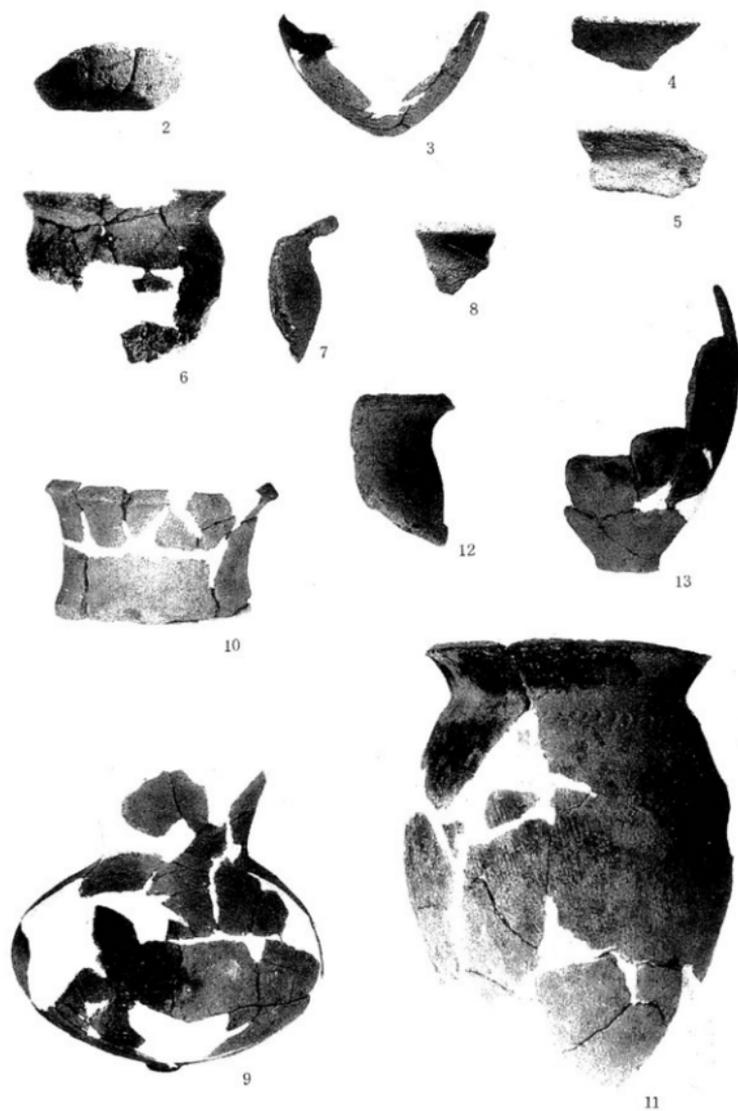
下冲5号遗址第1号住居层状堆积



下沖5号遺跡第2号住居跡状遺構



下沖5号遺跡第1号土壇



下沖5号遺跡出土土器(1)



14



15



16



18



17



20



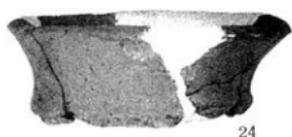
22



23



21



24



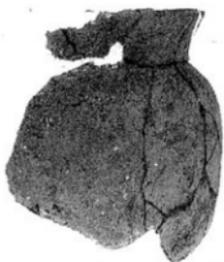
25



28



26



27



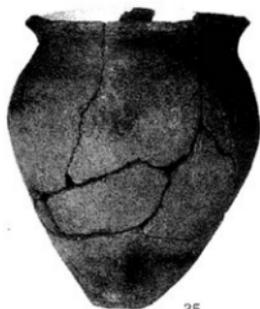
30



29



31



35



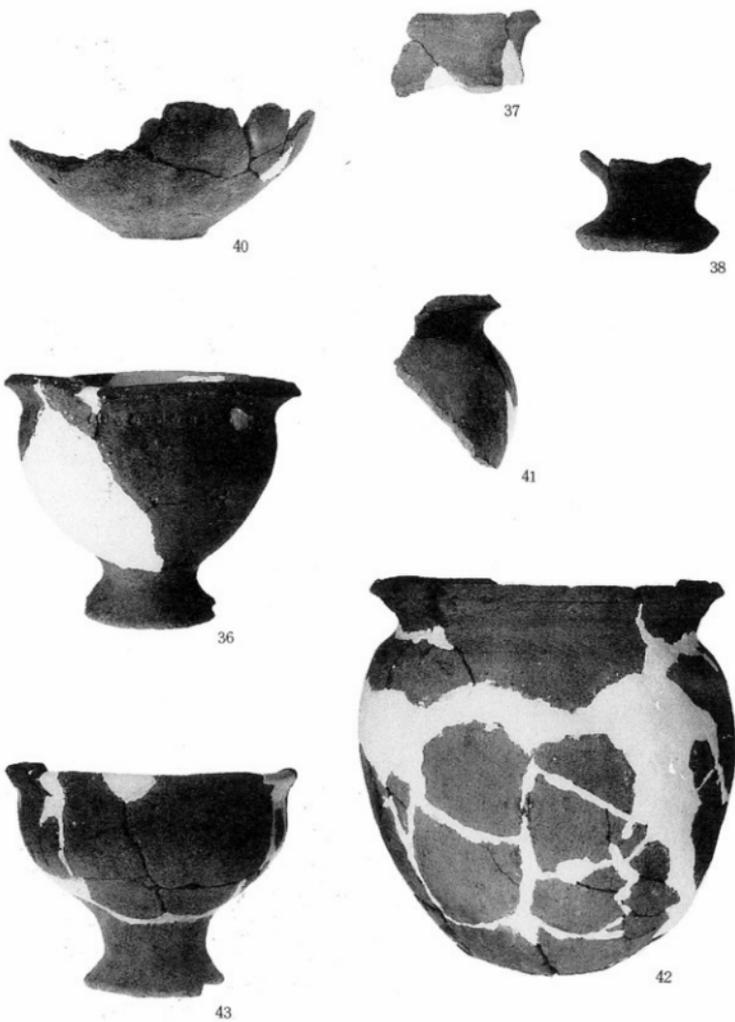
32



34



33





45



44



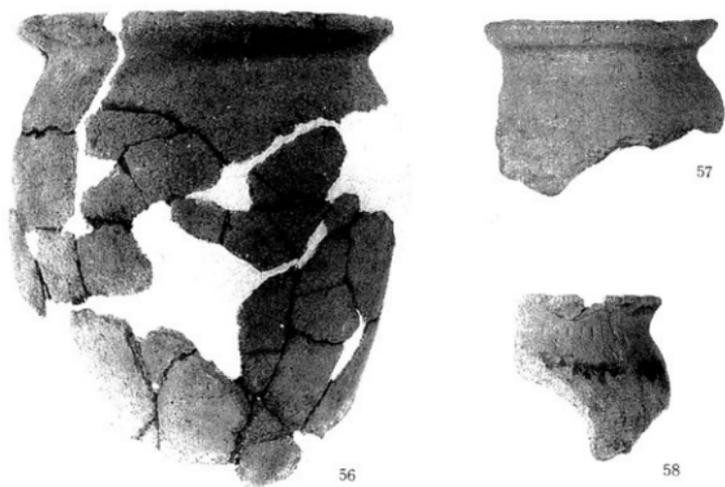
46



47



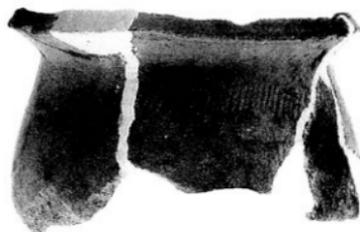
下沖5号遺跡出土土器(6)



下沖5号遺跡出土土器(7)



64



65



70



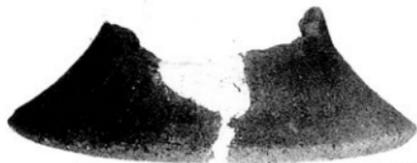
69



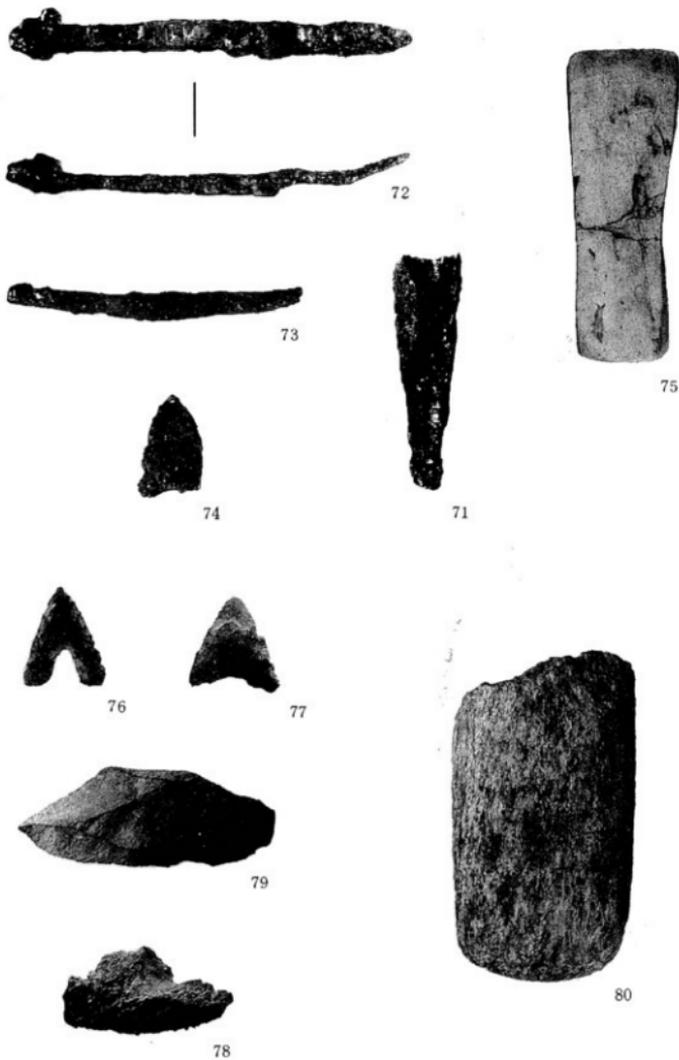
66



68



67





和田1号遺跡遺景(調査前)



和田古墳（西より）



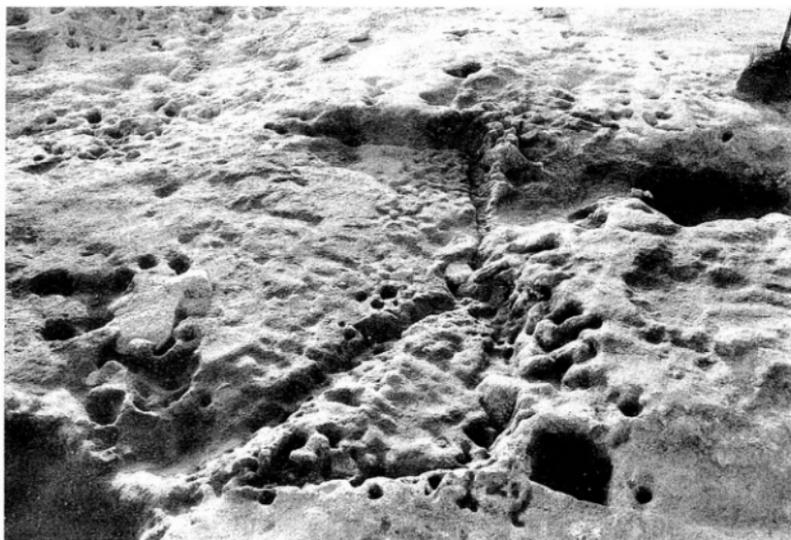
和田古墳主体部及び第2号住居跡，第1号掘立柱建物跡



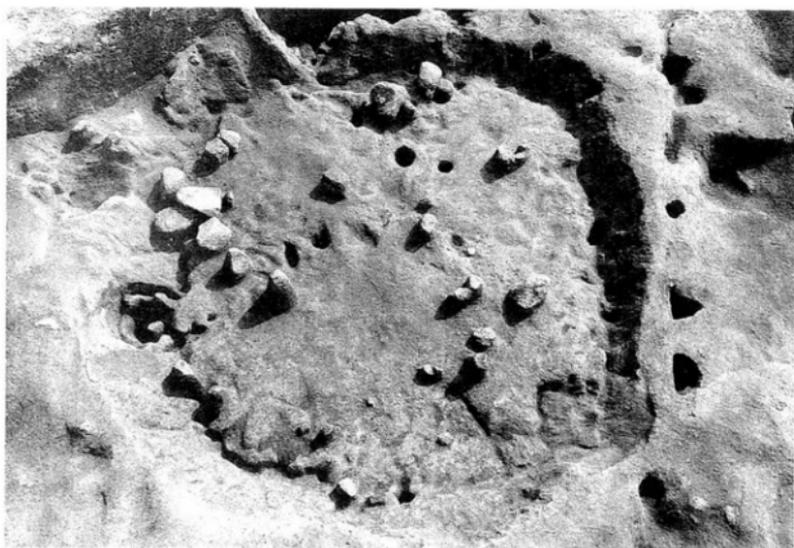
和田古墳主体部（正面から）



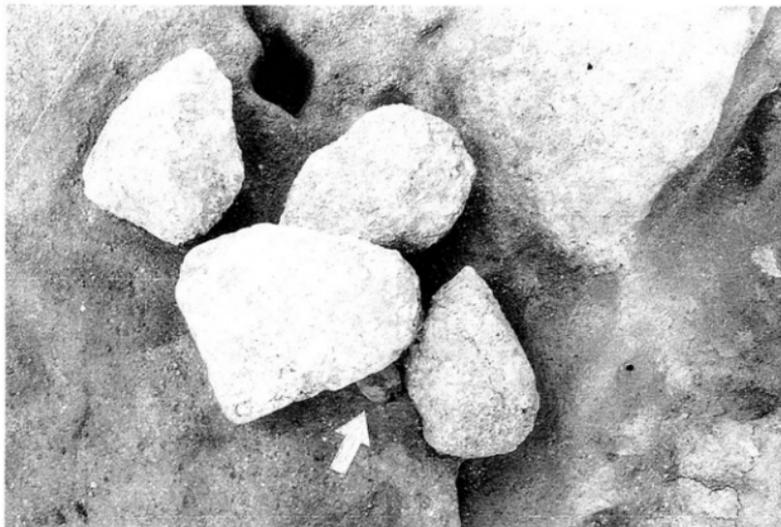
和田古墳主体部（完掘後）



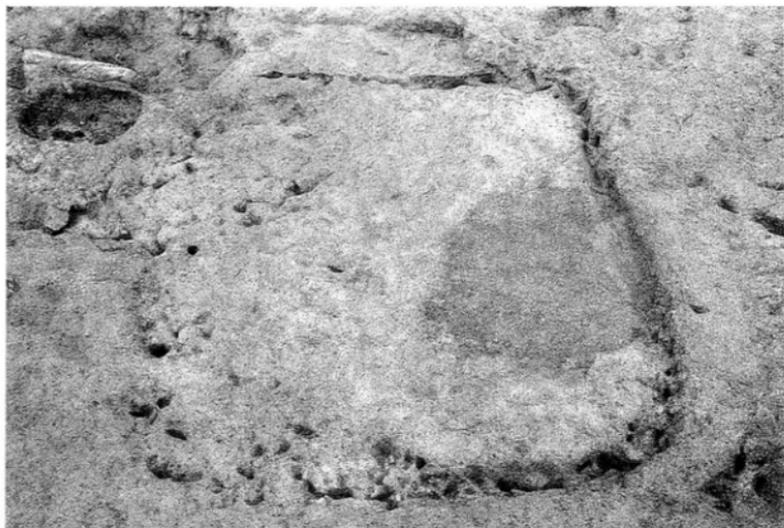
和田1号遺跡第1号住居跡



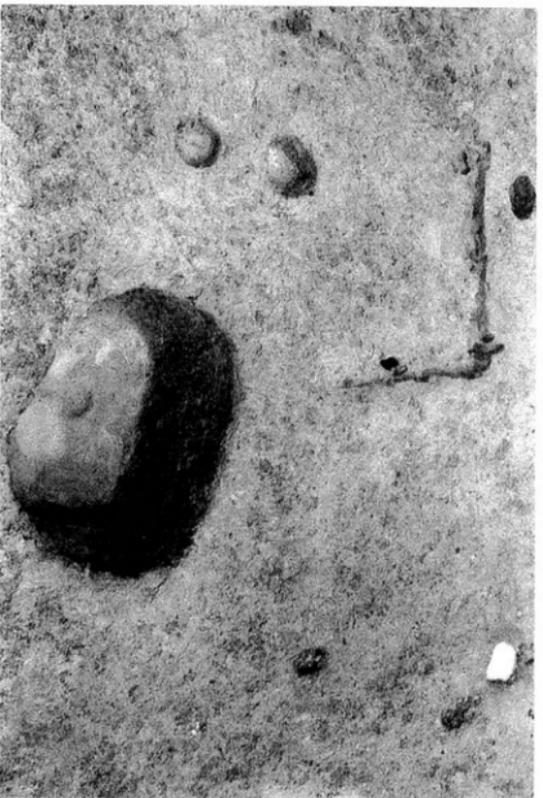
和田1号遺跡第2号住居跡



和田1号遺跡第2号住居跡石錘出土状態



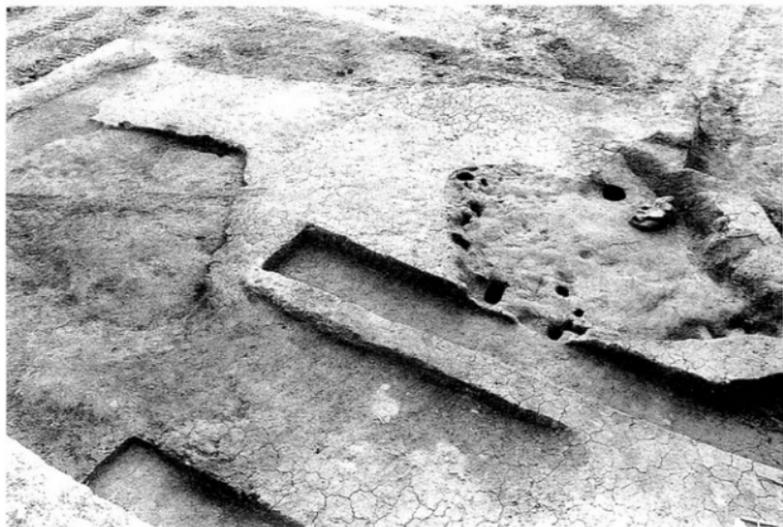
和田1号遺跡第3号住居跡



和田1号遺跡第4号住居跡及び第2土塊



和田1号遺跡第5号住居跡



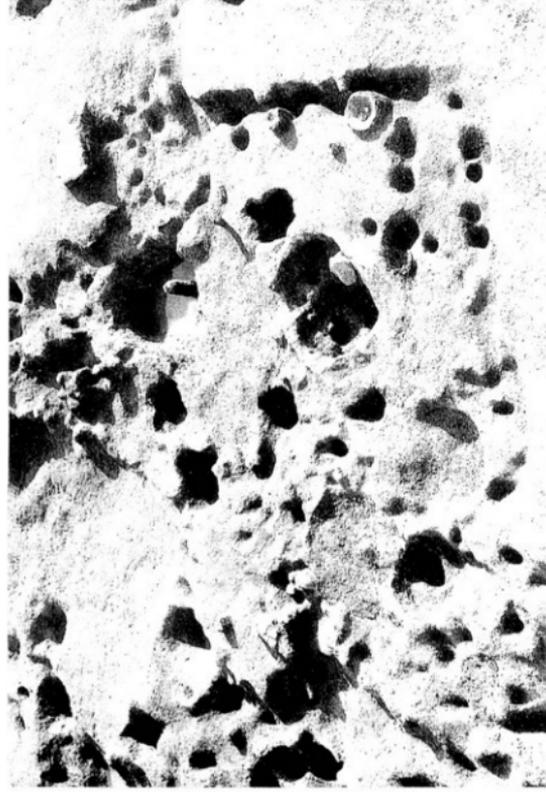
和田1号遺跡第6・7号住居跡



和田1号遺跡南側住居跡群



和田1号遺跡第8号住居跡



和田1号遺跡第9・10号住居跡



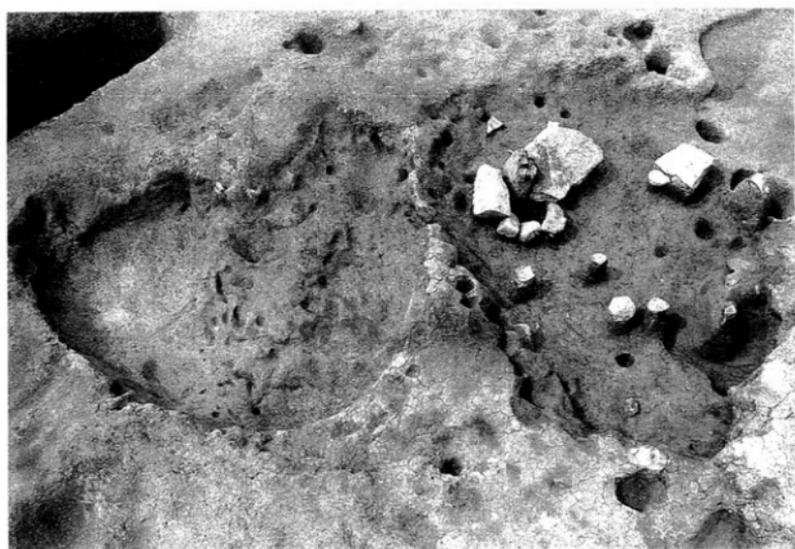
和田1号遺跡第11・12・13号住居跡



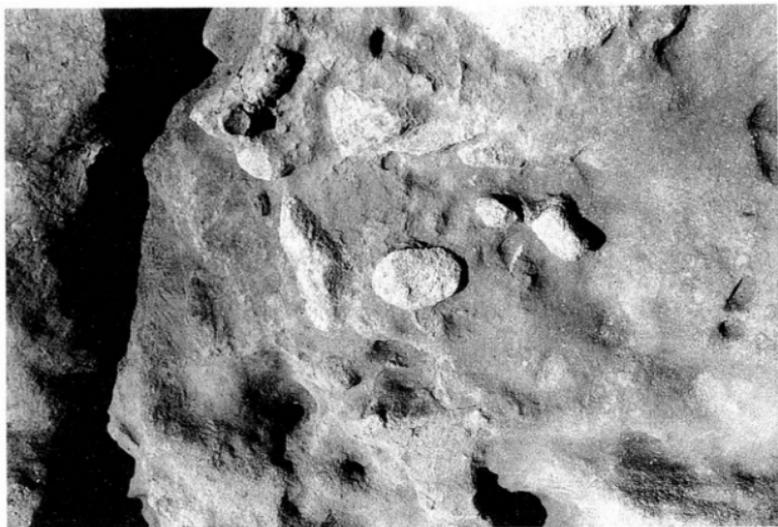
和田1号遺跡第14号住居跡



和田1号遺跡第1号土坑



和田1号遺跡第3・4・5・6号土坑



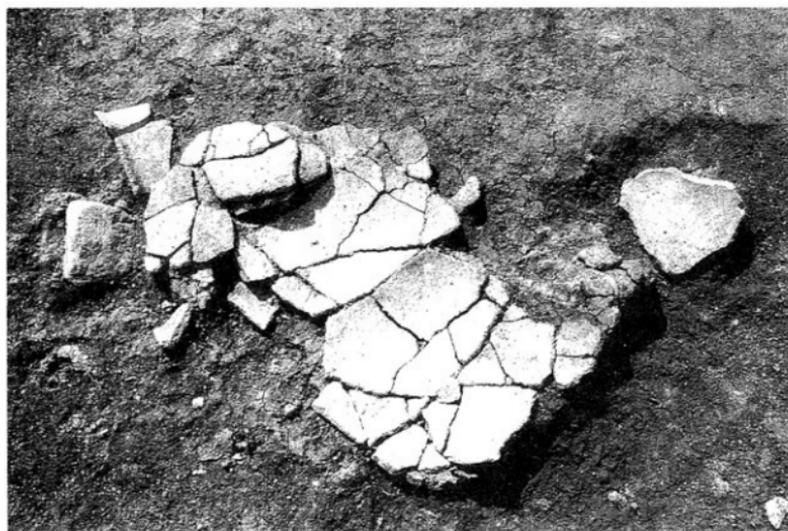
和田1号遺跡第7号土塊



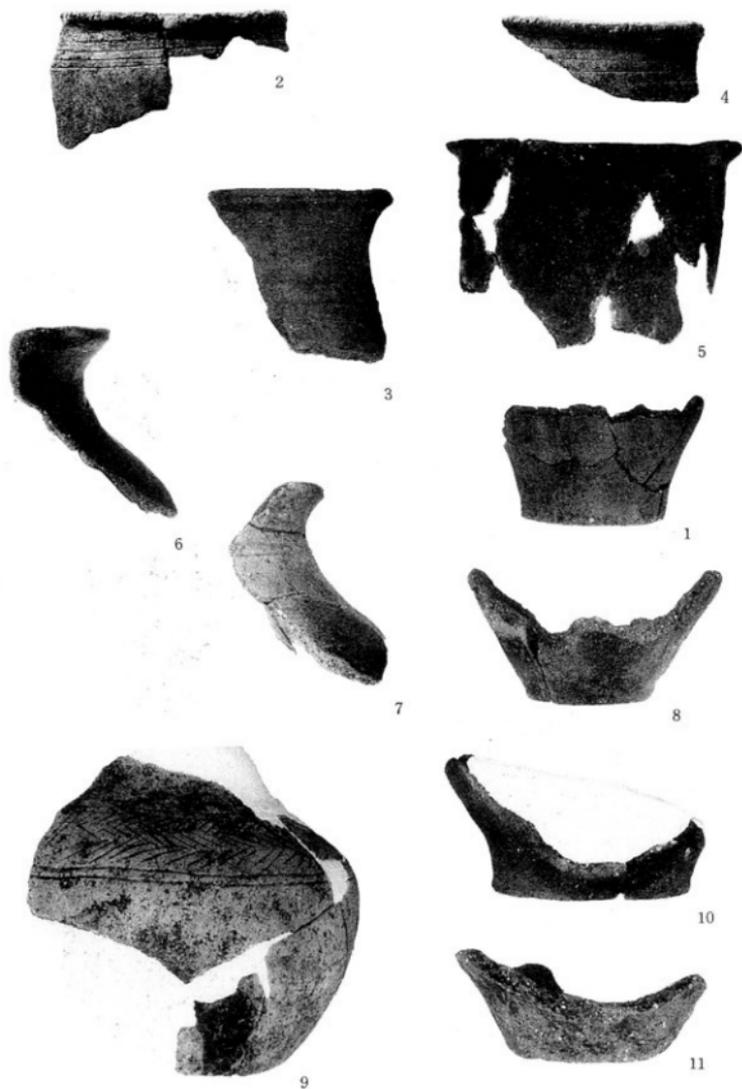
和田1号遺跡第8号土塊



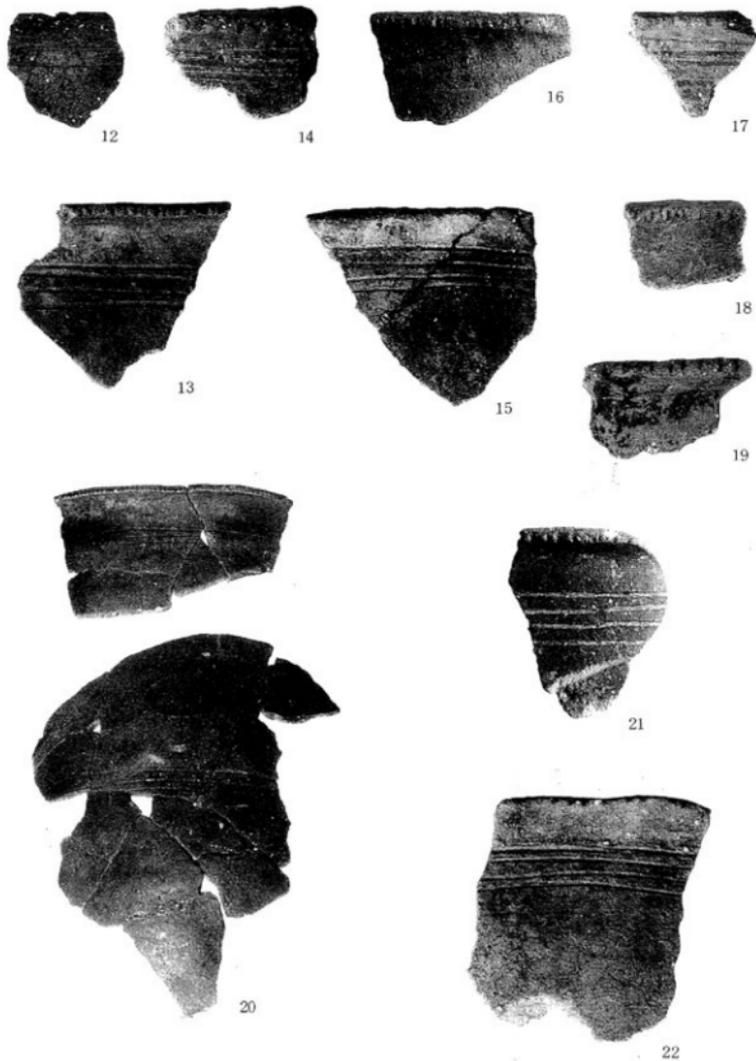
和田1号遺跡中央部東側土器だまり遺物出土状態

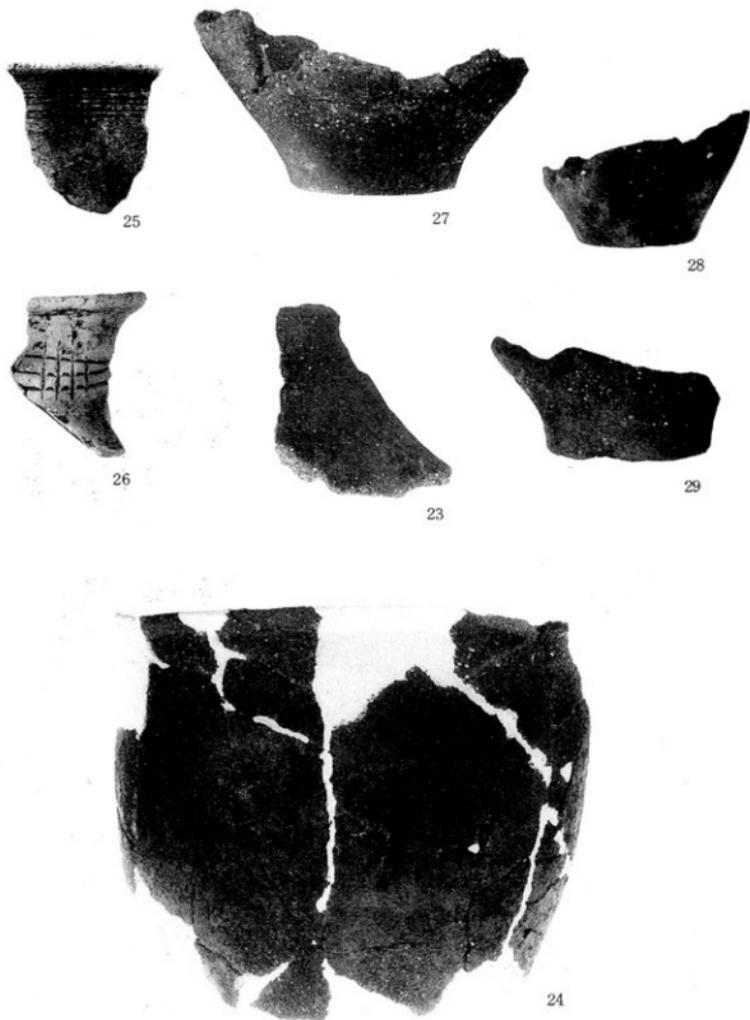


和田1号遺跡中央部東側土器だまり遺物出土状態(甕形土器及び蓋形土器)



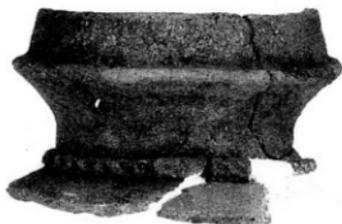
和田1号遺跡出土土器(1)



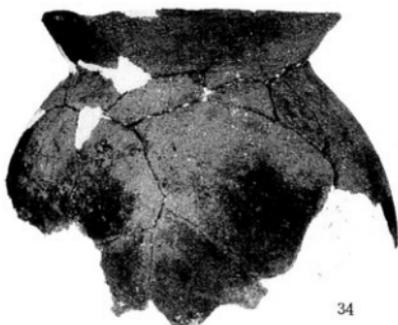




31



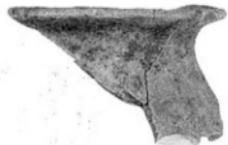
30



34



32



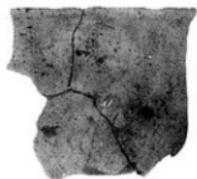
33



35



36



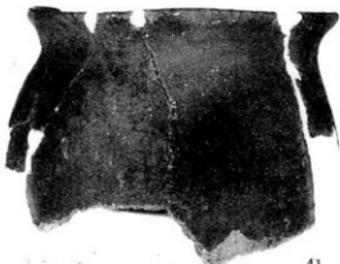
38



40



37



41



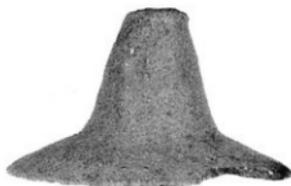
42



39



43



44



45



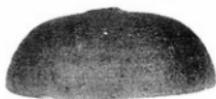
46



47



48



49



50



51



52



53



54

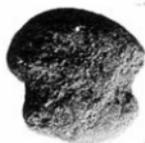


55



56





広X4-87-178

広島市の文化財 第41集

広島市佐伯区五日市町所在

一般県道原田五日市線(石内バイパス)道
路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告

1988年3月

編 集 行 広島市教育委員会(社会教育部管理課)

広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
(〒730) TEL.(082)245-2111(代)

印 刷 電子印刷株式会社
広島市中区堺町一丁目1番5号